

1.

一神教聖職者交流会議報告



第1回「一神教聖職者交流会議」報告書に寄せて

同志社大学一神教学際研究センター主催の第1回「一神教聖職者交流会議」の報告書をお届けいたします。

宗教は理念としてではなく、実体として存在します。それは一神教についても同様です。キリスト教、ユダヤ教、イスラームは、具体的には教会、シナゴグ、モスクを中心とする宗教共同体として存在しています。「一神教聖職者交流会議」は同一地域内の3つの一神教が直面している諸問題について、3つの宗教共同体のリーダーによる議論を通して学ぶことを目的としています。第1回はアメリカ合衆国を共通のコンテキストとする一神教の聖職者7名と、一神教以外の宗教の代表として1名の仏教の指導者をアメリカから招待いたしました。今後、東アジア、中東、ヨーロッパにおける「一神教聖職者交流会議」を計画しています。

同志社大学21世紀COEプログラム「一神教の学際的研究—文明の共存と安全保障の視点から」によって、アメリカ合衆国はもっとも重要な研究対象の一つです。アメリカは世界で唯一の軍事的・政治的超大国であり、しかも先進国では例外的に、宗教が内政と外交にとって大きな影響力を持っています。ギャラップ調査機関によれば、「宗教はあなたの生活にとって重要か」という質問に、イスラームの9カ国では72％が重要と答えたのに対して、アメリカでは86％であったという結果が出ています(2001年12月～2002年1月)。日本においては十分に認識されていませんが、アメリカはきわめて宗教的な社会であるのです。日本にとってもっとも重要な同盟国であり、世界の安全保障の鍵を握っているアメリカを正確に理解するためには、宗教についての理解を欠くことはできません。

統計調査によれば、アメリカ国民のほぼ90％は聖書の神を信仰する「ユダヤ・キリスト教的伝統」の宗教を信じています。また近年、イスラーム教徒の信者数は増加し、ほぼユダヤ教の信者数に匹敵すると言われています。アメリカは人類史上、最初に憲法に政教分離を明記した国家です。ところが、ブッシュ大統領の演説に見られるように、宗教は教派・教団の違いを超えて「見えざる国教」としてアメリカを統合し、政治を含む公的領域においても重要な役割を担っています。キリスト教・ユダヤ教・イスラームという中東生まれの一神教は、アメリカを理解するための重要なキーワードであると言えるでしょう。

「アメリカは人類にとっての実験場である」と言われますが、これは宗教の分野においても同様です。多様性を最大限に尊重しながら、同時に、統合を志向するというアメリカにおける宗教のあり方は、諸宗教の共存のための重要な実験と言えるでしょう。

刺激的な議論に満ちたこの会議の報告を、十分にお楽しみ下さい。

なお、この会議のために米日財団(United States—Japan Foundation)から1千ドル寄附をいただきました。感謝と共にご報告申し上げます。

同志社大学一神教学際研究センター長
森 孝一

第1回「一神教聖職者交流会議」を終えて

北米のユダヤ教、イスラーム、キリスト教の指導者たちが集まった今回の一神教聖職者交流会議は私にとってたいへん興味深いものであった。多くの発表や洞察に満ちたコメントを聞いて、私は米国における宗教信仰とその実践を特徴づける三つの事柄に改めて気づかされた。

第一は、憲法修正第1条によって保障されている「信教の自由」という考えに対する宗教指導者たちの掛かり合いが深く、ゆるぎないものであるということ。この自由はけっして当然のこととして決めつけられてはいないが、強く擁護されている。第二番目は、宗教指導者たちが寛容で、多様性を受け入れつつも、彼らの宗教による「真理の主張」が真剣に取り上げられるのを望んでいることである。彼らは、すべての宗教が同じであるとは考えていない。それぞれの宗教における特徴的な思想や活動が認められ、社会に強い影響を与えることを望んでいる。そして最後の三番目は、個人の宗教的信念が必ずしも所属する宗教と対応するとは限らないということである。それは個人において形作られるものであり、所属する宗教によって制限されるようなものではない。

現在の私があるのは私の家族や教育のおかげである。しかし私は家族や宗教共同体の意見にいつも賛成するわけではない。つまり、個人の信念や信仰習慣は、異なる宗教間ではもちろんのこと、同じ教派や宗教共同体の中でさえ多様なのである。

私は、以下の二つのことから、この一神教聖職者交流会議がこれから大きな影響を及ぼすことになるだろうと思っている。第一に、米国の宗教的多様性についての日本人研究者の理解を深めることができたこと。そして第二に、北米から招いた宗教指導者たちの多くが親睦と率直な対話を通して、互いに持っていた根拠のない固定観念を乗り越えたということである。私はCISMORがこれからも、世界の他の地域の宗教指導者たちと共に、そして彼らのためにも、このような会議を継続して開催することを望んでいる。

一神教聖職者交流会議 共同議長
同志社大学大学院アメリカ研究科教授
バーバラ・ブラウン・ジクムンド



2004年度一神教聖職者交流会議

現代アメリカのユダヤ教・キリスト教・イスラームが直面する諸問題

日 時: 2004年11月13日(土)・14日(日)

会 場: 同志社大学今出川キャンパス 寒梅館ハーディーホール
京都全日空ホテル 醍醐の間

プログラム

11月13日(土)

12:00-2:30 セッション A (公開シンポジウム)

「多元的国家において『真実の宗教』についてどのように語るか?」

会 場: 同志社大学今出川キャンパス ハーディーホール

司 会: 森 孝一(同志社大学大学院神学研究科・一神教学際研究センター長)

講 演: 小原克博(同志社大学大学院神学研究科)

ミラ・ワッサーマン(ベツ・シャローム・ユダヤ共同体)

クラーク・ローベンシュティン(メトロポリタン宗教対話協議会)

マハ・エルジェナイディー(イスラーム・ネットワーク・グループ)

コメンテーター

ロン・サイダー(「社会行動を求める福音派」/イースタン神学校)

イブラーヒーム・レイミー(フェローシップ・オブ・リコンシリエーション)

今井亮徳 (バークレー東本願寺)

ディスカッション

3:15-6:00 セッション B (非公開)

「アメリカ社会とその公共政策はあなたの宗教にいかなる問題をもたらしているか?」

会 場: 京都全日空ホテル 醍醐の間

司 会: バーバラ・ブラウン・ジクムンド(同志社大学大学院アメリカ研究科)

発表者 ジョーン・ボレリー (ジョージタウン大学)

マハ・エルジェナイディー

今井亮徳 (バークレー東本願寺)

ヒレール・レヴィン(ボストン大学)

クラーク・ローベンシュティン

イブラーヒーム・レイミー

ロン・サイダー

ミラ・ワッサーマン

コメンテーター

越後屋 朗 (同志社大学大学院神学研究科)

アダ・コヘン(同志社大学大学院神学研究科)

ディスカッション

7:00-9:00 レセプション 会場:新島会館

11月14日(日)

12:30 -3:30 セッション C (非公開)

「アメリカと中東の関係は、あなたの宗教と他宗教との関係に
どのような影響を与えているか?」

会 場: 京都全日空ホテル 醍醐の間

司 会: 中田 考(同志社大学大学院神学研究科)

発表者 ロン・サイダー

ヒレール・レヴィン

エルモスタファ・レズラーズィー(アジア・アラブ・メディア・ネットワーク東京)

コメンテーター

ミラ・ワッサーマン

マハ・エルジェナイディー

ジョーン・ボレリー

松永泰行(同志社大学客員フェロー)

ディスカッション

4:00 -6:30 セッション D (非公開)

「あなたの宗教伝統と宗教実践は、現在のアメリカ社会にどのように積極的に貢献できる
か?」

会 場: 京都全日空ホテル 醍醐の間

司 会: バーバラ・ジクムンド

発表者 ジョーン・ボレリー

今井亮徳

イブラーヒーム・レイミー

コメンテーター

クラーク・ローベンシュティン

森 孝一

ディスカッション

11月15日(月) エクスカーション



アメリカからの招待者紹介



ジョーン・ボレリー
BORELLI, John

ジョージタウン大学宗教間対話部門学長特別補佐。1976年フォーダム大学で神学および宗教学博士号取得、1987年から2003年にかけては米国カトリック司教会議メンバーとしてエキュメニカル運動、宗教間関係問題に従事した。論文多数、また、*The New Catholic Encyclopedia* (2002版)、*Handbook for Interreligious Dialogue* (Silver Burdett & Ginn, 1990)の編集にも携わる。



マハ・エルジェナイディー
ELGENAIDI, Maha

「イスラミック・ネットワーク・グループ」(Islamic Networks Group)の創設者・現在最高責任者。多くの学校、教会、警察署、協会などにおいて講演を行い、テレビやラジオ番組に登場し、反ヘイト・クライムや、ムスリムの人権と対人関係の向上を訴えている。数々の賞の受賞経験を持ち、2002年には地元サンタ・クララの市民賞を受賞している。アメリカ人ムスリムのための教育書などが共著にある。



クラーク・ローベンシュティン
LOBENSTINE, Clark

設立当初の1979年4月よりワシントンDCメトロポリタン宗教間対話会議(Interfaith Conference of Metropolitan)代表。同協議会は世界で最初に、イスラーム、ユダヤ教、プロテスタント、ローマカトリックのそれぞれのコミュニティが、よりお互いの理解を深め、社会公正のために機能し、世界を一つにすることを目的として設置された。バハーイー教、ヒンズー教、ジャイナ教、モルモン教、シーク教およびゾロアスター教も加盟している。



イブラーヒーム・A. レイミー
RAMEY, Ibrahim Abdil-Mu'id

米国で最も古い信仰に基づいた平和団体、「フェローシップ・オブ・リコンシリエーション」(Fellowship of Reconciliation)の平和・非武装プログラムのコーディネーター。彼の研究は、諸宗教間関係の視点からの通常核兵器解除と米国外交政策の非武装化に焦点をあてている。2002年には米国ムスリム協会自由財団より、ベターワールド賞を受賞している。



今井亮徳
IMAI Akinori

大谷大学仏教学科卒業後1967年に渡米。カリフォルニア・パークレー東本願寺駐在開教使となり、現在に至る。浄土三部経英訳事業(真宗大谷派東本願寺後援)委員会委員、「イースト・ウエスト・カウンセリング・センター」所長。



ヒレール・レヴィン
LEVINE, Hillel

ボストン大学宗教・社会学の教授。また、「憎悪なき歴史」を目指した政治的指導者や市民の育成プログラムを開発する「仲裁・史的和解を目的とする国際研究所」(International Institute for Mediation and Historical Conciliation)の所長も務める。ここでは、争いの歴史を仲裁し、そこに新たな和解の解釈を見出し、未来の争いを防止するという決意に基づいた紛争解決を目指す。レヴィン氏の研究「スギハラを探して」と「反セム主義の源泉」は、アカデミー賞を受賞したドキュメンタリー作品である。



ロン・サイダー
SIDER, Ron

北アメリカのキリスト教思想に強い影響力を持つ「社会行動を求める福音派」(Evangelicals for Social Action)の会長であり、創設者で、イースタン神学校教授。イエール大学において歴史学博士号取得。著作に、*Rich Christians in an Age of Hunger* (1977)、*Just Generosity: A New Vision for Overcoming Poverty in America* (1999)、*Churches That Make a Difference* (2002)など多数。



ミラ・ワッサーマン
WASSERMAN, Mira

ブルーミントン(インディアナ州)にあるベツ・シャロームユダヤ共同体(Congregation Beth Shalom)のラビ。宗派を超えた対話、多文化理解に熱心な活動をしているローカルグループのリーダー。シンシナティ(オハイオ州)のヒブル・ユニオンカレッジにおいてラビの資格を取得後、ニューヨークのユダヤ教神学校およびエルサレムのヘブライ系大学でユダヤ学を学ぶ。このほど幼児向けの本も出版している。夫はスティーヴン・ヴァイツマン教授、2児の母親でもある。



セッションA

多元的国家において 「真実の宗教」についてどのように語るか？

司会／森 孝一（同志社大学大学院神学研究科教授・一神教学際研究センター長）

- 発表／「逆光の被写体—日本社会における一神教のイメージ」
小原 克博（同志社大学大学院神学研究科教授）
「選ばれし者の選択：米国ユダヤ人にとっての自由の挑戦」
ミラ・ワッサーマン（ベツ・シャローム・ユダヤ共同体）
「宗教間対話への要請」
クラーク・ローベンシュティン（メトロポリタン宗教間対話会議）
「アメリカの公的領域でイスラームを語る」
マハ・エルジェナイディー（イスラーム・ネットワーク・グループ）
- コメント／ロン・サイダー（「社会行動を求める福音派」／イースタン神学校）
イブラーヒム・レイミー（フェローシップ・オブ・リコンシリエーション）
今井 亮徳（パークレー東本願寺）
- ディスカッション

逆光の被写体—日本社会における 一神教のイメージ

同志社大学大学院神学研究科教授
小原 克博



1. はじめに

一神教とは何か。一神教として、ここでは、ユダヤ教、キリスト教、イスラームを取り上げる。それぞれが固有の歴史、伝統、教義を持っていることを考えれば、一神教という包括概念や、それを構成するそれぞれの宗教に対し、比較的客観的な説明を与えることができるように思われる。ところが実際には、一神教とは何か、という問いが発せられる場所によって、異なるイメージが形成されてきた。また、地理的に近接していることが、正しいイメージを作り出すことに役立ってきたわけではない。

立つ位置によって、対象の見え方が大きく異なることを「逆光の被写体」というテーマは暗示している。プロのカメラマンが逆光の中で被写体を撮影すると、細部を捨象した大胆なシルエットを描き出すという美的効果を生み出すこともできる。ところが、初心者が逆光の中で被写体を撮影すると、被写体が暗くなりすぎて、誰を、何を撮影したのかすらわからないことが少なくない。日本社会に生きる私たちの多くは、一神教の実像に合ったイメージを撮影するという点において、初心者であることを認めなければならないだろう。

わたしの講演では、最初に日本における一神教のイメージを紹介し、そのイメージを生み出している文化的な構造について考える。しかし、これは日本に固有の構造ではない。エドワード・サイードによって解釈され直した「オリエンタリズム」が示すように、欧米社会においてその類似の構造を指摘することができる。次に、固定化されたイメージが

破壊的な影響力を及ぼしたり、逆に暴力的な衝動を引き起こすことを、「偶像崇拜」を用いて考察する。偶像崇拜の禁止は三つの一神教に共通する信仰の基盤である。それは単に伝統的な教えであるだけでなく、現代社会において新たな意味の地平を獲得しつつある。一神教同士の戦い、ということがしばしば語られるが、グローバル化する世界の中で、真に取り組まなければならない課題がどこにあるのかを示唆する。

2. 日本における一神教のイメージ

1) 一神教と多神教をめぐる言説

近年、日本の論壇では「一神教と多神教」をめぐるメッセージが頻繁に現れてきている。特に、9・11以降、その傾向が強まってきていると言える。ここでは、その一つを事例として取り上げたい。2003年1月1日、『朝日新聞』に『「千と千尋の」精神で一年の初めに考える』と題する次のような社説が掲載された。

「『文明の対立』が語られている。背景にあるのはイスラーム、ユダヤ、キリスト教など、神の絶対性を前提とする一神教の対立だ。（中略）いま世界に必要なのは、すべて森や山には神が宿るという原初的な多神教の思想である。そう唱えているのは、哲学者の梅原猛さんだ。古来、多神教の歴史をもつ日本人は、明治以降、いわば一神教の国をつくらうとして悲劇を招いた。そんな苦い過去も教訓にして、日本こそ新たな『八百万の神』の精神を発揮すべきではないか。」



上記の梅原氏は日本文化の先導的な紹介者として知られているが、著書の中で次のように語っている。「私は、かつての文明の方向が多神教から一神教への方向であったように、今後の文明の方向は、一神教から多神教への方向であるべきだと思います。狭い地球のなかで諸民族が共存していくには、一神教より多神教のほうがはるかによいのです」(『森の思想が人類を救う』小学館、1995年、158頁)。

梅原氏に限らず、日本文化の紹介者が一神教より多神教を優位に位置づけるのは珍しいことではない。一般的に日本において、一神教は紛争や自然破壊の原因として批判されている。また、こうした問題の解決として、多神教やアニミズムの自然理解を賞賛する声がしばしば聞かれる。一神教的な思考を捨て去り、多神教的な考え方に移行すれば、戦争や自然破壊の問題は解決するという考えは、非常に簡潔であり、多くの人の心に訴えるものがある。また、停滞を続ける経済状況の中では、多くの人が明確なナショナル・アイデンティティを見いだすのに困難を覚えており、西洋の一神教文明を乗り越える多神教という可能性に多くの日本人が心を開くのも自然なことかもしれない。

多神教的な考え方の重要性は、イラク戦争のあと、さらに強調されている。なぜなら、ジョージ・W・ブッシュ大統領の論理は、しばしば、一神教の論理と見なされるからである。日本社会に根付いている平和主義は、一神教的論理を平和の敵と見なす傾向にある。

一神教と多神教をめぐる言説は枚挙にいとまがないが、次のように類型的なまとめをすることができるだろう。

I) ユダヤ教・キリスト教・イスラームはただ一人の神を信じる宗教であるから、対立・衝突を避けることができない。

II) 現代世界の問題は一神教(文明)に帰するところが多く、(日本の)多神教(文明)こそが一神

教的思考の限界を乗り越え、問題解決に貢献すべきである。

III) 一神教は排他的・独善的・好戦的・自然破壊的であるのに対し、多神教は包括的・協調的・友好的・自然と共生的である。

2) 文化的構造の相克：オリエンタリズム、オクシデンタリズム、リバース・オリエンタリズム

歴史的に見れば、一神教を批判し、多神教を賞賛するような文化的構造は、日本の近代史において、繰り返し見られる。すなわち、精神的・道徳的に没落し危機に瀕している欧米の限界を乗り越えて、新たな価値・思想体系を提供する東洋、アジア、日本という考えは、繰り返し、現れては消え去っていった。このように西洋と東洋を二元論的に対置させる言説に含まれる問題性を、明確に指摘したのがエドワード・サイードの『オリエンタリズム』(1978年)であった。

オリエンタリズムとは、本来、近代ヨーロッパに現れた、ロマン的な異国趣味の濃い文学や芸術の潮流のことをいうが、サイードは、この言葉に新たな解釈を与えた。サイードは、オリエンタリズムを、東洋に対する西洋の支配の様式ととらえ、東洋と西洋の間には本質的な差異があるとする見方であると考えている。たとえば、東洋人は非合理的で、下劣で幼稚で、「異常」であり、それに対し、西洋人は合理的で、有徳で、成熟しており、「正常」である、とされる。オリエンタリズムのかっこうの対象となったのがイスラームであったが、それについてサイードは次のように語っている。

「イスラームが恐怖や荒廃、悪魔的なもの、いとわしい野蛮人の群れを象徴するようになったのも、決していわれのないことではなかった。ヨーロッパにとって、イスラームは癒されることのない精神的外傷(トラウマ)であった。(中略)要するに、イスラームに関する持続的な通念とは、ヨーロッパに対しイスラームが象徴した大いに危険な力を否認な

く矮小化したものにほかならなかった」(『オリエンタリズム』上、141-142頁)。

「イスラームは一つのイメージになった。—これはダニエル(注：ノーマン・ダニエル。イギリスの中世史家)の言葉であるが、私にはオリエンタリズムの全体の性格を驚くほど見事に暗示しているように思われる。—そのイメージの機能は、イスラームそれ自体を表象することではなく、中世のキリスト教徒のためにそれを表象してやることであった」(同書、143頁)。

西洋が東洋に対し、外部から固定的なイメージを割り当てていたように(オリエンタリズム)、東洋は西洋に対する固定的なイメージを割り当てた。それをオクシデンタリズム(occidentalism)と呼ぶことができる。もちろん、オリエンタリズムとオクシデンタリズムは対称的な関係にあるわけではないが、近代日本の事例からもわかるように、東洋(アジア)を西洋に対置させ、東洋の西洋に対する優越性を語ろうとする考え方は、構造的にはオリエンタリズムと同等であると言える。また歴史的な実像を離れた「表象」によって、外向きの自画像を描こうとする傾向を「リバース・オリエンタリズム」(逆オリエンタリズム)と呼ぶことができる。その意味では、リバース・オリエンタリズムのラディカルな例として、第二次世界大戦下の日本の大東亜共栄圏構想やアジア主義、また、現在のイスラーム過激集団の運動をあげることができるだろう。

この文脈の中で、日本における一神教と多神教をめぐる議論を考えると、一神教がオクシデンタリズムに配置され、多神教がリバース・オリエンタリズムに配置されていることがわかるだろう。オクシデンタリズムの中の一神教は、あたかも「逆光の被写体」のように、その表情が見えていない。また、リバース・オリエンタリズムの中の多神教は、被写体と背景の区別がはっきりしない露出オーバーの写真のように、歴史的な文脈を欠いていることが多い。

日本社会にとって一神教とは何なのか。それを



現代史の中で問うとき、アメリカとの関係を抜きに考えることはできない。それが日本にとっての歴史的文脈であり、その中で一神教の現実を知るために開催されたのが、今回の「一神教聖職者交流会議」であると言える。

3. 変容し拡大する偶像崇拜

1) 見えざる偶像崇拜

サイードは「イスラームは一つのイメージになった」と語ることによって、オリエンタリズムの本質の一つを指摘した。固定化された否定的なイメージを押しつけることが、支配の道具となることをサイードは見抜いたのであった。

オリエンタリズムにおいては、固定化されたイメージが破壊的な影響力を及ぼし、リバース・オリエンタリズムにおいては、否定的なイメージの押しつけに対し暴力的な反発が起きることもある。現代においては、オリエンタリズムだけでなく、オクシデンタリズムやリバース・オリエンタリズムが生み出すイメージは、インターネットを含むマス・メディアによって、大量生産されている。しかし、このイメージの増殖は決して現代特有の問題ではない。このように自己を絶対化し、他者を従属させるメカニズムは、一神教の伝統においては「偶像崇拜」と呼ばれてきた。それゆえ、偶像崇拜は、神のみを絶対的なものとする一神教にとって、厳しい批判の対象とされてきた。「偶像崇拜の禁止」は三つの一神教に共通する伝統であるだけでなく、一神教のアイデンティティは偶像崇拜の否定に依存している、とさえ言うことができる。

その意味では、一神教の信仰に真に敵対するのは多神教でも無神論でもなく「偶像崇拜」であると言える。偶像崇拜の禁止は、ヘブライ語聖書(旧約聖書)では、出エジプト記20章の十戒の第二戒に関係づけられるが、ユダヤ教では、禁じられた異教の神々への礼拝のことを「アヴォダー・ザーラー」(Avodah Zarah)と呼び、単に目に見える



偶像（ヘブライ語でペセル pesel）に限定していない。現代の問題を考察するためには、偶像崇拜を目に見える偶像（visible idol）に仕えること、とするだけでなく、より広い意味で「見えざる偶像崇拜」として理解すべきであろう。この点に関して、キリスト教の神学者パウル・ティリッヒ（Paul Tillich）の次の言葉は興味深い。

「偶像崇拜は、予備的関心を根源関心にまで高めることである。本質的に制約を受けているものを無制約的なものと考え、本質的に部分的なものを普遍的なものにまで高め、本質的に有限なものに無限の意味を与える（現代の宗教的民族主義の偶像崇拜は最も良い例である）。」（『組織神学』第1巻上、25頁）

ティリッヒが『組織神学』を著したのは1951年のことであるが、宗教ナショナリズムを偶像崇拜として理解する必要性は、9・11以降の世界において、よりいっそう高まっていると言えるだろう。ティリッヒの言葉からもわかるように、あらゆる人間、あらゆる宗教が偶像崇拜的になる危険性を有している。

2) 現代、特に9・11以降の世界における課題

すべての出来事が視覚的なイメージに変換される現代世界においては、あらゆる出来事がメディアの中で「偶像」となり得る。作られたイメージは現実を指示するのではなく、かえって現実を見えなくする「偶像」として機能することもある。

9・11以降、テロとの戦いという文脈の中で「悪」（the evil one）という表現が多用されてきた。反米感情の強い中東世界では、「悪」に打ち勝つべく戦っているはずのアメリカに対し「悪」という呼び名が与えられてきた。いずれにせよ、善と悪の戦いというイメージが、相互の敵対感情を強めてきたという側面がある。アメリカの宗教社会学者ロバート・ベラ（Robert N. Bellah）は、ブッシュ大統領の発言をめぐり次のようなコメントをしている。

「ブッシュの言葉は、奇妙なことに、ウサーマ・ビ

ン・ラーディンの言葉を写しているかのようである。ビン・ラーディンも自分自身が『悪』と戦っていると信じているのだ。このことは長引くテロに対する戦争の中で、われわれが多くの点において、敵対者に似てくるということを暗示している」。

ベラが指摘するように、善と悪というイメージは容易に反転し増殖する。これこそが偶像崇拜の魔力である。現代世界において増殖の力を身にまといながら、グローバルな影響力を与えているのが資本主義であり、軍事介入であるとするなら、その抑圧を受ける者が、それらの力を偶像崇拜的と見なすことは不思議なことではない。別の言い方をすれば、「見えざる偶像崇拜」は「構造的暴力」の温床となり得るということであり、その暴力性に立ち向かうために、時として「直接的暴力」が行使される。

それがきわめて過激な形で現れたのが、9・11同時多発テロ事件であった。テロリストたちの目には、ワールド・トレード・センターは資本主義の富と暴力を体現した「偶像」として映っていたかもしれない。ペンタゴンもまた軍事力を体現した「偶像」として映っていたことだろう。だからこそ、あの事件は、多くの尊い人命の損失にもかかわらず、偶像の破壊を見ようとする欲求に形作られた大きな歓喜の声を伴ったのであった。

絶望と歓喜を同居させるような偶像破壊行為を繰り返さないために、われわれは何ができるのか。今、われわれが直面しているのは、文明の戦いでも、一神教同士の戦いでもない。問題は、なぜ宗教が暴力を導くのか、ということでもない。むしろ、グローバル時代において、なぜ世俗世界の対立が宗教を巻き込むのか、を問わなければならない。

アメリカをはじめとする一神教世界が、この問題にもっとも切迫した形で直面していることは言うまでもない。しかし同時に、日本社会が世界に対し何らかの意味あるメッセージを発し、また貢献していこうとするなら、現代世界に緊張を引き起こしている文化的・宗教的構造に対し、十分な関心を向

けていくことが必要となるだろう。

逆光の中で被写体をとらえることは容易ではない。しかし、被写体が動き、あるいは撮影者がポジションを変えることによって、被写体はその姿を明確に表すことができる。

アメリカにおけるユダヤ教・キリスト教・イスラームは、互いにどのような関係にあるのだろうか。日本のクリスチャンあるいはムスリムの目から見て、アメリカの三つの一神教はどのように映っているのか。あるいは、アメリカの聖職者の目には、日本の多神教社会はどのように映っているのか。そうした素朴な疑問に触発されながら、相互の固定的なイメージを流動化させ、また、自己理解の弾性を高めることが、この「一神教聖職者交流会議」で求められていることなのである。





選ばれし者の選択：米国ユダヤ人にとっての自由の挑戦

ベツ・シャローム・ユダヤ共同体
ミラ・ワッサーマン
Mira Wasserman

本日こうしてこの場にいることをとても光栄に、嬉しく思います。私たちをあたたく迎えてくださり、このような意義ある学びの場を提供して下さった同志社大学並びに一神教学際研究センターの皆さまに厚くお礼申し上げます。私がとくに嬉しく思うのは、本日のテーマについて考えをまとめるにあたり、ユダヤ教のあり方を批判的な視点から鋭く見直すという貴重な機会を得られたことです。ユダヤ教のことを広く知ってもらうためには、私たちユダヤ教徒が、外部の人たちの前に自分自身の姿を示す努力をしなければなりません。そこで私は部外者の立場に立ち、一定の距離を置いた上で、ユダヤ教に内在する「個別主義」と「普遍主義」の緊張を真摯に検証すると共に、ユダヤ教の内部、米国のユダヤ人社会を巻き込んでいる論争、そして米国のユダヤ人という存在が個々に抱える葛藤を取り上げ、その一端なりとも皆さまにお伝えできるように全力を尽くしたいと思います。

本日皆さまと共に考えたいのは、「選民」というユダヤ教の伝統的な考え方が、米国のユダヤ人社会におけるリベラル派の台頭の中でどのように解釈され、受け入れられ、否定されてきたかということです。ユダヤ人が「選ばれた民」であるという考え方は、ユダヤ人が他の民族よりも優れているという信条であり、平等と寛容を重んじる米国的な価値観にはなじみません。またこれは多文化共生という理念に対立する概念であると共に、相互尊重に基づく宗教間対話の妨げになるものとみなされています。米国のユダヤ人社会には、選民

思想の擁護派もいれば否定派もあり、何とかしてうまい説明をつけようとする者もありますが、ユダヤ人は誰もがこの思想のことを気にかけしており、ユダヤ教徒以外の人たちがこの思想をどのように考えているかということを案じています。

「ユダヤ人が神に選ばれた民である」という考え方は、もともとヘブライ語聖書から生まれたものです。たとえば出エジプト記第19章4～6節には、神がモーセを呼んでイスラエルの民に次のように告げるよう伝えたと書かれています。「あなたたちは見た わたしがエジプト人にしたこと また、あなたたちを鷲の翼に乗せて わたしのもとに連れてきたことを。 今、もしわたしの声に聞き従い わたしの契約を守るならば あなたたちはすべての民の間にあって わたしの宝となる。 世界はすべてわたしのものである。あなたたちは、わたしにとって 祭司の王国、聖なる国民となる。」(※1) ここでは、イスラエルの民が神に選ばれたということが、契約と戒律という聖書的概念と密接に結びついて語られています。つまりイスラエルの民は、「モーセの律法」という特別な教えによって他の民族と区別されたことになります。ただしこれには、「イスラエルの人々が契約を守るならば」という条件が付いていました。またイスラエルを祭司の国と名指していることから、神が一方向的にイスラエルを加護するのではなく、イスラエルの民も神と全人類の仲介役となる役目を託されたのだということが分かります。この考え方はイザヤ書の中でいっそう明確に打ち出されています。イザヤ書は、

イスラエルの民が神の真実と力の証人となり、全人類のために尽くす使命を負っていることを、次のような言葉で記しています。「主であるわたしは、恵をもってあなたを呼び あなたの手を取った。民の契約、諸国の光として あなたを形づくり、あなたを立てた。見ることのできない目を開き 捕らわれ人をその枷から 闇に住む人をその牢獄から救い出すために。」(イザヤ書第42章6～7節)

選民イスラエルという聖書的概念は、ユダヤ教の世界に「個別」と「普遍」の対立という、後世のユダヤ教徒によっても解決できない問題を引き起こしました。この問題は、むしろ宗教的パラドックスと考えると一番分かりやすいのかもしれませんが。保守的なラビでさえ、折に触れて選民思想に対する不快感を書き残していますが、古典的なユダヤ教の文献の中では、この考え方は説明されないまでも、すべて肯定されています(※2)。

中でも選民思想を最も端的に表しているのがユダヤ教の祈祷書で(※3)、本日私が取り上げたいのも正にこの文献なのです。ユダヤ教の信仰には様々なパターンがありますが、祈祷書を中心に論を進めると、その全容を手っ取り早く理解することができます。というのも、他のユダヤ教的伝統を記したテキストとは異なり、祈祷書は昔から今まで、教養のある者となない者、学者と素人、そして男性と女性の区別を問わず、すべてのユダヤ教徒によって共有されてきたからです。ユダヤ教には正統な信条というものがありません。ユダヤ教徒は誰もが、日々祈祷書の言葉を唱え、ときにその文言を暗唱し、共同体で祈祷を執り行い、その教えを自分の血肉としてきました。その意味で祈祷書は、神学のカリキュラムに一番近いものであるといえるでしょう。

ユダヤ人は皆が皆自分の唱える祈りの言葉を信じているかといえば、決してそうではないでしょう。しかし祈祷書の中に信仰の土台となる諸要素が記されていることは確かです。祈祷書は公の言葉です。一つ一つの言葉は個人によって作られた

ものだとしても、その中身は共同体全体に浸透しています。保守的なラビもリベラルなラビも、やり方の違いこそあれ、「信徒が礼拝の中で唱える祈りの言葉とユダヤ教の信仰の間に矛盾があってはならない」という考えを実践しています。保守的なラビなら、信徒の信仰を伝統的な祈祷書の中身に合わせようとするでしょうし、リベラルなラビなら、伝統的な祈祷書の内容を変えて、信徒の信仰と祈りの言葉を一致させようとするでしょう。

本日私が重点的に取り上げたいのは、「アレヌ(Alenu)」とよばれる祈りです。この祈りの文言は、リベラルなユダヤ教徒が様々な典礼改革に乗り出すきっかけとなっていることから、選民思想に対する米国ユダヤ人の考え方を研究する上で非常に面白い資料であるといえます。伝統的なアレヌの英訳テキストが皆さまのお手元にあると思いますが、ご覧の通り、最初の段落ではイスラエル人の優越性があからさまに示されています。しかも「イスラエル人は、この世界で独自の宗教的使命を果たすために神に選ばれた」ことが明言されているだけでなく、異教徒の信仰する神を侮辱するようなことも書かれています。「なぜなら彼らは虚と空に向かって頭を垂れ、救いを授けることのない神に祈っているからである」。ところが第一段落から第二段落に移ると、異教徒に対する辛辣な言葉は陰を潜め、代わって「神の王国で全人類が一つになる」という預言が高らかに謳われています。そしてイスラエル人に課せられた使命を強調した上で、広く普遍的なビジョンが語られています。この二つの段落は、相反する二つの内容を対比する構成となっています。第一段落では手厳しい表現で絶対的な真理を訴え、続く段落でこうした強い調子を和らげようという意図があったのでしょうか。今日アレヌは毎日の朝、午後、夜の礼拝で、結びの祈りの一つとして唱えられています。

この祈りをめぐる歴史と言い伝えをひもとくと、ユダヤ人が米国に渡るずっと以前から、アレヌは伝



統的な選民思想を論じる根拠となっていたことが分かります。「ユダヤ人だけが真の神に選ばれた民族である」という過激な内容のアレヌがいつ、どのような理由で日々の祈りに取り入れられたのかについては、はっきりしたことが分かっていません。ただ確かにいえるのは、この祈りは西暦紀元最初の数百年間に始まり、当時はロシュ・ハシャナというユダヤ教の新年に限って唱えられていたということです。12世紀に入るとアレヌはユダヤ教徒の記憶の中ではっきりとした位置を占めるようになります。エフライム・ベン・ヤコブ (Ephraim ben Jacob) というボンの典礼詩人兼注解者が十字軍によるユダヤ教徒迫害の記録を書き残しているのですが、その中には、1171年の虐殺でプロア市のユダヤ教徒たちがアレヌを唱えながら殉教していったときの様子が記されています。アレヌは「厳しさを増すキリスト教の圧力への抵抗として、日々の礼拝の中で唱えられるようになった」とする説もあります(※5)。

エフライムの残した記録とアレヌ人気の高まりの間に関係があったにせよ、なかったにせよ5)、この記録を読むと、エフライムがアレヌに謳われたユダヤ人の優位性を強く擁護していることが分かります。ここには、肉体的迫害のさなかにあったユダヤ教徒が、アレヌを唱えることで自らの精神的優越性を肯定していたことが描かれているからです。アレヌがこのような理由でユダヤ人の優越性を執拗に説いていたのだとすると、「選民」という考え方に微妙なぶれが生じてきます。聖書には、贖罪と啓示ゆえにユダヤ人が「選ばれた」と記されているのに対し、後の時代には、ユダヤ人の苦難そのものが、神に選ばれたことの証であると解釈されるようになったからです。これに対してキリスト教は、ユダヤ人は神に見捨てられたために、世界を放浪する運命を強いられたと説いています(※6)。

ヨーロッパでは、アレヌの祈りは何世紀もの間、ユダヤ教とキリスト教をめぐる宗教論争の焦点となっていました。14世紀には、ユダヤ教からキリスト

教に改宗したPesah Peterという人物が、アレヌの中で非難されている「くう空」をあがめる者というのは、暗にキリスト教徒のことを指している、という主張を展開しています。「空」を意味するヘブライ語「Va-rik」の数秘学的な意味が「イエス」と同じであるというのがその根拠で、ユダヤ教社会はこの説に真っ向から異議を唱えましたが、13世紀にも1人のユダヤ人が著作の中で、アレヌに述べられた「虚と空」が数秘学的にイエスとムハンマドを指すことを明らかにしています(※7)。おそらくこれは著者独特の解釈であり、アレヌの本来の意図ではなかったものと思われますが(※8)、いずれにしてもユダヤ教徒たちは、キリスト教徒から執拗に浴びせられる非難を一貫して否定してきました。アシュケナジー系ユダヤ人社会の一部は、アレヌのこの部分を自発的に削除したり変更したりしています。またキリスト教会による検閲を甘んじて受け入れたケースもありました。プロシアは1703年にこの文言を唱えることを禁止する令を出し、その徹底をはかるために、シナゴークに官憲を立ち会わせることまでしています。「虚と空」という文言は、イスラーム圏の中で培われたユダヤ教の儀式の中に今も残っていますが、ドイツ系ユダヤ人が米国に渡る以前に、この文言はアシュケナジー系ユダヤ人の社会からほぼ全面的に姿を消していました。

19世紀に入ると、アレヌをめぐる論争はユダヤ教徒対キリスト教徒という図式から、ユダヤ世界内部の対立へと様相を変えてゆきます。ユダヤ人開放直後の数十年の間に、アレヌの選民思想的な考え方に眉をひそめるユダヤ人が出てきたためです。彼らは、アレヌの内容はユダヤ人が二心を持つことを露呈するものであり、やっとの思いで手に入れた大切な市民権を脅かしかねない、と考えたのです。また「ユダヤ人だけが神の真理を知る」という考え方そのものに異議を唱える者も出てきました。1885年、アメリカ合衆国ではラビの一団がいわゆる「ピッツバーグ要綱 (Pittsburgh

Platform)」を採択し、これを機に米国におけるユダヤ改革運動が始まりました。この要綱の中でラビたちは、ユダヤ教について云々するよりも先に他の宗教にも真理があることを認め、次のように宣言しています。「我々は、すべての宗教の内に無限の叡智を求めたいという意志を見、かつ一切の宗教体系において神聖視されているすべての様式、典拠、または啓示の書の中に、万人の内に神が宿るという認識を見い出す」(※9)。

こうした初期の改革者たちは聖書の選民思想を根本から否定することこそしませんでした。出エジプト記にあるような「選ばれた契約の民」という考え方を退け、「もろもろの国びとの光」というイザヤ書に描かれたユダヤ人像を重視しました。ラビたちは共通祈祷書 (Union Prayerbook) に収められたアレヌの文言を大幅に変更し、ユダヤ人の自己認識が様変わりしたことをはっきりと示しました。お手元の資料にありますように、1890年代に発行された改革派の祈祷書では、ユダヤ人の優越性を謳った箇所がアレヌの第一段落からすっぽり削られ、代わって第二段落の普遍主義的考え方がさらに詳しく述べられると共に、次のような兄弟愛を掲げた一節が新たに加えられています。「神の姿に似せて創られたすべての民が、人類が皆同胞であることを知り、心を一つにし、思いを一つにして、神のみ前で永遠の結びつきを得ますように」。

20世紀に入ると、ユダヤ教の選民思想は、モルデカイ・M・カプラン (Mordecai M. Kaplan) というラビによりさらに徹底した批判にさらされます。ユダヤ教再建主義者運動の創始者であったカプランは、「ユダヤ人が神に選ばれた民族であるという考え方は、迫害され、辱めを受けていた民の自尊心を向上させる上で大切な心理的役割を担っていた」ことを認め、初期のユダヤ人の精神的な優越性を肯定した上で、対立や疑念、そして一つの国や民族が他よりも優れているという考えを招くような主義を持ち続けることは、倫理的に問題である、

と断じています(※10)。「神を求めることが分裂を招くのではない」とカプランは語っています。「神を見つけたと主張すること、そして神に従い、神と意志を通じる唯一の正しい方法を見つけたと主張することが対立の原因となるのだ」(※11)。1945年、カプランは仲間と共に祈祷書を再編し、異教徒の信仰を否定した伝統的なアレヌの文言に代えて神とユダヤ人との前向きな関係を謳った一節を祈りの中に盛り込みました。また神の選択について触れた箇所を全て削除しました。「この祈祷書は、我々が万有の神を賛美し、我々に真理の教典(トーラー)と、内なる永遠の生命を与えたもうた創造主の偉大さを称えるためのものである」(※12)。

ここで話を終えれば、「米国では、伝統的な宗教形式や教義を守るユダヤ人社会とは別に、民族の優越性や個性といった考えをきっぱりと切り捨てたりベラルなユダヤ教社会が、改革または再建された宗教生活を送っている」と締めくくることができるのですが、北米のリベラル派ユダヤ人社会をめぐる状況はそれほど単純なものではありません。確かにリベラル派は今も普遍的な宗教観を肯定しており、無批判にユダヤ法に従う態度を戒めています。ここ数十年でリベラルなユダヤ人の間に伝統的な宗教観を支持する動きが新たに台頭してきているのも事実です。

祈祷書は信徒の心の内を映す格好のパロメーターです。そして改革派、再建派の信者が現在使用している祈祷書には、驚くべきことに伝統的なアレヌの祈り(大昔に削除された一行を除く)が、他の祈りと共にオプションとして掲載されているのです。1994年に発行された再建派の祈祷書では、編者が「伝統的なアレヌの祈りは他の信仰や民族がユダヤに劣っていることをほのめかす内容であったため、再建派ユダヤ教徒の間で問題視された」という注をつけてアレヌを批判していますが、その一方で問題視されたこのテキストを祈祷書の中に取り入れているのです(※13)。





今では、改革派の信徒の中に選民的思想が戻ってきたのは米国のユダヤ人をめぐる事情が変化したためである、という理解が一般的です。米国のユダヤ人社会が移民主体だった頃には、リベラル派ラビなどの指導的立場にある者が中心となって、移民たちが一日も早く米国社会に馴染めるよう、ユダヤ人の米国人化に力を尽くしました。ところが今やユダヤ人は米国の社会の隅々にまでしっかりと根を下ろしています。米国のユダヤ人たちは、生まれ落ちた瞬間から民主主義と多文化主義という米国的な価値観の洗礼を受けており、ユダヤ教独自の教えや礼拝に触れることができるのは、シナゴグを訪れる数少ない機会に限られています。つまり米国生まれのユダヤ人にとってユダヤ教は未知の存在となっているといえます。移民としてこの国に渡ってきた先人たちが、旧世界の言葉、服装、そしてヨーロッパ的な感性と共に、旧態然とした信仰を捨て去ったのに対し、若い世代の米国のユダヤ人たちは、祖父母の世代が否定した伝統そのもののの中に新鮮な意味を見いだしているのです。

リベラル派ユダヤ教徒の間で、自らの魂を追究する動きと古い宗教観が再び頭をもたげているのに対し、ユダヤ人がすっかり米国人化し、また米国社会がユダヤ人を広く受け入れてきたという状況が、米国におけるユダヤ民族の存続そのものを危うくするのではないかと、とする懸念もあります。私自身は、米国のユダヤ人の消滅を予見する社会学者の一派に与するものではありませんが、人口動態の傾向を目の当たりにすると、考えを改めようという気になります。あるデータによると、ユダヤ教徒が他の信者と結婚する割合は今や50パーセント近くにのぼっており、しかもそうした家庭の大半が、子供をユダヤ教徒として育てるつもりはないと回答しています。また米国ユダヤ人の出生率の低下も問題になっています。ユダヤ民族は今後高齢化に向かう一方であり、しかも移民による人口増も望めま

せん。そこで、こうした傾向に危機感を抱く米国のリベラル派ラビは、私も含め、新しい役割を担うようになりました。私たちの先人は、米国に渡ってきたユダヤ人移民を米国社会にとけ込ませようとしたが、私たちは、米国のユダヤ人を熱心なユダヤ教徒に変身させようとしているのです。

かつてユダヤ人は、自分たちが選ばれた民であると信じていました。この信念が、ユダヤの伝統を守り、ユダヤ教の教えを受け継ぐ力となっていたのです。今日米国のユダヤ人は、全ての人間は平等に創られていることを知っています。そして私たちは、ユダヤ教を存続させるための理由を模索しています。こうした理由は深遠にして説得力を持ち、私たちの普遍的使命を反映したものでなくてはなりません。私たちは、神の驚異、神秘、神聖性を尊ぶ気持ちと、宗教的使命感をもう一度取り戻したいと思っています。私たちの先人は、自分たちが選ばれた民であることを知っていました。しかし今日、私たちに分かっているのは、ユダヤ教を選び、その栄光と理想を未来に伝えることができるかどうかは、私たち自身の行動にかかっている、ということだけなのです。

最近私は、霊的修養と、伝統的なユダヤ人社会に見られる地域的結束の大切さをひしひしと感じています。私の信仰は、伝統的なユダヤ教徒のそれと較べるとはるかに恣意的なものです。それでも私は厳格な信仰の実践に努め、倫理的、宗教的義務を見いだすために絶えず力を尽くしてきました。私は常に、米国の文化を補完し、修正する一つの生き方としてユダヤ教を位置づけてきました。米国の個人主義を戒めるために地域社会の責任を訴え、米国的物質主義、大量消費主義を是正するために「究極の意味」の追究を促し、暴力が蔓延する米国社会において人の命の尊さを説いてきたのです。このようにして私は、個別主義の追究がいずれは普遍主義への回帰につながることを証明したいと考えています。作家のシンシ

ア・オジック(Cynthia Ozick)の著作にこのことを分かりやすく記した一文があります。オジックは、年に一度懺悔と改心のために雄羊の角笛を吹き鳴らす伝統行事に触れ、次のように記しています。「私たちがショファール(角笛)の狭い方の口に息を吹き込めば、その音は遠くまで響くだろう。しかしもし私たちがユダヤ人ではなく人類であろうとし、広い方の口に息を吹き込めば、私たちの声はまったくどこにも届かないだろう」(※14)。

最後に、私の会堂で実践しているアレヌの祈りについてご説明したいと思います。これは私の監督下で導入した形式なのですが、私の会堂ではまずヘブライ語でこの伝統的な祈りの第一段落を唱え(文言はもっと穏やかな表現に変えています)、次にその内容を詩的に訳したものを朗読しています。詩の翻訳はラビのラミ・シャピロ(Rami Shapiro)氏によるもので、お手元の資料にテキストが掲載されています。信者の大半は自分たちの唱えるヘブライ語の意味を全く理解していないわけですから、ときにはこうしたやり方が何だかごまかしのように思えることもあります。楽しそうに祈りの言葉を唱和していても、祈禱書に記載された英語訳をじっくり読めば、ちょうどかつての改革派ユダヤ教徒がそうだったようにアレヌの個別主義的思想に違和感を覚える人も出てくると思います。それでもこのような形でアレヌを唱えることは、まずユダヤ人独自の神聖な言葉で個別主義への思い入れを語り、次に共通語である英語で広い視点から普遍的ビジョンを唱えるということで、それなりに筋の通ったことなのです。だからといって個別主義対普遍主義というユダヤ教のパラドックスが解決されるわけではありませんが、ヘブライ語の意味が理解できないので、何となくお茶を濁して倫理的な問題に正面から向き合わずにすんでいるわけです。

さて本日のセッションは、偉大な宗教的伝統の中で何が多文化理解の妨げとなっているかという

問いを投げかけていますが、私の周囲のユダヤ人社会では、多文化社会における宗教のあり方を論証するという、正反対の課題の方がずっと大きな関心と呼んでいます。リベラル派ユダヤ教社会における私の仲間や信者は、カプランの選民思想批判をしっかりと自分のものとしており、ユダヤ人の優位性を唱える説に警戒感を抱いています。私たちが実現しようとしているユダヤ教は、特別ではあっても排他的ではなく、力強くはあっても孤立しておらず、他の偉大な伝統的思想や信仰と通じ合ってはいても、決してその中に同化することのないものなのです。私たちは神秘を、神聖な存在を、そしてすべてを超越した義務を追求しています。リベラル派ユダヤ教徒であり、女性ラビでもある私は、片方の足を伝統の内側に入れ、もう片方を外側に出した状態で立っています。ですからこのような集まりの場で私がなすべきことは、他宗教の説く真理に真摯に耳を傾けると同時に、ユダヤ教が独自に育んできた知見を再確認し皆さまと共有しながら、適度な距離を置くことと倫理観を育むことの大切さをお伝えすることなのです。倫理観というものは、敢えて距離を置いてこそ見えてくる場合もあるからです。

- 1) 聖書の引用は日本聖書協会の『新共同訳』による。以下同じ。
- 2) Arnold M. Eisenが著書 *The Chosen People in America: A Study in Jewish Religious Ideology* (Bloomington: IU Press, 1983) p.17.で述べている説。
- 3) たとえば、トーラ朗読の前の祈りや、シェマアの前に唱える朝夕の祝祷など。
- 4) Aleinu Le-Shabbea'ah, Encyclopedia Judaica, 2:559.
- 5) Stefan C. Reifは、アレヌはプロアの虐殺以前から既に日々の祈りとして唱えられていた可能性があると述べている。*Judaism and Hebrew Prayer: New Perspectives on Jewish Liturgical History* (Cambridge: Cambridge University Press, 1993) 209.
- 6) このような反ユダヤ論の例としてヨハネ・クリソストモスの説教があげられる。実際にはユダヤ人の苦難が神の選択の証であることを示す記述が聖書の中にある。「地上の全部族の中から私が選んだのはお前たちだけだ。それゆえ、わたしはお前たちをすべての罪のゆえに罰する」(アモス書第3章2節)





- 7) *Arugat Ha-Bosem*, by Abraham b. Azriel.
- 8) アレヌが成立したのはイスラームが生まれる以前のことで、キリスト教とはほぼ同時期に誕生した可能性はあるものの、いずれにしても数秘学云々の説には理論的に無理がある。ただしユダヤ教徒がこの祈りを唱えるときに、キリスト教徒とムスリムのことを念頭に浮かべなかったというわけではない。
- 9) ピッツバーク要綱はMichael A. Meyer著*Response to Modernity* (Detroit: Wayne State, 1988) 387.の補遺に掲載されている。
- 10) Mordecai M. Kaplan, *Judaism as a Civilization: Toward a Reconstruction of American-Jewish Live* (New York: Macmillan, 1934) 43-44.
- 11) 1928年度版 the SAJ Review のカプランの記事より。*Kol Haneshama: Shabbat Vehagim* (Wyncote: The Reconstructionist Press, 1994) p. 125.に掲載。
- 12) Sabbath Prayerbook, 1945.
- 13) *Kol Haneshama: Shabbat Vehagim* (Wyncote: The Reconstructionist Press, 1994) p. 120.
- 14) *I Am Jewish: Personal Reflections Inspired by the Last Words of Daniel Pearl* (Woodstock, VT: Jewish Lights, 2004) p. 49.より抜粋。

宗教間対話への要請

メトロポリタン宗教間対話会議
 クラーク・ローベンシュティン
Clark Lobenstine

はじめに、同志社大学の一神教学際研究センターが開催する、この素晴らしい会議に参加する機会を与えていただいたことを、会議の企画・運営に尽力されたすべての方々に心から感謝申し上げます。なかでも、長年の研究仲間であるバーバラ・ブラウン・ジクムンド博士には、研究仲間の代表として私を招待してくださったことに感謝いたします。また、宗教対話協議会での経験から一言言わせていただきますと、今のアメリカにはCIS-MORの趣旨説明で明記している「アブラハムの宗教」よりもはるかに多くの一神教があります。信者数が最大であることは間違いありませんが、バハイー教と、ヒンズー教の中の少なくともヴェシヌ教、シーク教、ゾロアスター教もあり、これ以外の他の宗教も含まれるかもしれません。

ある友人がこう言いました。「コミュニティーを形成するには二つの方法しかない。食事を共にすることと、話をする事だ」と。今ここにいる私達は両方ともできるという素晴らしい機会に恵まれています。宗教対話協議会の経験から、コミュニティーを形成する方法は少なくとももう一つあることは明らかです。それは正義のために協力し合って取り組むことです。この週末に、これ以外の方法もいくつか見つけることができるかもしれません。

ですから、まず話をするところから始めたいと思います。そして、プロテスタント主流派の一つである長老派教会(米国)の牧師として、なぜ私が宗教間対話に取り組まずにはられないのかを皆さんに理解していただきたいと思います。25年前に私

はワシントンDCへ戻り、ワシントン・メトロポリタン宗教対話協議会 (Inter Faith Conference of Metropolitan Washington) の初代代表になりました。神が私をこの聖職に召していることをはっきりと感じていなかったら、このような草分け的組織の最高指導部への誘いを引き受けていなかったでしょう。とはいえ神の知恵のもとに、私は子供の頃からこの役割を担う準備をしてきたように思います。

父がアメリカの専門外交官だった関係で、私は10歳になるまでにコロンビア、ペルー、レバノン、ドイツ、そしてアメリカで暮らしました。このような経験は多宗教・多文化に関わる仕事のための素晴らしい準備となっただけでなく、宗教間対話の仕事において重要な技能となる外交術を父から吸収することができたことを神に感謝しております。また、私達が暮らしたどの町にも英語を話す(英国教会系でない)プロテスタント集会があり、様々な教派の牧師がいたために、これはエキュメニカル(超教派的)な経験でもありました。

私の母は家族の面倒をみるだけでなく人を助ける活動に常に関わっていました。私の4人の兄弟姉妹と私が家を出た後、母はいっそう情熱を傾けるようになり、バーモント州ブラトルバラの重要な地域社会活動家の一人となりました。私の兄と双子の弟がソーシャルワーカーになることを決めたのも、私が社会事業学と神学の両方の修士号を取得しようと決心したのも母の影響によるものです。私の聖職は常に、宗教コミュニティーとより広いコミュニティーが交わる部分にありました。

私は父方の祖父からも大きな影響を受けています。祖父は1898年から1935年まで中国で長老派教会の宣教師をしていました。そこでの最後の20年間は中国キリスト教協議会の外務担当主事を務め、アメリカ、カナダ、ヨーロッパの約50の宣教師協会と中国にある約68の無所属の教会の調整に携わりました。祖父は私が13歳のときに亡くなりましたが、私が宗教間対話の活動に関わるようになったのも祖父の影響によるところが大きいのです。1951年に祖父が書いた論文の中で、伝道の目的を新たな視点で捉えるようになった初期の経験についてふれています。その「プロテスタンティズムに対する私の考えは、年月を経て、どのように進展したのか」(*How My Thinking on Protestantism Developed Over the Years*)と題した論文から一部を紹介しますので、皆さんも一緒に一世紀前に戻ってみませんか。

「1901年、私は同僚とともにホワイ・ユエン行きを命じられ、そこに住居を定めました。農民たちのために奉仕活動をする任務を与えられたのです。その土地は肥沃でしたが、たびたび水害に見舞われるため人々の暮らしは非常に貧しいものでした。

赴任後まもなくして起きた(二つの)興味深い出来事があります。ある日、街の大通りで小さな店の主が富の神が描かれた掛け軸の前でひざまずいているのを見かけました。その人は金持ちになりたいと祈っていたのではなく、ただ彼の家族と手伝い人の家族に日々の糧を与えてくださいと祈っていたのです。彼のこの祈りは、その偶像の神は彼の心の中にしか存在していないのだから、暮らしていくために彼自身がやれること以外に、彼と彼の暮らしがかかっている農地に神の助けが必要であるという認識ではないかと考えました。彼の祈りは言うなれば宛先違いで、私達の神や父なる神に届かなかったのではないかと。人間の日々の糧のために神に祈ることは、本質的にイエスの教えに従っていないのではないかと。このように自問しました。

その後しばらくして、友人が私をその地方で最も尊敬を集めている教師の一人のところへ連れて行ってくれました。その教師は小さな村にあるかやぶき屋根の土壁の家に住んでいました。長年にわたって彼は、その地方のどの教師よりも多くの生徒に公務員試験の準備をさせていました。当時私は中国語があまりよく話せなかったので突っ込んだ話はできませんでしたが、彼の人柄にたいへん感銘を受けました。とくに私達が帰る前に、毎日の瞑想と祈祷のために使っている隣の部屋に案内してくれたときのことです。祈祷のときに時間を気にしないように腕時計の類はなにももっていないので、朝と夕に二本のろうそくを灯しそれが燃え尽きるまで道教の瞑想を続けました。けれども、50年前の布教の主な目的の一つは(そのために私は中国にいたのですが)、あらゆる形の偶像崇拜と闘うことでした。私は彼に対してまったく批判的な思いを持たなかったばかりか、むしろ私自身の礼拝生活に恥ずかしさを感じて彼の家を後にしました。』(E・C・ローベンシュティン著『プロテスタンティズムに対する私の考えは、年月を経て、どのように進展したのか』1951年12月)

祖父は1世紀前のキリスト教徒がほとんど経験しなかったような形で宗教多様性との闘いに取り組んでいました。そして私達家族はまだその取り組みを続けています。私の妹メグは神の召命により南部バプテスト宣教師としてダーバンのヒンズー教コミュニティの中で宣教活動をしています。私は、やはり神の召命により、宗教対話協議会の代表を務め、ヒンズー教や他のコミュニティと力を合わせて各宗教に対する敬意を深めるために、そして正義のために活動しています。私も妹も、神が自分をこのような聖職に召したことをはっきりと感じています。この二つの宣教方法が明らかに相反していることは、神の慈愛の豊かさの現われであり、おそらくは神のユーモアのセンスを示す一例なのだと考えます。

これに関連する事柄を明確にするために、その後私が経験したことについてもう一つお話ししたいと思います。1985年の夏に私は研究休暇を利用して、シカゴのマコーミック神学校に提出する「クリスチャンとムスリムの関係：神との契約のきずな、対話の希望」(*Christian-Muslim Relations: Our Bond in Covenant with God, Our Hope in Dialogue*)というテーマの宣教学博士号論文に取り組みました。CISMORの蔵書用にこの論文のコピーを持ってきましたので皆さんのお役に立てば幸いです。それは、5週間エルサレムに滞在中に双子の息子の11歳の誕生日を祝ったことなのですが、宗教的に多様な社会に生きることの難しさを垣間見ることができました。

私達はマサダと死海へ旅行に行ってこの特別な日を祝いました。マサダはエルサレムの南の丘の上にあるローマ帝国の支配者の夏の別荘地で、抑圧者と闘うユダヤ人集団の最後の抵抗の場となったところでした。しかし、華氏100度(摂氏40度以上)をゆうに超える時期にこのような史跡を訪れることは、子供達にとっては退屈極まりないことでした。早く死海に行きたくてたまらないのです。というのも彼らは、死海は塩分が非常に多いために中に入っても決して沈まないことを知っていたからです。ところが子供達は水に入ってから数秒もたたないうちに飛び出してきました。蚊に食われたところが塩水でヒリヒリと痛んでたまらないからです。シャワーで塩水を洗い流し砂浜で遊んでから、予定よりも早く帰路に着きました。

エルサレムに戻るバスの車内で、見るからに正統派ユダヤ教徒のいでたちをした男の人の隣に座りました。運良く彼は流暢な英語を話したので私達は会話を始めました。まもなく彼はキリスト教の三大宗派の違いは何か、という質問をしてきました。彼が牧師と話をしたことがあるのかどうかは分かりませんでしたが、私はエルサレムに着くまでの30分間を最大限に利用したいと思いました。彼にな

じみがあるかもしれないので、エルサレムにある正教、プロテスタント、ローマ・カトリックのキリスト教徒にまつわる主な建物や史跡を用いて説明しようと思いました。

宗教間対話活動に携わる私にとって中核をなす信念として、相手の宗教に対する敬意をもって説明をしましたが、後から考えると貴重な対話のチャンスを逃してしまっていました。バスターミナルに到着したときに私の説明が終り、彼はお礼を言いました。しかし、彼は本当に大事なことを何か学んだのでしょうか。そして、私は彼から何を学びそこなったのでしょうか。もし私が彼にも話をさせていたら、なによりも頭ではなく心で語り合っていたら、どのような結果になっていたのでしょうか。

宗教対話協議会での経験を経て私は、諸宗教間のつながりには心からの分かち合いが重要であるとの思いをいっそう強くしています。それは学問教育や学究的な対話を補完する重要な要素であり、ともに諸宗教間のつながりや協議会に加盟している宗教コミュニティを形成します。宗教対話協議会において、例えば若者や成人を対象とした、あるいは世代間で行う宗教間対話の最も人を引き付ける企画の一つは、「私が(ユダヤ教徒、ムスリム、シーク教徒、バハイー教徒、プロテスタント、あるいは他の宗教の)信者でありたい理由」をテーマとする発表です。参加者は自分の生活における「ウンマ」(宗教コミュニティ)の影響や神について個人的な経験の話をするので、互いにいっそう強く話に引き込まれます。その結果、いろいろな宗教の教義についての討論や、あるいは歴史の中のある時点で起こった事柄に関する議論をしないですむのです。

私自身の信仰生活のためと、心からの説明の手本を示したいという気持ちから、私は宗教間対話の場で、なによりもイエスを通して神の愛を知ることができるという幸運を神にとっても感謝していると公言することがたびたびあります。しかし同時に、



様々な宗教の熱心な信者の方々からどのように神の愛を体験したのか教えてもらいたいと思っていることははっきりと言います。

多様な人々の間の相互理解と尊重の気持ちの促進に努め、ワシントンDC首都圏に公正なコミュニティを形成することを目指して力を合わせていると、神の子であるイエスと私の個人的な関係は私にとってこれまで以上に大切なものになっています。このような信仰の深まりは、宗教間対話の行事や企画に参加している人々に共通したものではないにしても一貫して見られる経験です。

私のイエスとの関係の大切さは、なによりもイエスと対話をするという習慣によって育まれたものです。1993年の夏から私は、心の指導者、ネル・テンプル・ブラウン(Nell Temple Brown)との定期的な面会を始めました。彼女は私にイエスと対話を始めるようにと勧めました。最初の頃は大きな連続コンピュータ用紙にマジックで書いていました。その後、目を閉じたままコンピュータに向かって書くようになりました。私の思いと気持ちをイエスに伝え、イエスが私に言っていると感じたことをキーボードをたたいて文字にするのです。このような対話について私が誰かに話をすると、その人は私がイエスが私に言っていると感じたことの内容について必ず肯定してくれます。このような対話を時折にせよ10年以上も続けている中で、私はイエスからこのような優しさ、このような愛、このようなやさしい導き、このような謙虚さだけでなく、ユーモアや、そして宗教対話協議会の私の聖職に対する強い肯定を与えてもらいました。

イエスとの結び付きを強く感じているという素晴らしい幸運に深く感謝している私は、パリのルーブル美術館にある6世紀の聖画の複製に美しい表現を見つけました。この聖画には、左腕に聖書を抱え、右腕をメナ修道院長(Abbot Mena)に回しているイエスの姿が右側に描かれていました。メナは中世エジプトの時代に修道僧の集団を率い

ていました。私の礼拝スペースや、オフィスの机の上や自宅のパソコンの脇に置かれた複製画を見ると、私がイエスとつながっているときは祈ることしかしていないということを常に思い出させてくれます。イエスの愛の神秘のもとにイエスは私を供として召され、イエスが私に召した和解という聖職を私が日々全うすることを期待されているのです。

一方、他の宗教を信じる敬虔な友人たちの洞察のおかげで、人類一人ひとりと万物に対する神の偉大なる愛についての私の理解は深まっています。宗教対話協議会では、「神をかいま見ること」と私が呼んでいる経験をお互いに発表しあう機会がたくさんあります。「ヨハネによる福音書」の書き手と同様に、私も「神を見たものはまだ一人もいない」と信じています(ヨハネによる福音書1章18節)。それでもなお、どの宗教を信じているかにかかわらず、私達の一人ひとりが、恩寵と愛、審判と許し、聞き入れられた祈りと導きなどの様々な「神をかいま見ること」を経験しています。このような「かいま見ること」をお互いに発表し合うことによって、私達の理解を超えている存在である神についての理解を深めることができます。

さらに、新約聖書の「ペテロの第一の手紙」の中の「あなたがたのうちにある望みについて説明を求める人には、いつでも弁明できる用意をしておきなさい。しかし、やさしく、慎み深く弁明しなさい」という賢明な助言もとても大切に役に立つと思います(ペテロの第一の手紙3章15節)。私達の生きている時代に実際に役立つ有益な助言ですので、私が好んで説教に使う節の一つとなっています。

しかしながら、やさしく慎み深く私達のうちにある望みについて説明することは、必ずしも容易ではありません。私達の信仰の喜びや確信から、独り善がりだと相手に思わせるような口ぶりで説明してしまうかもしれません。「私達は一つの本当の道を知っているの、あなたから学ぶことは何もありません」というような私達の「一つの道」というやり方

は、私がとくにイエスで経験している、すべての人々に対する神のあふれる慈悲と深い愛を損なうものです。あるいは、別の方向への行き過ぎもあります。気恥ずかしさや、怒らせて他の宗教に向かわせたくないという気持ちから、私達にとって肝心なことを伝えそこなうかもしれません。「宗教間対話の場でイエスについて話をしてもよいか」という質問をキリスト教徒の方から時々受けます。「もちろんいいですよ」と私は答えます。ただし、どのようにそれをするのがとても重要なのです。私達とともにある人たちのために、やさしく慎み深くイエスについて話をする必要があります。

キリスト教徒である私達がイエスとの経験の個人的意味、つまりイエスが私達のうちにある望みの源である理由を説明するならば、多くの人は耳を傾け私達と神との関係を知りたがるでしょう。とくに、私達も彼らの人生における神の経験や彼らのうちにある望みの源を知りたがっているならばなおさらです。

こうした関係において私達は神の愛の神秘を実現するのです。それは、「主イエス・キリストにおける希望」(*Hope in the Lord Jesus Christ*)というタイトルで米国長老派教会が2002年に発表した次の文章に現われています。

したがって、私達はキリストへの信仰をはっきりと言葉にする人たちに神の恩寵を限定するものではなく、宗教に関わらずすべての人が救済されると思っているわけでもありません。恩寵、愛、そして交わりは神に属するものであって、それを決めるのは私達ではありません。

私の考えでは、ペテロは「やさしく、慎み深く」私達の信仰を他者と分かち合うように呼びかけましたが、これは神学上必要なだけでなく、この多くの信仰が存在する地球村に人間として暮らす私達の未来のために必要なのです。

このことについて私の理解がいっそう深まったのは、カナダのバンクーバーで開催された世界教

会協議会(WCC)第6回総会にオブザーバーとして出席した15人の仲間の劇的な経験について知ったときです。彼らは、仏教、ヒンズー教、イスラーム、ユダヤ教、シーク教、そしてアフリカとアメリカの伝統的宗教の信仰者たちです。WCCの企画で、彼らは総会の数ヶ月前にインド洋にあるモーリシャス島に集まり、キリスト教徒の参加者と2週間にわたる活発な対話を繰り広げました。そして、『生きる意味』(*The Meaning of Life*)という報告書をまとめ、総会に出席している代表者に提出しました。

「協議の間、何度となく一つの現実が浮き彫りになった。それは単純なことだが、その意味においては心をかき乱すほどに奥深い。すなわち、私達はお互いを必要としている、対話は一つの選択肢ではない、ということだ。……協議で得られた一つの永続的な教訓は、互いの要求の相互認識を促進するような宗教要素を強化し、より明確に表明しようとする強い意欲と新たな動きが、広くすべての宗教において見られるということだ。世界はあらゆる分野において避けようのない相互依存の状態にある。人間の生命と地球全体に対する脅威のために、私達はみな、どの宗教も単独では存在し得ないという認識を強めている。……平和や正義などの世界的な問題を一つの宗教だけで引き受けることができるとってはならないし、あるいは有意義な形で取り組むことができるとさえ考えるべきではない。というのも私達だけがこの世界にいるのではないからだ。あらゆる文化、人種、宗教の人々がこの世界を共有していて、私達の未来は一つなのである。」(『生きる意味』(*The Meaning of Life*)、アラン・ブロックウェイ(Alan Brockway)編、WCC、1983年、p. 2-3, 18)

モーリシャス宗教対話のキリスト教側出席者の中にダイアナ・エック(Diana Eck)教授がいました。教授は後にハーバード大学で、リリー財団が出資する宗教多元主義プロジェクトのリーダーを務めたので、アメリカの宗教多元主義について誰よりも

よく知っています。そして次のように言っています。

「今日の世界における最も深い分裂は宗教間ではなく同一宗教内で見られるもので、厳密かつ狭量な信仰を求める人と開かれた寛大な信仰を求める人との間の分裂です。つまり、壁を造ることによってのみ自分の信仰が安定すると思う人と、深い根によってしっかりと信仰に根ざしていると感じる人の違いです。現在、こうした分裂はあらゆる宗教の信者に波及しているため、共通の問題として取り組む必要があります。」

「対話に関する見通し——将来に向かって」(A *Perspective on Dialogue: Looking Ahead*)、ダイアナ・エック、『「生きた信仰者との対話」ワーキング・グループ第6回会議議事録』(*Minutes, Sixth Meeting of the Working Group of Dialogue with People of Living Faiths*)所収、p. 20-30、WCC、ジュネーブ、1985年)

「モーリシャス宗教対話でユダヤ教徒の参加者が発言したように、『私達は他者について理解する必要がありますが、私達自身を理解するために他者を必要としてもいるのです』。対話は反射的なプロセスです。世界やその意味と結び付き、そして希望といったものを理解しようとするとき、他者の目を通して自分自身のこともよく分かるようになります。」(エック、前掲書、p. 25)

ある新しい宗教コミュニティの宗教対話協議会加盟を承認するかどうかの決断を下しているときに、私はこのことを痛感しました。加盟にはすべての現会員の同意が必要です。加盟を希望していた、移民を中心とするそのコミュニティは、故国で現会員の宗教の一つに対する激しい暴力に加担したことがありました。現会員であるその宗教集団の中心的聖職者は加盟を認めるべきだという姿勢を明らかにして、他の聖職者達の反対に合っていました。彼は、票決の前夜に行われる食事をしながらの会議に私を誘いました。まさに食事を共にしながら話し合うことによって、宗教コミュニティについての

彼らの理解は深まったのです。信頼を受けた外部の人間として、私は彼らの開祖の逸話を引き合いに出して彼らに最善であるように求めました。その恵み深い夕べが終わるころには、集まった聖職者は全員、新しい宗教集団の加盟承認について賛成票を投じるべきだということを納得しました。さらに、宗教対話協議会を通じて共に新しい関係を築いていけること、そしてうまくいけばそれによってその宗教集団の故国での関係を変えることができるかもしれないということも理解しました。ヒンズー教、イスラーム、ジャイナ教、シーク教、ゾロアスター教を代表して理事会に参加しているインド人の理事たちが集まるようになり、そのうちの二人が最近インドへ行き宗教間の理解を育むための活動をしました。

ドイツの神学者、ハンス・クンク(Hans Kung)は「グローバル・エシック(地球倫理)」の基礎として様々な宗教間で共有している倫理的価値を明確にするために広範囲にわたって活動を続けています。「世界の諸宗教間に平和が訪れない限り世界に平和は来ない」という彼の見解に異論を唱える人はいないと思います。暴力を正当化するための宗教の利用・悪用は、当然ながら宗教対話協議会の対話や行動のテーマとして取り上げられています。9月11日のテロ攻撃以降、この問題はすべての人々にとって大いに重要性を増しています。テロの数時間後に協議会が発表した非難の声明では、1995年に採択した「暴力を正当化するための宗教の悪用と宗教的固定観念の危険性」についての声明から次の部分を引用しました。

「暴力行為は神の創造物である人間に害を及ぼすだけでなく、その正当化はそれぞれの宗教の骨子を歪曲するものです。宗教は人間の命の尊厳を教えてください。したがって、個人的な報復や政治的目的のために行われた大虐殺は上辺だけの尊敬にも値しません。」

宗教的に多様な社会の中で忠実であるためには、私達のうちにある望みについてやさしく慎重深

く説明し、諸宗教間に橋を渡し力を合わせて社会の要請に取り組んでいくしかないと確信しています。事実、宗教対話協議会の代表を務めるという私の聖職は、使徒パウロに与えられた和解の使命に従うことだと解釈しています。

「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた人である。古いものは過ぎ去った。見よ、すべてが新しくなったのである。しかし、すべてこれらの事は、神から出ている。神はキリストによって、わたしたちをご自分に和解させ、かつ和解の務めをわたしたちに授けて下さった。」(コリント人への第二の手紙5章17～18節)

他の宗教を信じる人達との相互交流の用意をしておき彼らとの対話や共同作業にかかわるようになることが、今日私達がペテロの助言を実行する最良の方法だと思います。

「あなたがたのうちにある望みについて説明を求める人には、いつでも弁明できる用意をしておきなさい。しかしやさしく、慎重深く弁明しなさい。」(ペテロの第一の手紙3章15～16節)

この助言は神からの貴重な贈り物ですので、内外のキリスト教会やユダヤ教会堂やイスラーム寺院で、また仏教寺院や神社や仏塔で、そして裁判所や議会や大統領室などで育む必要があります。迫害に苦しむキリスト教徒への助言としてペテロが伝えたこの言葉は、今日の多くの宗教が存在する地球村で共に生きなくてはならない、あるいは共に死ななくてはならない60億の人々に対して求められるものです。

対話と共同作業はすべての人々にとって最も重要なことです。かつてないほどに私達は今お互いを必要としています。ダイアナ・エックはモーリシャスで行われた7つの宗教間の力強い対話を振り返り、次のような驚くべき発言をしています。対話について語るとき、彼女は正義のための共同作業も念頭に置いています。

「対話の一つの世界の基盤となるものです。対

話は関係に不可欠です。そのような関係はたまたま発生するものではありません。力強く、慎重に、そして思いやりをもって築いていくべきです。対話の一つの世界の基盤となるものです。一つの世界は、多国籍企業による資本主義という基盤のうえには築くことはできません。一つの世界は、超大国間の競争や多極化という基盤のうえには築くことはできません。一つの世界は、科学や技術やメディアという基盤のうえには築くことはできません。一つの世界は、キリスト教徒、ムスリム、ユダヤ教徒、あるいはシーク教徒の勝利主義という基盤のうえには築くことはできません。一つの世界は、互いに恐れや疑惑を抱いている基盤のうえには築くことはできません。私達はキリスト教徒の団結を目指してこれまでもそして現在も努力していますが、一つの世界はキリスト教徒の団結という基盤のうえに築くことはできません。

私達の知っている限りでは私達には一つの世界しかありません。実験を試みたり、分割したり、略奪や破壊できるような世界はありませんし、そこで生きることを学ぶために使えるような世界ありません。一つの世界の基盤を築くことが現代の私達の最も重要な課題です。その基盤というのは交渉や協議の結果生まれた声明や合意ではありません。むしろ、対話を通じて信頼を積み重ねていくなかにあり、意見の一致も不一致も受け入れることのできる関係を構築するなかにあるのです。キリスト教徒として他の信仰の人々との対話のもとに前進することによって、一つの世界の基盤となる関係を築くことになります。単独で前進してもそれはできません。」(エック、前掲書、p. 20～30)

以上のことから私は、長老派教会の牧師として、キリスト教徒として、そしてワシントン・メトロポリタン宗教対話協議会の代表として、様々な理由から、理解を深め公正な社会を築くために宗教間対話に関わらずにはいられません。私の生い立ち、イエスとの結び付きを深く感じていること、和解の聖職を



授かったこと、他の宗教を信じる人々との体験、人類が直面している大きな難問についての認識、そして私達の住む地球、これらすべてのものがこの取り組みに深く関わっています。

最後にもう一度、このように重要な会議で皆さんとお話しできる機会を与えてくださったことを深く感謝申し上げるとともに、私の話がお役に立つことを心から願っております。

アメリカの公的領域でイスラームを語る

イスラーム・ネットワーク・グループ（※1）
マハ・エルジェナイディー
Maha Elgenaidi

はじめに

まず、バーバラ・ブラウン・ジクムンド先生、中村明日香さん、長谷川（間瀬）恵美さんをはじめ、この会議の企画に尽力された当センターの職員の皆さんに対して、アメリカ国民だけでなく複数の宗教が共存する国々に直接的関わりのあるこのような重要なテーマについて講演する機会を与えてくださったことを感謝申し上げます。また、日本に来るのはこれが初めてですので、日本の皆さんにお会いし、日系アメリカ人のルーツである偉大な国の一部を垣間見ることができて大変喜んでおります。私を含めてアメリカ人ムスリムは日系アメリカ人を大変尊敬しています。日系の方々が礼儀正しく寛大であるからという理由だけでなく、9月11日の同時多発テロの直後に真っ先に私たちの応援に駆けつけ、テロとイスラームとの連想から憎悪的となっていたアメリカ人ムスリムを支援してくださったからです。日系アメリカ人は第二次世界大戦中の強制収容の経験から、差別というものが人権侵害をもたらし得ることを十分に分かっています。第二次大戦時には、祖先が日本人であるという理由だけで10万人を超える日系アメリカ人が3年間アメリカで抑留されました。その3年間の間に抑留された日系人で有罪判決を受けた人は一人もいません。それどころか罪を犯したとして告発された人さえいません。ですから9月11日に同時多発テロが起きたとき、日系アメリカ人は誰よりも早くアメリカ人ムスリムに波紋が広がる可能性を直ちに察知したのです。そして、日系アメリカ人は団結して、アメ

リカの歴史の暗いエピソードが繰り返されることのないように果敢な取り組みを展開しました。具体的には、PRイベントや公開討論会を実施して第二次大戦中の日系アメリカ人と9・11テロ後のムスリムの経験を重ね合わせて訴えました。さらに、やはり日本人を祖先に持つノーマン・ミネタ運輸長官が勇気ある方針を採用していなかったら、アメリカ人ムスリムやアラブ系アメリカ人に対する空港での審査や手荷物検査は他のアメリカ人よりもはるかに厳しいものになっていたでしょう。ミネタ長官も子供のころ第二次大戦中の強制収容を経験しています。長官は幾度となく厳しい批判に直面しながらも、空港でアメリカ人ムスリムだけを対象とした特別検査をするのではなく無作為に選んで検査をするという方針を守りました。

このような理由もあって、日系アメリカ人の祖先の地でありルーツである日本に来ることができて私は格別の喜びを感じています。また、アメリカにいる私の同胞に対する皆さんの同胞の方々による支援に心から感謝申し上げたいと思います。

アメリカにおける宗教の複数性と多元性

それでは、アメリカの宗教の複数性とそこでのイスラームの位置付けについて考えてみましょう。まず、テロとの戦いのためにアメリカは今、社会のあらゆる面で、なかでも自称キリスト教再生派のジョージ・ブッシュ大統領の影響を受けている宗教の分野で大きな変化が生じています。その政策のなかには、控えめに言っても賛否両論を呼ぶ事

業である「信仰に基づくイニシアティブ」を通じて宗教法人に国の援助を提供しているものもあります。現在はアメリカの宗教的多元性の問題がアメリカ人によって明確にされつつある状態ですので、その結果について論じるには時期尚早です。ブッシュ大統領に関するほとんどすべての事柄についても言えることですが、残念なことに、彼の再選を後押しした「キリスト者連合」の存在が目立っていることや明白になったその政治的影響力に対する反応ははっきりと二極化しています。

この問題には、アメリカの人口統計上の変化も影響を及ぼしています。2002年の国勢調査結果によると、アメリカ人の12%近く(10人に1人)が外国生まれで、その大多数はアジア諸国を出生地としています。私が住んでいるカリフォルニア州をはじめとする一部の地域では、外国生まれ人口の割合は3人に1人で、住民の3分の1がアメリカで生まれています。ニューヨークやニュージャージーではこの割合は5人に1人です(※2)。20世紀初頭の移民たちは主として、キリスト教徒が多くの人口を占める国からやって来ましたが、新移民の大部分はイスラームやヒンズー教や仏教の国の出身です。このような新アジア系アメリカ人の多くは学歴が高く、仕事で成功を収めており、平均的なアメリカ人よりも収入が多く、アメリカの政治や法律制度に精通しています。昔の移民と違って、自分たちの文化的宗教的アイデンティティを主張することにあまりためらいを感じません。なかでもアメリカ人ムスリムはその傾向が強く、9月11日のテロ以降ますます政治的影響力を増し、公的領域に積極的に関与するようになっています。

しかしながら、ダイアナ・エック(Diana Eck)教授(ハーバード大学、比較宗教インド学教授)によると、『多元主義と多元性は同義語のように用いられることがあります。多元性とは単に多様性そのものを意味する言葉です。しかしながら、そのような多様性は必ずしも私に作用するものではありません。私は多様性を観察することができます。決り文句にあるように、多様性を称賛することさえできます。けれども、多元性には「参加」することが必要です』(※3)。

出身国や民族性に基づく多様性は、アメリカ社会において一般に認められている多元性の要素ですが、エック教授によると『宗教(religion)は、多文化議論においては「R語」(rで始まる不快な語の言い換え)とされ話題にされません。白熱した多文化議論の表面のすぐ下にあります。宗教問題を表面上に持ち出したり諸宗教間の関係について議論できるのは、宗教間協議会の場であることが多いのです。ところが、宗教対話のための基盤を整備する取り組みが多く都市で始まったばかりです。私たちは互いの宗教をほとんど理解していないということと、共通の固定観念によって私たちの認識が形成されていることを理解する必要があります。全体としてアメリカ人の宗教的アイデンティティは高いけれども宗教に関する知識は極めて乏しいことを、どのギャラップ調査の結果も示しています。高校卒業の資格を得るにはカエルの解剖をしなくてはなりませんが、人類の5分の1が信じている宗教であるイスラームについて学ぶことがすべての高校卒業生に義務づけられているわけではありません。世界の宗教に関する学習が社会科のカリキュラムに組み込まれている学校組織はほとんどありません。教会やラビの指導者を養成する神学校で、他の宗教の基礎を学ぶ必須科目を設けている例もほとんどありませんが、現在のアメリカにおける聖職者の状況を見ればそのような基礎的な知識が必要となることは間違いありません』(※4)。

出身国や民族性に基づく多様性は、アメリカ社会において一般に認められている多元性の要素ですが、エック教授によると『宗教(religion)は、多文化議論においては「R語」(rで始まる不快な語の言い換え)とされ話題にされません。白熱した多文化議論の表面のすぐ下にあります。宗教問題を表面上に持ち出したり諸宗教間の関係について議論できるのは、宗教間協議会の場であることが多いのです。ところが、宗教対話のための基盤を整備する取り組みが多く都市で始まったばかりです。私たちは互いの宗教をほとんど理解していないということと、共通の固定観念によって私たちの認識が形成されていることを理解する必要があります。全体としてアメリカ人の宗教的アイデンティティは高いけれども宗教に関する知識は極めて乏しいことを、どのギャラップ調査の結果も示しています。高校卒業の資格を得るにはカエルの解剖をしなくてはなりませんが、人類の5分の1が信じている宗教であるイスラームについて学ぶことがすべての高校卒業生に義務づけられているわけではありません。世界の宗教に関する学習が社会科のカリキュラムに組み込まれている学校組織はほとんどありません。教会やラビの指導者を養成する神学校で、他の宗教の基礎を学ぶ必須科目を設けている例もほとんどありませんが、現在のアメリカにおける聖職者の状況を見ればそのような基礎的な知識が必要となることは間違いありません』(※4)。

宗教に関する知識が乏しいために、イスラームや福音主義や原理主義のキリスト教の場合とはとくに、信仰とその破壊的な性質と感じられるものに対してとてつもない不安が生じたり、あるいは、アメリカ人の一部が生活における宗教の役割にあま

りにも無知であることから、公共政策について議論をしたり意見交換をする場である公的領域において宗教に役割が与えられていない状態になっています。

私が取り組んでいる活動を通じた経験に基づいて、この状況の説明となる三つの事例についてお話します。私はイスラーム・ネットワークの代表を務めるとともに、アメリカ人ムスリムに関わることから文化的多様性の問題について教育をする立場でもあります。

1) 例えば、ある公共機関がアメリカ人ムスリムに関する講演を依頼するとき、宗教的背景ではなく民族的背景を特徴とするアラブ系アメリカ人について講演を依頼する場合ほど気楽にはできないということが私たちの経験から分かっています。公共機関を対象とした文化的多様性に関する教育においては、宗教に基づいてアイデンティティを定めることは、例えば民族やあるいは性別による定義と同等とはみなされません。このためイスラーム・ネットワークは、信仰について語るのではなく、仕事中のムスリムの宗教儀式による業務上の影響への対応とか、ムスリムの患者の宗教的ニーズに対する医療サービス提供者の対応などを求められることが多いのです。もちろんこれは全く意味をなさないことですが、このような要請をする人にとっては、エック教授が言及した宗教に関する知識が乏しいために、完全に筋の通ったことなのです。私の信じる宗教について言及することなく私の文化について話をするように求めることは、アフリカ系アメリカ人に対して彼らの人種または民族上のルーツについて話をせず彼らの文化について話をするように求めるようなもの、あるいは、ベトナム系アメリカ人に彼らの出身国について言及することなく彼らの文化について話をするように求めるようなものです。ある民族の習慣や当たり前のことについて説明したり認識を深めるためには、とくになじみ

のない民族であったり、ムスリムのように大衆文化において常に中傷されている民族の場合は、その民族のアイデンティティの源や背後にある動機を理解することが不可欠です。そして、ムスリムの場合は宗教がアイデンティティの重要な構成要素であり、ムスリムの行動について、そして公共機関が対応する準備ができていない文化についてももちろん多くのことを伝えてくれます。

2) いつでも参照できるようにクルアーンや聖書を職場に置くことが許されているように、同僚に自分の信じる宗教について話をすることや、ムスリムの女性が憤み深くヒジャーブをかぶったり、キリスト教徒が十字架を、あるいはユダヤ教徒がダビデの星を身に付けたりすることによって宗教的信仰の表現をすることも許されていますが、公的領域、つまり学校や職場などで宗教の話をする周囲の人はたいてい眉をひそめます。信仰の厚い人にとって、説教をするのではなく、ムスリムがしばしばしているように神のみ名を呼ぶという単純な行為などによって会話の中で自分の生活に重要な位置を占める宗教について周囲の人に伝えることができないということはつらいものです。例えば、ムスリムは行動の前に「ビスマ・アッラー」(神様の名のもとに)という言葉をお口にします。あるいは、行動の計画をするときには「インシャー・アッラー」(神様のおぼしめしがあれば)、何か嬉しいことがあったときは、「アルハムドゥリッラー」(神様のおかげ)という言葉をお口にします。ムスリムが公的領域外ではごく普通にしているのに、上司や同僚の前でこのような言葉を口にしたら社員がどのような不都合に直面することになるのかご想像いただけたと思います。礼拝などの儀式はともかく、こうした宗教的表現を狂信的な信者と思われることなく口にすることができるようにするにはどうしたらよいのでしょうか。

3) 実際のところ、公的領域での宗教への対応はほ



とんど行なわれていません。ただし、カリフォルニアは例外かもしれません。一般的に、公的領域の姿勢や環境はそのあるべき姿に比べて宗教的表現に寛容的ではありませんし、人種、民族、出身国、あるいは性別などに基ついてアイデンティティを定めている他の集団の場合に比べても寛容ではありません。9月11日以降、さらにはそれ以前でさえも、雇用機会均等委員会(EEOC)による調査で宗教による差別の事例が増加していることがこの問題を物語っています。9月11日以前に、タネンバウム宗教間理解センター(Tanenbaum Center for Inter Religious Understanding)がムスリム労働者を対象に実施した調査によると、回答者の77%が宗教による偏見の問題を抱えており、45%が仕事を辞めることを考えたことがあり、50%が自分の生産性に悪影響があったと答えています。

結論として、アメリカには宗教の複数性はあるかもしれませんが、宗教的多元性を実現するにはまだ程遠いということです。つまり、エック教授が指摘しているように、様々な民族集団が現在しているように宗教が公的領域に「積極的に参加」することです。

では、イスラームは、アメリカにおける宗教の複雑性の中でイスラームと他の宗教をどのようにとらえているのでしょうか。

この質問に答える前に、この問題に関して私が使用する用語について皆さんにご理解いただきたいと思います。イスラームは宗教の名前です。イスラームの信仰を守る人たちのことを「イスラミック」ではなく「ムスリム」と呼びます。「イスラーム」も「ムスリム」もアラビア語の言葉の読み方を書き表したのですが、その意味については後で説明します。「イスラミック」は「イスラーム」という音訳された言葉に基づいていますが、人間以外を指す名詞を修飾する形容詞として用いるもので、人間につい

て言及する言葉ではありません。イスラームの信仰を守る人たちは「ムスリム」と呼ばれます。

また、イスラームの宗教的知識の主な典拠としては次のようなものがあります。

- 1) クルアーン：ムスリムが神の最後の言葉として信じているもの。大天使ガブリエルを通じて預言者ムハンマドに下したとされる。ムスリムはそれが預言者の印であると信じている。
- 2) ハディース：預言者ムハンマドの言行録
- 3) イジュティハード：判断を下し結論を導き出す作業
- 4) イジュマー：学問的合意

イスラームでは、イスラームを人類原始の宗教とみなしています。そのルーツは、アダムとイブという最初の人類の創造に遡り、アダムとイブはその子孫にとって神の言葉の最初の預言者となりました。イスラームは、意図的に神に服従する「状態」です。「イスラーム」という言葉は、平安、純粹、服従、従順を意味するアラビア語の「サラマ」を語源としています。宗教上の意味では、イスラームは神の法に従うことです。人類を除くこの世のすべての自然物は神の法に従っています。つまり、神に従順であり神の法に服従しているため、イスラームの状態にあるわけです。ところが人間には知能と選択の自由があるために、神の導きに従うか拒否するかを選択することができます。ですから、イスラームは、まず第一に神への意図的な服従であり、第二に、服従の状態の維持につながる道(シャリーア)を支えるための実践と儀式的宗教です。例えば、礼拝(サラート)、神の名を唱えること(ズィクル)、つまり信仰告白、善を享受し悪を禁じながらラマダーン月に断食をすること、貧しい人々に富や財産を分け与えること、預言者アブラハムとその家族を偲んでメッカに巡礼にすることです。神の意志への服従は、このような儀礼の遵守とともに、人間の内なる平安と周囲の人々との和を守る最善の手段であると信じられています。イスラームは、最初の人間アダムに始

まり歴史をとおして数多くの預言者によって人間に伝えられてきたものとムスリムは信じています。預言者には、ノア、アブラハム、モーゼ、イエス、そしてクルアーンを通じて神の啓示を完結させたとムスリムが信じているムハンマドがいます。また、クルアーンは長い間守られてきた人間に対する神のメッセージであり、これから永久にもとのままの形で伝えられていくものとムスリムは信じています。クルアーンの変えることは誰にもできないでしょう。なぜなら、クルアーンの中で神は永遠にすべての人間のために守っていくと言っているからです。だからといって、クルアーンの理解、解釈、推測などの知的作業や、経典の作成や実践によって人間の心がクルアーンとふれあう余地がないというわけではありません。つまり、原文のアラビア語のクルアーンが守られているということを言いたいのです。実際、世界中にはアラビア語のクルアーンしかありません。もちろん、ムスリムが話す言葉と同じ数の言語にクルアーンは翻訳されていますが、翻訳は原文の解説とみなされています。そして、どの言語の場合も翻訳者によって異なるいくつかの翻訳版が出ています(※5)。

他の宗教に対するイスラームの見方

イスラームは、多くの使者を通じて神がすべての人類に伝えている一つの基本的なメッセージの継続であるというものです。そのメッセージの核心は、「神だけを崇拜しなければならない、そして人々は神の喜ばれるあらゆる形で正しく生きるよう努めなければならない」ということです。

クルアーンのメッセージは、人間の差異は人間の性質の一部であるため避けることはできないことを強調しています。これによって、クルアーンは多様性と寛容の道徳的価値観を認めています。多元主義、つまり多様な社会集団の積極的関与が人類の成長と発展に不可欠であることも強く主張しています。それは、以下のクルアーンの節に

表れています(※6)。

『我らは汝らのそれぞれに行くべき路と踏むべき大道を定めておいたのだから。勿論、アッラーさえその気になり給えば、汝らをただ一つの統一体にするもおできになったはず。だが、汝らに(別々の啓示を)授けてそれで試みてみようとの御心なのじゃ。されば汝ら、互いに争って善行に励まねばならぬぞ。結局はみなアッラーのお傍に還り行く身。その時は汝らが今こうして言い争いしている問題について一々教えて下さるだろう』5章48節(※7)。

『もしその気にさえおなりになれば、主は全人類をただ一つの民族にしてしまうこともおできになったのだ。だが、人々は、今もって、ああして仲違いばかりしている、神様の特別の御慈悲をいただいた者以外は。しかし、それが創造なさる当初からの目的でもあったのだから』11章118～119節。

『これ、すべての人間どもよ、我らはお前たちを男と女に分けて創り、お前たちを多くの種族に分ち、部族に分けた。これはみなお前たちをお互い同士よく知り合うようにしてやりたいと思えばこそ。まこと、アッラーの御目から見て、お前らの中で一番貴いのは一番敬虔な人間。まことに、アッラーは全てを知り、あらゆることに通曉し給う』49章13節。

『れっきとした神兆の一つではないか、天と地の創造も、またお前たちの言葉や肌色がさまざまに違っていることも。これこそ、どこの誰が見ても有難い神兆ではなからうか』30章22節。

『各共同体はそれぞれに決まった方向を向いて、その中心には主がおわします。だから、汝らは互いに競って善行に励むがよい。汝らがどんな所におろうとも、アッラーは汝らを全部ひとつところに集め給う。まことアッラーは全能におわします』2章148節(※8)。

また、以下のクルアーンの節にあるように、クルアーンでは意見の相違の道徳律について例示しています(※9)。





『主の道に人々を呼べよ、叡智とよき忠告とをもって。人々には、最善の方法で議論しかけて見るがよい。道から迷い出てしまった人々のことは、主が誰よりも一番よく御存知。正しい道を歩んでいる人々のことも、また一番よく御存知』16章125節。

『このような次第ゆえ、汝はみなを誘い、自分はひたすら命じられたとおりに真直ぐな道を進むがよい。彼らの思惑にうかうかと乗せられるなよ。こう言うておくがよい、「わしはアッラーの下し給うたものならどんな聖典でも信仰する。わしは、お前がたとも公正を旨として交わるようにとの御命を受けておる。アッラーはわしらの神でもあればお前がたの神でもある。わしらのすることはわしらの責任、お前がたのすることはお前がたの責任。わしらとお前がたの間で何も言い争いすることはない。みないずれはアッラーに呼び集められる身。みんな旅路の果てにはおそばに行きつく身』』42章15節。

さらに、信仰や見解の相違を抑えつけるべきではない、なぜなら抑圧から真の合意や本当の一致は生まれないからである、ということが以下のクルアーンの節に書かれています(※10)。

『宗教には無理強いということが禁物。既にして正しい道と迷妄とははっきりと区別された』2章256節。

『だが神様さえその気になり給えば、地上のすべての人間が、みな一緒に信仰に入ったことでもあろう。お前が、嫌がる人々を無理やりに信者にしようとしてできることではない』10章99節。

『曰く、「これ、皆の衆、考えてもごろうじろ。このわしが神様から下されたお徴の上に立って、こうしてお手ずから恩寵を頂戴しておるのに、お前がたにはそれが見えないとしたら、嫌だというお前がたを強制してまで無理にそれをさせることができるものか』』11章28節。

さらに、人々が人間の多様性を認め、意見の相違に対して道徳的かつ方法論的に対応していくこ

とをクルアーンは教えています。「最後の審判の日には人々の論争に判決を下すことができるのは神だけである、神だけが一人ひとりの思いや事情をすべてご存知なのだから」ということがクルアーンの節に書かれています11)。(2章113節、3章55節、4章141節、5章48節、105節、6章60節、108節、164節、7章87節、16章23節、22章69節、29章8節、31章15節、23節、39章7節)その一部を抜粋します。

『だが、彼らがアッラーをさしおいて崇拜している(邪神)どもを罵倒してはいけない。そのようなことをすると、彼らの方でも、何も知りもしないでやたらにアッラーを罵倒してかかってくる。…しかしそのうちにみな神様のお傍によび戻されて、おのれがしてきたことが(どのようなものであったかということ)を)詳しく説明して聞かされよう』6章108節。

『言うてやるがよい、「このわしがアッラーをさしおいて他に主を求めてどうしよう。(アッラーこそ)ありとあらゆるものの主であらせられるのに」と。誰でも自分の稼ぐだけのものが自分の勘定につくだけのこと、いくら荷物を背負わされたところで、他人の荷物まで背負わされることはない。やがて汝らみな神様のお傍に召し還されて、(現世で)言い争いしていた問題の(帰結を)きかせて戴くことになるであろうよ』6章164節。

『お前たちの中には、わしが託されてきたものを信仰する者もあれば、また信じようとしない者もある。ま、暫く辛抱しておるがいい、そのうちきっとアッラーが両方の間を裁いて下さろう。アッラーこそは最上の裁判官におわします』7章87節。

『お前たちがああだこうだと議論している問題については、どちらが正しいか、復活の日にアッラーがはっきりと裁いて下さろう』22章69節。

『だがもし父母が、わけもわからぬものをわしとならべてお前に拝ませようとするならば、決して言うこときいてはならぬ。ま、とにかくこの世にあるかぎり二人にはできるだけ優しいいたわりの気持ち

で交わってやれ。ただ、事あるごとにわしのところに還って来る人間の道を踏むことだけは忘れずに。やがてお前たちみなわしの傍に戻って来たら、お前たちのしてきたことを改めてわしから詳しく語り聞かせてやろうぞ』31章15節。

つまりイスラームの考えによると、ムスリムであろうとなかろうと、この世の人間関係で大事なことは正しい行為と誠実な協力だということです。このことは、クルアーンの2章62節と177節、3章75～76節と113～115節、および60章7～9節に書かれています、その一部を抜粋します(※12)。

『ムスリム、ユダヤ教徒、キリスト教徒、それにサバ人など、誰であれアッラーを信仰し、最後の審判の日を信じ、正しいことを行なう者、そのような者はやがて主からご褒美を頂戴するであろう。彼らには何も恐ろしいことは起こりはせぬ。決して悲しい目にも逢うことはない』2章62節。

『本当の宗教心とは汝らが顔を東に向けたり西に向けたりすることではない。いや、本当の宗教心とは、アッラーと最後の審判の日と諸天使と聖典と預言者たちとを信仰し、己が惜しみの財産を親類縁者や孤児や貧民、また旅路にある人や物乞いに分け与え、とらわれの奴隷を解放し、また礼拝のつとめをよく守り、こころよく喜捨を出し、一旦約束したらば約束を果たし、困窮や不幸に陥っても危急の時にのぞんでも毅然としてそれに耐えていく人、そういうのが誠実な人、そういうのこそ真に神を畏れる心をもった人』2章177節。

『…啓典の民の中にもまっとうな者もあって、跪拝をしながらアッラーの神兆を一晩中誦み続けておる。アッラーと最後の日を信仰もしておれば、義を勧め悪を抑え、互いに争って善行にいそしみもする。このような人々は立派なもの。汝らも何事にあれ善をなせば、決してそれを無にされることはない。アッラーは敬虔な信者のことは何から何まで知り給う』3章113～115節。

クルアーンでは、以下の節に見られるように、イ

スラームの反対者の主張も紹介してそれに応じています。これは人間の多元性についての貴重な教えとなっています(※13)。

『彼らに言わせれば、「ユダヤ教徒とキリスト教徒以外の者は絶対に楽園には入れて戴けない」というが、これはただ彼らの勝手なひとりぎめ。言うてやれ、「それならその証拠を出して見せるがいい、もしお前たちの言うことが本当であるならば」と。とんでもない。自分の顔をアッラーに捧げ尽くした人、そして善行を積む人は(誰でも)神様から御褒賞が戴ける。恐ろしい目にも遭わず、悲しい目にも遭いはせぬ』2章111～112節。

『汝らの身勝手な希望でそうなるのでもなく、また啓典の民の身勝手な希望でそうなるというのでもない。誰でも悪いことをすれば必ずその報いを受ける。そしてアッラーを措いては、ほかに味方になる人も助けてくれる者も見つかりはせぬ。だが、正しいことを行ない、しかも信仰深い者は、男でも女でも、みな楽園に入れて戴いて、棗椰子の皮一すじほども不当な目には遭いはせぬ』4章123～124節。

敵味方ともに正義を守るべきですが、正義を超えて、許し、思いやり、寛容、慈悲を与えることが常に求められ、そうすれば神がたっぷりのご褒美をくれる、ということを以下のクルアーンの節は伝えています(※14)。

『聖典の民の多くの者が、いったん信仰に入った汝らをまた背信に逆戻りさせようとやっきになっておる。ただただ自らの嫉妬心の故に。しかも事の真相がはっきりわかっていながら。許しておけ、構わないでおけ。やがてアッラーが御自ら判決を下し給うその時まで。まことアッラーは全能におわします』2章109節。

『これ汝らよ、信徒の者よ、毅然として正義を遵守し、アッラーの前に証言せよ。たとえ(その証言が)自分自身や両親や、或いは近親の者に不利であろうとも。また(相手が)金持ちであろうと貧乏で





あろうと。いずれにせよ本当に取りさばくのはアッラーただおひとり。ついむら気を起こして道を踏みはずしたりしてはならぬぞ。もし汝ら、ことさらに(証言を)曲げあらぬ方に逸れたりしたら、よいか、アッラーは汝らの所業を全てご存知であるぞ』4章135節。

『これ、汝ら、信徒の者、正々堂々とアッラーの前に立ち、正義の証人たれ。(自分の敵とする)人々を憎むあまり正義の道を踏みはずしてはならぬ。常に公正であれ。それこそ真の敬神に近い。アッラーを懼れまつれ。アッラーは汝らの所業一切に通曉し給う』5章8節。

『天も地も、その間にあるものも、ことごとく我らが真理をもって創造したものばかり。しかも、かの時は正に来らんとしておるぞ。されば汝はゆったりかまえて立派な寛容の態度をとるがよい』15章85節。

『悪には同じような悪をもって報いるのが当然のこと。だが、こころよく相手を赦し、仲直りする(ほうがよい)。そうすればきっとアッラーが御褒美下さろう。(アッラーは)道にはずれたことをする者が大嫌いであらう。だが不当なことをされた者が報復したとして、それは何も非難されることではない…だが本当は、じっと耐え、赦してやるのが誠の道というもの』42章40～43節。

それでは、クルアーンで認めている多様性と多元性を、イスラームの聖典に基づいてその行為を正当化しているイラクのアル・カーイダやアル・ザルカウィが率いる組織のようなテロ集団の排外的で偏狭なイデオロギーとどのように折り合いをつけているのでしょうか。

折り合いをつけることなどできません。なぜなら、イスラームではあらゆる卑劣な形のいかなるテロもはっきりと非難しているからです。イスラームにおける最大の罪の一つは、罪のない人の命を奪うことです。これこそテロの定義の一部となっています。イスラームはまた、自分自身の命を絶つことも禁じています。なぜなら、命は神から与え

られたものだからです。戦争状態にあるときでさえ、女性や子供、高齢者や聖職者、あるいは生態系やインフラも標的にしてはいけないという厳しい掟があります。戦争を宣言できるのは国家の正当な首長だけであり、まして、先ほど述べたように、イスラームの教えに反する行為を正当化するために戦争を利用することはできません。

「ジハード」という言葉は「聖戦」と訳されることが多いのですが、そのような言葉はアラビア語にはありません。「ジハード」の文字通りの意味は「努力すること」です。最大のジハードは内なるもので、誘惑を避け良い人格を得るための努力です。もっと小さいジハードは外なるもので、自己防衛のためや抑圧に対するジハードであり、これはすべての人間に認められている基本的人権です。このようなことは、心の中や、口やペンを使っても実現できますし、それでもうまくいかない場合は、自己防衛のためか、あるいは抑圧や侵略から他の人々を守るために(例えば、イギリスの圧制に対する独立戦争やヒットラーの侵略に対する第二次世界大戦)抑圧状態を物理的に変えようとすることによって実現できます。

戦争の目的や性質について述べたクルアーンの節をいくつか紹介します。

・抑圧の阻止

『不当な目に遭わされた者が、相手に敢然と挑みかかることはお許しが出ておる。そういう人たちはアッラーが助けて立派に勝たせて下さろう。すなわち、なんの罪とがもないのに、ただ「我らの主はアッラーだ」というだけの理由で住居から追い出されたような人たちのこと。アッラーのおはからいで、人間がお互いに撃退し合うようになっていなかったなら、修道院でも教会でも祈祷所でも礼拝堂でも、およそアッラーの御名が盛んに唱えられるようなところはみな完全に壊されていたことだろう。だが、アッラーは、ご自分に味方するものを必ず助け給う。まこと

にアッラーはお強くてお偉い方』22章39～40節。礼拝堂に限らずすべての礼拝用建物に言及していることに注目してください。

・自己防衛

『汝らに戦いを挑む者があれば、アッラーの道において堂々とこれを迎え撃つがよい。だがこちらから不義をし掛けてはならぬぞ。アッラーは不義なす者どもをお好きにならぬ』2章190節。戒律を犯すことにではなく、自己防衛のための戦いに対して許しが与えられていることに注目してください。

・平和が理想的状態

『もし彼らのほうで和平に傾くようなら、お前もその方向に傾くがよい。そしてすべてアッラーにお任せ申せ。アッラーは耳敏く、全てを知り給う』8章61節。

それでは、イスラーム過激派は聖典のどの部分を根拠にしているのでしょうか。

彼らは、クルアーンに書かれた啓示があった時代や場所や具体的な状況については考慮せずに、自分たちの集団に固有の社会的歴史的事情にあわせてクルアーンの節を選んでいきます。それ以外の状況では、クルアーンの別の部分でははっきりと否定している行為です。最も多く引用される節は、メッカで最初にムスリムと戦い迫害したメッカの住人との戦いという背景を踏まえて理解しなければなりません。迫害されたムスリムはマディーナに逃れそこで共同体を設立した後、メッカを奪還したのです。引用されている節は、罪のない民間人を標的とした攻撃を正当化するために用いることはできません。

テロリストグループがよく引用する部分は次のとおりです。『神聖月があけたなら、多神教徒は見つけ次第、殺してしまうがよい。ひっ捉え、追い込み、いたるところに伏兵を置いて待ち伏せせよ』9章5節。

興味深いことに、この節には次のような続きが

あるのですが、テロリスト集団はこの部分を普通は省略しています。『…しかし、もし彼らが改悛し、礼拝の務めを果たし、喜捨もよろこんで出すようなら、その時は逃がしてやるがよい。まことアッラーはよくお赦しになる情け深い御神におわします。またもし誰か多神教徒がお前に保護を求めてきたら、保護を与えておいてアッラーの御言葉を聞かせ、それから安全な場所に送り届けてやるがよい。仕方がない、何も知らない者どもなのだから』9章5節。彼らに悔い改める機会を与えているだけでなく、保護を求める人々にはそれを与えなければならない、と教えていることに注目してください。

慈悲、正義、思いやり、あるいは善良といった一般的な道徳的要請について言及しているクルアーンのメッセージの全体的な道徳的目的という視点以外から、この節を含めたクルアーンの節を分析することは不可能です。クルアーンには二つの性質があります。一つは、その状況や時代や場所に固有(特定あるいは過渡的)のもの、もう一つは、すべての時代や場所に当てはまる原則について述べている普遍的で恒久的な性質をもつものです。固有のものを普遍的に当てはめることはできませんが、普遍的なものは常に固有なものの特徴づけています。

アメリカには(宗教の複雑性はあるものの)宗教的多元性が欠如していることを考えると、ムスリムはこの国で自分たちの居場所を得るためにどのように交渉しているのでしょうか。

いくつかのやり方があります。政治の分野では、ムスリムは投票者登録運動と選挙に全面的に参加しています。社会的にはモスクを建設したり、ムスリムのニーズに応えるためにコミュニティ・センターや全日制学校、社会事業事務所を開設しています。経済面に関しては、平均的なアメリカ人よりも所得が多く学歴も高い場合がほとんどです。しかしながら、このように成功を収めているにもかかわらず、後半のセッションのテーマとなっている、対テロ戦





争や激しさを増す中東紛争をめぐる政治環境のために、アメリカ人ムスリムはアメリカで最も攻撃されやすい集団の一つになっています。

私が取り組んでいるイスラーム・ネットワークグループは、その活動内容や公的領域での相互作用から多元主義の遂行者ともいえます。公的領域においては、教師、学校管理者、企業の経営者や社員、警察署長や警察官、医者や社会福祉事業担当者、教会、コミュニティ・センター、大学教授、生徒などを対象にイスラームやムスリムについて話をします。それによって必然的に、アメリカ人ムスリム社会と公共機関との間に長期的な対話が生まれます。私たちは、米国憲法の権利章典、具体的には以下に示す修正第一条の擁護を通じて宗教というデリケートな問題に対処するというこの仕事を成し遂げることができます。

『連邦議会は、国教を樹立し、あるいは信教上の自由な行為を禁止する法律、または言論あるいは出版の自由を制限し、または人民が平穏に集会し、また苦痛の救済を求めるため政府に請願する権利を侵す法律を制定してはならない』。

宗教に関するこの修正条項は、公的領域で宗教がどの程度容認されるかをアメリカ国民に示しています。『連邦議会は、国教を樹立し、あるいは信教上の自由な行為を禁止する法律を制定してはならない』とは、私たちに学校や職場や礼拝の建物で自分の信仰を実践する自由があることと、国による宗教の制定がないことを意味しています。つまり、例えば、庁舎のロビーにクリスマスツリーを置いたり、事務室のドアにクリスマスリースを飾ったりすることによって一つの宗教に焦点を当てるならば、そこで働く人々によって代表される他のすべての宗教についても同じことをしなければなりません。さもないと、他の宗教に優先してその宗教を広めようとしているとみなされます。その一方で、ムスリム、キリスト教徒、ユダヤ教徒、ヒンズー教徒、仏教徒、そしてあらゆる宗教の信者に、言う

までもなく他の人の権利を妨げないかぎり、妨害されることなく自分の宗教を自由に実践する権利があります。

憲法修正第1条に鑑みて、イスラーム・ネットワークグループ(ING)の講師が公的領域でイスラームについて講演を行なうときの方針及び指針を以下のように定めています。

- 1) 教室での講師の役割は、イスラームに関する教科を教える教師の役に立つことです。事前に計画したとおりにその必須教科を補足することを目的とした講演をします。
- 2) 学校以外の団体の場合は、聴衆のニーズに合わせた講演を行ないます。講師の役割は、文化能力について教える際にイスラームやムスリムの文化について正しく説明できるように開催者の役に立つことです。
- 3) 講演は学問的(客観的かつ中立的)なものであって、信仰上献身的なものではありません。INGとその加盟団体の講師は、他の宗教の場合と同じようにイスラームに関するテーマについて講演をします。
- 4) 講演は聴衆にイスラームについて教えるものであって、イスラームを押し付けたり、聴衆がイスラームを受け入れるように感化するものではありません。
- 5) INGとその加盟団体の講師は聴衆にイスラームについて知ってもらうように努めるもので、決してイスラームを受け入れるように聴衆に迫ってはなりません。
- 6) 他の宗教と関連づけてイスラームについて語るとき、講師はいかなる宗教の奨励も中傷もしてはなりません。

上記の方針はもともと「合衆国憲法修正第1条センター」という組織が策定したものです。このセンターは、教師を対象とした学校での宗教教育についての研修に使用する教材の制作に携わっています。私たちはすべての活動にこの方針を適用

しています。おかげで、講演依頼が増加していることなどで分かるように、イスラーム・ネットワークグループは成功を収めています。INGの講師の話は押し付けがましくなったり説教じみたりすることもなく、説明に徹し知識を与えるものであり、そのうえ聴衆のニーズに合わせているために、公共機関やその聴衆から高い評価を得ています。

このような教育と奉仕という重要な活動を通じて、私たちはアメリカにおける宗教的多元性の形成の後押しをしています。そして、同じく宗教上のアイデンティティによって特徴づけられている他の共同体のために道を開くことになるかもしれません。

ご清聴有難うございました。

12) Fathi Osaman, 8

13) Fathi Osaman, 8

14) Fathi Osaman, 8

1) INGは全米に会員を持つ、政治や政党とは無関係の教育組織である。INGに関する詳しい情報はウェブサイト(<http://www.ing.org>)で得られる。

2) 米国情勢調査局(U.S. Census Bureau)、2002 American Community Survey、表1: State Ranking, Percent of Population that is Foreign Born、<C:\Documents and Settings\Owner\My Documents\Census Bureau, American Community Survey Ranking Tables.htm>

3) Dr. Diana L. Eck(米ハーバード大学、比較宗教インド学教授)が、2002年8月20日～21日にマレーシアのクアラルンプールで開催された、「民主主義社会における宗教的多元性に関する国際会議」(MAAS International Conference on Religious Pluralism in Democratic Societies)での基調講演の中で言及したもの。<C:\Documents and Settings\Owner\My Documents\Pluralism.htm>

4) Dr. Diana L. Eck

5) このセクションのいくつかの箇所は“Meaning of Islam”という題名の論文に基づいている。<C:\Documents and Settings\Owner\My Documents\Meaning of Islam.htm>

6) Khalid Abou El Fadl, *The Place of Tolerance in Islam*, Boston, Beacon Press, 2002.

7) 注記のないものはすべてこのクラーン 翻訳書より引用。Thomas Clearly, *The Quran, A New Translation*, Chicago, Starlatch, 2004.

8) この翻訳書より引用。Muhammad Asad, *The Message of the Quran*, Gibraltar, Dar Al-Andalus, 1984.

9) Fathi Osaman, 7

10) Fathi Osaman, 7

11) Fathi Osaman, 7



コメント・ディスカッション

司会：森 孝一

(同志社大学大学院神学研究科教授・一神教学際研究センター長)

【司会】 予定より20分遅れてしまいました。この原因は主催者である最初の発題者の小原さんが時間を守らなかったことにあります(笑)。それでは今から三人の方からコメントを頂きたいと思います。

最初は、「社会行動を求める福音派」の議長を務めておられますロン・サイダーさんにコメントを頂きたいと思います。プロテスタント福音派の立場からのコメントです。5分間ずつお願いいたします。

コメント：ロン・サイダー

(「社会行動を求める福音派」／イースタン神学校)

ありがとうございます。皆さま、こんにちは。日本に向かう機上ではお二人分の論文しか持っていませんでしたので、この論文をベースにしてコメントーターとしての責任を果たしたいと思います。クラーク・ローベンシュティン博士、ミラ・ワッサーマンさんの順でコメントさせていただきます。

ローベンシュティン博士のご意見には頷ける点が多々ありました。とくに繰り返し言われていた「優しさと敬いの心」、「心からの共感」、「他者から学ぶことの大切さ」については、全くその通りだと思います。ただ少々異論のある点もありますので、以下に四つの点を取り上げて議論を深めてゆきたいと思います。

まず博士はどの宗教にも「神の姿がかいま見える」とおっしゃいましたが、このご発言は少々分かりにくいのではないのでしょうか。どの宗教にも何ら

かの限られた真実があるということなのか、あるいはどの宗教も同じだけ正しいということなのか、どのようにも解釈できます。もう少し具体的なご説明をいただければと思います。

二点目ですが、博士は発表の中で「キリストに深く帰依する人たちだけが神の恩恵を賜るわけではない」という長老派の言葉を紹介されましたが、この言葉もやはり分かりにくいと思います。恩恵というのは一般的な恩典のことなのでしょう。それとも神の加護のことなのでしょう。この点についてもはっきりさせる必要があると思います。

次に博士は、「今日どの宗教にも二通りの信仰のあり方がある。こぶしを固く握って他者を排除するものと、手を開いて他者を受け入れるものだ」というDiana Eckの言葉を引用されました。しかしこの二分化はあまりに単純ではないのでしょうか。確かにどの宗教でも信仰のあり方は大きく分かります。ただしそれは二通りではなく、少なくとも三通りあると思います。まず外部との対話や交流を恐れ、自ら壁を築くグループ。次に「偉大な宗教はいずれも救済に至る正しい道を説いている」という前提に立ち、対話と協調を歓迎するグループ。これに加えてもう一つ大切なのが、「偉大な宗教はある程度共通の目的を掲げているが、芯の部分では相容れない」ことをしっかり理解しているグループです。こうした人たちは自分の宗教こそが真理であるという認識を持っているために、矛盾する教えを受け入れることはありませんが、それでも目指すものが同じなら対話や協調、協働を厭いません。

最後に「世界を一つにするための基礎を築くことは、私たちの時代で一番大切な仕事だ」というご意見にも納得がいきませんでした。確かにこれはとても大切な仕事であり、私自身そのために多くの時間を投じています。けれども、それぞれの宗教の真理主張に耳を傾けることの方がもっと大切だと思うのです。

次にワッサーマンさんですが、ワッサーマンさんの論文には多くの点で共感を覚えました。ユダヤ教社会の葛藤と論争の過程が実に見事に、生き活きと描かれた論文で、内部事情を楽しくかいま見ることができました。「アレヌの祈り」をめぐる下りでは、キリスト教世界がユダヤ人に加えてきた非道の歴史を思い起こしました。また個人主義と物質主義、そして米国文化に蔓延する暴力を批判されていることも高く評価したいと思います。

ここでは二つの点を取り上げたいと思います。まず論文の4ページ目でワッサーマンさんは「アレヌの祈り」の第二段落は、第一段落の強い調子を和らげるために付け加えられたと述べておられますが、少なくとももう一つ、別の解釈が可能だと思います。つまりこの第二段落は第一段落を否定したり和らげたりしているのではなく、万人の幸福こそが選民の目的に他ならないことを訴えていると解釈できるのではないのでしょうか。

次の点ですが、論文を拝読していて一つ疑問に思うことができました。この論文のどこを見ても「偉大な宗教が他宗教の教えを排除していることが問題であり、こうした姿勢は正さなくてはならない」ということがはっきりと述べられた下りはないようですが、それでもこの論文の背景にはこうした前提があるように思います。私が疑問に思うのは、偉大な宗教がたった一つの真理を主張しており、その真理が互いに相容れないものだということを認めた上で、そこからさらに一步を踏み出すことができないのか、ということです。まずこうした状態をあるがままに受け入れ、次に「万人に完全な信

仰の自由を認めることは神の意志である」というスタンスに立ち、その上で各人が信仰の自由を持つことを肯定し、互いの意見に耳を傾け、学び合い、寛容の心と敬意を持って証をするべきではないでしょうか(証をするというのは、私たちの奉じる真理を他の人たちに伝えることです。私たちがこれこそが正しい真理だと考えているのなら、他の人たちにもその真理を受け入れてもらいたいと思うのは当然のことでしょう)。そして私たちの共通点を確認し、可能であればその共通点に立って共働することが理想的だと思います。ありがとうございました。

【司会】 二人目のコメントーターはイスラームの代表の方です。ニューヨークにあります「フェローシップ・オブ・リコンシリエイション」からおいでくださいましたイブラーヒーム・レイミーさんにコメントを頂きたいと思います。

コメント：イブラーヒーム・レイミー

(フェローシップ・オブ・リコンシリエイション)

ありがとうございます(アラビア語の挨拶)。慈悲深く、慈愛あまねきアラーの御名において。三人の方の素晴らしい発表に大いに感銘を受けました。皆さまの学識だけでなく、心の有り様にも接することのできた素晴らしい時間に感謝いたします。ムスリムの立場から私がいつも知りたいと思っていたことがあります。それは宗教内対話と宗教間連帯を推し進める中で、ムスリム以外の皆さんは自分の宗教をどのように見ているのだろうかということなのですが、先ほどの発表を拝聴して、イスラーム、キリスト教、ユダヤ教信者の皆さんがそれぞれの立場から他宗教をどのように捉え、また世界における自分の宗教のあり方をどのように見ているのかということがよく分かりました。

何よりも私は、ワッサーマンさんの大変興味深いお話に大きな感銘を覚えました。ラビは「アレヌ



の祈り」の変遷を紹介され、この祈りが排他的側面や個別主義的側面を持ち合わせてはいるが、ユダヤ教徒だけに限らないもっと大きな信仰の世界の中で、普遍的な意味を帯びているとも解釈できると述べられました。これは「神の言葉のように自分自身が真実の存在でありたい」という願いがどの宗教にも共通しているということ、そして人々は教義や聖典の違いこそあれ、それぞれのやり方で神の啓示に接し、その影響を受けているということだと理解いたしました。

もう一点申し上げたいことがあります。ムスリムなら皆同じ意見だと思うのですが、クルアーンの19章、つまりマルヤム(マリア)章を読むと、非キリスト教系宗教の中で唯一イスラームだけが、イエス・キリスト(彼の上に平安あれ)に対する信仰を教義の中心に据えていることが分かります。つまりイエスを救世主とみなし、聖母マリアの処女懐胎とイエスの啓示、およびその奇跡の数々を信じ、全能の神が神と人間の仲介者としてイエスをこの世に送り出されたことを肯定しているのは、非キリスト教信者の中では唯一ムスリムだけなのです。私たちはイエスを神として崇めているわけではありませんが、ニカイア公会議(325年)以前には、初期キリスト教会の大半がそうだったのです。それでも私たちはイエスが偉大な存在であり、神の子であると信じています。

またご本人にも申し上げましたが、エルジェナイディーさんはムスリムの信仰を実に分かりやすく、かつ的確に説明されました。イスラームの基本的な教義をめぐる発表としては、正に白眉の内容であったと思います。ここでちょっとしたエピソードをご紹介します。ハディースという予言者ムハンマドの伝承を集めた記録に収められている話です。予言者ムハンマド(彼の上に平安あれ)がローマ・カトリック教会から派遣されてきた聖職者の一団をメッカに迎えたことがありました。聖職者たちは話し合いのためにメッカを訪れていたので

す。日曜日になると聖職者たちはムハンマドのところにやって来て、ミサを行いたいのだがどこに行けばいいだろう、と尋ねました。もちろんメッカには教会など一つありません。するとムハンマドはちょっと驚いたような表情を浮かべて、そういうことでしたらどうぞモスクをお使いください、と言ったのです。ムスリムの礼拝集会は金曜日ですが、キリスト教徒は安息日厳守主義者を除き、日曜日に礼拝を行いますから。

三人の方はその発表の中でいずれも「共存」という概念を打ち出されていました。この概念はイスラームの中に確実に根付き、肯定され、ムスリムの間で重要視されています。エルジェナイディーさんのお話にもありましたように、復活の日にもスリム、ユダヤ教徒、キリスト教徒を裁くのは、他ならぬ神なのです。また神のみが、モーゼ、イエス、ダビデ、そしてムハンマド(彼らの上に平安あれ)に啓示を与えられたのです。

最後に申し上げたいことがあります。私たちは今、それぞれが違ったやり方で真理を追究するという実験の過程にいるのだと思います。ガンジーも言っていました、私たちは真理をめぐる大いなる実験の渦中にいます。皆さんのお話を聞いていて思ったのは、真理とは啓示という意味ではたった一つのものではあるけれど、別の意味では複数あるのではないかということです。神が、互いが対立するのではなく学び合うような方向で、キリスト教徒、ムスリム、ユダヤ教徒に語りかけておられるからです。ですから皆さんがこの学びと共有の場を与えてくださり、またそれぞれの視点から全能なる神について語ってくださったことに感謝したいと思います。神とは一つの宗派、一つの宗教のものではなく、全宇宙と全人類の創造主であり、支配者であるのです。

【司会】 最後のコメンテーターは今井亮徳さんです。今井亮徳さんは今までの発表者、コメン

テーターとは違い、一神教からの代表ではありません。アメリカにおける仏教からの代表です。今井さんはカリフォルニア・パークレーにあり、ます東本願寺のBuddhist Templeで長くご奉仕をなさっておられる方です。それではよろしくお願いします。

コメント：今井 亮徳
(パークレー東本願寺)

ありがとうございます。別にアメリカの仏教を代表してここに来ているわけではございませんので、個人的見解のほうが大きいかと思います。森先生が最初に、この会議というのは、理念ではなく、また学者のかたがたの討論ではなく、現実に寺、教会をあずかっている者の対話の場であるということをおっしゃってくださいました。お聞きしている範囲では、かなりそれでも高度な学者的な発言が多かったなというのがまず印象です。その中で最初のワッサーマンさんとエルジェナイディーさんのコメントの中で非常に印象に残ったものを二、三、指摘させていただきたいと思います。

その中で、ユダヤ教の中で、アメリカのユダヤ教の人たちが今、伝統への回帰ということがあると。そして移民社会の中で苦闘してこられて、選民という意識がイスラエルのかたがたのバックボーンになっていたと。しかし、今のアメリカにおけるユダヤ人、三世、四世の世代というのでしょうか、そういうユダヤ系の人たちは、そういう選民の意識よりも自由と民主主義のアメリカに慣れ親しんでしまって、ユダヤ教から離れていく傾向があると、こういうご指摘があったと思います。

このことについては日系アメリカ人の仏教の歴史というのを見てみますときに、やはり移民仏教です。1899年にサンフランシスコにはじめて西本願寺の僧侶が渡り布教をはじめましたが、それは、ミッシヨナリーがアメリカに行って仏教を布教するという形で始まった訳ではございませんで、広島

とか和歌山といった真宗王国といわれているところからの移民の人たちが、自分たちが教えを聞きたいということで、開教使を西本願寺に要請したというところから始まっております。

ですから、自分たちのアイデンティティというものを非常に宗教に求めたということがいえるのではないかと思います。

そのことについてエルジェナイディーさんが「イスラームというのはアイデンティティと切り離して考えられないのだ」ということをおっしゃっていました。そのことに非常にうなづくことがあります。しかしながら、そうしますとイスラームにしても、ユダヤ教にしても、仏教にしても、民族的な宗教だけなのか、いわゆるRegional Religion、地域社会の宗教だけであるのかということになってしまう可能性があります。

そうではありませんで、一応アメリカというのは多民族国家ですから、アイデンティティは大変必要なことかと思います。そして、戦前のアメリカの移民社会を構成してくる歴史を概観してみますと、やはりアメリカというのは同化政策を非常に取ってまいります。アシミレーション(assimilation)、アメリカ社会に同化していけと。そうしますと、やはり民族としてのアイデンティティの危機が出てまいります。私はそういうところからアシミレーション(同化)ということよりも、インテグレーション(integration)ということを目指すことが大切かと思うわけです。

インテグレーションということは統合ということです。簡単な例で申しますと、アシミレーションというのは野菜スープを作るようなもので、にんじんだろうが、じゃがいもだろうが、何でもぶち込んで、ぐつぐつ煮てしまえば形がなくなってしまうものです。インテグレーションというのは野菜サラダみたいなもので、きゅうりはきゅうり、トマトはトマト、そういったもののアイデンティティは残っておりますけれども、サラダとしてお互いのアイデンティティを侵すことなく、しかも共存していけるような場が、あるいは

考え方が大切なのではないかと思うことです。そういうことを先生がたのご意見の中から思ったことでございます。

もう一つ、エルジェナイディーさんがおっしゃっていた9・11のあとのイスラームの方々の苦難、これは本当に日系アメリカ人の苦難と同じものです。同じものがあったと思います。だから日系アメリカ人がイスラームの方々に積極的に陰ながら援助したと……。実は私は、エルジェナイディーさんの近くに住んでいるのですけれども、それほどまでにサンノゼ近辺の日系人の方々がお手伝いをしたということを、うかつにも知りませんでした。

ただ9・11のときに三大ネットワークのアナウンサーの人たちが、あの事件をパールハーバーと一緒にして、第二のパールハーバーだということを盛んに言うておりました。そのすぐあとの日曜日にちょうどお寺の人たちが集まる会があったのですけれども、やはりそのことが最初に取り上げられました。その日系人の人たちはそういう言葉に非常に傷つきました。

そのときに何を話したらいいのかなと思いますと、こういう一神教の会議というようなところでお話をさせていただければいちばんいいと思うのは、やはり菊池寛の『恩讐の彼方に』という小説を思い出しまして、その物語をお参りにきてくれた人たちと一緒に考えてたことでした。そんなことを、まとまりもない話なのですけれども、お聞きしながらいろいろ思い出しました。どうもありがとうございます。

ディスカッション

司会：森 孝一

(同志社大学大学院神学研究科教授・一神教学際研究センター長)

【司会】 皆さんからこんなにたくさん質問を頂いていますが、もちろんそれに全部答えることはできません。またコメントに対してのレスポンスもしてい

ただけないかもしれません。特に私の印象に残った皆さんからの質問の中からピックアップさせていただいたものを幾つか紹介させていただいて、皆さんの意見を聞かせていただきたいと思います。

質問を見ておりますと、具体的な問題と関連した質問が多いように思います。例えば、いわゆるテロの問題、いわゆる自爆による自殺の問題、中東問題の解決の問題、そういう問題について今日の議論とどう絡んでいくのかという質問が多いように思います。

私の印象も込めて、少し皆さんに意見をお伺いしたいと思うのですが、こういう形の宗教対話の会というのは、多くの場合、対話できる者どうしの対話であることが多いのです。そうではなくて現実を見ますと、キリスト教でもユダヤ教でもイスラームでも、同じ宗教の中の、いわゆる原理主義的なグループと穏健なグループの対話というのは非常に難しいように思います。

そういう問題について、それぞれの皆さんの宗教の中では、いわゆる原理主義的なグループとの対話がどのように行われているのか、あるいは行われていないのかということについて、どなたでも結構ですからお答えをお聞かせいただければと思いますが、いかがでしょうか。

手を挙げていただければいいと思いますが。ではエルジェナイディーさん。

【エルジェナイディー】 そうですね、私たちの場合はアル・カーイダやハマース、あるいはイスラーム聖戦との対話は行っていないと申し上げてよいと思います。こうした集団はムスリムではなく、基本的には犯罪者です。彼らはイスラームの名をかたってテロ行為を行っています、多くの場合、その行為が誰よりもムスリムを傷つけているということを理解していません。私のような一般のムスリムもこうしたテロリストと同一視されるのですから。9月11日の同時多発テロから数年たった今ではそれ

ほどでもありませんが、直後の数ヶ月は、一般のムスリムが皆テロリストのように見なされ、米国のムスリムは戦時中の日系アメリカ人のような運命をたどるのではないかとさえ思われました。

ですからテロリストとの対話というものはありえませんし、先に言いましたようにムスリムはテロ行為を全面的に否定しています。クルアーンからこの点を裏付ける一節を具体的に引いてもいいのですが、いずれにしても私は、仏教徒であれユダヤ教徒であれキリスト教徒であれ、どの宗教にもこうした犯罪者がいるという事実に向き合うべきだと思います。

キリスト教徒がテロ行為を繰り返してきたことは歴史を見ても明らかですし、それほど頻繁ではないものの「ユダヤ教徒によるテロリズム」も存在します。真っ先に思い浮かぶのは、Baruch Goldsteinという男がモスクに入り、銃を乱射して礼拝中のパレスチナ人を殺害した事件です。仏教徒のケースでは、東京の地下鉄サリン事件がありました。団体の名前は失念しましたが、最近その教祖が有罪判決を受けたと記憶しています。このように、宗教の名をかたってテロ行為を行う輩はどこにでも、またどの時代にも存在します。

ムスリムは正にこうした苦難の渦中にいます。そして多くが世間の声と闘っています。残念ながらとくにムスリムに風当たりが強いのが米国のメディアで、ヨーロッパのメディアはそれほどありません。日本のメディアについてはよく分かりませんが、私たちの声はまだ十分に届いていないのです。以上です。

【司会】 エルジェナイディーさん、おっしゃることはよく分かります。そして、アメリカでテロリストとムスリムが同一視されているということも私はよく理解しています。しかし、テロリストのあの形はイスラームではないと言ってしまっているのでしょうか。というのは、例えばキリスト教の場合、ブッシュのキ

リスト教、あれはキリスト教ではないのだと切り離してしまっているのでしょうか。やはりブッシュのキリスト教もキリスト教であり、そしてテロリストの信仰もイスラームであるという現実に立たなければ議論ができないように思うのですけれど、その点はいかがでしょう。

【レイミー】 一言よろしいでしょうか。私は核兵器廃絶を訴える運動に身を投じています。1945年に日本に二つの原爆が投下されたのは、とても惨いことでした。しかし、だからといって米国のキリスト教徒がテロリストと名指しされているわけはありません。またテロリズムという言葉は、先ほどエルジェナイディーさんが言われましたように、文明社会のルールを無視して行われる一種の戦争だと思います。私の行う非暴力運動は、戦争はどのようなものであれ廃絶することができる、そして人を殺すことは間違ったことである、と訴えています。また戦争を行うにしても、民間人への攻撃やある種の武器の使用については一定のルールが定められています。

たとえば米国軍はイラクで焼夷兵器を用いましたが、これは国際法に違反する行為です。それでも普通は米国兵がテロリストと見なされることはありません。ですから私は「テロリズム」という言葉は基本的に「行為の主体が軍隊であるか否か、また攻撃の対象が民間人か軍人であるかを問わず、意識的に力行使して人を殺す行為」と定義すべきだと思います。過激かもしれませんが、必要なことだと思います。

またハマースについても簡単に述べたいと思います。ハマースというのはイスラエルの民間人に対して非道な暴力行為を加えてきた組織で、大抵はイスラエルの正規軍がパレスチナ人を攻撃したことがその引き金になっています。私たち米国の団体は代表者を派遣し、イスラエル政府、仲介者、ハマース、パレスチナ政府、そして世界の政界や



社会、宗教界の代表者との間で対話を推進してきました。私たちは暴力一切を否定しており、こうした対話が、暴力から非暴力へと対立のあり方を変えるための理解につながればと思います。

私が申し上げたいのは、対立をなくしたいのであれば、全く立場の違う相手の声にも耳を傾けなくてはならないということです。仲間とだけでなく、敵対者とも仲良くしていかななくてはならないのですから。誰もが同じ土俵に立つべきだと言っているわけではありません。同じ地球に暮らす者同士が平和と宗教の共存を達成するためには、お互いの声を聞かなくてはならないと言っているのです。対話こそが、万人の痛みの真実や暴力の理不尽さを知る唯一の手段だからです。誰もが自分の心の中に神や仏を持っており、それが変革への力となるのだと信じます。

【司会】 サイダーさんに次にお聞きしたいと思います。サイダーさんはアメリカの Evangelicals（福音派）を代表してここにおいでになっています。今回のアメリカの大統領選挙の中で福音派がブッシュに対して非常に強い支持を与えました。ブッシュのキリスト教理解というものに対して、福音派としてどのようにお考えなのかぜひ聞かせていただきたい（笑）。

【サイダー】 1時間、あるいは3時間いただいても構わないでしょうか？ 今のご質問はとても良い点をついていますし、同時に大変な難問でもあります。先に原理主義者と穏健派の対話というお話がありましたが、まずこの問題について考えてみたいと思います。原理主義者と穏健派というカテゴリー分けは十分ではないと思います。まずここにテロリストというカテゴリーを設けなくてはなりません。キリスト教にもユダヤ教にもイスラームにも数は少ないながらテロリストはいます。ただしこれは一つのカテゴリーでしかありませんが。

次に三つのグループ分けができると思います。まず保守派（お望みならばこのグループを原理主義者と呼んでもよいでしょう）。その対極にいるのがリベラル派で、宗教のあり方を根本から問い直し、変えようとしているのがこのグループです。その中間が中道派で、このグループは対話を推進し、合理的な考え方をしますが、イスラームでもキリスト教でもユダヤ教でも、その核となる教えに深く帰依しています。ブッシュ大統領の信仰は、保守派と中道派にまたがるものではないかと思います。確かに大統領を支持する米国人には、原理主義者に分類できる者が大勢います。ただ福音派には原理主義者も含まれますが、裾野はずっと広く、その多くは中道派です。また白人の福音派の多く（実に78%）がブッシュに投票していますが、これは何も戦争だけでなく、中絶や家族、結婚といった様々な「社会問題」への姿勢を総合的に判断した結果なのです。こうした社会問題は福音派にとってとてつもなく大きな意味を持っています。

ブッシュ大統領自身、非常に深い宗教体験をしています。大統領は米国キリスト教の主流教派の出身であるにもかかわらず、「神の意志に支えられた強い米国」というアイデンティティを作り上げてしまいました。米国にはこうしたアイデンティティを確立してきた長い歴史がありますが、私はこれは偶像崇拝にも通じるとても危険な思想だと思います。（これは国内で何度も言ってきたことなのですが）ブッシュ大統領がリンカーン大統領のような心境に至ってくれることを願っています。100年前に、神があなたの側についていると思うか、と聞かれたリンカーンはこう答えたのです。私は神が私の側についているかどうかということには関心がない。私が知りたいのは、私が神の御心になっっているかどうかということだ、と。ブッシュ大統領にもこのような謙虚さを望みたいと思います。

【司会】 ありがとうございます。

ワッサーマンさんに対して質問が来ておりますので紹介したいと思います。選民意識とそれを超える普遍性の問題、特にアメリカのユダヤ教の中で、それが問われているということをお話しになったわけですが、アメリカ以外のところ、イスラエルやヨーロッパではその選民意識に対しての疑い、あるいはその普遍性との関係、それはどういう状態であるのかという質問です。

【ワッサーマン】 とても良い質問です。そうですね、米国のユダヤ教社会と同様に、ヨーロッパでも対話が生まれていると思います。イスラエルではリベラルなユダヤ教徒はほとんど声をあげておらず、いわゆる原理主義者の声ばかりが聞こえてきます（「原理主義者」というのが適切な呼び名とは思いますが、ユダヤ教の場合は他に良い言葉がありませんので……。ただユダヤ教について、もっと保守的な、あるいは復古主義的な側面を話題にするときには、原理主義との違いをしっかりとわきまえているつもりですが）。ユダヤ教社会の内部ではこうした議論が広い範囲に渡って起きていますが、こうした議論の中でユダヤ教の普遍性を重視するのか、個別性を重視するのかは、人によって違います。ですからこうした議論における人々の立場をはっきりさせることはとても役に立ちますし、先ほどのご質問にも関わってくると思うのです。またこれは、中東の政局を考えたときに、ユダヤ教徒の見解の違いを理解する上でも有効だと思います。イスラエルとパレスチナが別々の国家として共存することを望んでいるユダヤ教徒も大勢いるように思います（数のことではありません）。もちろん多くのユダヤ教徒は統一の希望を抱き続けているのですが。

【ローベンシュティン】 今のご質問と私の発表に対するロン・サイダーさんのコメントについてちょっと意見を述べたいのですが、よろしいでしょうか。

Rokeachという社会学者が何十年も前にこのようなことを言っています。他人の考え方を理解するには、原理主義派、保守派、中道派、リベラル派、急進派といった従来の区分を行うだけでなく、その人が他の考えを受け入れる用意があるのか（手を開いているのか）、あるいは他の一切を排除する姿勢をとっているのか（こぶしを握っているのか）を見なくてはなりません。

現に原理主義者の中にも心を大きく開き、外部の人たちと交流し、熱心に対話を進める人たちがいます。また急進派やリベラル派、あるいは中道派の中にも、自分の考えを決して譲らない人たちがいます。このことはとても重要だと思います。政治的見解にしても宗教的見解にしても、その人の姿勢を見れば、その人が外部に対してどの程度心を開いているかということがすぐに分かるからです。ですから人の見解は、縦方向から、また外部に対する視点という面から見るべきであり、保守、リベラル、中道、急進、原理主義という決めつけを行うべきではないと思います。

【司会】 ご参考までに、今の議論の中で、福音派（Evangelicals）という言葉、原理主義者（Fundamentalist）という言葉が出てきました。いろいろな定義があつて難しいのですが、私はこう理解しているということを少しお話ししたいと思います。

まずアメリカの福音派と呼ばれる人たちは全人口の40%いるといわれています。その中で宗教右派、私はこれがアメリカのキリスト教原理主義者だと思うのですが、15%～18%いるといわれています。

ファンダメンタリストというのは単に宗教理解が保守的であるだけではなくて、それを政治に反映させていこうとしている人だと思います。アメリカの場合はそれが選挙、投票ということだし、イスラーム世界の場合には非常に不幸なことですが、それはテロという形で表れています。ですから、ただ信仰的に保守的であるというだけでは



なくて、政治との関係ということを抜きにしてはファンダメンタリズムということは語れないのではないかと思います。

あと数分ですが、先生がた、何かぜひ発言したいという方、おられませんか。では、今井さんどうぞ。

【今井】 お話をお伺いして、森先生の質問が非常に鋭い質問でみんな辟易しているのだと思います。それが本音だと思うのです。本音でやはり話していただかないと困るなという思いはします。けれどこれは宗教だけで話ができるのだろうかと思うのです。というのは、それぞれの立場というのがありますから。ワッサーマンさんが、最初のお話の中でおっしゃったのは、Jewを客観的に見ていく、クリティカル・アイでオブジェクティブに自分を見ていきたいのだということをまずおっしゃっていました。そういうことはどこまで可能なかなということが一つここで問われると思うのです。

それをやるのには、やはり何かもう一つ別の形態というか、社会心理学とか、精神心理学とか、そちらの分野の人たちとの対話も必要なのではないかなという感じがするのです。宗教だけでお話ししていると、どうしても「わが宗教が一番良い」の感じで弁護になってしまうのです、どこまででも。そういうものをもう一つ離れて、本音でどこで話せるのかなということを私、今考えていました。

もう一つ、森先生がキリスト教と政治とはアメリカの世界で決して離すことができないのだとおっしゃっていました。これは非常に重要な発言だと思います。憲法で、宗教の自由、いわゆるseparation between state and religionということ言われていますけれども、アメリカの伝統の中で政治と本当にキリスト教が離れているのか、本当に離れてやっているのかどうか、その辺も客観的に私どもは見ていかなくてはいけないだろうと思います。

【司会】 ありがとうございます。残念ながら、もう時間がございません。これで終わりにさせていただきたいと思います。司会の不手際で、十分な議論ができませんでした。最後にプレゼンターの皆さん、コメンテーターの皆さんに、私たちの心からの拍手を送りたいと思います(拍手)。

それではこれで終了させていただきます。ありがとうございます。





セッションB アメリカ社会とその公共政策はあなたの 宗教にいかなる問題をもたらしているか？

司会／バーバラ・ジクムンド（同志社大学大学院アメリカ研究科教授）

- 発表／「アメリカ社会とその公共政策はカトリック教徒に
いかなる問題をもたらしているか」
ジョーン・ボレリー（ジョージタウン大学）
- 「アメリカ社会とその公共政策はムスリムにいかなる問題をも
たらしているか」
マハ・エルジェナイディー（イスラーム・ネットワークグループ）
- 「アメリカ社会とその公共政策は仏教徒にいかなる問題をも
たらしているか」
今井 亮徳（パークレー東本願寺）
- 「アメリカ社会とその公共政策はユダヤ教徒にいかなる問題をも
たらしているか」
ヒレール・レヴィン（ボストン大学）
- 「宗教的多元的国家における回心と改宗」
クラーク・ローベンシュティン（メトロポリタン宗教間対話会議）
- 「イスラームの歴史的側面——アフリカ系・アメリカ人の経験から——」
イブラーヒム・レイミー（フェローシップ・オブ・リコンシリエーション）
- 「福音派にとってのアメリカ社会の問題点」
ロン・サイダー（「社会行動を求める福音派」／イースタン神学校）
- 「政教分離」
ミラ・ワッサーマン（ベツ・シャローム・ユダヤ共同体）

- コメント／ 越後屋 朗（同志社大学大学院神学研究科教授）
- アダ・コヘン（同志社大学大学院神学研究科助教授）

■ ディスカッション

アメリカ社会とその公共政策はカトリック教徒に いかなる問題をもたらしているか

ジョージタウン大学
ジョーン・ボレリー
John Borelli

アメリカにやってきたほとんどすべての宗教集団と同様に、カトリックもこの民主主義国家アメリカで大きく成長しました。イギリスから来たカトリック教徒は、独立革命以前にもともとあった13の植民地のうちメリーランドに定住し宗教的寛容を認めました。ほどなくしてカトリック教徒はその植民地の統治権を失い、イギリス本国で経験したものと同種の多くの制約を受けました。これに対してクエーカー教徒が定住したペンシルバニアでは、すべての宗教集団に宗教の自由が保障されました。その後カトリック教徒は他の愛国者と共に加わりイギリスからの独立革命を推進しました。ジョン・キャロル (John Carroll) は、アメリカで最初のカトリック司教に任命される前のことですが、いどこであり独立宣言に署名した唯一のカトリック教徒、チャールズ・キャロル (Charles Carroll)、クエーカー教徒のベンジャミン・フランクリン (Benjamin Franklin)、サムエル・チェイス (Samuel Chase) らとともに、カナダの支持を取り付けることを目的とした1776年の使節団の一員となりました。

1783年、パリにいたローマ教皇の代理が、イギリスとの最終条約についての交渉を続けていたベンジャミン・フランクリンに接触し、教区の設立とカトリック司教の任命について協議するために、大陸会議との間の通信伝達の特使になるように要請しました。フランクリンがその書簡を大陸会議へ届けると、大陸会議はフランクリンに教皇代理宛に次のような書簡を託しました。「フランクリン博士に託した申請書の主題は純粋に宗教的なものであ

る。大陸会議には管轄権も法的権限もないため、容認するか否かを決定する権限は持たない。このような権限はそれぞれの州が保有しているものである。」その後何年も経たないうちに、13の州も同じように、そのように純粋に宗教的な教会の管轄権の履行については「容認するか否かを決定する権限を持たない」ことを表明しました。これについて、カトリック教徒であり20世紀における宗教と民主主義に関する理論家の権威、ジョン・コートニー・マーレー (John Courtney Murray) は、ローマの教会当局はその書簡を受け取り非常に驚いたに違いないと言及しています。彼の説明によると、教皇庁 (教皇とその行政機構) は数世紀もの間、いかなる国においても所轄当局の承認なしに教区を設立したり司教を任命することはできなかったのです。アメリカで作られたこのような前例は、今では大半の国であたりまえのことになっています。アメリカでは近代史上初めて、司教の任命というような教会の主要決定事項について政府との交渉が行われないことになりました。

カトリック教徒は自由に定住できるようになったものの、まだ疑いのもとに置かれたままであり、プロテスタントを主体とする社会でいくつもの問題に対処しなければなりませんでした。一例を挙げると、南北戦争の英雄であり後に大統領となったユリシーズ・グラント将軍は、カトリック教徒はまだ十分に解放されておらず、聖職者の支配下で無知な状態に置かれたままであると信じていました。数多くのカトリック教徒がグラント将軍の指揮下で北



軍として闘い、その多くが北部の大義のもとに命を落としたにも関わらず、彼はカトリック教徒に対してこのような否定的な考えをしていました。

特定の一つの教会を優先するものではありませんが、公立学校は他の市民生活機能と同様に、明らかにプロテスタント的特徴を持っていました。学校で生徒たちは聖書を読み「主の祈り」を唱和します。当時、近代のエキュメニカル運動が起こる前は、どちらの聖書を使うか、どちらの「主の祈り」や「十戒」を唱えるかが、拡大を続けていた宗教改革の両陣営を明確に分けていました。現在はプロテスタントとカトリックの聖書学者が協力していますが、50年前およびそれ以前はプロテスタントの「キング・ジェームス版聖書」を使うか、カトリックの「ドゥエー聖書」を使うかによって社会不安を引き起こしかねない状況でした。いずれの側も相手側の聖書の英訳を使用したり、相手側の「主の祈り」や「十戒」を唱えることを嫌がりました。公立学校では、「プロテスタント」のものと考えられている祈りや朗読を行うことを拒否したカトリックの子供たちに対して学校側が指導を行い、体罰を与えることも多かったのです。1859年にボストンで起きた有名な事例では、カトリック教徒とプロテスタント教徒が互いに敵意をあらわにするきっかけとなりました。

カトリック教徒は自分たち自身の学校制度を創設するために一層尽力しました。そして、カトリック教徒とカトリック系学校の数が増えるにつれて、不誠実であるとか良きアメリカ国民でないといった批判が起こりました。カトリック人口が都市部に集中してきたことで政治的力を持つようになり、力の立場から諸問題に取り組むことができるようになりました。

このような困難やそれ以外の苦難はあるものの、それでもなおアメリカには、カトリックが栄え、カトリックであろうとなかろうと広く国民に影響を及

ぼす信仰の原則を認める大きなチャンスがあることをカトリック教会聖職者は認識していました。1892年から1893年にかけて開催されたコロンビア万国博覧会とシカゴ万国宗教議会を、誇りをもってはっきりとカトリック信者をアメリカの他の宗教コミュニティと同列に置くことのできる機会としてとらえました。海外の、とくにローマ・カトリックの聖職者がそのような公然とした教会一致主義を認めていなかった時代においてさえ、カトリック教徒は多元的な試みに取り組んでいました。

カトリックの教育制度はアメリカ最大の民間教育制度となりました。そして今日では、多くの都市で貧しい人々にとって大切な教育機会を提供しています。カトリック系学校では、カトリック教区が費用を負担して貧困層の中の優秀な人材に教育を施しています。信教の自由を保証しながらも特定の宗教集団を優遇しないという政教分離を掲げている米国憲法修正第一条の解釈に基づいて、カトリック系学校に対するいかなる形の公的補助も認められないことも時としてあります。この問題は、現政権が導入した「信仰に基づく主導」計画の一面として今日でも続いている、アメリカ社会のカトリック教徒が直面している最も古い、不変の問題だと思われます。

19世紀には多くのカトリック移民が労働人口に加わり、カトリック教徒は労働者の権利の確保や組織労働者の運動において重要な役割を演じました。アメリカのカトリック教徒はカトリックの公共政策の新たな取り組みを実行していました。生活困窮者を助けるために病院などの公共施設を建てたのです。というのも、彼らの考えでは初期資本主義の極端で歪んだ個人主義によって煽られている経済社会の中で、カトリック教徒の中にも助けを必要としている人が数多くいたからです。一般にカトリック教徒は社会自由主義者 (social liberals) ですが、避妊などの性の問題に関しては公然と社会自由主義者の仲間入りをすることはでき

ません。これは、宗教集団全体の公式見解とその集団を構成する一人ひとりが持つ個人的見解とを区別しなければならない、どの問題についても当てはまる一般的な意見にすぎません。

大きな変革がもたらされたのは1960年代中頃のことです。ローマ教皇ヨハネ23世がカトリック教会の刷新、現代世界の社会的政治的機関と教会との対話の開始、教会一致運動や宗教間交流へのカトリックの参加を促進するための施策の策定などのために、全教会に対して公会議の開催を呼びかけました。カトリックがアメリカにおいて民主主義となじんでいたことが、世界のカトリック教会全体に大きな影響を与えました。アメリカのカトリック教徒は、他のキリスト教徒やユダヤ教徒との実りある対話の確立や、筋の通った倫理的合意に基づく一貫した公共倫理の構築に主導的役割を果たしました。現在アメリカが宗教的多元性をますます強めている中で、宗教間交流というより広い分野において今日でもこのような状況は続いています。

第2バチカン公会議の前と後ではカトリック社会は大きく異なっています。他の宗教集団との協力が増した結果、カトリックのアイデンティティについて新たな考察がなされました。今日カトリック系の大学では、このような高等教育機関をカトリックとして特徴づけている事柄について、公式、非公式の様々な考察が行われています。カトリック系大学では、宣教・聖職部が流行りはじめ、カトリック研究の講義に人気が集まっています。

第2バチカン公会議による刷新と改革のさなかの1973年に、人工妊娠中絶を認める最高裁判所の判決が下りました。かつて中絶は違法でしたが、今では多くの保守的な法律学の権威でさえ、中絶の問題を決着済みの法的事項とみなしています。20世紀にカトリック教徒は、主としてジョン・F・ケネディが大統領選に勝利したことによって国内政治首脳部への参加を初めて果たしました。しかし現在では、カトリック教会当局が倫理的でないとみなし



ている法律に対してカトリック教徒の公人がとるべき対応について、カトリック社会の中で意見が大きく分かれています。カトリック教会当局は、軍事力の制限、死刑の廃止、移民労働者の待遇、経済的権利の剥奪などの問題については慎重な姿勢をとっていますが、中絶や安楽死、実験室で造られた人間の胎児から取った幹細胞の研究などの問題は他の倫理的問題よりも重視しています。

かつてアメリカは奴隷や州権の問題をめぐる北部と南部に分裂しましたが、現在はこうした倫理的問題に政府はどのように取り組むべきかという問題をめぐってアメリカ国民の意見が分かれています。カトリック社会もまた意見が分かれていると言えると思います。アメリカ社会において、あるいはアメリカ国内のカトリック教会の中でも、合意点を見いだすことはたいへん困難です。共通の利益の促進はイギリスからの独立の趣意の一つでしたが、最近では共通の利益についてアメリカのコンセンサスのみならずカトリックのコンセンサスが容易に得られるかどうかを問う必要があります。



アメリカ社会とその公共政策はムスリムに いかなる問題をもたらしているか

イスラミック・ネットワーク・グループ
マハ・エルジェナイディー
Maha Elgenaidi

アメリカの社会と公共政策は、次のような形で
イスラームに問題を引き起こしています。

1) アメリカにおけるムスリムとアラブ人を取り巻く 政治的環境：愛国者法などの反テロ法の主な 標的となっている。

例えば、ムスリムは次のような目に遭っています。

人種による選別：民族や宗教的背景に基づいて 嫌疑をかけること

- ・9・11テロの後、直ちに数百人のムスリムやアラブ系アメリカ人が強制捜査を受け、拘束された。
- ・ムスリム人口の多い国から非居住者として入国する者を対象とした特別登録。自主的に登録手続きに訪れた人の中にも拘束された人がいる。拘留中の過酷な状況についても報告がある。
- ・数千人規模(5千人と3千人)のアラブ系アメリカ人男性の尋問。
- ・ワシントン市およびその周辺に住む著名なムスリムのリーダー達の自宅や事務所の強制捜査。
- ・全米にあるモスクの地図をFBIが作製。
- ・イスラーム慈善団体の閉鎖。ここにはアメリカ人ムスリムが純粋な気持ちで寄付した数百万ドルの資金が集まっている。

市民権の侵害(居住者や市民権を持つムスリムや アラブ系アメリカ人も被害にあっている)

- ・嫌疑もないのに長期間拘束される。
- ・多くの人が直ちに国外退去させられた。
- ・「正当な法的手続き」を踏まずに極秘の証拠を

用いる。正当な手続きを踏めば、告発に用いた証拠を見る権利があるので自分の立場を弁護して告発側に異議申し立てをできる。

- ・弁護士を付けさせない。
- ・内密に弁護士と話をする権利を認めない。
- ・拘留中の人々に関する情報をその家族や親しい人およびマスコミに入手させない。
- ・法執行権限の拡大と牽制機能の縮小を背景に、盗聴や秘密捜査などによってムスリムの監視を強化。
- ・グアンタナモ基地には、ジュネーブ条約に違反して、ムスリムの捕虜が「不合法戦闘員」として拘束されている。

2) アメリカ大衆文化に見られるムスリムとアラブ系 アメリカ人のイメージの固定化

第二次世界大戦中の日系アメリカ人のイメージと、今のアメリカ人ムスリムのイメージは驚くほど似ています。現在、「ムスリム」と「テロリスト」とを区別することが難しくなっています。例えば、政府による国家安全保障のためのテロ警戒体制強化は、ラマダーン(断食月)やハッジ(巡礼月)などのイスラームの休日と関連付けて行われることが多いのです。

固定化されたイメージ

- ・テロ、暴力、狂信的行為との連想
- ・2番目に根強い固定観念は、ムスリムの女性は抑圧されていて服従的で教養がなく、権利もほとんど与えられていないというもの。
- ・ムスリムは、外国人、つまり非アメリカ人とみ

なされ、英語を話さないし、「自分たちの友人」ではないと思われている。

- ・ムスリム社会は、本質的に非民主的で、不寛容で遅れているとみなされている。

そのようなイメージを創り出している源 マスコミ

- ・一般にマスコミは否定的な傾向がある。良いニュースはニュースにならない、ということ。
- ・ごく普通のアラブ人やムスリムの日常生活に関する良いニュースはほとんど見られない。
- ・マスコミは、一人のムスリムがしたことを、政治、経済、文化やその他の多くの理由との関連が深いと思われるときは、イスラーム全体を代表するものとして誤って説明することが多い。
- ・マスコミの報道は、ある特定の国や集団に対する国の姿勢を反映していることが多い。

ハリウッド映画

- ・『シャイフ』などのごく初期の映画の時代から、アラブ人やムスリムは、ハーレムを持つ神秘的な族長や石油王、あるいはテロリストのいずれかのイメージで描かれている。
- ・『星の流れる果て』、『トゥルーライズ』、『エグゼクティブ・デシジョン』、『マーシャル・ロー』、『英雄の条件』を始めとする数多くの映画、そして『花嫁のパパ2』のようなコメディ映画でさえ、アラブ人やムスリムはテロリスト、女性に対する暴君、野蛮人、そして一般に「悪人」という固定観念を植え付けている。
- ・アラブ人やムスリムを英雄や、あるいは普通の人とさえ描いている映画はほとんどない。
- ・昔の西部劇のアメリカ先住民や犯罪映画のイタリア人などのように、ハリウッド映画は他の集団についても同じような扱いをしている。

教科書や小説も固定観念の存続に一役買っている。

- ・代表的な例は、多くの学校でイスラーム史の単元を補足するために必読の書とされている『シャーパーヌー』という本である。

- ・『シャーパーヌー』は、家族を没落から救うために両親に第三夫人として55歳の男と結婚させられた13歳の少女の話である。
- ・このような本は一般に広まっている固定観念をさらに強くするだけである。実際には、イスラームの教えを表すものではないし、現在の文化的慣習を描写するものでもない。

世界各国でムスリムが実践しているムスリムの文化的慣習がイスラームを代表するものとみなされている。

- ・ムスリムとは、いくつもの国や伝統を代表する様々な人々の集団である。
- ・アラブ人やムスリムの多くの社会で見られる伝統はイスラームとは関係ないことが多い。むしろ、イスラームの教えと相反することもある。例えば、名誉殺人、少女の教育の制限、あるいは運転の禁止などは宗教的慣習というよりは文化的慣習である。

近年の、原理主義団体や保守的な政治家による憎悪を込めた言葉

- ・声明やインタビューでの発言がある。例えば、福音主義派キリスト教徒のフランクリン・グラハム(Franklin Graham)は、イスラームは「邪悪な宗教」であるといい、テロは「主流」イスラームの一部を成している、また、クルアーンは「暴力を唱道している」と断言している。多くの新聞に同時に寄稿しているコラムニスト、アン・コールター(Ann Coulter)は、アメリカは[ムスリム]諸国を侵略し、その指導者たちを殺して国民をキリスト教に改宗させなければならないという発言をし、「ムスリムの集団強制退去」を求めている。また、フロリダ州ジャクソンビルのファースト・バプティスト教会の牧師、ジェリー・バインズ(Jerry Vines)師は、南部バプティスト教会の大会参加者に、預言者ムハンマドは「悪魔に取りつかれた小児愛者」であると語り、さらに「アッラーはエホバではない。エホバなら、あなたを人々の上に爆弾を落とし無数の人々の命を奪おうとするようなテロリストにすることはない」と続けた。



・このような発言は問題になることも、否定されることもないので、イスラームおよびその信者に対する否定的な固定観念を強めるだけである。

③ 西側のフェミニズム(男女同権主義)と「ヒジャーブ」観

・ヒジャーブ：文字通りの意味は「防壁」または「幕」で、「隠すこと」である。服装という面では、「自宅以外の場所で性を隠す衣服」を意味するようになっている。

・ヒジャーブは、ヘッドスカーフであったり、ゆったりとした衣服、あるいはベールなどと社会的歴史的要因によって様々な形がある。

・ヒジャーブはムスリムの女性に強制されているものではない。ただし、現在のイランとサウジアラビアは例外だが、この二国のムスリムが全世界の14億人のムスリム人口に占める割合は小さい。

・女性にとってヒジャーブが意味するものはこれまで時代や国や人によって様々であり、今後とも様々な意味を持つことだろう(※1)。

i. エジプトのイギリス植民地時代には、ムスリムの女性は植民地主義を定義づけるものに対する抵抗のしるしとしてヒジャーブを身に付けた。

ii. イラン革命では、シャー(皇帝)と西洋文化の影響に対する抵抗のしるしとしてヒジャーブを身に付けた。

iii. 現在、教育を受け職業を持つムスリムの女性は、アイデンティティを主張する手段としてヒジャーブを着用している(人類学者のファドワ・エルギンディ(Fadwa El-Guindi)による)。

iv. 男女同権主義者の立場からヒジャーブを身に付ける女性もいる。「ベールで覆うことによって男性優位に基づく女性の肉体的性的魅力の順位付けを阻むことができる。さ

らに、欧米の消費文明に対する抵抗でもある。というのも、消費文明では流行に遅れまいとお金とエネルギーを費やし続けているが、結局は女性を外見と市場に捕らわれているだけである」(サーディヤ・シャイフ(Sa'diyyah Shaikh)(テンプル大学博士号候補)による)。

v. ほとんどの女性は、神に従順であろうとして深い信仰からヒジャーブを着用している。

vi. ムスリム社会の各分野で活躍するために着用する女性もいる。伝統的な社会の公的な場を中立化し、それによって公的領域への女性の参加を促進することになる。

西側の男女同権主義者がヒジャーブを着用している女性について発言するときは、欧米の服装の規範を用いています。欧米の規範のほうが優れていると考え、その規範に照らして第三世界や欧米以外の女性を判断しているのです。この規範においては、ヒジャーブは単に抑圧的で強制的なものであり、西側と東側の女性が性の公正に関する諸問題について話し合い、共に取り組む機会を損なうものであると考えられています。

ご清聴ありがとうございました。

1) この部分は、Sa'diyya Shaikh, "Transforming feminism: Islam, women and gender justice"を参考している。所収は、Omid Safi(ed.), *Progressive Muslims, On Justice, Gender, and Pluralism*, Oxford, One World, 2003.

アメリカ社会とその公共政策は仏教徒に いかなる問題をもたらしているか

バークレー東本願寺
今井 亮徳

「アメリカ社会全般あるいは社会的形態のどのような見方があなたの宗教にとって問題をもたらしているか」という問題提起のもとに、子供の教育について、女性の役割、異宗教間の結婚、セックスについての道徳観、同性愛について、妊娠中絶、移民政策、人種差別、言葉の習得、服装問題、休日、食べ物、家庭、死について、という13に亘る細目が与えられ、そのうちの一つ以上の細目について意見発表をせよという課題をいただきました。

与えられた問題提起は、これらの細目について、仏教の見解がアメリカ社会の一般の見解から問題となるか、ということだろうと思いますが、あまり問題とならないというのが、私の見解です。その一番の理由として、「寺の存在価値」を考えるからです。言うまでもなく、寺はどんな人にも開放されています。ですから子供の教育について右翼的な考え方を持つ人、左翼的な考え方を持つ人、どちらも歓迎します。異宗教間の結婚についても、どちらか一方が仏教に関心のある人で、仏教的儀式に沿って結婚式をあげたいというのなら問題はありません。また結婚後も、お互いの宗教を敬い合う生活態度を身につけ欲しいということで、話し合うことはあります。同性愛者についても同じです。妊娠中絶にしても、「いのち」の重さ、大切はともに考えますが、中絶したから寺に来てはいけないということはありません。ただ、中絶後の「自分」と他の「いのち」との関わり、中絶後の苦悩をとおしての生き方などは、ともに真剣に考えます。人種

差別にしてもマイノリティーであるから、マジョリティーから差別を受けるということがあると思います。が、マイノリティーがマジョリティーになる時もあるのです。そのような時の人間の根底にある非平等的な差別的な考え方を問題として扱っていきます。死や死んでいくことについての話題は、アメリカ社会では一般的にタブー視されていると言われていますが、仏教の基本的教えには「無常」ということがありますから、近親との今生の別れ(葬儀)をとおして、与えられてある「いのち」を如何に十全に生きるかという課題を考え、自らの死を受け入れ生を豊かに生き抜く大切な機会だと思います。言い換えれば、タブー視されていればこそそのチャレンジです。このごろは、仏教の葬儀に参列した人達が、仏教の教えを聞きたいと訪ねてくる傾向が、私の寺ばかりではなく、アメリカの仏教寺院によく見受けられると聞いています。

端的に言えば、自分の生き様を通して仏法に「道」を求めるのであれば、いかなる生き方をして人であろうとも寺に来ることを拒むことはないということです。そのように考えられる根底には、仏教の「宿業観」があることを一言申し添えておきます。

課題として与えられた13項目は、どれもが大切な問題を孕んでいますから、もっと丁寧に応答していかなければならないとおもいますが、今の私にとって、もっとも問題で、かつまた良く分からないのは「銃」の問題です。「仏教の見解が、どのよ





うなアメリカ社会の一般的見解から問題になるか」という課題と少しずれるかもしれませんが、問題提起したいと思います。

銃の保持は規制されているとはいふものの相変わらず銃による犠牲者は後を絶ちません。それにも関わらず、今のアメリカ社会から銃による犯罪或いは事故を無くすということは不可能に近いでしょう。それは、アメリカ合衆国修正憲法第2条に“A well regulated Militia, being necessary to the security of a free State, the right of the people to keep and bear Arms, shall not be infringed.”つまり、国民に「武器を持つ権利」が与えられていること、また、この第2条を楯にとった大きな政治団体としての“National Rifle Association”の存在があります。大きな政治団体ということは、それだけ銃をもつことを支持している人が多いということです。

私がこの「銃」の問題に関心を寄せるのは、十年ほど前に、お寺に来ていた子供が、友達の家で子供同士の遊びで拳銃の犠牲になり死んだこと。そして殺された子供の家族が、今もって精神的に苦悩しているということ。また、コミュニティーマーケットのオーナーとなるべく将来を期待されていた若い父親が、その店主と共に白昼強盗に殺され、残された母子の精神的苦痛を共にし、また父親が息子をこのような悲劇で亡くしとても落胆し、精神的にたちなおれない状態になった事実を目の当たりにしているからです。このようなことは、仏教徒とは限らずに、聖職にたずさわる者ならば、一つや二つ経験しているのではないのでしょうか。

ここでは、銃に関する問題を提起するだけで解決の方法とか、仏教徒はそれにどのように関わるべきかということについては、発言を保留したいと思います。というのも正直なところ私には、未だ明確な答えが見いだせていないからです。ただ、考える資料としては、アメリカ合衆国の隣国カナダ

でも多数の人達が銃を保持しているということですが、銃による殺人、或いは犯罪はアメリカに較べて非常に少ないという事実です。その違いは、アメリカ人のものの考え方に由来するのではないだろうか、と考えたりしています。

そこで、出来ればここに参加されている聖職者の方々が「銃」の問題についてどのような取り組みをなさっているのか、お聞かせ下されば有り難いと思っています。

もう一つの問題は、憎悪犯罪といえますか、ヘイト・クライムについてです。人種差別の問題とも絡んでくるのですが、根本には自分の価値観と相容れない価値観を暴力をもって憎悪する行為だと定義できるのではないのでしょうか。ユダヤ教の聖堂の壁に、鍵十字を書くというとても陰險な暴力から、聖堂内が荒らされたり、聖堂が放火されたりという身の危険を感じるような直接的暴力を聞くとき、相手が見えないだけに不安感ばかりが募ります。また、それが、個人的な憎悪ではなく、憎しみを共有するようなグループの犯罪ということになれば、なおさら不安感は大きくなるばかりです。

アメリカの仏教寺院が、ヘイト・クライムの犠牲になったということは、未だ聞いていませんが、それは、仏教徒が、集団として少数であり社会的影響も少ないからかもしれません。

銃の問題やヘイト・クライムの問題の背後に、民衆の不安感と、人と人との間の不信感の不必要な増幅を感じざるを得ません。これら社会問題にたいしては、宗教にたずさわる私たちだけではなく、社会心理学、或いは精神心理学といった分野との連携も必要ではないかと考える今日この頃です。

以上、問題点のみを指摘して私の発表を終わらせていただきます。

アメリカ社会とその公共政策はユダヤ教徒 にいかなる問題をもたらしているか

ボストン大学
ヒレール・レヴィン
Hillel Levine

このテーマに着目された本会議主催者の皆さまの慧眼に敬意を表します。実を申しますと、私はこれまでに幾度となく米国政府や同胞である米国人を批判してきましたが、今回の会議のような視点からこの問題について考えたことはただの一度もありませんでした。おそらくユダヤ教的伝統の最良ものこそが米国文明の中心的な価値であると思ひこんできたために、常に一米国人の立場からしか諸問題に向き合ってこなかったせいだと思います。米国人の感性、想像力、対人感、言語には、伝統的西欧文明や現代哲学、社会科学だけでなく、豊かなユダヤ教的思想が色濃く受け継がれています。加えて、日本の文明に触れ、日本の皆さまと交流することをはじめ、数々の経験が私の人格や生き方に大きな影響を及ぼしてきました。

この点について私の個人的な体験を披露したいと思います。9月11日の同時多発テロの数日後に、ハーバード大学のチャペルで朝の説教を行ったことがありました。これはテロの何カ月も前から予定されていたことで、このたびの悲劇のために計画されたものではありませんでした。この説教の中で私は「テロリズムには即刻、決然とした真摯な態度で、痛烈な非難を徹底して浴びせるべきである」と訴えました。悪に向き合う場合、言い訳は一切認めるべきではありません。私はまた、私たちを襲ったこの大いなる悲劇に対し行政の責任も問われるべきであるとし、こうした攻撃に対する備えを怠った政府関係者にも非難の矛先を向けました。このように述べた上で、それまでとはトーンを

変えて私は次のように語りかけました。私たち米国人は世界に対する責任について考えるべきであり、自分たちがこうした責任を果たしてこなかったのではないかということに思いを馳せるべきであると。この点を強く訴えた私の発言は、大勢の友人や仲間の不興を買いました。私が最初からもっとユダヤ教的視点でこの問題を取り上げていれば、そして最も根強い伝統的な教えを念頭に置いていれば、リベラルな友人や一部のラビのように「苦難が降りかかったときには自らの行いを振り返らなければならない」という言葉で説教を締めくくったかもしれません。ところが私が説教の最後に述べたのは次のようなことでした。「私たちは、破壊をなす人々や職務を怠った人々の尊厳を認めなくてはならず、そのためにはその行いに対して彼らの責任を問いたださなくてはならない。翻って私たち自身の中に、こうした人々の怒りを買ひ、正義にもとる報復心をかき立てるような倫理的欠陥があるのではないかということも反省しなくてはならない。」

もちろん米国にとっての「善」がユダヤ教、ひいてはユダヤ教徒にとっての「善」であるとは限りません。それでも私はそれが合わせ鏡であることを経験上知っています。とはいえ社会や公共政策は、ユダヤ教に関するものであれもっと一般的なものであれ、実にたくさん問題を内包しています。具体的なことを書き出せば枚挙にいとまがないでしょうし、社会構造に対して私が感じる問題点や、こうした問題の原因となる米国行政の手続きの不



備についても同様でしょう。米国憲法と権利章典には本来最も崇高な理念が掲げられていたはずですが。ところが現実には、米国が体験してきた最も恥ずべき失敗の数々を私たちはその中に見ることができるのです。私たちは、新しく寛容な人間として互いに接し、人がみな多くの自由を持つことを認めてきたはずですが。それなのに、米国社会には有色人種や女性(肌の色を問わず)など、十分な市民権を認められていない国民が大勢存在していました。国民の自由を全面的に推進するという意味では米国社会は正しい方向に発展してきましたが、なぜこれほど時間がかかるのでしょうか。またこの期に及んで、自由が実現されないことがありますのでしょうか。あと何世代を経れば、米国社会のマイノリティーや女性たちは公平な自己実現の機会を手にすることができるのでしょうか。一体いつになれば、米国人は個人の権利と集団の権利の力関係を正しく理解することができるのでしょうか。ジョン・F・ケネディが大統領選に出馬したとき、反対陣営は「ケネディはバチカンに支配されたカトリック信者だ」と主張しました。しかし集団に対する忠誠心や帰属意識はそれほど単純なものではなく、様々なものに対して忠誠心を持つ一方で、自国と自国民に無条件の忠誠を誓うことは可能です。今では米国人もこのことをよく理解しています。たまたまイスラームを信仰する米国人が、テロリズムを擁護する少数のムスリムと同一視されなくなるのはいつのことでしょう。たまたまユダヤ教徒だった新保守主義者や新左翼のために、ユダヤ人全体がその責を負わされるような時代はいつ終わるのでしょうか。国家の優先事項を損なうことなく、外国系米国人とそれ以外の米国人の利害を一致させるにはどうすればよいのでしょうか。どうすれば私たちは偏った歴史観を改め、正しい教訓を学ぶことができるのでしょうか。

これまでは国民の大部分が中流意識を持っているということが米国の強みの一つとなっていまし

た。たいていの人はキャデラックには手が届かなくても、シボレーなら十分購入できたのです。ところが社会経済的格差は広がり続け、1990年には米国民の20%が資産の40%を所有していたのに対し、今ではこうした小数の上流層が資産の実に半分以上を独占するようになりました。富裕層の中でも上から2%が富の大部分を支配する一方で、国民の一部はいくら働いても医療保険等の基礎サービスさえ受けることができなかつたり、家族と共に過ごす時間を持てなかつたりしているのが現状です。

社会から貧困や不完全就業や失業がなくならないのは、貧しい人たちが意欲や向上心を持たなかつたり、子供たちに良い暮らしをさせてやりたいという気持ちを欠いていたりするためではありません。累進課税や、相続税等の公正な税制が廃止されようとする中、公的サービスに対する貧困層の負担は不当に拡大し、その一方で富裕層は社会貢献の責任を忘れ去っています。ユダヤ教社会が諸手をあげて支持する理想的な税制とは、慈善目的の寄付金や担保金を税金控除の対象にするというもので、こうすれば国民は政府の介入を受けることなく、自分や社会のために積極的に明るい未来作りに貢献することができるはずです。教育は一般的に貧しさから脱却する手段であるとされていますが、その教育の現場でさえ、もはや機会均等は実現されておらず、多くの青少年が、想像力を欠いた教育の前で挫折を余儀なくされています。一人のユダヤ教徒として、ユダヤ教的視点から私が言いたかったことは以上です。米国のユダヤ人を評して「聖公会信者のように稼ぎ、プエルトリコ人のように投票する」といわれることがよくあります。これはユダヤ人が常に米国社会全体の利益を念頭に置き、投票時にはユダヤ人社会の経済利益だけにとらわれずに候補者を選ぶということです。ところが先に述べたような不平等がまかり通る米国社会では、ユダヤ教徒の声が十分に

届いていないのが現状です。

ユダヤ教的思想とは相容れないある一つの傾向が今米国文化の中でクローズアップされています。それは犠牲という思想であり、絶対に必要でなくても、高邁とされる何らかの目的のために自分の身を投げ出すことを理想化する考え方です。確かにユダヤ教徒もしばしば自分の身を犠牲にし、殉教者を敬います。それでもラビは宗教的な動機からこうした犠牲が求められるような状況を極力排してきました。ラビの言葉を借りれば、大切なのは「あなたがたはそれらによって生きよ、しかしそれらのために死んではいけない」ということなのです。もちろん人は高邁な理想やときには最大の利益のために身を挺する心構えを持たなければなりません。ただし自分の身を犠牲にするということが目的そのものになってはいけません。そうした考えが人々を誤った方向に導き、神の祝福を受けたい一心で罪のない人々を害する行為に駆り立てるからです。自己犠牲がもたらす弊害には限りがありません。米国の社会からこうした弊害が少しでもなくなることを切に願います。最後になりましたが、もう一つ言っておかねばならないことがあります。よそ者、すなわち外国人や仲間・友人以外の者に対してこの国が取ってきた態度です。米国社会は、おそらく「世界は敵意に満ちている」という思い込みから、外部の者、とりわけ米国人以外の者に対する寛容性を失いつつあります。米国は本来移民の国であり、米国人は皆、移民の意味するところを理解しているはずです。私たち自身がかつては移民だったからです。少なくとも何世代か前の祖先はそうでした。聖書には他者を虐げてはならないという教えが繰り返されています。「あなたがた自身、エジプトの地ではよそ者だった」からです。私たちは皆、内なるエジプトを経験しており、国内の「よそ者」の協力と善意のありがた味をよく分かっています。米国が「よそ者の土地」としての使命に立ち返ってくれることを願うばかりで



す。翻れば、米国は18世紀に略奪者の被害を受けた人々を守るために、外国人不法行為法(The Alien Tort Act)を制定しました。そして今日私たちは、この法律によって米国企業の不法行為に歯止めをかけようとしています。

ユダヤ教徒が何らかの行動を取ったり意志の疎通をはかったりする場合、その背景には必ず責任感や相手を思いやる気持ちが働いています。米国の行いは間違いだらけです。米国は世界の警察を気取り、都合の良いときにだけ民主主義と自由を持ち出して、他国を侵略する行為を正当化しています。また必要とあらば専制体制の支持に回ることさえあります。ここ数十年を振り返っても、リアルポリティーク(現実主義的政治)というお題目を掲げて、クメール・ルージュやサダム・フセインといった非道な体制を支持した例があります。大量虐殺を行う指導者を支持するようなことは、いかなる理由をもってしても断じて正当化できるものではありません。自国民や他国民を平気で殺戮するような主権国家に、どのような主権があるのでしょうか。また聖書に書かれている通り、正しい国家を「血の上に築く」ことはできません。しかし米国は過去にはルワンダで、そして今このときもダルフールで、同じ過ちを繰り返しています。米国が聖書の発想に導かれて、今何よりも求められている国際人道支援のリーダー的役割を担うようになることを願ってやみません。また米国はベトナムの轍を踏み、イラクでもまた同じ過ちを犯していますが、そのために米国が新たな孤立主義的立場に陥ることがあってはなりません。米国の大義の正しさを世界中の人たちに理解してもらうには、私たちの意図をきちんと発信すると共に、バランスよく責任を果たすことが必要です。さらに「経済的公正の実現に努める主権国家」という新たな考え方が今こそ求められています。ユダヤ教は、万人の能力とニーズのバランスの大切さを説いています。経済がグローバル化する中、誰もが、天然資源だ



けでなく、工業製品やハイテクな知的所有権の恩恵に浴することができる途を開かなければなりません。輸入税、割当、アウトソーシングについては、常に最大多数の幸福を念頭に置き、多国間協力を通して決定を下さなければなりません。普段は水面下に陰を潜めている国家主義が、一段と毒々しさを増し、危険な形で姿を現すことはよくありますが、こうした場合にもバランス感覚が求められます。つまり宗教間協力や国際協力を推進しようとするあまり、大切に育まれてきた個別主義を排除することがあってはならないのです。個別主義は人間一人一人のアイデンティティーと、その共通の記憶のより所となるからです。集団のアイデンティティーは、四方八方に張り巡らされた網のようなものだといえます。

米国は、イスラエルでの故郷再建を目指したユダヤ民族解放運動、すなわちシオニズムのよき理解者であり、おそらく唯一の信頼に足る同盟者でした。ところがこの動きは大きな悲劇を招きます。主権国家を再建しようとするユダヤ人の運動が、パレスチナ人やアラブ人をはじめとする現地の人々に大変な脅威を与えたからです。確かに政治的な妥協によってこの問題を解決することもできたでしょう。現に世界にはそうした事例がいくつもあります。ただこうした妥協が行われた場合でさえ、多くの血が流れ、政情不安が続くのが常なのです。米国がイスラエルを支持する一方で、「自分たちの主権国家を建設し、同胞や、イスラエルを含む隣国と平和に暮らしたい」というパレスチナの人々の切なる思いに耳を傾けることを願う次第です。また「地は主のもの」という言葉に代表される土地に対するユダヤ教徒の姿勢を尊重し、国境の線引きが曖昧な土地に立つこの二つの主権国家が、それぞれの宗教観と価値観の下で所有と利用を切り離して考えるようになること、そして歴史的な聖地はじめ好きな場所に誰もが移動できるようになる日が来ることを切に望みます。宗教は問

題の解決にもなれば、火種にもなるのです。

互いが協力してこうした対話の場を持つことで、私たちは、詩篇に謳われているように「やわらぎを求めて、これを努める」ことができるのだと思います。

宗教的多元的国家における回心と改宗

メトロポリタン宗教間対話会議
クラーク・ローベンシュティン
Clark Lobenstine

アメリカおよび世界各国において諸宗教間の関係に関わる極めて難しい問題の一つに改宗の問題があります。ここでは改宗という言葉を、誰かを自分の信じる宗教に帰依させる意識的な努力と定義して用います。まず始めに、どのような点でこの問題は重要なのか、宗教対話協議会ではどのような対応をしているのか、というところから論じてみたいと思います。次に、アメリカの社会と公共政策の現在のあり方が、この国の改宗に関する諸問題を引き起こしている状況についてお話しします。

I. この問題については宗教界で懸念が広まっています。とくに若者や、高齢者や病人などの狙われやすい人たちを巻き込んでいることが問題になっています。例えば、宗教対話協議会が様々な宗教を信じる高校生のために実施していた「週末を過ごすための修養会」という集まりが中止になりました。一部の保護者や聖職者の間に、宗教の異なる若者が互いに関心をもつようになるには、毎週金曜日の夜から日曜日の昼まで一緒に居るほど長い時間は必要ないのではないかという懸念もあって、学校が休みのときに1日限りのワークショップをしたほうがよいということになりました。「修養会」の基本原則では改宗させようとする試みを明確に禁止しているにもかかわらず、その後デートをするなどしてやがては改宗に至るかもしれないと大人は思ったのです。十代の子供を「失う」のではないかという親の心配を理由に、高校で世界の宗教についての授業を行わないこともあります。という

のも、そのような授業を行うことによって子供たちが他の宗教に触れる可能性があるからです。

どの宗教も、ティーンエイジャーとなった子供たち、とくに中学2、3年で行われる堅信礼のための勉強会を終えた後の若い人たちの関心を引くにはどうしたらよいかという難題に直面しています。「集会で他の宗教について教えるための独創的モデル」に関するワークショップの終りに、ユダヤ教の宗教教育者がした発言を私は忘れることはできないでしょう。その教育者が学んだ最も大事なことは、自分のコミュニティーだけの問題ではないということでした。これをきっかけにその後、「若者の精神的飢えを満たすー宗教対話教育を通じて若者の関心を引く」というタイトルでワークショップを開催する運びとなりました。宗教対話協議会理事会では、昨年二度の会議において対話の時間を利用して、各宗教ではどのように子供たちに教えているか、どのようにして若い人たちをつなぎとめようとしているのかということについて発表を行いました。

ヨーロッパの歴史においては、他にも影響を受けた宗教集団があることは間違いありませんが、ユダヤ教徒が改宗行為の最大の被害者となっています。ユダヤ人はみなイエスの死に責任があるとする「神殺し」の罪が、ヨーロッパの多くのユダヤ人虐殺の根拠となりました。ユダヤ教徒がキリスト教への改宗か、さもなければ死を強いられることが頻発しました。たくさんのユダヤ教徒の強制改宗やホロコーストは、ユダヤ人の社会的・個人的

記憶の中核を成す要素となっています。ヨーロッパにおける最近の反ユダヤ主義の高まりは、それよりも規模は小さいものの、アメリカにおける煽動グループや他の反ユダヤ主義の動きと同様に憂慮すべき事象です。

けれどもアメリカのユダヤ人にとってはるかに深刻な問題は、イエシュア(Yeshua)をメシアとして受け入れれば「契約を果たしたユダヤ人」になると約束して彼らを改宗させようとする、メシアニック・ジューズ[イエスを信じるユダヤ人]、ヒブリュー・クリスチャンズ[ユダヤ人のキリスト教徒]、あるいはジュズ・フォア・ジーザス[イエスのためのユダヤ人]などと呼ばれる団体の伝道活動です(イエシュアはアラム語およびヘブライ語でイエスを意味する言葉です)。このような伝道団体の礼拝をユダヤ教の礼拝と見分けることは容易ではありません。宗教対話協議会では、1987年に発表した重要な『改宗についての声明(Statement on Proselytism)』の中でこうした団体の活動を浮き彫りにしました。この声明は私の講演の原稿に添付しています。その後、宗教対話協議会に加盟する他の宗教団体もこの声明に対する支持を表明しています。

「ユダヤ教の祝祭を祝い、ユダヤ教の安息日に礼拝をし、彼らの教会でユダヤ教の象徴、儀式、祈禱を流用し、時には彼らの指導者を「ラビ」と呼んだりすることによって、カナンの地へ戻る道を真剣に探し求めている多くのユダヤ人を、しばしばごまかしによって引き込もうとしています。」

この声明が採択された背景には、このような伝道団体の一部の人が老人ホームに入りユダヤ人らしい姓を持つ人を見つけ改宗させようとするという欺瞞的行為について、ユダヤ人から宗教対話協議会に相談が持ち込まれたということがあります。また、大学でユダヤ人らしい名前の学生を標的にした改宗行為が続いていることも問題となっていました。ジュズ・フォア・ジーザス(Jews for Jesus)という伝道団体は現在、旧ソ連から近年移

住してきた人たちも標的にしています。

しかしながら核心となる欺瞞は、ユダヤ教信者であると同時にイエスをメシアとして受け入れることができるという主張にあります。この主張はユダヤ教の権威を失墜させるものです。というのも、旧約聖書、とくに預言者の書でメシアがまだ来られていないことは明確にされています(例えば、エゼキエル書37章24～28節、イザヤ書11章12節、ミカ書4章3節、イザヤ書66章23節を参照のこと)。ある人にとってイエスがメシアならば、その人はキリスト教徒です。最近あるラビが私に言ったように、「これはおそらくすべてのユダヤ人の意見が一致する唯一のことでしょう。」さらに、こうした伝道団体は彼らの宗教をユダヤ教の象徴で覆い隠すことによって、ユダヤ教の権威を失墜させているだけでなく、キリスト教を尊重していないこと、ならびに信者に与えるすべてのものを尊重していないことも露呈しています。一例を挙げると、残念なことに長老教会(米国)からの出資で始まったフィラデルフィアの新しいメシアニック・ジューズの集会では、礼拝後に聖餐／最後の晩餐を希望者にしか与えていません。

今年の秋、ワシントンDCでユダヤ人を標的とした改宗行為が再び大きな問題となりました。ユダヤ教の祭日が始まる前の月に、ジュズ・フォア・ジーザスのメンバーが多くのボランティアとともに地下鉄の出入り口で約20万枚のピラを配りました。いい意味で自分の信じる宗教を他の人と共有するということは、その宗教を肯定することであって、その人が信じているものについて否定的論評をすることではありません。特定の宗教集団を標的にした改宗行為は、本質的にその宗教に欠陥があり尊重に値しないことを示唆するものです。多様な人種や民族で構成されるコミュニティのように、複数の宗教を持つ団体は、尊重と寛容という基盤のうえに形成されています。対象を絞った改宗行為のように、尊重という共通の概念が脅かさ

れるときは、信仰者がその行為をはっきりと非難することが求められます。

宗教の多くは、自分の信仰を他者と共有する権利だけでなく、その必要性も主張していることは明白です。それでもなお宗教対話協議会では、信仰を共有する権利を、一方では人間の自由という文脈に、他方では宗教的多元主義の原則の尊重という文脈に置いて捉えています。このような「宗教的多元主義の原則は異なるコミュニティ間の理解と協力を促進する最大のチャンスを持つ社会の基盤」となります。宗教対話協議会の改宗についての声明は以下のとおりです。

「私達はあらゆる宗教が善意をもってそのメッセージを伝える権利を支持します。ただし、一つの宗教集団が改宗行為の一環として、別の宗教コミュニティの信条や儀式を公然と貶めたり非難することは適切な行為ではありません。人間の自由を尊重しない改宗は慎重に回避すべきです。改宗は、謙遜の気持ちと他者への敬意を持ってなされるべきです。

宗教対話協議会は、特定のイデオロギーや神学の下に結集する集団の正当性について判断を下そうとしているではありません。過激な人道主義から個人崇拜に至るまで多様な宗教団体から精神的な支えを得ている人々がいます。しかしながら、宗教間の尊重や寛容の精神を損なう活動を推進あるいは是認する宗教団体があると、私達は非難の声をあげなければならないと感じます。私達は、改宗を迫られている人が信じている宗教の権威を失墜させるような改宗行為を非難します。そのようなやり方は、適切で倫理に基づく宗教奉仕活動の範囲を逸脱するものです。

アメリカは、数世紀にわたってヨーロッパの人々をおびえさせたような宗教間の争いはほとんど経験していません。したがって、ワシントン首都圏にあるイスラーム、ユダヤ教、モルモン教、プロテスタント、ローマ・カトリックの宗教コミュニティのリー

ダーとして私達は、ワシントン・メトロポリタン宗教対話協議会の後援を受けて、すべての宗派・教派に対して、異なる集団間の理解と協力を促進する最大のチャンスを持つ社会の基盤である宗教的多元主義の原則を尊重することを求めます。」「[バハイー教、ヒンズー教、ジャイナ教、シーク教、ゾロアスター教も加盟の一環としてこの声明に対する支持を表明しています。]

宗教対話協議会は、いくつかの異なる宗教に影響を及ぼす多くの状況に、この「改宗についての声明」を適用しています。その具体的な事例についてはディスカッションの時間に紹介できると思います。モルモン教会が「改宗についての声明」の最初の署名者であったことを聞いて驚く人もいます。この教会は今では約6万人の伝道師を抱えています。その多くは若い人たちで、2年間の奉仕期間中に自分または家族のお金で費用をまかない戸別訪問をしています。ところが彼らは、自ら厳しい宗教的迫害を受けた経験から、すべての人に対して自分の信仰を選択する自由を尊重しています。この若い伝道師たちは研修のときに、彼らが自分自身の信仰の喜びを伝えるときに他の宗教について攻撃したり、けなしたりしないように教えられています。また、宗教集団を標的とした改宗活動も行いません。

この問題を個人的な体験に引き寄せて論じてみたいと思います。1985年の研究休暇の年に私は、クリスチャンとムスリムの関係をテーマとする宣教学博士の学位論文に取り組むために、11週間の予定でヨーロッパと中東へ家族とともに出かけました。そのとき、私はムスリムになるかもしれないという思いがよぎりました。もしそうなればムスリムの同僚の中には大喜びする人がいることは分かっていましたが(彼らの宗教にとって、クリスチャンの宗教対話活動リーダーを改宗させることほどよい証はないため)、私にとっては実のところ困



った考えでした。研究を通じて、そしてクリスチャンやムスリム、ユダヤ教徒に対する多くの聞き取り調査によって、イスラームに関する私の理解と認識は確かに深くなりました。それでもなお、研究、聞き取り調査、論文執筆などの活動によって、私はキリスト教徒でよかったとの思いはいつそう強くなりました。こうした経験は宗教対話や公正のための共同活動に携わる人に普遍的ではないとしても一貫して見られるものです。

私のうちにある望みを実現している様子が(ペテロの第一の手紙3章15節を参照)誰かをキリスト教信仰に導くことになるとしたら、そのような尊い幸運を私の人生に与えてくださったことを神に感謝するでしょう。しかしながら、そのような可能性のために私が彼らと仕事をしたり語り合ったりしているのではないということを明確にしておきたいと思います。私の知る限りでは、25年間に及ぶ宗教対話協議会の活動の中で、私の信心深さを十分に理解している人は数多くいましたが、私がきっかけとなって改宗した人は一人もいません。また、彼らのうちにある望みを実現するという幸運を私と同じように持っている、他の宗教を信じる多くの人たちが私の周りにいます。神が私の人生に働きかけているように、彼らの人生においても神の働きがあるということを私は確信しています。時には、午前中にお話した私の祖父の経験と同じように、「むしろ私自身の祈りの生活に恥ずかしさを感じる」こともあります。私の信仰の旅は、彼らの宗教への改宗を私に強制することのない彼らの信仰によって深められ豊かなものになっていますし、他の人たちも同じことを私に言っています。

改宗は聖霊の働きであると私は理解しています。誰もが改宗した人を知っています。キリスト教徒であろうと、ユダヤ教徒、ムスリム、仏教徒、あるいは他の宗教であろうと、あなたの信じる宗教に誰かが皈依するといつも嬉しく思いますか。あなたの宗教を捨てて別の宗教に転向すると残念に

思いがちですか。いかに自身の宗教が墮落したか、あるいはその人を自身の宗教にとどめておくために自分ができることはなかったのだろうかなどと考えますか。

宗教対話協議会(IFC)で活動をしている私は、誰かが自分自身の「精神的な拠所」を見つけると神に感謝するようになりました。これには二通りのパターンがあります。一つは、自分が育った宗教をより深く求めるというものです。一例を挙げるとIFC理事会の元会長は、生まれはユダヤ人を選んだのもユダヤ教であると自己紹介することがありました。定年後には、宗教対話協議会で他の多くの宗教を信じる人々と接していたこともあって、いっそう信仰を深めています。二つ目は、別の宗教に精神的な拠所を見つけて改宗するというパターンです。IFCにはキリスト教徒として育った活動的なアフリカ系アメリカ人が何人かいます。実は、そのうちの二人は聖職者の息子でした。ところが、彼らはイスラームの中に平安と神との関係の完全さを見いだしたのです。彼らは自身の信心深さと喜びによって、キリスト教の中に見いだせなかった精神的な拠所をイスラームに見つけたのでした。これは、主の働きが実に不可思議なかたちで現われることを思い出させる事例の一つにすぎないのではないのでしょうか。

II. このセッションでは、宗教にとって問題を引き起こすアメリカの社会と公共政策のあり方について少し話をするように言われました。これまで、アメリカの宗教的に多様なコミュニティに改宗行為がどのような影響を及ぼしているかについて説明しましたが、この問題は政府の政策にどのように左右されるのでしょうか。

皆さんご存知のように、米国憲法修正第1条は政教分離を保障しています。すなわち、「連邦議会

し、または人民が平穏に集会し、また苦痛の救済を求めるため政府に請願する権利を侵す法律を制定してはならない」と明記されています。

ヨーロッパからこの国に移住した人々の圧倒的多数はキリスト教徒であることは間違いありません。彼らの多くは、母国の政府が連携しているものとは別の宗派や信仰を持っていたために宗教的迫害を逃れてきていました。このため、わが国の創始者らは政教分離という極めて重要な宣言をしたのです。

アメリカがこの基本的原則に従って行動しないこともたびたびありました。公共政策と広く浸透している慣わしのために、多くはムスリムであるアフリカ人奴隷が自分たちの宗教の教えを実践することを奴隷所有主らは禁止しました。アメリカン・インディアンやファースト・アメリカンとも呼ばれるアメリカ先住民が彼らの言葉を話すと、民事裁判で罰せられました。当然ながらその言葉は神との対話に使うものでもありました。政府の政策の一環として彼らの子供たちの多くは部族から引き離され、「文明化」のためにキリスト教の学校で教育を受けました。その後、アメリカ全土の学校で授業時間の始まる前に子供たちが先生と「主の祈り」を暗唱するようになり、1950年代まで続けられました。地方によってはもっと後まで行われていました。

つい最近の大統領選挙戦では、ブッシュ大統領とケリー上院議員の信仰や宗教的信条が利用・悪用されました。選挙運動期間中に見られた政教分離のひどい違反行為の一つは、ブッシュ・チェイニー陣営が支持者たちに教会員名簿の提出を求めたことです。名簿を利用して会員に接触し支持を求めるためです。これは権利章典に違反しているという批判の声があがりましたが、謝罪の記事やこのやり方をやめろという記事は目にしませんでした。これは、ブッシュ大統領とその政権に対する宗教右派の影響の強さを物語る数多くの事例の一つにすぎません。事実、2000年と2004年の大

統領選挙においてブッシュ大統領に対する支持のかなりの部分は宗教右派から集まったものです。

もう一つの困った事例は昨年起こりました。アラバマ州最高裁判所のロイ・ムーア元裁判長が「モーセの十戒」を記した大きな石碑を夜中に運び入れ、裁判所入口の非常に目立つ場所に設置したのです。その後、彼は石碑の撤去を求めた連邦地裁の命令を拒否したために罷免されました。

宗教右派の影響力が大きいので、そのリーダーと支持者たちは大胆にもアメリカは「キリスト教」国家という神政国家であると宣言したいと考えています。しかしながら、そのような影響力は世界で最も宗教的に多様な国を形成するうえで重要な役割を果たしてきた政教分離の原則を蝕んでもいます。また、宗教対話協議会が「異なる集団間の理解と協力を促進する最大のチャンスを持つ社会の基盤である宗教的多元主義の原則の尊重」と訴えているものに明らかに反しています。

このような宗教的多元主義の尊重という原則のもとで、アメリカは世界で最も多様性のある国として繁栄し、アメリカ国民は自分自身の信仰を深めるとともに他の人々の信じる宗教に対する理解を深めていくでしょう。

政教分離に関する主な情報源としては、アメリカの政教分離監視団体Americans United for the Separation of Church and State(www.au.org)を利用した。このホームページからアクセスできるウェブログには、政教分離侵害の最近の事例がたくさん掲載されている。





イスラームの歴史的側面 —アフリカ系・アメリカ人の経験から—

フェローシップ・オブ・リコンシリエーション
イブラーヒーム・レイミー
Ibrahim A. Ramey

慈悲ぶかく、慈愛あまねきアッラーの御名において。

本日は、ここ京都の地にお招きいただき、日米で宗教対話を促進されている第一線の研究者、宗教家、並びに指導者の皆さまにお目にかかれたことを光栄に思います。この意義深い会議を開催され、私たち遠来の参加者をあたたかく迎えてくださった森孝一教授、バーバラ・ブラウン・ジクムンド教授はじめ、一神教学際研究センター及び同志社大学で活躍されている数多くの方々に対し、アミール・アル・イスラーム (Amir Al-Islam) 教授、宗教間対話のための世界ムスリム会議 (The World Conference of Muslims for Interfaith Relations)、並びに平和と正義そして宗教間の対話と協働のために力を合わせて行動しているアメリカのイスラーム団体に代わりまして、心から「ありがとう」の気持ちをお伝えいたします。この集まりを契機として、日本はもとよりアメリカでも同様の話し合いの場が持たれることを切に希望いたします。この思いはイスラーム社会全体の願いでもあります。アメリカでは宗教間対話だけでなく宗教内対話のあり方を、理論、実践の両面から見直すことが火急の課題となっているからです。「アメリカ帝国主義」的ともいべき流れが拡大し、また片やアメリカの社会秩序を形成し、片やその秩序に逆らい、これを変革しようという力の土台となっている宗教勢力と宗教的アイデンティティーが衝突している現状を目の当たりにするにつけて、こうした見直しの緊急性がますます強く実感されます。

言うまでもなくイスラームは、その起源をアブラハムに遡る三つの一神教の一つです。ただムスリムは、ユダヤ教徒、キリスト教徒という「啓典の民」に神学的関係性はあるものの、アメリカの歴史と文化の中では、そのいずれとも全く異なるポジションを占めています。歴史、人種、階級、地政学の視点からこうした違いを検証してはじめて、ウンマ (イスラーム共同体) が直面している根本的な課題、そして内的変化と幅広い社会変革のために私たちがなすべきことの全容が、ムスリムだけでなく、非ムスリムの前にも開けてくるのだと思います。

そこで、アメリカのムスリムをめぐる基本的な疑問、そして宗教間対話と市民社会における他宗教との関わりの中で頻繁に表面化する誤解を幾つか取り上げ、私なりの分析と視点を交えて、簡単に考察を加えてみたいと思います。

皆さまお分かりのように、ムスリムについてまず出てくる疑問点には次のようなものがあります。アメリカにおけるイスラームの歴史とは。ムスリムはどこから来たのか。また何者なのか。私たちムスリムがアメリカ社会で疎外されているのはなぜなのか。

後世の歴史には「ムスリムは2001年9月11日の同時多発テロ前後にアメリカで『発見』された」あるいは「アメリカにおけるムスリムはほとんどアラブ人ばかりである」という誤った記録が刻まれるかもしれませんが、もちろんこれは間違いです。ここで、アメリカにおけるイスラームの歴史を振り返り、これまで往々にして蔑ろにされ、ときには抑圧されてきた二つの事実を検証したいと思います。

なお私がここで歴史に注目するのは、歴史とはどの民族にとっても神聖な記憶であり、また全人類の「今」を形成する土台となるものだから、ということもありますが、それよりも、歴史を理解しなければ、今の言葉でいう相互理解を育むことができないから、ということが大きな理由となっています。

最初に申し上げたいのは、「アメリカ社会にとってムスリムは新参者でもよそ者でもない」ということです。西半球にムスリムが初めて姿を現したのは、クリストファー・コロンブスの侵略よりも182年ほど早い、14世紀前半のことでした。アフリカ、マリ帝国のムスリムが、200隻ほどの大型海洋船を連れ、いわゆる「新世界」を目指す冒険に乗り出したのがそもそもの始まりです。現在のメキシコに上陸したムスリムは、現地のアメリカ原住民と幅広く交流を深めました。ところがほとんどの教科書は、コロンブス以前にアフリカ人ムスリムが北米に存在したという事実にもまったく触れておらず、またこの事実がアメリカ史の逸話として語られることもありません。しかし、Ivan Van Sertima博士、故 John Henrik Clark博士、Yosef Ben-Jochanan博士など、新世界に連行されたアフリカ人を先祖に持つ一級の歴史学者たちは、この事実を裏付ける研究成果を多数残しています。

黒人でありかつムスリムであった冒険者たちが、堂々たる船と高度な航海技術を駆使して大海を横断し、アメリカの原住民と平和的に文化交流を深めたという事実からも、イスラーム及びアフリカ社会が高い「文明」を持っていたことは明らかであり、「大西洋奴隷貿易が始まる以前のアフリカは未開の地であった」あるいは「一神教であるイスラームはアメリカ史において何ら重要な役割を果たさなかった」という通説が誤りであることが分かります。(ちなみに、アメリカ原住民の一部がアフリカからやって来た冒険者たちからイスラームの信仰を取り入れたとする説にもしっかりと裏付けがあることを付け加えておきます。)

次に二つ目の史実ですが、これは「ムスリムが南北アメリカ大陸に存在していた」という一つ目の事実との関連で、是非とも触れておかなければならないことです。それは、大西洋奴隷貿易によりヨーロッパ人がアメリカに連れてきたアフリカ人の中に、ムスリムが混じっていたということです。ハーワード大学のスレイマン・S・ニャン (Sulayman S. Nyang) 教授はじめ、一部の歴史家は、奴隷として連れてこられたアフリカ人の少なくとも一割、おそらくそれ以上がムスリムだったとする説を唱えています。その中にはアラビア語の読み書きができ、ハーフィズ (クルアーンを全部暗唱できた者) の称号を得ていた者もいたといひます。

奴隷を所有していた白人は、躍起になって奴隷の中からイスラーム的な思想や習慣を一掃しようとしました。またキリスト教の信仰が奴隷たちの間に浸透するにつれて、アフリカ人のコミュニティーでは徐々にイスラームが衰退してゆきました。しかしそれでもアフリカ人奴隷の中には、厳罰はもとより、ときには死を覚悟してまで、かたくなに信仰を守り通した者がいたのです。南部に古くから残る黒人の墓地では、今日でも人間の両手が刻まれた墓石を見ることができます。片方の人差し指が天に向けられているのですが、これはシャハーダという信仰告白の印で、「アッラー (神) の他に神はなく、ムハンマド (彼の上に平安あれ) はその使徒である」という意味がこめられています。

アメリカにおけるイスラームの存在と歴史の重みを物語る史実はもう一つあります。これは、20世紀に入って激化したアフリカ系アメリカ人の急進的な団結・開放運動の一環として考えた方がよいでしょう。

こうした運動の中でも、Noble Drew Ali率いるムーアリッシュ・サイエンス・テンプル (The Moorish Science Temple) と、イライジャ・ムハンマド (Elijah Muhammad) のネイション・オブ・イスラーム (The Nation of Islam) の二つについて言えば、その原動力となったのは、クルアーンやい



わゆる「正統イスラーム」への深い帰依ではなく、運動の支持者が直面している神学的、精神的、及び物質的状况を、キリスト教徒を中心とするアメリカ社会のあり方とは異なる方法で変革しなければならない、という強い信念でした。

こうした宗教運動は、「反抑圧」闘争とも呼ぶべき方向に拡大を遂げ、アフリカ系アメリカ人に対するヨーロッパ的キリスト教社会の支配と、アメリカにおけるあからさまな白人優位に反旗を翻すものとなりました。彼らがとくに重点を置いたのは、清廉な人格、経済的自立、女性を守り、尊敬するという家族法の遵守、イスラームの教えをベースにした社会と学校の設立でした。またこうした運動が契機となり、何万人ものアフリカ系アメリカ人が、地球上であまねく実践されているイスラームの信仰に向けて、足を踏み出しました。

ただこのような歴史的背景があったとはいえ、アフリカ系アメリカ人だけがアメリカ社会で豊かなイスラームの歴史を築き、その実践に当たってきたということではありませんし、アフリカにルーツを持つムスリムが、ただただ抑圧に苦しんできたというわけでもありません。またアフリカ系アメリカ人だけが、他のムスリムとかけ離れた体験をしてきたというつもりもありません。

イスラームの信仰は複雑で、驚くほど豊かであり、兄弟・姉妹格のユダヤ教やキリスト教と同じように、その歴史は紆余曲折をたどり、喜びと絶望、抑圧と勝利、成功と失敗を繰り返してきました。ただアメリカのイスラーム社会では、人種差別と経済的抑圧、それに排外主義と宗教的支配が大きく影を落としていました。そしてこの事実に向き合わない限り、私たちの複雑な体験を理解することはできないのです。

加えて、イスラームと他の宗教との絆を深め、尊敬と協力関係を構築するためには、今やアメリカにおけるムスリムの四割以上を占め、アメリカのイスラーム社会で最大の人種／民族グループを形成

しているアフリカ系ムスリムのたどってきた道程を、包括的なアメリカ・イスラーム史、そしてアメリカ史そのものの中で検証し、その中心に据えることが必要です。

軍縮と世界平和を訴える活動家として私は、多民族が平和に、互いを尊重して共存することこそが、人類の前進の原動力になることを強く実感しています。私たちは皆、自らの宗教的アイデンティティを根本から見直さなくてはなりません。そして他の宗教に対してもっと心を開き、その信仰ために力を尽くすと共に、これを愛する気持ちを持つことが大切です。またムスリムとしては、排外主義とそこから発するすべての問題を徹底的に根絶しなければなりません。現にクルアーンにもこう書かれています。「(いと高き、偉大なる)アッラーが人間を異なる部族と国に分け給うたのは、憎しみ合うためではなく、互いを知るためである」。

アメリカ、そして世界中の一神教社会が、民族の違いを越えてお互いのために尽力し、相手を尊敬し、融和をはかるためには、その多様な歴史と、それぞれの宗教が歴史の中で経験し、克服してきた数々の不正についてしっかりとした認識を持たねばならない、ということを最後に申し上げたいと思います。私たちが、人類が共有する歴史と、その信仰のあり方をきちんと理解したときこそ、平和と正義、そして人類の連帯を乗せた新たな「箱船」を築こうというこの高邁な試みが、大きな前進を遂げるときなのです。

この箱船の構築に向けて献身的な努力を捧げておられる一神教学際研究センター並びに同志社大学の皆さまに対し、宗教間対話のための世界ムスリム会議並びに関連団体を代表しまして、お礼申し上げます。創造主のお導きにより、私たちの心と知性が、この変革への道程に向けて開かれますように。そして千の御仏が、その光で私たちの進む道を照らしてくださいますように。

ありがとうございました。

福音派にとってのアメリカ社会の問題点

「社会行動を求める福音派」／イースタン神学校

ロン・サイダー
Ron Sider

米国の文化と社会の中でも福音派キリスト教徒にとってとくに次の二点が大きな問題となっています。

- 1) 消費主義、物質主義、金銭および貧しい人々に対する態度
- 2) セクシュアリティ、家庭、結婚

このいずれにおいても、大衆文化と聖書の価値観が大きくかけ離れていることが、問題の多い公共政策を生み出す原因となっています。

I. 消費主義、物質主義、富、貧しい人々

(強烈な広告活動によって大々的に作り出される)大衆文化は次のようなメッセージを伝えています。「喜びと幸せを手に入れるには、富を蓄え、物質的に豊かになることだ。貧しい人たちのことなど気にかけることはない。彼らは怠け者で、無責任なことをしているから貧乏なのだ」。また以前、私の取引銀行は次のような広告を掲載していました。「少しの愛を蓄えておきなさい。誰にだって困ったときの備えは必要です。だから少しの愛を蓄えておきなさい。」これは大嘘です。

こうした考え方は、「喜びと幸せは、神、人、そして土地との正しい関係によって作られる」とする聖書の教えの対極にあるものです。このうち土地との正しい関係というのは物質的な豊かさを指しますが、もっと大切なのは、神および隣人との関係の方です。聖書には、神が貧しい人たちのこと

を気にかけておられ、経済的正義を求めておられるという記述が繰り返し出てきます。神は、私たちが底辺の人たちをどのように遇するかによって、その社会の善し悪しを判断されるのです。

しかし、メディア(ハリウッド、テレビ、ラジオ、社会に蔓延する広告)には恐るべき力があります。メディアは自己中心的な物質主義と個人主義的消費主義を増大させ、貧しい人々を蔑ろにする風潮を作り出すと同時に、「富の福音」のようなおよそ神学とはかけ離れた発想さえ生み出しています。

残念なことですが、平均的な米国のキリスト教徒はこうした風潮にすっかり染まっています。教会への献金が収入に占める割合は、この30年で3.2%から2.6%にまで落ち込んでしまいました。しかもこの間キリスト教徒の収入は倍以上に増えているのです。平均的な米国のキリスト教徒は、富と貧困についての聖書の教えを理解できていないのです。

こうした事情が今日の公共政策に大きな陰を落としています。

- ・対外援助：米国政府の対外経済援助額は、G NP比に換算して先進工業国中最低です。
- ・国内問題：米国の貧困レベルは先進工業国中トップです。また全ての国民に健康保険制度を適用していないのは先進工業国の中でも米国だけです。

残念なことですが、為政者には、公共政策に「貧しい人々を心にかけてよ」という聖書の教えを盛り込むつもりはないようです。

II. セクシュアリティ、家庭、結婚

歴史的キリスト教は「結婚とは一人の男と一人の女が生涯にわたって交わす契約である」とはっきり述べています。つまり男女は結婚するまで肉体関係を持つべきではないのです。ところが大衆文化は、金銭、富、貧者への対応と同じように、ここでも聖書の価値観とその伝統的な教えを真っ向から否定しています。

伝統的価値観を否定する風潮が強まったのは1960年代のことです。婚外交渉がまかり通るようになり、またハリウッドがそうした男女関係を美化してその傾向を助長しました。離婚と片親家庭がライフスタイルの一形式として社会に認められるようになり、離婚率と婚外出産率はうなぎのぼりに増大しました。今では既婚者の二人に一人が離婚し、米国の子どもの31%が片親家庭に生まれています。こうした風潮は子どもに計り知れない悪影響を及ぼしています。

これに関連するのが、一般市民と同じ社会的権利を得るために同性愛者が根強く展開している運動ですが、実はこれはそれほど重要な問題ではありません。この運動の背景にはハリウッド、メディア、主要各紙の強力なバックアップがあり、ニューヨークタイムズ紙などは、これが一流紙でなければ冗談としか思えないような偏った記事を掲載しています。ただし米国で結婚率が低下しているのは同性愛者の運動のためではなく、結婚の誓いを守れない人が増えていることが主な原因です。福音派教徒の間でさえ、離婚率は世間並に高まっています。

ここでも、大衆文化の力が公共政策に反映されています。1960年代後半から70年代にかけて、破綻主義的離婚法(no-fault divorce laws)(この法律には、たとえ子どもがいる場合でも、両親に離婚を思いとどまらせるような効果はありません)が国内で次々と導入されました。最近ではこうした風潮のマイナス面が表面化しつつありますが、公立学校で純潔教育を強化したり、二親のそろっ

ている家庭に減税を適用したりする措置を導入したくても、公共政策の軌道修正さえままならないのが現状です。

先の米大統領選からもお分かりのように、今米国では同性愛者の結婚の問題が大きな注目を集めています。ちなみに私は婚姻修正案(The Marriage Amendment)を支持しています。しかし同性愛者の市民権や結婚をめぐる問題よりももっと大切なことがあります。二親がそろった健全な家庭を社会に取り戻し、子どもたちが生みの親と暮らせるようになるためには、公共政策はどうあるべきか、そして教会やシナゴークやモスクはどのような活動を展開すべきなのか、ということです。

政教分離

ベツ・シャローム・ユダヤ共同体
ミラ・ワッサーマン
Mira Wasserman

先頃行われた米国大統領選挙は、米国を真っ二つに分裂させました。世間では数々の政治問題が話題にのぼりましたが、その背景には米国の二大陣営間のいわゆる「文化戦争」がありました。民主党と共和党、左派と右派、「メトロ」と「レトロ」、そして「赤の州」と「青の州」の対立と言い換えてもいいでしょう。こうした対立を見ていて私が一番興味深く感じたのは、一般の米国人は(どちら側の陣営にいても)、「神及び宗教は右派に属している」という共通認識を持っているということです。米国の保守派政治家が信心深い人々の代弁者をきどるケースが増えていますが、私たちリベラル派ユダヤ教徒はそのたびに不安とストレスを大きく募らせています。

政治、社会福祉、公教育といった市民生活の場に宗教が持ち込まれることは、米国のユダヤ教社会を揺るがす最大の脅威であると私は考えています。これは万事において言えることです。こうした問題の一部は重大な象徴的意味を持つ政治論争にまで発展し、最近ではその是非が法廷の場で争われるケースも出てきています。たとえば、「under God」という文言が入った忠誠の誓いを公立学校の生徒に唱えさせてもいいのか。あるいは十戒の言葉を米国の裁判所に掲出したりすることは違法行為に当たらないのか。また特定の宗教・信条を掲げる学校や慈善事業に対して公的資金援助を行うことを合法化しようとする動きも見られます。ブッシュ大統領の信仰に基づく施策や、学校券制度などです。中絶の権利、同性愛者の権利、

女性の権利、幹細胞研究への資金提供といった市民生活にかかわる問題も、米国の保守派政治家によって宗教的枠組みの中で取り上げられることが増えてきています。

先の大統領選ではユダヤ人の75%がジョン・ケリー候補を支持しました。これまで政治と宗教を分け隔ててきた壁をブッシュ大統領が壊そうとしているのではないかと懸念が米国のユダヤ人の間で広まり、反ブッシュへの動きにつながったのです。後に米国憲法の修正条項となった権利章典には「連邦議会は、国教を樹立し、あるいは信教上の自由な行為を禁止する法律を制定してはならない」と明記されています。宗教の自由を保証しているこの条文のお陰で、ユダヤ人とユダヤ教は、過去2000年、どの土地よりもここアメリカ合衆国で繁栄を享受することができたのです。政教分離政策があればこそ、私は米国国民として平等な扱いを受け、ユダヤ人社会は心おきなく宗教生活を送ることができているのです。十戒は私の生活、そしてユダヤ教徒の生活の土台となる伝統であり、その文言は私のシナゴークに高らかに掲出されていますが、私は先に述べた理由から、公共の建物に十戒を掲げることには反対です。

十戒はたまたま、米国人の大半を占めるキリスト教徒とユダヤ教徒が共有している教えですが、それでもこれは特定の宗教の教義であり、すべての米国人に受け入れられているわけではありません。私の信仰を公の場で他の人たちに押しつけるということは、他の米国人の社会参画を疎外す



る行為であり、ひいてはマイナーな宗教の信者や無宗教派の人たちが私たちと対等な国民ではないと言うに等しい行為です。確かに、「十戒はごく一般的な道徳を説いているにすぎず、その意味するところは大変広いため、誰かを疎外するような心配はない」という意見があることも知っています。しかし十戒の言葉を一般的なありきたりなものにしてしまおうという動きには、私はとても賛同できません。私にとって十戒とは単なる道徳論ではなく、ユダヤ人と神の一度の契約から生じた特別な宗教的義務に他ならないからです。「十戒の内容は今ではごく一般的な意味に解釈されており、どの米国人にも違和感なく受け入れられている」ということは、十戒の宗教的な力を損ない、神の啓示としての神聖性を蔑ろにする行為です。この十戒の一件からも、もし私たちが政治と宗教の一体化を許せば二重の危険が生じることは明らかです。私たちが国民として持つ政治的権利が脅かされると同時に、私たちが培ってきた宗教的伝統の一体性が損なわれることになるからです。つまり政治と宗教を分離することは、宗教の神聖性と一体性を守ると同時に、米国民としての平等と権利を守ることでもあるのです。

先の大統領選に先立つ数週間、二人の候補者の対立は、「信仰」と「理性」、「宗教」と「科学」、「伝統」と「変革」の対立であると盛んに言われていました。最近のニューヨーク・タイムズにも次のような記事が掲載されています。「ブッシュ氏の世界では、信仰に価値が置かれており、疑問を持つことは敵を力づけることだと考えられており、信念が自由を拡大する力と同じ意味を持っている。」一方「ケリー氏の世界では、常識に価値が置かれており、疑問はときに答えと同じくらい重要であると考えられており、信念は頭から否定され、問題になることさえない」(ロジャー・コーエン記「熱い信仰と深い知性の対立」、Roger Cohen, “Ardent Faith Squares Off Against Earnest Reflection”、

2004年10月24日)。私のようなユダヤ教徒の目には、このような二項対立的図式は見当違いなものに映ります。なぜなら私たちの信仰には疑問がつきものであり、また私たちは人間の理性は神からの贈り物であると考えているからです。ブッシュ大統領とその支持者たちは、大統領が祈りを支えとし信仰を重要視していることを盛んに喧伝し、大統領の政策や決定があたかも神の意志の現れであるかのような印象を与えようとしています。一方、反大統領派の急先鋒たちは、大統領に信仰について語らせるだけ語らせた上で、その決定や政策を批判し、「信仰や祈りが国民の指導者を啓発し、その仕事に力を与える」という考えを否定しています。ここでもリベラル派ユダヤ教徒は二重の重荷を背負わされています。今日の社会が宗教を緊急に必要としていることを肯定した上で、次に宗教が違えば神の求めるものも大きく違ってくることを説明しなければならないからです。

信仰を持つ人たちの中でも、同性愛者に結婚や市民権を認めることは社会の道徳に反する行為であり、聖典を真っ向から否定することであると考える人もいれば、同性愛者の権利獲得のために闘うことは「全ての人間は神の姿に似せて創られた」という聖書の教えに根ざす思いやりと正義の実践であるとする人もいます。また女性に中絶する権利を認めることは、神から贈られた命を抹殺することであると主張する人もいれば、神の眼の前ではすべての人命が絶対的な価値を持っていることから、これから生まれる胎児の命よりも、母体の命を優先するのは当然であるとする人もいます。こうした意見の衝突は、宗教的価値観と悲宗教的価値観の対立ではなく、教義の内容の相違に起因しているのだと思います。

私が奇異に感じまた残念に思うのは、一般的に宗教に関わると目されている社会問題が個人の選択の範囲を出ないものばかりであり、社会や国の責任を問われるものがあまりないということです。

昨今米国の政界では宗教論争が花盛りですが、その範囲はいずれも個人の信心や信仰のレベルにとどまっており、国家問題にまで発展することがありません。宗教的問題に区分されるのは、同性愛者の権利や中絶や医療研究などであって、戦争、平和、貧困、正義、教育などではないのです。これはここ数年来米国の政治と宗教をめぐるパラドックスとなっています。米国の最高権力者たちの話を聞いていると、宗教の存在が個人的でささいなものに思えてくるからです。

聖書に登場する預言者たちは、権力者に真実を語るという伝統をうち立て、宗教をもっと大きなスケールで実践しました。公道を水のように、正義を大河のように流れさせよ。水が海に満ちるがごとく、神の叡智をあまねく地上にあふれさせよ。これは、政治の世界ではすっかり息を潜めてしまった信仰表現です。なぜならこの表現の力は、怒りと正義に満ちた非難の声として、外部からわき出てくるものだからです。またこれは、貧しい者、弱い者、虐げられた者への信義を守り、正義と慈悲というはかりの上で全ての指導者を裁くことを意味しています。イザヤ書の中で、ことさら信仰心を見せつけようとする者に対し、神は次のように語っています。「私が選ぶところの断食は、悪のなわをほどこき、くびきのひもを解き、虐げられる者を放ち去らせ、すべてのくびきを折るなどのことではないか。また飢えたる者に、あなたのパンを分け与え、さすらえる貧しい者を、あなたの家に入れ、裸の者を見て、これに着せ、自分の骨肉に身を隠さないなどのことではないか」(イザヤ書58章5〜7節)。

結局のところ、政教一体化の一番の弊害は、信仰の自由が脅かされることではなく、宗教者が権力者にノーと言えなくなることなのです。



The InterFaith Conference of
Metropolitan Washington (IFC)
STATEMENT ON PROSELYTIZATION

Approved March 16, 1987

One of the founding principles of the InterFaith Conference of Metropolitan Washington is the respect and legitimacy accorded to each of the faith communities that make up the InterFaith Conference (IFC). Our ability to sit together, to dialogue and to cooperate in the enterprise of improving the quality of life for all in our area takes place even as we recognize that we adhere to different faith traditions.

Every faith group has a particular vision of the Divine Truth which it feels is unique. Some faith communities feel that it is a part of their mission to share that Truth with others, not of that tradition. We do support the right of all religions to share their message in the spirit of good will. It is inappropriate, however, for one faith group to openly demean or disparage the philosophies or practices of another faith group as part of its proselytizing. Proselytism that does not respect human freedom is carefully to be avoided. Proselytism must be done with a sense of humility and a respect for others.

It is not for the IFC to pass judgment on the legitimacy of groups who rally around a particular ideology or theology. There are people who draw spiritual sustenance from religious groups that span the spectrum from radical humanism to the cult of personality. We do, however, feel compelled to speak out when a religious group promotes or sanctions activities that are harmful to the spirit of interreligious respect and tolerance. We condemn proselytizing efforts which delegitimize the faith tradition of the person whose conversion is being sought. Such tactics go beyond the bounds of appropriate and ethically based religious outreach.

[Examples of such practices are those that are common among groups that have adopted the label Hebrew Christianity, Messianic Judaism or Jews for Jesus. These groups specifically target Jews for conversion to their vision of Christianity, making the claim that in accepting Jesus as the savior/messiah, a Jew “fulfills” his or her faith. Furthermore, by celebrating Jewish festivals, worshipping on the Jewish Sabbath, appropriating Jewish symbols, rituals and prayers in their churches and, sometimes, even calling their leaders “Rabbi,” they seek to win over, often by deception, many Jews who are sincerely looking for a path back to their ancestral heritage.]

Deceptive proselytizing efforts are practices on the most vulnerable population—residents of hospitals and old age homes, confused youth and college students away from home. These proselytizing techniques are tantamount to coerced conversions and should be condemned.

The United States has been largely free of the religious rivalries that scarred the life of Europe for centuries. Consequently, we, the leaders of the Islamic, Jewish, Mormon, Protestant and Roman Catholic faith communities in the greater Washington area, under the aegis of the InterFaith Conference of Metropolitan Washington, urge all religious denominations and sects to respect the principles of religious pluralism as the foundation of a society that has the greatest chance of fostering intergroup understanding and cooperation. *[The Baha’i, Hindu, Jain, Sikh and Zoroastrian traditions affirmed this upon joining.]*

コメント・ディスカッション

司会：バーバラ・ジクムンド
(同志社大学大学院アメリカ研究科教授)

【司会】 発表者の皆さま、ありがとうございました。お陰で時間通りに進行することができました。ここであと10分間お時間をいただいて、8件の発表に対する二人の方のコメントをうかがいたいと思います。皆さまにはご自分のコメントと質問をメモしてくださいようお願いいたします。その後短い休憩をはさんで、これまでの発表について意見交換をしたいと思います。

コメントをいただくのは、同志社大学神学部で教鞭を執っておられる先生方で、お二人とも一神教学際研究センター(CISMOR)に深く関わっておられます。八人の方の発表について、5分間で簡単なコメントをお願いいたします。もちろん何もかもカバーするわけには参りませんので、内容を選んでコメントしていただくことになりますが。

では越後屋先生からお願いいたします。

コメント：越後屋 朗
(同志社大学大学院神学研究科教授)

「アメリカの社会、公共政策はあなたの宗教にいかなる問題を引き起こしているのか」という問いに答える形で、アメリカからの8名の参加者のかたがたから非常に興味深い発表をしていただき、多くのことを学ぶことができました。ありがとうございました。ただ、これから5分という短い時間ですべての発表についてコメントすることは無理です。特に私にとっては非常に大変な仕事で、このセッションのテー

マにはアメリカの宗教、公共政策とありますので、最近のアメリカ社会にとって最も重要な出来事であった先週2日、火曜日に行われたアメリカ大統領選挙と関連させて少し話したいと思います。

予想ではもっとアメリカ大統領選挙の話が出るのではないかと考えていたのですが、思ったほど出ませんでした。選挙が終わってまだ2週間というときですから、こういう機会に大統領選と宗教を絡めて話すことは非常に重要なことだと考えております。ただ最後にワッサーマン先生が大統領選挙のことについて深く踏み込んで話していただいたので、こちらとしましては非常にほっとしております。

日本でもアメリカ大統領選挙はもちろん大々的に報道されました。ニュースの中では、ブッシュ、ケリー両候補の州別獲得地図がよく出てきました。ブッシュ陣営の赤、ケリー陣営の青に塗り分けられた地図です。そのとき初めて私はブッシュ候補の属する共和党のシンボルカラーが赤で、ケリー候補が所属する民主党のシンボルカラーが青であることを知った次第です。

そして、あるニュースの中で、レッド・アメリカと、ブルー・アメリカという言葉が使われていました。現在アメリカにはレッド・アメリカとブルー・アメリカという二つのアメリカの対立があるというのです。面白いことにこの対立は生活習慣にまで及んでいて、冗談のような話ですが、レッドはバーベキュー、ブルーはすしを好むという解説がそのときされました。

2日の投票日にアメリカのマスコミが共同で実施した出口調査で、投票に際して最も重要な論点としてトップに上がったのは、皆さんもご存じのとおり、モラルバリュー（倫理観）で22%、次いで経済・雇用が20%、テロ対策が19%でした。ちなみにイラク問題は15%ということであったわけです。

この出口調査から分かることは、二つのアメリカという分裂、あるいは対立において、そういうものがあるとすれば、倫理観の違いが極めて大きな要因となっているということです。倫理観というのは極めて個人的なことからであり、それは同時に宗教、信仰と密接に結びついています。今回の大統領選では、このセッションでも出ましたように、具体的な倫理問題として同性婚や妊娠中絶などがテーマとなりました。アメリカの国民は候補者を選ぶ際に候補者との倫理観の共有が非常に大事な要素になっているといえるのかもしれませんが、多様な背景を持っている人々から構成されるアメリカにとって、個人の信教の自由を守りながら、アメリカを一つの国家として統合していくことが、アメリカ建国期以来、最も重要な課題でした。そうしたアメリカにおいて、この倫理観、倫理問題に関する分裂、対立がどのような意味を持つのか、これについては大変関心があります。

そして、宗教とは何も倫理だけを扱うものだけではありませんが、具体的な倫理問題が前面に出て、それを巡る対立がアメリカにおける今後の宗教の在り方に大きな影響を及ぼすのではないかと、今回の大統領選の報道を通して私は感じました。

それはすでに大きな問題として実際にアメリカでは起こっているようです。例えば、ジョージタウン大学のボレリーさんの発表の最後のほうで、「倫理の問題に関して、今日アメリカの国民は分裂している」「カトリック信者も同様に分裂しているといえると思う」と話されました。カトリック信者は今回の出口調査ではブッシュ支持が52%、ケリー支持が47%とほぼ半々に分かれていると。こういう状況

でカトリックというのは一体になれるのかということです。アメリカの社会における倫理観、倫理問題への関心、そして倫理観の重視が必ずしも問題を引き起こすものだとはいえませんが、現在のアメリカの宗教にとって重要な課題となっていることは確かだと思います。

さらにこのことは政教分離の問題とも関連しています。政教分離の問題についてはこれからあとのディスカッションの中でも具体的に話されるのではないかと思います。私としてはこのセッションBの中でアメリカからの参加者のかたがたから、さらに倫理観、倫理問題についてのご意見を聞かせていただければと思っています。特にこの倫理問題が宗教観の対話にどのような影響を与えるのか、これについて特にお教えいただきたいと思っています。ありがとうございます。

【司会】 ありがとうございます。では次にアダ・コヘン先生にコメントをお願いいたします。先生はユダヤ教学とヘブライ語を教えておられます。

コメント：アダ・コヘン
(同志社大学大学院神学研究科助教授)

先日短期出張で米国へ行ってきたばかりなのですが、シカゴ大学のキャンパスで多様性の広がり強く実感いたしました。肌の色や話す言葉、さらには背景にある文化や信条を異にする人たちが共に暮らし、研究と創作にいそしんでいる様子に触れ、平和共存は大きな夢ではあるけれども、地球に暮らす私たちにとって実現可能なことなのだという思いを強くいたしました。あるときなど三大一神教の子孫が連れだって1989年の東ドイツ崩壊を描いた映画を見に行き、英語、スペイン語、ドイツ語、ギリシャ語、ヘブライ語を交えて感想を述べ合ったこともありました。

大学のキャンパスは社会の縮図ではないという意見もあるかもしれませんが、米国人の多くは現

実にこのような社会生活を送っています。米国はこうした多様性が現実のものとなる場所なのです。

米国ではキリスト教徒やユダヤ教徒と知り合いになりました（まだムスリムの知り合いはいませんが）。このセッションで取り上げられているテーマについてこうした人たちの意見を聞いたところ、とても興味深い回答が返ってきました。いずれの回答も現在の米国社会の姿を的確に映し出していると思います。その回答をご紹介します上で、米国の信教の自由を脅かしていると思われる諸問題について、ざっと私見を述べたいと思います。

質問に答えてくれたユダヤ教徒の人たちは年齢が40代から70代で、その回答は次の2点に集約することができます。1) 数十年前に較べると今は信仰のために差別を受けることがずっと少なくなった。米国社会は、ユダヤ教も含め他宗教に対してかなり寛大になっている。2) 子どもの教育の問題。

では実際のコメントを紹介しましょう。これはニューヨーク州北部に暮らす60代のユダヤ人女性からいただいたコメントです。この女性はユダヤ人が少ない地域に暮らしています。「30年、40年あるいは50年前ならば、米国のユダヤ教徒が日々の生活であからさまな宗教的差別を受けていた実態を自分自身の経験を交えてお伝えできたでしょう（私も「ユダヤ人立入禁止」と書かれた看板を見たことがあります）。公立の学校や学内集会では、全員がキリスト教の歌を歌われました。宗教的な迫害から逃げてきた移民のボートが岸で追い返される光景も目にしました。今は法律が整備され、監視機関が目や目を光らせて市民権を守ってくれているので、子どもたちが差別を受けることはなくなり、私自身も差別されていると感じることはありません。けれど差別は未だに社会のあちこちに潜んでいます。ただユダヤ教徒と他宗教の信者の結婚が増えていることが、宗教間の垣根を取り除くきっかけになっていると思います。」

60代のユダヤ人男性、Yaakovも次のように語

っています。「異なる宗教間の結婚が当たり前のようになっていますが、こうした事態は人口構成の上から問題だと思います。このような結婚から生まれる子どもがユダヤ教徒になる可能性はとても低いからです。一方で、こうした動きは米国社会が従来とは較べものにならないほど寛大に、ユダヤ教徒を受け入れていることの証でもあります。今では大変な数の米国人がユダヤ教徒の親戚を持っていますし、昔と違ってそのことが問題視されることもありません。また宗教間結婚が増加していることから、今後ユダヤ人がひどい差別を受けることはないだろうという意見もあります。」

ボストンに住む70代のHelaineはこう言っています。「確かにユダヤ人差別は今も世界中で生きていると思います。ただこれは公共政策の問題ではなく、人間の心のありようの問題だと思います。人の考え方を変えるのはそう簡単なことではありません。ただ今ではユダヤ人差別を厳しく監視し、抗議してくれる団体が存在するので、助かっています。」

しかし宗教的アイデンティティーを保つためには、祭日を祝うことも含め、宗教的儀式を継続することが必要です。私の質問に答えてくれた回答者の多くは、ユダヤ教徒もキリスト教徒も口をそろえて「米国はキリスト教国家だ」と言っていました。中でもユダヤ教徒の人たちが腹立たしい思いをしているのは、祝日の扱いをめぐる問題です。ニューヨークに住む40代の女性Ellenはこの問題について次のように述べています。「聖日を祝うために仕事を休もうと思えば、休暇を使わなくてはなりません。これには本当に困っています。キリスト教の祝日はたいてい国や学校の祝日に定められているのに。同じように、地元のサッカー委員会にロシュハシャナとヨーム・キップールの日には試合を入れないでほしいと申し入れたのですが、断られました。個人的にスケジュールを調整するのは構わないと言われたのですが。」別のユダヤ教徒の母親

も次のように言っています。「子どもたちが学校に通っているところは、ユダヤ教の祝日は正式な休みとは認められておらず、教師が祝日の翌日にテストの予定を入れることもありました。予定を変更してもらおうと、教師や校長とかけ合ったものです。」ただしこの女性は力を込めて次のようにも語っています。「最近ではユダヤ教の教えや儀式が復活しており、とても嬉しく思っています。米国社会が私たちの信仰の邪魔をしていると感じることはありません。未だにユダヤ教徒は少数派ではありますが、ユダヤ教の掲げる目的や理念——トーラーの学習や正義の実現、虐げられた人への共感と支援など——は、確かに民主主義社会を照らす一筋の光りとなっています。」

またこの点に関連して、Maryは仕事場での体験を次のようにつづっています。「先週、ボストンの聖約教会の地階にあるウイメンズ・ランチ・プレースでシフト勤務していたときのことです。これは住む場所のない貧しい女性が日中利用できる施設で、毎日100人ほどの女性に朝食と昼食を支給しています。このスタッフの一人にハーバード大学神学部（キリスト教の神学校です）の院生がいるのですが、ある日この院生が控え室で休憩しているときに、9月のチャリティー事業のお知らせを目にしてこう言ったのです。『この日はヨーム・キップールの日だ。祝日に地域の行事を入れるのはよくない。』そこにいたスタッフとボランティアもその意見に賛成し、次年度からはこの日を避けるよう申し送りをしよう、ということになりました。実はこの行事はこれまで何年もユダヤ教の祝日に行われていたのです。この度の申し送りにより、初めて日程が変更になりました。」Maryはこう締めくくっています。「人々は互いを尊重し、受け入れることの大切さに気づき、自分もそうありたいと願っています。一つの社会、一つの世界の実現に向けた期待が高まっています。」

次にキリスト教徒の知り合いですが、彼らはキリスト教の活動、とくにワッサーマンさんが取り上

げた政教分離の問題についてはさほど関心を持っていませんでした。ここに彼らから紹介してもらった記事があります。これはニューヨーク・タイムズ紙10月31日号に掲載されたもので、こんなタイトルがついています。「ミネソタ州オトセゴのリバービュー・コミュニティ・バンクでは、従業員が客と一緒に礼拝を行い、布教に努めている。オフィス付き牧師と職場の礼拝グループの出現を機に、宗教は次なる職場の問題となるのだろうか？」記事はミネソタ州の一銀行を取り上げていますが、この地域は「ミネアポリスのバイブル・ベルト」にはかかっておらず、どちらかといえば宗教に無関心か、リベラル寄りであると考えられていました。この銀行では従業員が客と礼拝を行っているというのです。目の前で両手を合わせて、じっとイエスに祈りを捧げています。これは合法的なことでしょうか。記事にはこう書かれています。「インテル（企業）ではムスリムやユダヤ教徒のグループが伝道を行うことはないが、キリスト教徒のグループは違う。多様性を推進している専門家はさぞかし頭を痛めていることだろう。」果たして単に頭の痛い問題にとどまるのでしょうか？

この点について、別の知り合いはこう述べています。「現政権下で私が深刻な問題だと思うのは、大統領が原理主義的なキリスト教的思想の信奉者であり、こうした思想を公共政策に織り込むのが正しいことだと考えていることです。」この意見には数人の知り合いが賛同しています。

今日米国のユダヤ教徒が抱える問題は、数年前とはすっかり様相を変えているようです。今大きな問題となっているのは、若い世代にユダヤ教徒としてのアイデンティティーを持たせるための教育のあり方です。Yaakovはこう言っています。「無料の公教育が問題です。公立学校は地域の固定資産税によって運営されています。ユダヤ教徒の子女にとって理想的な教育とは、高度な一般教育を行うと共に、高度なユダヤ式の教育を集中的に行

うユダヤ系の学校です。残念ながらこのような学校は授業料が大変高いため、親は税金以外の支出を惜しみ、子供を公立学校に通わせています。その結果いつまでたってもユダヤ式の教育ができずにいるのです。」

確かに教育問題は私にとっても長年の悩みの種でした。これがイスラエルであれば、公立の学校で教育を受けることによって、ユダヤ教徒としてのアイデンティティーを自然に育むことができるのですが。ユダヤ系国家に暮らすユダヤ教徒なのですから。ところが米国のような多様性の社会では、ユダヤ教徒の子女のために特別な教育プログラムを実施しなければなりません。ユダヤ教徒を増やすためではありません。ユダヤ教の伝統と遺産を次世代にて伝えて行くためです。

私は、1492年にスペインを追放されトルコとバルカン諸国に逃れてきたユダヤ教徒の子孫です。子どものころからユダヤ教の歴史を教えられ、その伝統を受け継いで育ちました。私は今でも、祖母から教わったラディーノ語を話すことができます。ラディーノ語というのはスペインの言葉で、ユダヤ教徒はスペイン追放後もこの言葉を使っていました。スペイン時代のユダヤ教徒にまつわる数々のエピソードも覚えています。これは私がユダヤ式の教育を受け、先祖伝来のアイデンティティーを受け継いできたためなのです。

およそ500年前にスペインを追放されたユダヤ教徒の子孫として、私は教育の大切さを身にしみて感じています。教育は自分自身のアイデンティティーを築くと共に、他人への思いやりを育むものなのです。

【司会】 お二人のコメンテーターにお礼申し上げます。大変難しいテーマでしたが、お二人とも見事にその役割を果たしてくださいました。ではここで7分間の休憩を取りたいと思います。17時30分から45分間意見交換を行いますので、言いたい

ことがある場合、あるいは誰かを指名して質問したり、一般的な質問をしたい場合は、ご自分の意見をまとめておいていただきますようお願いいたします。では7～8分間休憩に入ります。

ディスカッション

司会：バーバラ・ジクムンド

（同志社大学大学院アメリカ研究科教授）

【司会】 それでは、これから約1時間かけて本日の発表内容について意見交換をしたいと思います。なおセッションBだけでなく、セッションAについてのご意見も歓迎いたします。この場はたくさんのテーマを扱うラウンドテーブル式のフォーラムであり、きちんとした線引きはできませんので、色々なテーマをまとめて扱いたいと思います。

では本日の午後のテーマに関してご意見のある方、あるいは誰かに質問したい方や、全体的なことについて質問のある方はおられませんか。本当に長い一日ですね。富田先生。

【富田】 私はイランの研究をしています。ホメイニのイランです。サイダーさんのお話を聞いておまして、ホメイニの主張していることとだいぶ共通しているところがあるかなと思いました。例えば物質主義の批判、大衆が物欲に駆られて走っているという批判。それから、道徳と倫理が必要であり、また禁欲が必要であるということ。物欲を抑え、あるいは精神性を高めるために自らの物質的な欲望を制御しなければいけないなど、このようなことをホメイニは主張しております。

その辺はサイダーさんがおっしゃったことと非常によく似ているところがあるなと感じます。サイダーさんのおっしゃっている観点、私の考えでは、これは福音派の考え方を代表されているのかなと思うのですけれども、イランとアメリカの福音派のかた

がたがなぜ手を結ばないのか不思議だというぐらいによく似ていると私は感じました。
ところで……。

【司会】 サイダー先生、お答えいただいてもよいでしょうか？

【富田】 ちょっと待ってくださいね。まず、この点についてあとでコメントを頂きますけれども、私の質問はまだ全部終わっていません。

私の質問は、もしそういうふう到大衆が自らの欲望を満たすものを制御する、要するに禁欲を行うという場合には、それは強力な指導者が大衆の意向を制御するということです。基本的な民主主義の原則と果たして調和するのかと、こういう疑問が出てきます。これが私の質問です。

【司会】 ありがとうございます。サイダー先生どうされますか？

【サイダー】 ご質問にお答えしたいと思います。ありがとうございます。私はこれまでマルクス主義者だとか、そういった方面で色々な非難を受けてきましたが、イランのホメイニ師と共通点があると言われたのは初めてです。別に構わないのですが、ご質問にお答えするために、まず信教の自由と政教分離について定めた憲法修正第1条についてコメントしたいと思います。

その前に、民主主義の原則と物欲を制御することが調和しないのではないかという先ほどのご発言についてですが、私は国家が中心となって物質主義を抑制するための手だてを講じるべきだとは思っていません。宗教界、これは社会の別の側面ですが、市民社会においてこそ、物質主義を抑制するような教育を行うべきだと考えています。法律によって物質主義を抑制することもある程度はできるのかもしれませんが、それが主流に

なることはありません。

いずれにしても私は、米国憲法修正第1条、つまり信教の自由と政教分離についてもっと議論を深めるべきだと考えています。

最初に申し上げておきたいのは私の所属する宗派はメノナイト派だということです。この宗派は16世紀に宗教改革が起きたときに誕生しました。実は政教分離を初めて訴えたのがメノナイト派なのです。そのために何千人ものメノナイト派信者がカトリック教徒やルター派、改革派によって殺害されました。こうした歴史があるからこそ、私は憲法修正第1条に対してとくに大きな思い入れを持っています。と同時に、修正第1条が政教分離を定めているという解釈も大きな混乱を招く元だと思います。そもそも宗教と政治を分離することなど不可能だからです。本人がそのことを意識している方がいいですが、政治判断を下すときには誰も正義や人間の本質等に対する何らかの規範的価値観を基準にしています。そしてこうした規範的価値観は個人が心の奥底に抱く哲学的、宗教的理念に根ざしているのです。つまりムスリムもキリスト教徒も無神論者もヒューマニストも、最終的には誰もが宗教的な価値観を根拠に政治判断を下しているわけです。ですから宗教と政治を分離することは不可能です。私たちにできること、そして私たちがすべきことは、政府に対して国教樹立反対を訴え、全ての宗教を公平に扱うよう求めることなのです。

加えて、米国の福音派が神権政治を樹立する野望を抱いているとか、米国をキリスト教国家にしようと目論んでいるという憶測は、全くの杞憂であると申し上げておきます。確かに福音派の活動は多岐に渡るため、中にはそうした方向を目指そうとしているものもありますが、それはごく少数の信者に過ぎません。またJerry Falwellがときどきそのような発言をしていますが、Falwellが大多数の米国福音派を代表しているわけでは決してありません。ですから心

配はご無用です。

「信仰に基づく政策」についても同じことが言えます。この場にはこの政策に不穏なものを感じる方もおられるようですが、ブッシュ大統領は「信仰に基づく政策」を打ち出すに際し、これは機会均等を目的としたものだ、とはっきり述べています。この政策は、政府が非政府団体に何らかの社会的サービスを委託する場合（これは米国ではよくあることで、いくつもの非政府団体が社会的サービスを提供しています）、宗教団体にも等しく参入の機会を与え、宗教団体が優れたサービスを提供できるのであれば、公的資金でそのサービスを購入できるようにしようという主旨のものです。

Jerry Falwell や Pat Roberstonは、この政策には賛成だが、公的資金がムスリムの手に渡るのは反対だという発言をしています。これはとんでもないことであり、憲法修正第1条の主旨からしても全くもって不当なものです。現に福音派の大部分は「ムスリムであれ仏教徒であれ、誰もが平等な機会を与えられるべきだ」と考えています。つまりこの政策は特定の宗教団体を優遇することを意図したものではなく、誰にも等しく機会を与えるためのものなのです。

【司会】 ありがとうございます。進行についてですが、こうして室内を見回していると、皆さん名札を付けておられますね。発言を求める場合は挙手して下さると、お名前をリストにします。それでそのリストに沿って進めるようにします。

【ローベンシュティン】 先ほどのご発言に対して、一言コメントしたいのですが。

【司会】 分かりました。ただボレリーさんが先に発言したいということですので、その次をお願いいたします。たくさんの方のご意見をうかがいたいで、発言はできるだけ簡潔にお願いします。

【ボレリー】 ありがとうございます。1994年にカイロで国連人口開発会議が開催されました。当時私は米国カトリック司教会議(USCCB)に勤務しており、カトリック教徒とムスリムのまとめ役として、この国連会議のテーマに取り組んでいました。

ある日の午前、デスクの上の電話が鳴りました。受話器を取った私は思わず息をのみました。相手がゴア副大統領と名乗ったからです。副大統領はその日の午後に記者クラブで講演を予定しており、「人口と開発」をめぐる対立する二つの見解の接点を探ろうとしていました。著名な政治家から相談を受けるのはワシントンDCは日常茶飯事です。おそらくイスラーム界の指導者が私の名を副大統領に伝えたのでしょう。というのもその頃USCCBとイスラームの団体が共同声明を発表し、カイロ会議のアジェンダに対する賛成意見と反対意見を公にしたばかりだったからです。このときの電話でゴア副大統領は自分の発言の要旨を確認し、私は人口、開発、米国政府の政策など、カトリック教会が大きな懸念を抱いている諸問題について考えを述べました。最後に副大統領は、他にコメントはないか、と私に尋ねました。そこで私はこう答えました。おそらく副大統領はカトリック教会とイスラームの「暗い密約」について尋ねられるでしょう。そのときは、ムスリムにも強い倫理観があること、そして米国国民なら誰でもそうであるように、公の問題について、倫理的観点から発言したいと思っていることを伝えてください、と。副大統領は礼を述べ、その日の午後の講演に臨みました。講演には私の意見の大半が盛り込まれていました。果たしてそのとき副大統領が尋ねられた最初の質問は、カトリック教会とイスラームの「暗い密約」についてのものでした。副大統領はこのときも私が意見した通りのことを述べてくれました。ですから富田先生、ホメイニ師との共通点があるとして責めるべき相手は私なのです。少なくとも私はホメイニ師と「密約」を結んだのですから。



カトリック教会は色々な意味で最初にグローバル化を達成した社会です。サイダー先生は宗教と政治の分離は不可能だと発言しましたが、私もまったく同感です。米国の建国者たちは政教分離の原則を打ち立てましたが、これは結局のところプロテスタント的な行動様式が一般化される結果を招きました。この点についてはプロテスタント自身も批判しています。とくに神学者のRichard Niebuhrは、分派主義のせいで社会問題への対応が効率を欠くものとなった、と苦言を呈しています。その後カトリック教徒や他宗教の信者が増加し、もはや一つの宗教の行動様式だけで米国国民全体を語ることはできなくなりました。政教分離は今や公の場で議論すべき問題なのです。

一つの集団の倫理観だけを倫理問題の判断基準に据えることには反対です。国内の一部の集団を不当に差別したり、経済的な権利を剥奪したりすること、あるいは一方的に軍事力の行使を決定することは、性行動や生殖の問題に対して個人的な倫理観を問うのと同じくらい、倫理にもとる行為だと思います。イラク戦争開始の是非をめぐる倫理問題については、事前に十分な議論が尽くされました。また宗教界でも多くの人々がはっきりと声高に言うべきことを伝えました。

ですから、宗教と政治を分離することは不可能です。私たちは皆、様々な宗教的視点から発言するのですが、残念なことに「倫理観」という言葉は「原理主義」同様に一つの決まり文句になっていて、一方的に意見を伝え、特定の集団を非難するための口実になっています。そしてそこに目を付けた人間が、往々にして、宗教団体に対する敵意をよいことに自分の意見を押し通しているのだと思います。

【司会】 ありがとうございます。レイミー先生も発言を求めておられますが、ローベンシュティン先生に先にお願いいたします。

先ほどのご発言のフォローアップということですが。レイミー先生はその次にお願いします。

【ローベンシュティン】 富田先生、米国人が民主主義的な価値観を損なうことなく、崇高な犠牲行為に身を投じた例を二つほど簡単にご紹介しましょう。一つは第二次世界大戦中の事例です。当時は大抵どの米国人も自己犠牲を惜しまず、不自由に耐えたり、物資を差し出したりして軍隊を支援しました。当時の米国は大きな危機を迎えていましたが、国民はこのような形で政界や宗教界等、国の指導者の呼びかけに応えていました。

もう一つはケネディ大統領が国民に平和部隊への参加を呼びかけたときのことです。「国家が諸君に何をしてくれるのかを問う前に、国家のために何ができるかを問いたまえ。」この声に応え、膨大な数の国民が一年、二年、あるいは生涯に渡り、奉仕活動に従事したのです。

以上二つの事例は、米国人が他人のために奉仕し、民主主義的な理想を損なうことなく物質主義的な価値観を排したケースです。

【司会】 ありがとうございます。

【レズラーズィー】 セッションAに戻ってお話させていただきたいのですが、よろしいでしょうか。とくに小原先生の発表についてコメントしたいと思います。私がとくに興味を持ったのは次の三点です。まず先生は、米国における政治的価値観と宗教的価値観の対立というテーマを取り上げられましたが、先生のお話を聞いていて、私は対立という概念と競争という概念について考えさせられました。米国内部の競争については議論が百出しているのではないかと思います。これに対してレイミー先生とエルジュナイディー先生は、二つの分野または二つの社会(アフリカ系米国人のムスリムとアラブ系米国人)の対立にまつわる諸問題につ

いてお話をされました。アフリカ系米国人やアラブ系米国人は受け身の立場にあり、その出身と歴史的、社会的バックグラウンド故にうまく社会に同化できなかった人たちです。こうした二つの概念は、米国内の対立であれ米国と他の地域との対立であれ、宗教と政治の関係を論じる上で大変興味深いキーワードになるような気がします。

二点目は、一神教に対する日本人の理解不足についてです。一神教に対する日本的な偏見は、少なくとも1890年代に遡るのではないかと思います。それ以来日本ではこうした偏見が繰り返されてきました。二つの事例をご紹介します。一つ目は日露戦争勃発前夜の話です。当時、北海道のニコライ堂が日本政府によってロシアのスパイ容疑をかけられたのです。二つ目は、イスラームという概念が日本でどのように変遷してきたかということです。日本では当初イスラームは「回教」と呼ばれていました。回教というのは、カーバの周りを回る人という意味です。1906年から1907年になると文書やメディアに「マホメタン」という言葉が登場します。これはヨーロッパから取り入れられた言葉です。「イスラーム」という言葉が日本に入ってきたのは二つの大戦の間でした。「Islam」のローマ字表記か、あるいはインドネシアやマレーシアあたりの東南アジアの言葉から取られたものと思われます。60年代を過ぎてやっと日本の研究者たちが中東へ留学するようになり、数年後にはアラビア語の文献をベースにイスラーム世界について語るようになりました。こうした言葉の変遷は三つの一神教に対する日本人の見方の変遷を表しているように思います。三点目ですが、19世紀に書かれた書物には、日本人の二つの精神世界観を示したものが多数あります。ありのままの飾らない自然の世界「自然」(じねん)と、人間の手の入った秩序的な自然の世界「自然」(しぜん)です。こうした区別は日本とそれ以外の国の違いをそのまま反映しており、さらに明治時代以降に台頭した国粋主義的

思想が一神教、神道、仏教の対話に陰を落としてきたように思います。

【司会】 小原先生、何かご意見はありますか。

【小原】 私の発表に対して非常によい補足説明をしてくださってありがとうございました。実際には今お話ししていただいたような例はたくさんあります。しかし、今日は時間の都合上、一部だけを取り上げました。少しずつ変わってきているとはいえ、日本の中にもイスラームに対する偏見がありました。また、キリスト教に対する誤解や偏見もあります。

ところがユダヤ教に関しては、ほとんど何の知識もないというのが実情です。ですから、ユダヤ教関係では、例えば、ユダヤ人が世界の金融界の後ろで悪いことをしているのだというユダヤ人陰謀説のような偏見に満ちたイメージが流布しているような状況があります。その意味でも、日本がアメリカときちんとつきあっていくためには、一神教とは何かということを正しく理解することは欠かすことができないと私は思っています。

日本とアメリカは非常に多くのものを共有しています。例えば、若者の文化などはほとんど差がないぐらいです。ところが大統領選挙で出た三つの倫理的問題については、どうでしょうか。中絶と同性婚とES細胞研究です。この三つはアメリカではだれもが口にする日常的な話題ですが、日本では、これらはほとんど話題になりません。小泉首相が中絶や同性婚について語ったことなど一度もありません。語る必要がないのです。それぐらいに、倫理的な問題に関しては、日米の間に大きなギャップがあるということです。

ES細胞研究は、アメリカであれば、多くの人が口にする話題ですけれども、日本では議論されないままに研究がどんどん進んでいます。実は京都は、日本のES細胞研究のメッカです。京都がセン



ターになって、今、ES細胞研究はどんどん先に進もうとしています、そこでは倫理的な問題はまったくと言ってよいほど議論されません。

単に宗教の違いというだけではなく、重要な倫理的な 이슈がアメリカと日本とではかなり違うことは明らかでしょう。この差は非常に面白いと思うのです。もちろんアメリカにおける倫理的 이슈の背景に宗教が関係しているということは、日本人にも何となく分かるのですが、なぜここまでアメリカ人が熱狂するのかというメカニズムについては十分に理解されていないように思います。

三つの倫理的 이슈は、やはりキリスト教に深く関係していると思います。キリスト教の生命観や、ものの考え方に非常に関係しています。そこで、私が今日来られた方々に聞きたいのは、ユダヤ教においても、イスラームにおいても、これらの倫理的な問題が、キリスト教と同じぐらいに熱く語られているかどうか、という点なのです。あるいは、クリスチャンが大騒ぎしているから、仕方なく、その問題に付き合っているのでしょうか。

【司会】 今おっしゃったことを確認させてください。先生は、ここにおられるユダヤ教徒とムスリムの参加者に対し、こうした問題が同じくらい重要なのかどうかを尋ねておられるのですね。

【小原】 その通りです。

【司会】 分かりました。ではこの問題についてまずご意見をうかがいたいと思います。レイミー先生、先ほど発言したいことがあるとおっしゃっていましたが、この質問にお答えになりますか、それとも別のことについて発言されますか。

【レイミー】 先ほどから二つの点について発言したくてうずうずしていました。まず同僚の発言についてコメントさせてください。できるだけ短く切り

上げて次の点に移りたいと思いますので。米国では倫理をめぐる公的な議論がなされていますが、こうした議論では倫理という概念が往々にして正しく理解されていないと思います。今年前半にインドへ行き、また2年前に南アフリカに行った経験から、私はムスリムとして、また倫理観念を持つ一人の人間として心の底からこう言いたいと思います。地球上で一番大きな倫理問題は、経済搾取と偏った富の分配というシステム故に、何億もの人たちが貧しい生活を強いられていることだと。そしてこうしたシステムは非倫理的かつ持続不可能であり、あらゆる宗教理念に真っ向から対立するものであると。

このシステムは色々な名で呼ぶことができますが、ここではそのことに触れるつもりはありません。ただ次の点ははっきり言っておきたいと思います。キリスト教、ユダヤ教、仏教、神道、バプテスマ教、シーク教、ゾロアスター教等、世界にはあまたの宗教がありますが、すべての宗教人は今、「現行の世界の経済システムは生産や分配のあり方に偏りがあり、この地球上に暮らす大多数の人々、とくに第三世界と呼ばれるところに暮らす人々に犠牲を強いている」という事実を倫理問題として捉えることができるかどうかを問われているということです。

次に去る7月にスペインのバルセロナで開かれた世界宗教議会について少し触れたいと思います。この会議では世界の宗教人の前に四つの重要な問題が呈示されました。基本的な人間の権利として、清潔な水の確保にどのように対処するか。宗教の暴力にどのように対処するか。とくにアフリカやラテン・アメリカで深刻化する債務危機にどのように対処するか。そして戦争や暴力や迫害のために難民が次々と住む場所を追われている事態にどのように対処するか。この4点です。

これはちょっと論点からずれるかもしれませんが、同志社大学などが率先して日本の市民社会の目をこうした問題に向けさせることはできないか、

あるいは米国の宗教者たちが同じことをできないものかと思います。なぜならこうした問題は机上の空論ではなく、現実にはこの地球に暮らす何十億もの人たちの命を脅かしているからです。

結論として申し上げたいのは、米国の一神教であれ他の地域の多神教であれ、宗教団体はすべて、人間の生死にかかわるこの一大事に本気で取り組むべきだということです。こうした取組を避けて同性愛や肝細胞研究の是非ばかりを論じていたり、あるいはどの神が最高神かということだけに熱くなっていたのでは、世界を変革するという重責を放棄したことになってしまうからです。

【司会】 ありがとうございます。今の質問にお答えになりますか、それとも何か他におっしゃりたいことはありますか。ボタンを押していただけますか。はいどうぞ。

【レヴィン】 米国人以外の参加者の皆さんが先の大統領選の意味を拡大解釈されては困りますので、一言。私たちはひどく混乱しており、またデータが出そろっていませんので、この点について立場を硬化させることはやめたいと思います。ワッサーマンさんが先ほど、先の大統領選は信仰対世俗、共和党対民主党の問題ではないとおっしゃいましたが、私もその通りだと思います。リベラルな民主党員にも信仰心はあります。ケリーの信仰のあり方はブッシュのそれとは異なっており、そのことがあまり語られないだけであって、決してどちらか一方だけに価値があるわけではありません。

ちなみに、中流の市民社会に対する見方も、共和党員と民主党員そしてその支持者とでは、大きく異なっています。それはさておき、現在の情勢は、1648年のウエストファリア条約の崩壊に例えることができると思います。ヨーロッパの百年戦争のことは皆さんご存知だと思いますが、これはキリスト教徒がムスリムやユダヤ教徒と争っていた

のではなく、キリスト教徒同士の戦争でした。しかもこれは宗教と政治にかかわることであり、この戦争を曲がりなりにも終結に導いたのがウエストファリア条約でした。ところがこれが、現代のリベラルで多元的な民主主義社会で問題となっているのです。

ウエストファリア条約の崩壊を招いたのは人間の悪意ではなく、社会の複雑さだと私は考えています。人生というものは恐ろしく複雑なものであり、先ほど述べた中絶や同性結婚といった問題に対してさえ、どの宗教も明白な回答を示すことができないでいます。また教義の解釈に真剣に取り組んでいる宗教人さえ、簡単に解決策に至ることはできないのです。こうした問題はひどく複雑です。ですから結論を出すのは後にして、先にあの選挙で何が起こったのかをもう少しはっきりさせたいと思います。

まずユダヤ教徒の言い分を検討してみましょう。ユダヤ教徒が必ずしもどちらかの陣営に肩入れしていたということはありませんが、別の意味で先の大統領選はユダヤ教徒を二つに分裂させました。リベラル対民主という図式です。ユダヤ人のおよそ8割がブッシュに反対票を投じたのはやはり驚くべきことだといえるでしょう。ブッシュ大統領を再選することはイスラエルにとって大いに利益になるというのが大方の見方でしたから。選挙前に私はフロリダにいたのですが、トレーラー・キャンプで猛犬に追いかけられたり、塙で囲まれた高級住宅地で警官に追いかけられたりして、貧しい者と富める者という二極化した米国社会をかいま見えました。米国というのは色々な意味で二極化された社会だと思います。

またユダヤ人社会は、別の角度から中絶問題を捉えています。少なくともキリスト教徒よりも宗教的伝統の影響を受けているユダヤ教徒は、この問題に対して随分違う見方をしています。両者の見解が同じになることはありません。ときには似てい

るように見えても、決してそうではないのです。

つまり問題は非常に複雑であり、詳しい考察が必要だということです。少なくとも私は、正直に言いまして、現時点ではっきりとした考えを述べることはできません。私たちにもまだ分からないのです。

【司会】 ありがとうございます。次にエルジェナイディーさんが小原先生に対して何かコメントがあるということです、お願いしたいと思います。その後で森先生より質問をしていただきます。ではお願いいたします。

【エルジェナイディー】 社会正義、セクシュアリティ、生命に対する権利等に対し、ムスリムがキリスト教徒と同じくらい関心を持っているかということです、この点についてごく簡単に意見を述べたいと思います。単刀直入に言いまして、答はもちろんイエスです。こうした問題一切に向き合うことは私たちの信仰の重要な部分を占めています。セクシュアリティと生命に対する権利については、私たちはカトリックにとっても近い立場を取っていますし、実は福音派ともほぼ同一の見解を持っています。社会問題についてもそうです。これはいずれもムスリムの行動や生き方にも深く関わる問題です。

昨今米国ではムスリムがこうした問題について大きく声を上げることはありませんが、これは私たちの身に危険が迫っているからです。ムスリムは今攻撃の渦中にいます。ですから今私たちにできるのは、我が身を守ること、市民権を訴えること、政治力を強化すること、そして教育に力を入れることくらいなのです。イスラームに対する世間の無理解にはいつも哑然とさせられます。イスラーム文化の存在や、ヨーロッパ文明に果たしたイスラームの役割が全くといってよいほど無視されています。西欧諸国はイスラーム文明から多くの恩恵を受けており、またそのことを自覚すべきなのに、現実にはこの事実を蔑ろにされています。これは米国だ

けの話ではありません。ヨーロッパはじめ世界中がそのような状態なのです。

しかも現在私たちはムスリムの過激派への対応を強いられています。ムスリムの過激派は今や、穏健派など大半のムスリムの声をかき消すほど大きな存在となっています。また私たちはイランのようにイスラームと政治の役割を明確化している国への対応も迫られています。多くの人が、そうした体制の中にこそイスラームと政治が共存する唯一の方法があると考えていますが、合議を重んじる民主的なイスラームの統治に較べると、こうしたやり方は色を失ってしまいます。

予言者ムハンマドもやはり、合議を重んじ、マイノリティを尊重してメディナを統治していました。イスラーム文明史をひもとけば分かることですが、当時のメディナは最も寛容で多様性に富んだ都市でした。ユダヤ人でさえ自由を謳歌し、創造的な活動にいそしんでいたのです。ユダヤ人の創造活動が花開いたのは、スペインがイスラーム支配下にあったころではないかと思います。また迫害を受けたユダヤ人が真っ先に逃れたのは、北アフリカのイスラーム諸国でした。そこに自由があったからです。けれど誰もこのことを知りません。ですから私たちは現在自分の身を守らざるをえないのです。とくに米国では。

中東でも植民地化政策の置きみやげとも言えるべきことが続いています。戦争が勃発し、パレスチナ人とイスラエル人が対立しています。ですから米国で、キリスト教徒やユダヤ教徒ほどムスリムの声が聞こえてこないのは、目下のところ私たちの優先すべきことが全く別のところにあるからなのです。

【司会】 ありがとうございます。では森先生お願いいたします。

【森】 文化戦争について質問をしたいと思います。

マスコミの方もおられますけれども、日本のマスコミは今までアメリカの文化戦争についてほとんど扱ってこなかった。急に大統領選挙が終わった後、アメリカのメディアの情報を得て、アメリカが文化によって二分されているということを言うようになりました。日本のマスコミはそれを克服すべきだと言っています。どういう形で克服したらいいと日本のマスコミは考えているかというと、宗教的価値観を持っている方がもう少し理性的になって一つになるべきだと、すなわち、宗教的でなくなっていったら一つになれるのではないかと非常に単純に考えていると思います。私はそんなことはできないと思います。

単純化してはいけないのだけれども、やはり今のアメリカ社会はレッドとブルーに分かれていると思います。今日ご出席の8人の先生方は宗教は違うけれども、ブルーの立場であるのではないのでしょうか。だから、発言される内容は私たちにはよく分かります。

でも、問題はレッドとブルーのこの二分化されている文化戦争をどうやって克服するのかということではないのでしょうか。そのきっかけというか、ヒントというか、それについて何か皆さんの中で意見のある方がおいでなら、聞かせていただきたいと思います。

【司会】 どなたかコメントしていただけますか？

【サイダー】 最初に言っておきたいのは、心に深く根ざした価値観の対立に起因する問題が数多くあるということです。これはとくに人間の命の尊厳について言えることで、中でもカトリックと福音派は中絶と肝細胞研究に強く反対しています。ただ肝細胞研究なら何でも反対というわけではなく、研究のために胎児を殺すことを問題視しているのですが。同じことは結婚についても言えます。こうした見解の相違を簡単に解決することは不可能で

あり、これから先も苦悩が続くと思います。揺るぎない価値観が激しく対立しているわけですから。

先の大統領選における宗教の影響についてはあまり過大解釈したくはありません。ただし無視できない事実もあります。先の選挙だけでなくその前の選挙でも、毎週教会に通う人たちは迷うことなく共和党候補に票を投じ、逆に礼拝になどほとんど行かない人たちは民主党に投票しています。これは過去2回の大統領選の特徴です。もちろん熱心なカトリックや福音派の中にも民主党候補に投票した人は大勢います。けれども基本的なデータを見る限り、信仰心の有無と候補者の選択にはかなり強い相関関係が見られます。

【司会】 次にローベンシュティンさん、お願いします。

【ローベンシュティン】 先ほど宗教右派が倫理の定義を欲しいままにしているというコメントがありましたが、この点について一言付け加えたいと思います。宗教界は、寝室の中の問題だけでなく、戦争と平和、貧困、経済的正義、資本主義といった問題を倫理的問題としてはっきりと国民に示す責任を担っていると思います。米国人はどうも寝室の中の問題ばかりに気を取られているような気がします。ある意味で先の大統領選挙は、こうした問題についての是非が争点となっていました。

この点についてサイダー先生は「社会行動を求める福音派」で素晴らしいリーダーシップを発揮されています。またJim Wallace氏はじめ、宗教界を一体化し、倫理的問題を明確化するという素晴らしい成果を上げている人たちもいます。こうした倫理的問題については意見が一致しない点もあります。例えば中絶に関しては、宗教界全体の取組は決して一枚岩ではありません。けれども倫理観や戦争と平和といった重点的な問題については、皆が同じ基盤に立っています。サイダー先生は飛行機の中でブッシュ大統領に送る手紙の草案

を作っておられました。福音派の指導者に広く署名を呼びかけたいとのことでしたが、こうしたことはとても重要です。Jim Wallisやサイダー先生のような福音派の代表者や、全米キリスト教会協議会のこうした取組はプロテスタント社会の主流となっており、とても重要なことだと思います。

【サイダー】 一言だけ付け加えさせていただきます。人命の尊厳や結婚や家族の問題は政治に関わる倫理的な問題のごく一部に過ぎないというご意見には全面的に賛成です。経済的正義や平和維持、ケアの問題などもありますから。

ただ結婚や家族に関わる問題一切を寝室で起きていることとしてばっさり切り捨てるのはいかがなものでしょうか。こうした問題はもっと深刻で奥が深いと思うのですが。

【ローベンシュティン】 それはその通りだと思います。ただそれほど大きな問題ではないと考えている有権者も大勢いるということです。自分にとって大切な価値観ばかりを主張し、それ以外の重要問題から目をそらしている政治家の体たらくに、つい条件反射的に反応してしまいました。過去にはガッツのある大統領もいたのですが、4400万人の人たちが健康保険の対象外となっていたり、人口の5人に1人が貧困層に生まれついているなど、米国は数々の大罪を犯しています。それなのに有権者の多くは小さな問題ばかりにとらわれていて、肝心のリーダーシップに目を向けようとしない。リーダーシップこそ、もっと広い意味での倫理的問題に向き合う上で米国に求められているものなのですが。

【司会】 森先生のご質問の中で日本のマスコミの分析や報道というお話がありましたが、この点について意見を述べたいと思います。私自身日本で生活しているわけですが、マスコミの報道には常々疑問を持っていましたから。

米国社会が、合理的な人とそうでない人、あるいは信仰を持つ人と持たない人に二分化されているというのは事実ではありません。米国の宗教のあり方には問題があります。歴史に深く根ざした公私の問題です。米国史を研究すれば分かることですが、この問題が完全に解決されたことはこれまでただの一度もありません。選挙の度に形を変え、別の方向から議論されています。これは選挙毎に焦点となる問題が異なっているせいかもしれませんが、今回の選挙ではこの問題への理解が深まり、それと共に課題が明確化したように思います。社会や宗教界の指導者たちは今こそこの問題にしっかりと向き合い、レッドとブルー、公と私、合理と非合理、世俗と宗教、信仰心の有無などで米国民を無理やり二分化しようとするマスコミのやり方に異を唱えるべきなのです。米国人は誰もがある程度問題を共有しています。私たちはそのことを認めなければなりません。信仰心のかけらさえない人でも、環境問題や家族問題に大きな関心を持っている場合がありますし、子どもたちに価値観を伝えたいと願うこともあります。これは信仰心の有無とは関係がありません。それでも、こうした人たちの思いには信仰心に共通するものがあります。大切なことは共通性を認めることです。たとえブルーとレッドに分かれていても、共通点は必ずあるのです。先の大統領選は刺激的なチャレンジであり、大きなチャンスであったと思います。これまでこうした問題に無関心だった層を目覚めさせるきっかけとなったからです。これは「文化戦争」というよりは、現代社会が直面する意義深いチャレンジを掘り下げ、共通の目的に向けて国民が共働するためのチャンスだと思います。レッドに区分された州の住民すべてがレッドだというわけではありません。ブルーについてもしかりです。どの州にもレッド、ブルー両方の支持者がいます。宗教界も同じことです。宗教間に違いがあるように、一つの宗教の内部にも大きな違いがあり

ます。私たちはそのことを伝えるために努力しなければなりません。楽観的かもしれませんが、私は今回のことは大きなチャンスだと思っています。確かにがっかりさせられたり、喜んでばかりいられないと思うこともあるのですが、それでも米国民が新たな意義あるチャレンジを迎えているという考えに変わりはありません。宗教界はこのチャレンジにもっと真剣に向き合うべきだと思います。保守的で伝統的な宗派も、進歩派、あるいは穏健派も、さらには無宗教を標榜する人たちも、皆共通する理想を抱いています。私たちはそれが何なのかを明らかにしなければなりません。

さて、次に三人の方のご意見をうかがいたいと思います。時間は8分です。三人の方にコメントをいただいた上で、残りの時間で皆さんにご意見をお願いしたいと思います。ただし一部は明日の話し合いになるかもしれません。

【見市】 私は東南アジアのムスリム社会についての研究をしています。ちょうど関連する質問、別の聞き方をしたいのです。

中絶やファミリー・バリューというのが選挙の 이슈になるということは日本人は非常に変だと感じるわけです。これには幾つかの理由があると思うのです。例えば日本の選挙で何がイシューかと聞かれれば、経済あるいは年金、社会保障、それに外交あたりが来ると思います。なぜ日本人が選挙のときにそういうファミリー・バリューや中絶のことを考えないのか、イシューにならないかといえ、まず一つは、恐らく政治家がそのような倫理観を持ち合わせていなくて、政治家がモラル・イシューの議論をできると信じていないということがあると思うのです。

それと同時に中絶とかファミリー・バリューということが、パブリックではなくて、プライベートの問題であると日本人が考えているのではないかと私は選挙とか政治の部分で争うことではないと考えているからイシューにならないのではないかと私

は思うのです。ところが我々は日本とか、あるいはアジアの社会というのはパブリックとかプライベートとが混ざっていて、西洋の社会はプライベートとパブリックの区別がはっきりしていると今まで一般的には考えてきたように思うのです。

それで質問ですが、このモラルのイシューが政治とか選挙の中で問題になるというのは、アメリカ社会の中でパブリックとプライベートという区別それ自体が変化しているのか、あるいはこういった倫理の問題こそがパブリックなイシューなのかということですか。

【司会】 ありがとうございます。ご質問の件は後ほど取り上げたいと思います。ご発言の内容はメモしておきます。では澤井先生、お願いいたします。

【澤井】 今日、アメリカから来られた宗教者の方々から、いろいろなご意見をお伺いして改めて感じましたのは、宗教教育の重要性です。現代のアメリカ社会では、宗教教育がうまく行なわれているように日本からは見えるのですが、意外に宗教教育が行なわれていないことがよく分かりました。先ほども今井さんが指摘されたように、アメリカ社会はやはりキリスト教をベースとした社会です。その社会において、エルジェナイディーさんが言われましたように、イスラームに対する理解の欠如、誤解あるいは偏見が、特に9・11以降、存在しています。そうした事実は、まさに宗教教育の必要性を物語っております。

私は「宗教教育」という場合、それには二重性があると考えております。まず、特定の宗教伝統において、子供を家庭の中で教育していくという、いわば宗教的あるいは信仰的な情操教育というものがあります。それは特定の宗教伝統において行なわれてきたし、また行なわれております。もう一つの宗教教育とは、いわば比較宗教学の研究手法と関連しています。それは諸宗教の思想と信仰を出来



るかぎり客観的な視点からとらえなおし、宗教を知識として教育するというものです。先ほどワッサーマンさんも言われましたが、みずからの信仰を持ちながらも、自己の信仰を突きはなして客観的に見ようとする。そういう宗教理解の態度によって、世界の諸宗教のあり方を理解しようとする。さらには、宗教の違いを超えて、宗教あるいは宗教的なものの意味を理解しようとする。そういう意味における宗教教育が、日本社会は言うまでもなく、現代のアメリカ社会においても必要であると思いました。

ところで、これは現代の宗教学が抱えている課題の一つなのですが、従来の宗教学研究は、西洋文化的あるいは宗教的な概念枠組みにもとづいて行なわれてきました。ところがグローバル化がますます進んでいる今日、東洋的な視座も踏まえて、従来の概念枠組みを再検討する必要性が認識されてきております。こうした意味でも、西洋の文化的あるいは宗教的な価値とともに、東洋の文化的あるいは宗教的な価値も踏まえて、いわゆるグローバルな視点から、私たちは宗教教育の重要性を改めて認識すべきであると思います。こうした宗教教育の重要性について、先生がたがどのように考えておられるのか、一言お伺いできれば有難いと思います。

【司会】 どうもありがとうございます。では手島先生、お願いいたします。

【手島】 この場に参加できることをとても嬉しく思います。ただ私が思うのは、このような素晴らしい話し合いが実現したのはなぜだろうかということです。皆さんが米国から来ておられるからでしょうか。それとも場所が日本だからでしょうか。つまり私が知りたいのは宗教の壁を越えて意見を交換し合うこのような場を皆さんが持っておられるのだろうか、ということです。日本のマスコミは三つの一神教が互いに争っているという報道をしています。もちろ

んこれはナイーブな見解であり、この場で殴り合いのけんかが起きると思っていたわけではありません。ただ誰一人席を立つことなくこれまで話し合いを進めてこられたことは、とても素晴らしいことだと思います。また皆さんの発言内容は私たち日本人にとってとても学ぶことの多い啓発的なものでした。そこで、なぜこのようなことが可能なのだろうと思ったわけです。皆さんの心の有り様が違っているからなのでしょう。皆さんは米国憲法をよく引用されますが、米国憲法とは皆さんにとってもう一つの聖典なのではないかという印象を持ちました。皆さんをお互いに結びつけるような何かがあるのでしょうか。もちろん皆さんの間に意見や見解、イデオロギーの相違があることは分かっていますが、それでも皆さんはいわば一つの共同体を形作る能力を持っておられるように思えます。また大変紳士的に意見を交換されているのも素晴らしいと思いました。こうした光景を目の当たりにしますと、「民主主義」という言葉が自然と思ひ浮かびます。もっともこれはイラク侵攻を決断したブッシュ大統領のキーワードでもあるのですが。そこでこうした心境、あるいは態度というのは、結局のところ宗教云々ではなく、何か別のものに根ざしているのでしょうか。以上が私の質問です。

【司会】 大変興味深い質問です。是非回答をお願いしたいのですが、残念ながら時間が迫っております。中田先生も発言を求めておられますが、先生は明日のセッションCの議長ですので、そのときにゆっくりと意見を述べていただくと、この場では短く切り上げていただければと思います。先生には明日がありますので、どうぞその点、よろしくお願いいたします。

【中田】 私は明日、議長をさせていただくのですが、恐らくこの今日お集まりの人々の中で、ただ一人、先ほど森先生のおっしゃった「赤い」

(保守的・原理主義的)立場の人間だと思います。明日は公平を期さないといけませんから、あまり発言できないと思いますので、今日簡単に発言させていただきます。

三つの一神教、ユダヤ教、キリスト教、イスラームですけれども、すべて始まった時点ではその時代の既成の秩序に反するというか、新しいものをもたらしました。それはその時代の秩序の中で与えられている選択肢の中のどれかを選べということではなくて、その全体を否定するようなものをもたらしたと思います。

その三つの普遍宗教は、それぞれ普遍的である、つまり自分で選ぶという側面と、同時にそれはどのような宗教でもそうですし、政治体制でもそうだと思うのですが、始めた人間が自分たちの自由で始めたものであっても、次の世代の人間にとってはそれは自分が生まれた土地のものになるわけです。アメリカの場合もそうだと思います。最初は契約をして国を作るわけです。しかし次の世代の人間にとっては、それはもう自分の生まれた社会になっています。これは三つの普遍宗教、すべてに個人のレベルでも、集団のレベルでも当てはまると思います。

質問ですけれども、つまり特に今回皆さんはアメリカから来ていらっしゃるわけです。アメリカの国は自由な国だといわれています。恐らくそれはかなりの程度まで当たっていると思います。しかし、それはあくまでもアメリカという今ある秩序の中で、与えられた選択肢の中で選べるという、それ以上のものではないと思うわけです。それは別にアメリカに限りません。日本もそうですし、どこの国でもそうなのです。そこで私の知る限りだとネイション・オブ・イスラームの運動というのは唯一、そういうアメリカの秩序というもののの中で与えられた選択肢ではなくて、秩序自体を否定して、別の国を作ろうという運動だったと私は理解しているのです。

そういう意味で現在あるアメリカという秩序の中

で二つのどちらかの陣営に投票するというのではなくて、それとは違う秩序を作ろうというような運動が、その三つの一神教の中にあるのか、あるいはそういうものを許すようなことがアメリカ文化にあるのかというのが私の質問です。

【司会】 締めくくりとして、先ほどの発言内容をフォローする大変素晴らしいコメントをいただいたと思います。発言を求めておられる方はまだおられますが、申し訳ありませんがもう時間が来てしまいました。ただ、ここにおられる方はほとんど全員がこれからレセプションに参加されますので、その場でプライベートにお話しいただければと思います。こうした会議の良いところは議論のテーブルだけでなく、コーヒーを飲んだりプライベートに歓談したりするところにもありますので、どうか楽しんでいただきたいと思います。明日のセッションCは同じ場所で12時30分スタートです。

皆様どうもありがとうございました。それではお開きとさせていただきます。



聖職者
交流会議

セッションC

アメリカと中東の関係は、あなたの宗教と他宗教
との関係にどのような影響を与えているか？

司会／中田 考(同志社大学大学院神学研究科教授)

- 発表／「政策及び行政に対する米国福音派の姿勢」
ロン・サイダー(「社会行動を求める福音派」／イースタン神学校)
「『選ばれた者』と『選ぶ者』:一神教的多元主義——
そのユダヤ教的源泉とアメリカにおける様態」
ヒレール・レヴィン(ボストン大学)
「危機の時代における不協和音
——アメリカの『宗教政策』がアラブの自己認識と他者認識に与える影響」
エルモスタファ・レズラーズィー(アジア・アラブ・メディア・ネットワーク東京)
- コメント／ミラ・ワッサーマン(ベツ・シャローム・ユダヤ共同体)
マハ・エルジェナイディー(イスラーム・ネットワーク・グループ)
ジョーン・ボレリー(ジョージタウン大学)
松永 泰行(同志社大学客員フェロー)
- ディスカッション

政策及び行政に対する米国福音派の姿勢

「社会行動を求める福音派」／イースタン神学校

ロン・サイダー
Ron Sider

本稿では政治課題に対する米国福音派のスタンスを取り上げ、少なくともその行動の土台にある理念を明らかにしたいと思う。福音派プロテスタントは米国の有権者の4分の1を占める一大勢力であり、とくにジョージ・W・ブッシュのような共和党大統領の政権下では絶大な影響力を持つ。

5,000万もの人間の考え方やその多様性を一本の論文で論じ切るのは無理な話である(※1)。そこで本稿では、一米国人福音派信者である筆者自身と、福音派社会の全体的な視点の両方を切り口に論を進めてゆく。とくに後者については、ごく最近発表された「健全な国を目指して—市民責任に対する福音派の使命 (*For the Health of the Nation: An Evangelical Call to Civic Responsibility*)」という宣言文を何度も引用し、その概要を述べることで、福音派全体の意見に代えたいと思う。この宣言文(本稿に添付)は、国内最大の福音派の団体である米国福音同盟(The National Association of Evangelicals)の理事会が2004年10月7日に全会一致で採択したもので、何万もの信徒団体に属するおよそ3,000万の福音派信者の声を代表した公式文書である。(なお公正を期するために、筆者自身共同議長として、この宣言文並びに近く刊行される書籍『福音主義的公共政策に向けて—健全な国のための政治的戦略 (*Toward an Evangelical Public Policy: Political Strategies for the Health of the Nation*)』(※2)をまとめる作業に携わったことを明らかにしておく。)

米国福音派社会の裾野は広く、ペンテコステ派、ウェスレー派、カルビン派、バプティスト派、アナバプティスト派、カリスマ派、原理主義派など多数の分派が複雑に絡み合って存在しているが、ここでは便宜上、保守、中道、リベラルという大まかな三つの区分から福音派を論じたいと思う。米国福音派信者の実に4割が属する保守派はしばしば「宗教右派」と呼ばれ、「モラル・マジョリティ」(The Moral Majority)の創設者ジェリー・フォルウェル(Jerry Falwell)や「キリスト者連合」(The Christian Coalition)のパット・ロバートソン(Pat Robertson)といった指導者がよく知られている。中絶や同性愛に反対し、家庭に大きな価値を置き、中東問題に対して強硬なシオニスト的立場を打ち出しているのが保守派の特徴である。保守派の対極にはごく小数のリベラル派がいる。リベラル派も生命の尊厳や家庭の価値を重視している点に変わりないが、その一方で経済的正義や人種的正義、聖書のフェミニズム、平和活動、環境保全にも強い関心を抱いている。その中間に位置するのが、ビリー・グラハム(Billy Graham)率いる一大勢力や、福音派の大学・神学校、青少年の信者による諸活動、『クリスチャニティー・トゥデー』(Christianity Today)(最大の影響力を持つ福音派の雑誌)、それに先に紹介した宣言文を発表した米国福音同盟などである。

「健全な国を目指して」に盛り込まれた「いかなる政治的判断も規範的見解と事実の分析に基づくべきである」(※3)という一文は、大部分の福音

派信者の一致した意見でもあるだろう。福音派は聖書の権威と真実性を絶対視しており、旧約・新約聖書の記述を根拠に、人間、創造、歴史、正義、生命、家族、平和等を理解しようとする。これに対して同じ福音派でももう少し思慮に長けた信者は、聖書の規範的見解を確実にかつ効率よく今日の複雑な政治的課題に適用するためには、「綿密な社会的、経済的、歴史的、法学的、政治的分析」が必要であるという認識を持っている。

さらに付け加えるならば、私たちが必要としているのは政治哲学であり(それは聖書の基本見解と綿密な社会分析の一体化から生じると筆者は信じている)、この理念がいわば道路地図の役割を果たして、日々の政治判断の指針となるのである。米国の福音派はこれまで、政治哲学—たとえばここ100年強の教皇回勅に示された理念—を大局的に見直すという作業を怠ってきた。これに対して「健全な国を目指して」は、教会が福音主義的政治理念の確立に向けて、初めてこうした見直し作業に乗り出したことの現れであるといえるだろう。

本稿では以下に、福音主義的政治思想に関わる聖書の規範的見解に焦点を当て、その最重要項目についてざっと論じた上で「健全な国を目指して」に示された福音主義的政治哲学を形成する諸条件について解説し、最後に、米国福音主義派の政治のあり方について筆者が問題視している事項の一部を、ごくかいつまんで取り上げたいと思う。

聖書の規範的見解

歴史 聖書が最初に私たちに語るのは、私たちを取り囲む物質世界がいかに善いものであるかということである(※4)。確かに私たちの世界は有限で制約があり、決して神聖なものではない。それでも世界は幻ではない。世界は実在し、有限ながら栄光に満ちた素晴らしい場所である。だからこそ万物の創造主は自ら人となられ、この小さな星の塵芥にまみれた道の上を歩まれ、死者の中からよ

みがえられ、いつの日にかこの地に戻って、この物質的、物理的世界を完全な姿に戻すことを約束されたのである。また復活の日までに、富を創造し、文明を築き、世界が完全な姿を取り戻す方向に歴史を導くようを私たちに託されたのである。

人間 聖書物語の中心となるのは、人間は神の姿に似せて創られたという教えである。人間は肉体と魂を持ち、共同生活を営む存在として創造された。また神の僕として人間以外のすべての世界を支配すると共に、創造主の足跡をたどって物質世界と社会を作り直し、富を創造して美と善の文明を築く使命を託された。

創世記には、人間のみが神に似せて創られたと記されている(第1章27節)。神は人間一人一人に自由を与えられ、(創造主との交わりと)服従を求める神の声に自由に応じるよう、人間を導かれた。人間が神に逆らったとき、神は、三位一体の第二人格として受肉し、死、復活という形で、救い主を信じる者を救われ、人間への愛を示された。人間は誰もが、万能の創造主の導きにより、神と共に永遠に生きることができるのである。このことから、一人一人の人間がいかに大切に価値のある存在か、またいかに大きな尊厳を持っているかが分かるはずである。

このことはまた人間が権利と義務を持つ理由にもなっている。創造主が何よりもまず、人間にこれほど大きな価値を置いておられるのであれば、私たちも同じだけの敬意をもって互いに接することが求められるからである。生きる権利や自由の権利をはじめ、創造主が定められた人間の権利はすべて、神の創造の意図に盛り込まれているのである(※5)。

このように人間の権利を神学的視点から考察すると、義務と責任を軽視している今日的な人権論がいかに偏ったものであるかが分かるだろう。創造主は、これほど高い尊厳を人間に与える一方

で、自分の命令に従い、宇宙の倫理秩序に服することを人間に求められた。つまり人間の権利と義務は表裏一体なのである。

創世記によると、人間は肉体と霊魂からなる存在である。「土のちり」(創世記第2章7節)から造られた人間は、徹底して物質的な存在であり、本質的に物理的な世界の一部として造られている。そのため私たちは十分な物質がなければ、創造主の意志に沿うことはできない。神はまた私たちに「命の息」を吹き入れられ、他の生き物にはない自由を与えられた。創造主が私たちを肉体と霊魂の統合体として造られた以上、市民的・政治的視点のみから(人間の自由に焦点を当てた場合)、あるいは社会経済的視点のみから(物質的ニーズに焦点を当てた場合)人間の権利を理解しようとしても、聖書に描かれた人間の本質を完全に把握することは難しい。

聖書には、人間一人一人がかけがえのない存在であると同時に、人間は共同生活を営むべく造られたと記されている。つまり昨今の西欧的自由民主主義が掲げる顕著な個人主義も、20世紀のファシズム社会や共産主義社会が実践した全体主義的共同体主義も、聖書の深遠な思想を都合良く解釈したものでしかないのである。創造主は私たち人間を、共同生活を営む者として創造された。そのため私たちは、相互に依存してはじめて完全な存在になり得るのである。

エバが出現するまでアダムは孤独な存在だった。神がエバを造られたのは、二人の肉体が結ばれ、互いに充足感を得られるようにとの思いからであった。こうした相互依存的性質は、神の本質そのものに由来している。私たちは父と子と聖霊の三位一体の神に似せて創られた。つまり人間であるということは、人を愛し愛される中で他の人間と結びつくことを意味しているのである(※6)。

ゆえに、聖書的観点から見た場合、正義とは、個人の権利と万人の利益に等しい価値を置くこと

に他ならない。それ故に、個人の尊厳や自由を犠牲にしてまで曖昧な公の利益を追求したり、個人の選択の自由を絶対視するあまり万人の幸福を蔑ろにしたりするような政治経済制度はあってはならないのである。

罪 残念なことであるが、神の造られたこの良き地においてさえ、迫り来る罪の脅威と無縁でいられるものは何一つとして存在しない(※7)。罪は個人だけでなく人間が作り上げた思想・制度までもねじ曲げてしまう。創造主の意図に逆らおうとするとき、人間は、歴史と物質世界の意味を拡大解釈するか、あるいは過小評価しようとする。自分たちの価値を不当に高めようとする者は、高尚な理論武装を施した上で、隣人を抑圧するような政治経済制度を構築するのが常である。まっとうな政治経済制度とは、罪をもってしてさえ完全に消し去ることのできない人間の良心に訴えると共に、墮落の根元であり、誰もが持つ私利私欲の心を抑制して建設的な目的に振り向けることのできるものをいう。

正義 前世紀には、手続きが公正であればその結果として社会的な財がどのように分配されても正義は存在するのか、それとも正義とは何らかの「公正な成果」をとみなすべきなのか、という問題が大論争を招いたが、聖書的な観点から正義を論じると、この問題に一定の決着をつけることができる。最小国家を主唱したロバート・ノージック(Robert Nozick)をはじめとする政治哲学者たちは、前者を支持する立場を取っている。ノージックによると、正義とは、正しい手順を経て構築された正しい状況から生じるもの一切を指す(※8)。つまり手続きが公正でありさえすれば、その結果も正しいということであり、福音派信者の一部はこの説を擁護している(※9)。

ただし聖書の正義観を検証するには、多少なり

とも「正しい成果」に目を向けることも大切である。というのも一定水準の物理的、社会的幸福を達成するための手段が、誰の手にも入ること、あるいは少なくとも誰の手にも届くところにあることが必要だからである。このことは、正義と公正を意味するヘブライ語の単語や、神の大いなるあわれみが貧しい者に注がれるという聖書の教え、万人が生産の手段を持ち、誰もが自活し、共同体の一員として尊厳を持って遇されなければならないという聖書の思想、そして自活できない弱者については、共同体がその世話に当たるべきであるという強い主張にはっきりと現れている(※10)。

人間の権利 これと同時に同じ聖書の記述から、人間の権利は市民的・政治的であると同時に社会経済的なものであるという結論を導き出すことも可能である。聖書には、市民的・政治的な権利の大切さがはっきりと謳われている。法的手続きは透明かつ公正なものでなければならない。私的財産を持つ権利(もちろん絶対的な所有者である神の意志にかなっていないかもしれないが)は、聖書のどの箇所でも肯定されており、明確に是認されている。また聖書には、言論の自由や無記名投票、民主主義のプロセスについての直裁的な記載はないが、人間一人一人が持つ計り知れない尊厳と価値を尊重するならば、宗教と政治の自由、そして民主主義のプロセスが何にも増して重要であることは歴史が証明済みである。西欧社会が何世紀もの年月を経て聖書的価値観の下で形成されてきたことを考えると、市民的・政治的権利が西欧で大きな位置を占めているのはむしろ当然のことだろう。

これと同じくらいはっきりしているのは、万人が社会経済的恩恵を享受すべきであるという道徳観が聖書の基本理念に盛り込まれていることである。仕事、食物、医療、住宅等に対する権利を保障するのは誰の責任か(家族か、市民社会か、政府か)、

という問題はあるにしても、確実にいえるのは、聖書が分配的正義を擁護し是認すると同時に、社会経済的な人間の権利の大切さをキリスト教徒たちにはっきり訴えているということである(※11)。

政府と社会 聖書的な観点からいうと、政府というのは数ある重要な社会制度の一つに過ぎない。聖書の中で最初に語られている制度は、結婚と家族制度である。創造主は男と女を造り、ここに結婚と家族という神聖な制度が誕生した。エバが造られてはじめて、アダムの心は満たされたのである。かように結婚と家族という社会制度は、創造の秩序そのものの中に、原初の昔から深く根ざしたものである。政府という制度が聖書に登場するのはその後のことである。

イスラエルの歴史をひもとくと、様々な社会制度がゆっくりと生まれてきたことが分かる(※12)。大家族の長であったアブラハムの場合は、親と司祭と王の役割にはっきりとした線引きをすることは難しかった。しかし時代が進むにつれてイスラエルでは、家族とも政府とも異なる司祭と預言者という新たな制度が台頭する。またキリスト教が一民族の宗教から脱し、あらゆる部族、あらゆる国の民に広く信仰されるようになると、教会という制度が力を増し、国との間にはっきりと一線を画すると共に、ときに国と激しく対立するようになる。

時代の流れと共に、政府から独立した存在として新たな制度が続々と生まれ、社会制度は多様化の一途をたどるようになる。そして企業や組合といった独立した経済制度が力をつけると同時に、教育、文化、市民生活にかかわる多種多様な制度が、政府にほとんど依存することなく社会に根付いてゆく。

過去100年の歴史が残した教訓の中でも際だって明確なものがある。社会には国家以外にも重要な制度が数々存在するが、為政者がそうした国家の位置づけを認めず、全ての民を支配し、己の管

理下に置こうとしたとき、人間の自由と繁栄は失われてしまうということである。ナチスも共産主義的全体主義国家も、国家以外の独立した社会制度をことごとく破壊しようとしたために、人間の自由は大きく蹂躪されてしまった。これは、自らの姿に似せて創った人間が自由な繁栄を謳歌するよにとの創造主の思いを踏みにじる行為である。世界は罪に満ちているが故に、権力を一点に集中するのは危険なことである。また全体主義社会では、一人一人の人間が創造主の意に応じて自由を謳歌し、自らの意志で創造的に歴史を形成することができなくなる。こうした理由から、国家から独立した多種多様な社会制度の存在こそが、良い社会の絶対条件となるのである。国家や政府は社会とは別物である。

政府の権威の源 とはいえ政府が重要な存在であることは確かである。ただし政府の権威がどこに由来するかという問いに対して、聖書は近代的な契約論とはかなり異なる解答を用意している。契約論は、自然国家に暮らす主権者は他の自由な個人との間で任意に社会契約を結ぶことができるとしている。これに対して聖書には、政府の絶対的権威は個人が選択できるものではなく、神によって与えられるものであると記されている。

イエスはピラトに対してははっきりこう言っている。「あなたは、神から与えられたものでなければ、わたしに対してなんの権限もない。」(ヨハネによる福音書第19章11節)またパウロも「神によらない権威はなく、おおよそ存在している権威は、すべて神によって立てられたものである」(ローマ人への手紙第13章1節)と高らかに宣言している。人間は共同体を営み、互いに依存して暮らす存在として造られたため、人と人とを仲立ちする制度を必要としている。そして人間をこうした存在に造られた創造主こそが、統治権一切の絶対的な所有者なのである。

だからといって、人間が合意の上で憲法を制定・採択し、民主的選挙で統治者を選ぶことが取るに足りないことだというわけではない。また「人民が主権者」であり、政府の権威は民主的な自由選挙による人民の選択に委ねられている、という民主主義的な思想が間違いだというわけでも決していない。神が権威の絶対的な所有者であるというのは、あくまでも過半数による選択が必ずしも正義ではないという意味である。一切の統治権は神に帰属しており、神は「人民」と政府が正義を実践することを望んでいる。「政治的権威が人民ではなく神に帰属するということは、政府と人民のいずれも自分の意図するところを実行する権利を持たないということである。」(※13)

制限された政府 政府がその権威の及ぶ範囲と権力とに大きな制約を科さなければならない理由は、聖書の中で繰り返し語られている。

政府に対する制約の最たるものは、政府の権威はすべて神から授けられたものであるという神学的な一般認識に由来していると思われる。神は、国の行動はすべからく神の定める正義にかなっていないと主張している。だから私たちは、神の正義という高次元の法に訴えることによって、政府の下した決定に対し、いつでも異を唱えることができるのである。

イエスや初期の教会がローマ帝国の権力者に対して取った態度を見ると、神が絶対的支配権を持つという考えが、一切の世俗的権力を相対化し、否定していることがよく分かる。裁きの場に出たイエスはピラトに対し、ピラトの(そしてカエサル)の権威と権力は神から授かったものであるとはっきり伝えている。またパウロは、ローマ皇帝が自らを神格化しようとしたときに、皇帝は「神の僕」であると言い放っている。「パウロはローマ帝国の秩序を相対化し、皇帝の絶対的権威を否定して、皇帝は神の下に存在する僕であると言っている。」(※14)



どの時代のキリスト教徒も神への絶対的帰依を理由に政府の権限を制限し、世俗的支配者の権力をことごとく相対化してきたのである。

神は人を自由で創造的な存在として創造された。そして創造主の足跡をたどるために自らの意志で物質世界を形成し、歴史を築き、これまでに見たことのないものを作り出す使命を人間に託された。この使命を全うするためには当然政府の権限を制限することが必要になる。絶対的権力を持つ政府があらゆる決定を下すような社会では、こうした神の使命を実行することができないからである。

残念なことであるが現実には悪は遍在しており、それだけに政府の権限を制限することが重要性を帯びている。アクトン卿の「権力は腐敗する。絶対的権力は絶対的に腐敗する」という言葉が真実であることは歴史を見ても明らかである。罪深い人間は必ずといってよいほど、絶大な権力を意のままに操り自分の利己的な目的をかなえようとする。聖書には他者を抑圧した王や、強大な権力を持つ邪悪な治世の話があふれており(列王紀上第2章、レビ記第13章等)、力を持つ支配者の行為に警鐘を鳴らす記述もある(サムエル記上第8章11節～17節、申命記第17章14節～20節等)。政府の権限を大幅に制約してはじめて、国家による重大な悪行を回避する望みが生まれるのである。

最後に、他の社会制度(家族制度、教会等)が神の意志で造られたものであるという事実もまた、政府を制限することの必要性を訴えている。家族や教会は、国ではなく神の手によって造られ、神より、政府とは無関係にその責任を果たす自由と権威を与えられている。政府の権限が適正に制約されてはじめて、他の社会制度は神の意図した通りに社会に浸透することができるのである(※15)。

幸運にも民主主義社会は、憲法の下で三権(立法権、司法権、行政権)を分立させ、連邦政府、州政府、地方政府に幅広い分野で大きな裁量を与え、自由な民主的選挙を実施するなど、様々な

やり方によって「制限された政府」の実現に努めてきた。また多様な非政府組織の存在意義を尊重し、政府の介入を排すると共に、為政者は法に拘束されるべきであり決して法を超越してはならないとの認識の下で言論の自由、集会の自由、反対意見を述べる自由を認めてきた。この他にも色々なやり方によって私たちは制限された政府を実現してきたのである。

制限された政府の重要性が分かれると、私たち自身、社会問題の解決を政府にばかり頼る姿勢を改めなくてはならないことに気づくはずである。家族、教会、学校、企業、組合など、政府以外の制度も社会的問題を解決する義務を負っている。いかなるときでも私たちは、問題解決に一番適しているのはどの社会制度のどのレベルなのかということを考えてみなければならない。家族、宗教団体、企業、市民社会が一番頼りになることも往々にしてあるからである。

だからといって、公益に資することは政府の仕事ではないというわけではない。政府はコミュニティーの道具であり、私たちが造った社会的自然の一形態として人間の生活に本来備わっているものだからである。

また罪の存在も、政府の介入を必要とする。権力を持つ利己的な人物が本来他人に帰すべき生産手段を奪った場合は、当然政府が介入して不正を正さなくてはならない。またコミュニティーの人間や機関が困っている人たちに最低限の生活必需品を支給できない場合は、やはり政府が支援の手を差し伸べてしかるべきである。

もちろん政府は、コミュニティー内の他の組織—家庭や教会、社会的非政府機関、ギルド、組合等(※16)—が経済弱者への責任を果たせるように、こうした組織への働きかけや支援を行ってしばしば公益に貢献している。しかし非政府組織の力では社会の要請に十分応えられないこともある。間接的な対応では、効果的に経済的な不正を正

したり、弱者を救済したりできないのであれば、国家が直接行動を起こして正義を実現し、必要なサービスを提供するのは当然のことである。もちろんこの場合、非政府組織を弱体化するのではなく、その力を回復し、一層増幅させるようなやり方が求められることはいうまでもない。

福音派の公共政策宣言文策定の過程における重点事項

先に、福音派信者は聖書の規範的見解を土台に、綿密な社会分析を加えるべきだと考えている、と述べた。そこからは当然福音主義的な政治理念が生まれてくるはずである。そこで次に、福音派が新たに採択した宣言文「健全な国を目指して」の中で、福音派の政治行動の重点項目に位置づけられている七つの分野、すなわち信教の自由、家庭、人間の命の尊厳、貧者及び弱者への正義、人間の権利、平和、被創造物の保護について論じたいと思う。

福音派信者がこの七項目すべてを常に意識しているわけではない。しかし新しい宣言文には、福音派信者の政治行動は、聖書の中で神が重要視しているすべての項目に向けられなくてはならないことが、次のように明記されている。「聖書には、神が幸福な結婚、家庭、人間の命の尊厳、貧しい人たちへの正義、被創造物の保護、平和、自由、民族的正義を大いに気にかけておられることがはっきりと述べられている。」したがって「信仰深い福音派信者の政治行動は、聖書的バランスのとれた政策を擁護したものでなくてはならない。」

信教の自由 信教の自由は、創造主が神の命に従う自由と従わない自由をすべての人間に与えたことに由来している。こうした「福音多元主義(Gospel pluralism)」、すなわち万人に対する信教の自由の肯定こそが、米国の実験、そして憲法修正第1条の基礎となっているのである。

「政教分離」が意味するところは、宗教は単なる個人的、私的な習慣なので公共の領域から排除すべきであるということではない。およそ国民たるもの、信仰の有無を問わず、政治家に対して自分の信念を公の場で自由に発言できてしかるべきである(こうした信念は多くの場合、信仰に基づいている)。また政府が民間の業者を指定して公的資金による社会サービスの提供を委託する場合、宗教団体だけを除外することも間違っている。圧倒的多数の福音派信者が、ブッシュ大統領の信仰に基づく政策を支持している理由もここにある。

家庭生活 「創世記から一貫して、聖書は、家庭こそが神の理想とする人間社会の要であると訴えてきた。一人の男と一人の女が生涯にわたって結ばれる結婚は、神と人間との関係の比喩として聖書の中で何度も繰り返して述べられている。人と人とが助け合い、お互いに支え合う家庭生活は、個人の自由と権利ばかりを主張するごく最近の風潮の対極にあるものである。」福音派信者は、まともな社会の中心には必ず安定した健全な家庭があると考えている。健全な家庭生活を実現する責任を担うのは主として宗教社会であって、政府ではない。ただし「政府には、家庭の幸福を増大するための法律や政策を実施する責任がある。」

「良い家庭生活は健全な人間活動にとって大きな意味を持つため、私たちは、政府が本来の領域を越え、親に代わって子供を教育したり、普通とは異なる形態の世帯を社会的、法的に家族と同等のものとして扱ったり、結婚の意欲を損なうような経済措置を打ち出したりすることに反対する。」

また福音派信者は同性「結婚」のような急進的な動きにも反対の立場をとっている。

人間の命の尊重 「神は自らの姿に似せて人間を造られた。つまりすべての人間は神聖な尊厳を共有しているのである。また聖書には、神が誕生以



前の人間にも心を留めておられると記されている（詩篇第139章13節）ことから、胎児にもこの尊厳は備わっていると考えるべきである。」つまり、中絶、安楽死、そして反道徳的な人体実験はすべて神が人間に与えた尊厳を汚す行為なのである。「人間の尊厳は不可分である。老人、幼児、胎児、障害者、あるいは遺伝病患者に脅威を加えるということは、全人類に脅威を加えるのと同じことである。」したがって、人間のクローン作りや胚幹肝細胞の研究を受け入れることはできない。

貧者及び弱者への正義 「神は貧しい者に共感され（詩篇第146章5節～9節）、「弱者をあわれむ者は主に貸す人」（箴言第19章17節）、「弱者を虐げる者はその造り主を侮る」（箴言第14章31節）と言われた。またイエスは、困窮している者や獄につながれた者を省みない者は、生ける神から永遠に分かたれるであろうと言われた（マタイによる福音書第25章31節～46節）。弱者の内には貧しい者だけでなく、女性、子供、老人、障害者、移民、難民、マイノリティ、迫害を受ける者、獄にいる者も含まれるであろう。神は、社会が底辺の人々をどのように遇しているかによって、その社会の良し悪しを判断されるのである。」

神は正義を求められている。正義とは「公正な法制度（貧しい者、豊かな者のいずれにも偏っていない制度）と公正な経済制度（永続的な貧困を許さない制度）の両方を意味する。聖書は「機会均等のために力を尽くすよう私たちに呼びかけている。神はすべての人間、すべての家庭が生産手段を手に入れること、そして各人がきちんと責任を果たしさえすれば、自ら生計を立て、社会の一員として尊厳を持てるようになることを望んでおられる。」「私たちは、政界で活動するキリスト教徒たちが、富の創造、賃金、教育、税金、移住、医療、社会福祉にかかわる優れた法を制定し、貧困にとらわれた人たちを守るとともに、貧しい人たちを力づけ

て生活水準の向上に尽力することを願う。」

貧しい人たちへの配慮は、米国の対外政策及び貿易政策にも盛り込まなければならない。「私たちは指導者に働きかけて、貧しい人たちを虐げる貿易のあり方を変えると共に、世界の貧困問題の解決を米国の対外政策の中心課題としなければならない。」

人間の権利 「神が自らの姿に似せて人間を造られたということは、人間は神より権利と義務を授かったということである。この責任を果たすためには、組織を作り、自分の意見を形成して表明し、良かれと思う目的のために行動する自由が必要である。」

「健全な国を目指して」には社会経済的権利についての具体的な言及は盛り込まれていないが、次のような一文が含まれている。「肉体を持つ生命という神の贈り物を受けた人間は、食物、世話、住まい、保護を必要とする。」「快適な暮らしを送るために必要な条件をすべて整えることは、政府の主たる役割ではないが、政府は、人々がこうした条件を不当に奪われることがないように目を配り、家庭、学校、企業、病院、社会サービスの提供機関等の組織が国民の幸福に資することができるように、その力を強化する義務を負う。同時に政府は、国民一般の福祉の実現に努め、公益を促進する責任を果たさなくてはならない。」

米国の対外政策は、人権を尊重し、民主主義と市民社会を擁護し、改宗する権利も含め信教の自由を標榜する国に報いるものでなくてはならない。「言論の自由と集会の自由は信教の自由と密接に関わっている。拷問などの報復行為を受ける心配なしに、各人が正しい社会秩序についての持論を自由に表現できる社会でなくてはならない。」

平和 この宣言文は、人を殺すことの是非をめぐって福音派信者の間で意見が分かれていることを

認めている。福音派信者の大部分は聖戦支持の立場をとっているが、人を殺すことに全面的に反対している者も少ないながら存在する。政府はいかなるときも「徹底した非暴力を貫いて平和に至る道を歩み、武力に訴えるのはあくまでも最後の手段とすべきである。もし政府が武力を行使するのであれば、それは平和を目的とする場合に限らねばならず、決して国益のためだけに武力を用いることがあってはならない。武力行使は伝統的な聖戦の原則に指針を求めるべきである。」

イエスを信仰する者は、地域で、国内で、そして国際社会で、平和の実現に尽力すべきである。「イエスに従う者として私たちは、市民としてできる範囲で対立の緩和を目指し、国際理解を促進すると共に非暴力的な手段で紛争解決に努めなくてはならない。」

被造物の保護 私たちが敬うのは創造主であり、被造物ではない。神は人間を神の被造物の所有者ではなく、その番人として位置づけ、この地球を見守り、管理する役割を託された。目標は持続可能性の達成であり、政府は環境破壊から国民を守ると共に、「燃料の効率的利用、汚染の緩和、天然資源の有効活用を呼びかけ、野生生物とその自然の生息地を適正に保護しなければならない。」

米国の福音派の政治の問題点

最後に若干の苦言を呈したい。理想を完璧に実現できる共同体はどこにも存在しない。米国の福音派社会も例外ではない。

過去20年間、米国の福音派教会は「健全な国を目指して」が掲げる目標よりもずっと狭い範囲の政治課題にかかり切りになっており、中には中絶、家庭、同性愛等の限られた問題だけに絞って政治行動や採決が行われる場合もあった。ところが今では、中絶に反対しながら貧しい者の保護を訴え、伝統的な家庭のあり方を擁護しつつ民族的正義

の実現に努め、結婚の大切さを説きながら被造物の保護を推進するという従来よりも幅広い取組が「聖書的バランスのとれた課題」として台頭しつつある。

今日の米国では、あまりに多くの福音派信者が、神と国家を同一視するナショナリズムを無批判に信奉し、大統領の宣戦布告を疑いもなく受け入れている。米国は神によって選ばれた特別な国であり、米国が「悪」と名指す敵から世界を救う重大な使命を担っているという傲慢な思い込みが、昔も今も米国社会には深く根付いている。この点についても新たな宣言文は、これまでよりも高尚な神学理論に裏付けられた謙虚なアプローチを打ち出している。

「キリスト教徒として私たちは、忠誠を誓うべき相手はキリストとその王国、そして世界中のキリスト教社会であって、特定の国家ではないことを認める。神は米国に豊かさや強さという恩恵を賜った。しかしこうした恩恵が万人の幸せのために役立てられることがなければ、私たちを待つのは破滅である。キリスト教を信仰する米国国民として私たちは、米国の社会と政府が自己破滅の道をたどらないよう、両目を大きく見開いていなければならない。また自然な愛国心を抱く一方で、世界中の人々に対する愛情と彼らの繁栄を積極的に願う気持ちのバランスを取らなくてはならない。私たちは米国以外のキリスト教徒の助けを得て、もっと広い視点から米国の生活と行動を見つめたいと願っている。」

これまで政治に携わってきた福音派信者たちは、神学的、あるいは政治経済的な内省をあまりにも怠ってきた。ジェリー・フォルウェル率いる「モラル・マジョリティ」で数年間副議長を務めたエド・ドブソン（Ed Dobson）は、後年当時の様子を振り返り、自分たちがやったことは「構え、打て、狙え」式の本末転倒な行動だったと述懐している。また米国福音派社会で屈指の名声を誇る歴史家、マーク・ノル（Mark Noll）教授は、福音派の政治活



動では感情と直感ばかりが重視されていて、政治行動を体系的に振り返る作業があまりにも蔑ろにされていると嘆いている(※17)。

また20世紀を代表する社会正義のための闘いにおいても、米国の福音派信者の存在感はきわめて希薄である。マーチン・ルーサー・キング牧師率いるかの公民権運動の場にも、福音派の姿はほとんど見られず、また女性の尊厳を全面的に肯定し、被造物(環境)を保護する運動でも福音派は遅れを取っている。ただし過去10年間でこうした分野に大きな進展が見られたのは幸いなことだといえる(未だに十分とはいえないが)。

最後に、米国福音派の大多数は、歴史の終焉についてのある種の終末論的思想と、そうした筋書きの中でユダヤ人が果たす役割を信奉するあまり、一方的かつ無批判にイスラエルを擁護し、パレスチナ人に対する正義をまったくといっていいほど蔑ろにしている。米国の福音派の中には、パレスチナとの交渉にさえ異議を唱え、「二国家共存」路線を否定する者までいる。ただし福音派信者の大部分は二国家共存を支持しており、イスラエル人とパレスチナ人双方にとって、正義と平和と安全が実現することを願っている。

これほど奥深く複雑な問題を20分間で語り尽くすことは到底不可能であるが、ひどく誤解されながらも米国社会の一大勢力となっている福音派について多少なりとも理解を深めていただくことができれば何より嬉しく思う。

1) 米国福音派については、Christian Smith, *American Evangelicals: Embattled and Thriving* (Chicago, University of Chicago Press: 1998) はじめ、John Green, James Guth, Corwin E. Schmidt, Lyman A. Kellstedt 等による多数の優れた著作がある。特に *Religion and the Culture Wars* (Lanham, MD: Rowman & Littlefield, c. 1996)、*The Bully Pulpit: The Politics of Protestant Clergy* (Lawrence, KS: University Press of Kansas, c. 1997) は秀逸。また John C. Green, Mark J. Rozell and Clyde Wilcox, eds., *The Christian Right in American Politics* (Washington: Georgetown University Press, 2003) も参考になる。

2) Ronald J. Sider and Diane Knippers, eds. (Grand Rapids: Baker, 2005)

3) とくに記載のない限り、引用文はこの宣言文から取ったものである。

4) このセクションは「福音主義的公共政策に向けて：健全な国のための政治的戦略」の中で筆者が執筆した章をベースにしている。

5) Joan O'Donovanの論文 “Rights, Law and Political Community: A Theological and Historical Perspective,” (*Transformation*, January, 2003, 30-38) には、近代的、現世的な人権思想とはっきり一線を画する人権論が述べられている。

6) Stephen Mott and Ronald J. Sider, “Economic Justice: A Biblical Paradigm,” in *Toward a Just and Caring Society*, ed. David P. Gushee (Grand Rapids: Baker, 1999), Chapter 1より。

7) 以下に続く数段落は、Mott と Sider の論文を引用。

8) Karen Lebacqz, *Six Theories of Justice: Perspectives from Philosophical and Theological Ethics* (Minneapolis: Augsburg, 1986), p. 73.

9) たとえば、Ronald H. Nash, *Freedom, Justice and the State* (Lanham, MD: University Press of America, 1980), 43-75; Doug Bandow, *Beyond Good Intentions: A Biblical View of Politics* (Westchester, IL: Crossway Books, 1988), 87; E. Calvin Beisner, *Prosperity and Poverty: The Compassionate Use of Resources in a World of Scarcity* (Westchester, IL: Crossway Books, 1988), 54. など。ただし、こうした福音派信者はいずれも「キリスト教徒は貧しい人々を助けるべきである」という認識を持っている。意見が分かれているのはあくまでも政府の役割についてである。

10) 詳しくは「福音主義的公共政策に向けて：健全な国のための政治的戦略」の中で筆者が担当した “Justice, Human Rights and Government” を参照。

11) 米国カトリック司教 (the U.S. Catholic Bishops) (the discussion in Hollenbach, *Claims in Conflict*, pp. 66-67 and Lebacqz, *Six Theories of Justice*, pp. 74-75) 及び世界改革派教会 (Reformed Ecumenical Synod) the Reformed Ecumenical Synod, *RES Testimony on Human Rights* (1983), esp. 151-52. でも同じ主張が展開されている。

12) Paul Marshall, *Thine is the Kingdom* (Grand Rapids: Eerdmans, 1984), 43-45.

13) Marshall, *Thine Is the Kingdom*, 42.

14) *Ibid.*, 48-49

15) たとえば Helmut Thielicke, *Theological Ethics: Politics* (Grand Rapids: Eerdmans, 1979), 250 参照。

16) 国家は集団間の相互支援の過程を形成する。(Reinhold Niebuhr, *The Nature and Destiny of Man. Vol 2: Human Destiny* [New York: Scribner's, 1964], 266).

17) *The Scandal of the Evangelical Mind* (Grand Rapids: Eerdmans, 1994) 第6章を参照。

「選ばれた者」と「選ぶ者」：一神教的多元主義 —そのユダヤ教的源泉とアメリカにおける様態

ボストン大学
ヒレール・レヴィン
Hillel Levine

師と仰ぐ京都の故オオツキ・タケジ神父
を偲んで

川のほとりで…

答を求めるなら、その前に問いを知らなければなりません。ユダヤ人といえばすぐに「選民」という言葉が思い浮かびますが、選民思想抜きにはユダヤ人と神との関係を語れないという解釈は正確さを欠いており、悪くすればユダヤ人差別にもつながりかねないものです。この思想がユダヤ教古来のものでないことは、古典ヘブライ語に「選民」そのものに相当する単語がないことから明らかです。確かにユダヤ人と神の関係は特別なものであるという思想には根強いものがあります。しかしいくつかの側面が見過ごされていることもまた事実です。ユダヤ人を肯定的に受け入れ、選民思想を好意的に解釈してくれる非ユダヤ系の人々でさえ例外ではありません。実は神との間に特別な関係を結んだ故に、ユダヤ人は特権よりもはるかに多くの義務を背負わされることになったのです。ユダヤ人は、他の民よりも厳しい基準の下で神の審判と裁きを受けなければなりません。そのため往々にして神の期待に添うことができず、罰を与えられてきたのです。現にホロコースト以後は、多くのユダヤ人が「最悪の敵」というときと同じ皮肉を込めて「選民」という言葉を口にしています。現代のユダヤ文学にも、正にこの点に対する神への抗議と反逆が様々な形で表現されています。「おお慈悲深き神よ、我らに賜った慈悲と選民の地位

を、別の民に与えたまえ!」。

しかしおおもとである聖書に示された選民思想についてよく調べると、一つ明らかになることがあります。神がユダヤ人を選んだということは、ユダヤ人が神を選んだことに他ならないということです。ユダヤ聖書の系譜によると確かにアブラハムは最初のユダヤ人ではありませんが、決して最初の人類ではありません。この事実を基に、次に「ユダヤ教における多元主義のルーツ」という問題について考えてみたいと思います。人間が唯一無二の存在であるとする文献は多々ありますが、中でも聖書はその序章ですべての人類が同じ起源を持つと述べています。宗教、国、背景の違いを問わず、すべての人間は「神の姿」に似せて創造されました。しかし個人は生まれ落ちた瞬間から、この世に二人としない唯一の存在です。このことは多元主義を擁護する揺るぎない根拠であり、人間の起源や系譜をテーマとした他の文献と聖書との違いを際立たせています。

アブラハムが神を見い出したことは、ラビ文学の中心テーマとなっています。アブラハムは神の声に積極的に応じ、「選ばれた者」そして「選ぶ者」として神との間に相互の契約を結びました。シナイ山に集まったその子孫たちも、自ら進んで神の声に答えています(「わたしたちは主が仰せられたことを皆、従順に行います」)。ユダヤ人が「祭司の国、聖なる民」であるとするならば、それはただ神に盲従したからではなく、彼らがたゆまぬ努力を続けた結果でした。またイザヤ書第2章に美し



く謳われているように「主の家の山」がユダヤ人の住む土地に存在し、「すべての国はこれに流れて」くるのであれば、ユダヤ人が神に選ばれ特別な地位を与えられたのは、彼らがすべての国の民を温かく受け入れ「律法と、エルサレムから出る主の言葉」を共有する寛容さを持っていたからに他なりません。この部分にも、よそ者を転向させようとする姿勢ではなく、調和と多元主義への傾倒が感動的に謳われています。

しかしここではユダヤ人が歴史の中で体験したある事件を取り上げて、ユダヤ人が選民意識と多元主義を信奉するようになった過程を考察したいと思います。詩編137編には、紀元前586年にエルサレムの神殿を壊され、バビロンに強制移住させられたときのユダヤ人の悲しみが次のように描かれています。

「われらはバビロンの川のほとりにすわり、シオンを思い出して涙を流した。われらはその中のやなぎにわれらの琴をかけた。われらをとりこにした者が、われらに歌を求めたからである。われらを苦しめる者が楽しみにしようと、『われらにシオンの歌を一つうたえ』と言った。われらは外国にあって、どうして主の歌をうたえようか」

これほど感動的な言葉でつづられた一民族の悲劇に思いを馳せたとき、神の被造物を愛するものなら誰でも強く心を動かされずにはいられないでしょう。これは一神論の形成について語る上で、創世記の天地創造の物語や、ユダヤの神が天上に戻られると同時に「アダムの子どもたち」に与えた地に「足台」と「聖なる家」を求められたことと同じくらい大きな意味を持つ出来事です。同じように、イスラエルの神を至高のものとするために、諸外国の神々や自然界に存在する力と闘ったという聖書の記述にも、一神論の形成に至る過程をはっきりと読み取ることができます。ユダヤの民は、バビロンの川のほとりで悲しみ、苦難の日々を送る中でもイスラエルの神を見捨てず、神も民を見

捨てませんでした。ユダヤ人が選んだのは、ヨブ記に書かれたように「神をのろって死ぬ」ことではなく、その正反対のことでした。ユダヤ人はバビロン人の崇める強い神々に心を奪われることもない代わりに、自分たちを守ってくれなかった神を悪魔の地位に貶めることもしなかったのです。征服されたイスラエルの神は、シオンの神としてではなく全世界の神として、紛れもなく今も至高の存在であり続けています。やがてユダヤ人は外国の地でも主の歌を歌うようになりますが、その背景にはシオンとエルサレムに対する揺るぎない帰依の心があります。こうした神の一体性と無限の力に対する信頼があるからこそ、ユダヤ人は民族の離散後も世界の各地に定住し、その身に迫害が及んだ時代を除き、ユダヤの文化を花開かせることができたのです。

ニューアムステルダムの川のほとりで…

バビロン捕囚からおおよそ2240年後の1654年、選ばれた者にして選ぶ者、一神教信者にして多元主義の擁護者であるユダヤ人が再び座って涙を流す場面が訪れます。1492年、ユダヤ人はスペインにあった当時最大のユダヤ人コミュニティから追放され、以来各地を流浪する生活を強いられました。定住の地を見つけたと思っても、たいていは短期間で別の場所への移動を余儀なくされ、迫害と追放が繰り返されました。失われた故郷、多文化が息づいていたアンダルシアへの思いは、昔日のシオンの栄光を偲んだ先祖たちと同じくらい痛切なものでした。1654年のある日、追放されたユダヤ人の子孫23人が、カトリック教徒によるレコンキスタと宗教裁判のために強制移住させられていたブラジルのラシフェから(ニューアムステルダムに)逃れてきました。ハドソン川を遡る一行の思いはいかばかりだったのか、私たちにはただ想像するしかありません。冷血漢として知られたオランダ西インド会社のピーター・スタイブサント(Peter

Stuyvesant) 総督は「ユダヤ人たちにはこの地を去るよう穏便に求めるのがよいだろうと判断」しました。「冬を迎え、彼らが重荷になる」ことを懸念したからです。スタイブサントは本国アムステルダムの上官に対して次のように具申しました。「かかる不実な民族、憎むべき敵にしてキリストの名を冒瀆する輩が、我らが植民地にこれ以上悪影響と混乱を及ぼし、閣下の名誉を損ない、閣下を敬愛する民の離反を招くようなことがあってはなりません」。ところが上官の返事はスタイブサントのまったく予期しないものでした。上官は「ユダヤ人の悪影響」は植民地にとって好ましくないとしながらも、次のように伝えてきたのです。「(ユダヤ人を追い出すことは)道理と公正さを欠く措置ではないか。とくにブラジルが奪取されたために我が国はじめ諸外国が膨大な損害を被っており、またユダヤ人が我が西インド会社の株式に巨額の資本を投資していることを考えるとなおさらである」。こうして、ニューアムステルダムに逃れてきたユダヤ人たちはこの地に留まることを許されました。その背景には公正を重んじる態度と現実的な損得勘定、西インド会社に投資している多数のユダヤ人に対する配慮に加えて、「ユダヤ人なら自分の生活くらい自分で何とかするだろう」という判断がありました。後に人種のるつぼとなるこの社会でユダヤ人が市民権を得るようになったのも、正にこうした資質のお陰でした。ユダヤ人は広大な社会で創造的役割を担い、万人のために人的、社会的、経済的資本を提供しています。そして自分の生活の糧は自分で稼ぎ、他人の重荷にならないよう意識して努めているのです。

米国の川のほとりで…

それから250年後、ニューヨーク港の波にもまれるユダヤ人の姿が、添付の木版画に刻まれています。ユダヤ人たちは古き良きシオンの思い出にふける一方で、ユダヤ民族を待ち受ける数奇な運命

を予感していました—これから先は外国の地であろうとなかろうと、自分たちは高らかに朗々と主の歌を歌いあげるだろう。植民地時代に米国に移住したユダヤ人は、数こそ少な目だったものの、やがて社会にしっかりと根を下ろしました。清教徒たちは自らの体験を「エジプトの肉のなべから離れ」、大河を渡り、「荒れ野をさまよい」、「約束の地」に至り、「山の上に町を建てる」という聖書の記述と重ね合わせました。生まれて間もない若いアメリカ共和国では聖書に由来する地名が次々と誕生し、国民の中にも聖書にちなむ名を持つ者が大勢いました。米国人こそ新しいイスラエル人であるという信念は、当時米国に暮らし、イスラエル人の直系の子孫を自認していた小数のユダヤ人にも共通のものでした。離散の歴史を重ねてきたユダヤ人は、米国に移住してきて初めて故郷を手に入れたのです。その後1848年を境にドイツからの移民が増え、1881年以降は東欧から大量のユダヤ人が移住する中、米国ユダヤ人の共同生活は内面的にも外面的にも複雑さの度合いを増してゆきました。この木版画は1904年から1905年頃のもので、Sidurという祈祷書の冒頭のページを飾っています。ユダヤ人が再び「座って涙を流し」ている様子が何と感動的に描かれていることでしょう。彼らが心に思い描くのは、(ユダヤ人に対する差別や暴力が徐々に激しさを増し、もはや安全な地ではなくなった)東欧でのかつての楽しく創造的な暮らしであり、ユダヤ人の故郷であるシオンでした。今シオンの地を開いているのは、神殿が破壊された後もその地に留まり続けた誇り高きユダヤの子孫たちであり、その背景には、19世紀後半から20世紀初頭にかけて世界中で台頭した民族解放運動に連なる新たなシオニスト運動がありました。木版画に刻まれた顔— 敬虔な父親、恍惚とした表情を浮かべる母親、そして元気で好奇心に溢れる子どもたちの顔— は、私たちに何を語りかけているのでしょうか。何世代にも渡ってユダヤ人たちが大切にしてきたこ



の絵は、選ばれた者と選ぶ者のあり方が多様化し、米国で一神論と多元主義が発展することをはっきりと予見しています。一つだけ確実に言えることがあります。米国を象徴する自由の女神に似た像と、新しくこの国に渡ったユダヤ人移民に捧げられた詩編の二つの詩は、まったく同じことを言っているということです。ユダヤ人は米国に値し、米国はユダヤ人に値するのです。

ここまでは割当て時間のほとんどを使って選民思想と多元主義という問題を歴史的視点から細かく検証してきましたので、次に米国の現状について少し述べたいと思います。構造的多元主義と原理的多元主義には違いがあります。異なる宗教や民族が混在する社会に暮らし、独自の文化や価値観を指針に様々な集団の間を渡り、志を同じくし最も安心感を抱ける集団を見つけて共に理想を追究し、コンセンサスを形成してゆくことは、ユダヤ人のみならず他の民族にとっても決して初めての経験ではありません。米国が初めて経験しているのは、多元主義、すなわち集団に属するか否かを選択する個人の自由を損なうことなく、すべての集団に表現の自由を保証するということです。政府は慈善事業に対して税金の控除を認めるなどして、こうした原理的多元主義を一部擁護してきました。「信仰に基づく」社会福祉活動に公金を投じるという政府の決定が議論を呼んだことは記憶に新しいところです。憲法の定める「政教分離」条項は、ほとんどの米国人の中に今もしっかり根付いています。これに対してたとえば政教分離を定めていないヨーロッパの国では、教会になど絶対に行きそうもない不信心者でも、政府の税制により、教派主義を維持するための費用を強制的に負担させられます。こうした制度は米国人にとって大変理解しにくいものです。それと同時に、啓蒙思想を生み出し、かの革命を成功させたフランス人の子孫が、こともあろうにフランス国内(の公立学校)で、イスラーム女生徒のスカーフ、キリスト教の飾り、シ

ーク教やユダヤ教男子生徒の帽子の着用を禁止しているのも不思議な話であり、憤りさえ覚えます。確かに「タウン・スクエア」(the Town Square)で行われていることの是非をめぐっては、今も国内で議論されていますが、政府がその費用なり電気代なりを負担しないのであれば、キリスト生誕の像やメノラ(ユダヤ教の祝いに使う燭台)などの宗教的なシンボルが広場を飾るのはむしろ当然のことであり、それはそれで多元主義と個別主義が共存していることの証なのではないでしょうか。価値観の向上なくして、民主主義の規範的秩序の浸透はありえません。こうした価値観には、伝統的な宗教に源を発するものも含まれています。同時に自由民主主義の下で政教分離を徹底することも必要です。多元主義と世俗主義は表裏一体です。1648年にウエストファリア条約が締結されたのを機に一世紀に及ぶ宗教戦争は幕を閉じました。それ以来、流動的ではあっても、規範と価値観を区別することは良い統治、とくに民主主義の礎であるという認識が一般的になっています。公共の広場にいろいろな宗教のシンボルが飾られるということは、私たちの政府が世俗主義的であるということです。「全体主義的」統治の中ではいかなる宗教も繁栄を謳歌できないからです。

米国のユダヤ人は今、ボランティアズムの新たな台頭と、多元的な宗教的、精神的価値観が拮抗する市場への適応を迫られています。ユダヤ人は市場のメッセージに精通していたはずですが、そのメッセージを利用して、米国のサブカルチャーに自由に違和感なくとけ込んでいる同胞を結集させ、「より大きく、より良くなること」によってその存在感を増すことができるようになったのは、ごく最近のことでした。

また米国の政治や社会を舞台に活躍しているユダヤ人が、ユダヤ人であることも含め複数のアイデンティティーを保ち、イスラエルへの強い愛着を維持続けることができるようになったのも、ここ最

近の新しい傾向です。様々な意見やロビー活動を自由に展開できる社会において、一部の米国人が「ゼネラルモーターズにとって良いことは米国にとっても良いことだ」と言うのなら、米国のユダヤ人が「イスラエルの利益は米国の利益につながる」という信念を持ち、そのために行動することも許されるはずです。「左派リベラル」や「ネオコン」の立場からこうした発言をする人もいるでしょう。ただし昔でいうならベトナム戦争反対派、今でいうならネオコンの大半がたまたまユダヤ人だったからといって、彼らがユダヤ人全体の意見を代表しているわけでは決してありませんし、ましてやシオニストの陰謀のために働いているわけでもありません。民主主義の存在や、現代人のアイデンティティーがクモの巣のように複雑な帰属意識によって形成されているということも含め、その論証はいくらでも可能です。ただ米国の利益は、豊富な油田をしっかりと押さえることから、リベラルで多元的な民主主義を浸透させることまで多岐に渡っています。これはイスラエルについてもいえることで、その国益は、領土の安全保障を確保することから、これまでの政策を方向転換して隣国との間に新たな形の平和を構築することにまで及び、そのすべてが複雑に絡み合っています。すべての米国人にはかつてのシオンを思って涙を流すだけでなく、それを擁護する権利があります。外国系米国人は、たいていどの集団でも、立派な米国人とみなされているのですから。

こうした点一つ一つについて細かく論じるのはまた別の機会に譲ることとし、ここでは次の点を指摘したいと思います。かつては「プロテスタント、カトリック、ユダヤ教」の三本柱が米国人の精神生活をしっかりと支えていました。今必要なことは、多元主義という考え方を広く浸透させることです。最近の米国社会では、この三つ以外にも多くの宗教が存在感を増しつつあり、数式的にも政治的にも無視できない力となっています。イスラーム系米

国人、アラブ系米国人、キリスト教徒をはじめすべての国民が多元主義の名の下に集い、国をあげての対話に参加することが大切です。イスラーム世界を中心とするテロリズムの台頭、そして9月11日に続く悪夢の日々は、世界を一変させました。今こそ米国人は、恐れと苦痛の記憶を希望と信頼の記憶に転換させなくてはなりません。米国人が本来生まれ持つ、人を信頼する気持ちが今やすっかり蝕まれており、その結果、一神論と多元主義の意味が大きく問い直されているからです。

深刻な問題はもう一つあります。ここ京都に集う私たちがとくに関心を持つべき問題です。私たちの掲げる新多元主義は本来一神論を念頭に置いたものですが、同時に一神教以外の宗教を信仰する世界何億もの人々にも間口を広げることが必要です。ではユダヤ教徒はこうした新たな状況のためにどのような貢献ができるのでしょうか。京都や伊勢の美しい寺院を訪れ、ヴァラナシやシェムリアップやバンコクで宗教行事を見学しながら、私の頭の中ではある聖書の言葉がぐるぐる回っていました。それは「shaketz teshaktseno」(あなたはそれを全く忌みきらわなければならない)というものです。私が今この地にいるのは、そして過去15年に渡り私の人生にとって日本がこれほど大切な存在になったのは、一つにはこうした精神的、美意識的葛藤に向き合うためだったからだと思うのです。

この会の本来のテーマは信仰です。そこで私はここに二つの信仰宣言を表明し、時間の許す限り、宗教の枠を越えてこの精神を広めてゆきたいと思っています。「ユダヤ教は唯一神を信仰する一方で、仏教、神道、ヒンズー教はじめ信仰と平和を擁護する世界の多くの宗教と連帯できるはずである」。「米国的多元主義の間口をさらに広げ、米国で誕生した新しい数多くの集団と、バビロンの川のほとりに座り、外国の地で主の歌を歌うことに心を痛めた記憶をその中に包含すべきである(なお



象徴的な意味でも文字通りの意味でも、『イラク戦争という苦難のときに』という一節をここに付け加えたいと思います)。2001年9月11日以降の恐怖と痛みを、米国は克服するでしょう。そして米国人が本来持つ優しさと正義感が世界に浸透するでしょう。信仰する宗教を問わず、すべての米国人が、日本はじめ「同盟国」の人々と手を携え(その日本に対し、今米国はイラク戦争への支持を求めているのです)、政情不安、飢え、病に苦しむ世界の各地に飛び出して行き、より良い世界をつくるために協力するでしょう。これこそが私たちの選んだことあり、私たちが選ばれたことの意味なのです。

危機の時代における不協和音—アメリカの「宗教政策」がアラブの自己認識と他者認識に与える影響

アジア・アラブ・メディア・ネットワーク東京
モスタファ・レズラーズィー
Elmostafa Rezrazi



Part I

A はじめに

この発表の中で、私はムスリムの世界と西洋が、愛情、憎しみ、感謝、屈辱に基づく非常に複雑な関係、つまり、同胞であり敵であるという、かなり込み入った関係を、どのように築いているかという問題について検討してみようと思います。

私たちのテーマに関係する、他の問題についても話す予定です。主に、どのように、なぜ、政治が宗教的信条に影響し、どのように宗教的信条が政治に影響するかという問題を取り上げます。但し、私の行う分析はイスラーム社会に根ざす私の文化的背景にのみ基づいているわけではありません。私は、文化と信仰においてはムスリムで、人種においてはベルベル人、そしてアイデンティティと言語においてはアラブ人です。しかし、私はまた、複数の文化で学際的な教育を受けてきた人間でもあります。ですから、私の見解は純粋なものではありません。つまり、アルチュセール(Althusser)が比較した、顕在的テキストと潜在的テキストとの違いです。潜在的テキストとは、顕在的テキストに欠落、歪曲、沈黙、不足が加わった結果のことです。潜在的テキストは、問うて答えるべき疑問であるのに、まだ問うことができていない疑問に対する「奮闘の日誌」なのです。

私たちのテーマに関係のある、いくつかの質問をはっきりと提示にすることから始めさせてください。これらは、私たちが明確に、かつ認識論

的に議論を進めて行くのに役立つと思われる質問です。

1. 宗教の影響とは何か。誰が誰に影響を与えるのか。どのような方法で。どれぐらいの時間で。どのような状況においてか。
2. それは私個人への影響か。それとも、私の宗教への影響なのか。私の礼拝の仕方に影響するのか。それとも、私の聖典の読み方にか。
3. イスラームとは、何を指すのか。人か。地理的に見た中東なのか。それとも、社会政治的動きを指しているのか。
4. その影響を測るのに、どのような方法論的手段を用いることができるのか。

B 衝撃：深い影響

アメリカが政治的に世界を管理することの影響により、中東は大きな被害を受けてきました。地理的な地域としての中東、また、その人々と文化としての中東のいずれも被害を受けました。私が挙げるいくつかの例が示すように、中東はアメリカの政策の執拗な介入によって苦しめられ、それにより、人々の反応の仕方、考え方、そして、行動の取り方に深い影響があり、様々な反応が結果として起こりました。

イランの人質事件から湾岸戦争、世界貿易センタービルの爆破、及びアフガニスタンとイラクでのアメリカによる戦争まで、アメリカのメディアは、「イスラーム」を一枚岩であるかのように、また、テロリズムと同義であるかのように描いてきました。この

問題に関しては、この他の発表にも関連があるかもしれませんが、アメリカの影響を三つの主要な事例に分けて、検討することが大切です。

事例(1): 少数派への影響

アメリカ人ムスリムの研究者たちが示しているところによると、9月11日以降、アメリカ人ムスリムの反応は非常に感情的なもので、アメリカという国に自分たちが同化していけるのかという懸念に、心理的に支配されていたということです。アメリカの政府省庁、各種メディア、その他の機関が、アメリカ人ムスリム・コミュニティの奥底にある自己評価に影響を及ぼし、一部のアメリカ人ムスリムの身体的イメージとボディランゲージを変えてしまったのです。このように奥の深い影響というのは、歴史を見てもめったに起こらないことです。

2001年9月11日の同時多発テロから3年が経ちましたが、アメリカ人ムスリムは生活のあらゆる側面で差別を受けています。イスラームに対する認識を高めようというコミュニティぐるみの試みもありますが、依然として、国の多くの場所で情報の普及にギャップがあります。

多くの人は、9月11日がすべてを変えてしまったと言っていますが、私はこれを違った角度から表現することを提案します。実際は、米国内外の様々なコミュニティの考え方というのは、9月11日によって変わってはいないのです。実際は、反応の仕方、つまり、人々が自らの世界観を表現する方法が変わったのです。見る目は同じですが、眼鏡が変わったのです。9月11日によって、各文化の無意識の部分が露呈され、裸で光に晒されて汚れて見えるようになりました。これ程までの透明性というのは、非常に精神病的で、公正さに欠けるものです。

表面に現れたのは、予断であり、イメージであり、移り変わる幻影のような認識で、それぞれの文化とサブ文化の中にあるものですが、隠されている

か、少しだけしか表現されず、恥とされているものです。なぜなら、外交的「礼儀正しさ」や文明間の対話という基準では、それらは許されないことだからです。

事例(2): クルアーンの解釈への影響

9月11日の二日後、著名なムスリムの学者であるシャイフ・ユースフ・アル・カルダーウィー (Sheikh Yusuf al-Qardawi) 師が、火曜日に起きたアメリカの一般市民を対象とした同時多発テロを非難し、テロの被害者のために献血をするようムスリムたちに促しました。このときアル・カルダーウィー師は次のように述べました。

「私たちはイスラエルに対するアメリカの偏狭的な軍事的、政治的、経済的政策には強く反対しているが、世界貿易センター、並びにその他の合衆国機関に向けられた攻撃に対し、私たちの心は痛む。イスラーム、それは許容の宗教で、人間の魂を高く尊重し、罪のない人々に対する攻撃を重大な悪と見なしている。」

今日のイスラーム社会で最も影響力のある学者の一人であるアル・カルダーウィー師が、世界貿易センターの爆破はイスラームに反すると非難したのですが、そのような判断が占領下のパレスチナには該当しないということもまた示唆しています。このような解釈、つまり、次の発言でも明らかなように、シャイフ・アル・カルダーウィー師のかつての考え方では、戦時下でも殺人を禁ずるという姿勢が支配的だったようです。

「戦時下にあっても、ムスリムは、面と向かった直接対決の相手を除いて、誰をも殺すことが許されない。ムスリムは、女性、老人、子供、宗教的隠遁生活を送っている僧侶を殺してはならない。」

何が考え方に変化をもたらしたのでしょうか。ファトワー(宗教的布告)は、フィクフ(fiqh)の問題が未決定または不明確である場合に、裁判官または個人からの依頼を受けて発せられるものです。フ

アトワーによって、訴訟に判決を下すことができます。ファトワーが、ムフティー(mufti)、すなわち、法律家自身の望みや考えに基づいたものであってはならないというのは、きわめて重要なことです。ムフティーは確立された先例に従って、ファトワーを言い渡さなければなりません。しかし、その判断には、新しい状況を評価しなければならず、その上で、フィクフの前例に基づいた布告をしなければなりません。イスラームの聖職者は人間であるがゆえに、現実、すなわち、戦争やテレビ画面などによってもたらされる、強烈なプレッシャーを逃れることはできません。テレビの画面は、認識的不協和や世論管理の過程に大きく影響することが分かっています。そして、学者たちは彼ら自身が現実を評価し、聖典を自ら解釈し、その時々機運を察知して、それに基づいてファトワーまたはイジュティハード(Ijtihad)を定めます。これは大変人間的で自然なことです。それが正しいか間違っているかは、問題ではありません。ファトワーはこのような方法で発布されるので、ファトワーの発布を深く分析する必要があります。

アメリカによるイラク攻撃が始まる数日前、アル・カルダーウィー師は新たなファトワーを定めました。それは、アラブおよびムスリム国家は、その空港、港、領土をイラク攻撃のための発射台としてアメリカ合衆国が使用するのを許してはならないというものでした。

「侵略者を拒否するのはすべてのムスリム個人の責務である。敵がムスリム国家を攻撃したら、その国の者たちは自国の領土から敵を拒否し追放すべきである…。これは、男性、女性、すべてのムスリム個々の責務である。もし、彼らが敵を力で追放するのに成功したとしたら、それで良い…。成功しなければ、彼らを守るのは近隣のムスリム諸国の責務である。」

2004年の夏に、アル・カルダーウィー師は、「イスラームは、戦闘下にある者たちしか殺害してはな

らず、明らかに民間人を殺害してはならない」と説明し、彼のファトワーに関する論争を鎮めました。アル・カルダーウィー師が最初のファトワーを発布したのは、カイロでのセミナーでのことで、それは「イラクにいるすべてのアメリカ人は戦闘員であり、従って、彼らがイラクを去るまで彼らと戦うことは宗教的義務である」という考えに基づいて定めたものだったのですが、その一方で、イスラームは罪のない民間人を殺害することは禁じているとの説明もありました。

このような絶対的な概念は、非戦闘員の誤った死を招き得ると気付いたのか、アル・カルダーウィー師はすぐにこのファトワーを撤回し、「軍の人間と民間人を区別するのが困難な場合は、その者が実際に軍事行動に参加したという明確な証拠がない限り、その者を殺害しないよう注意すべきである。なぜなら人命は尊いからだ」と語りました。アル・カルダーウィー師はまた、2004年8月20日に「イスラミック・アーミー」と呼ばれるグループによってイラクで誘拐された、フランス人ジャーナリスト二人を即座に解放するようにと、繰り返し呼びかけました。「もしその誘拐犯がイスラームの名声を大切に思うのであれば、彼らは二人のフランス人ジャーナリストを解放すべきである。」

しかし、人々の間で熱い論争が繰り返されたのは、アル・カルダーウィー師による最初のファトワーに関してで、その発表直後に論争は起こりました。現代のイスラームにおける最高の学者の一人と考えられているアル・カルダーウィー師によるそのファトワーは、多くの人に不安を与えました。例えば、「エジプト人権組織」(Egyptian Organization for Human Rights)は、すぐにそのファトワーを非難し、それに反対しました。また、このファトワーに反対する団体や組織は、アル・アズハル及びスンナ派のイスラームの権威に対し、ジャーナリストや労働者など民間人の殺害及び誘拐を禁止するよう、即座に求めました。多くのイスラーム学者もまた、同じく素早



く反応し、イラクにいるすべてのアメリカ民間人が戦闘員であるという、アル・カルダーウィー師の見解に反対しました。またその一方で、イラクの有識者たちは、イスラーム系グループによっては、アル・カルダーウィー師のこのファトワーを誤って解釈するのではないかという懸念を表明しました。

ファトワーがいかに国内、地域内、及び、国際的政治環境に影響されるかを、この事例で考えてみると、アメリカまたはその他の政策が、宗教的聖典の解釈にどれほど影響するかを理解することができます。このような背景の中においては、そのファトワーがアル・カルダーウィー師個人の考え方に限定されたものであるとすると同時に、そのような解釈をし易くしている環境の枠組みの中に還元して、そのファトワーを受けとめることが大切なのです。

事例(3): 大衆が混乱するとき

アメリカ合衆国に対する嫌悪の気持ちがいつ生まれたのかを正確に指摘することは、実に難しいことです。韓国やベトナムなどの戦争劇にアメリカが加担し始めたときに遡るとする者もいるかもしれませんが、しかし、中東の場合で考えると、アメリカは愛憎相まみれる対象なのです。

最初の反応

ある独立した調査会社の調査によると、回答者の25%が「ムスリムは、嫌悪の感情を持つよう子供に教える」及び、「ムスリムは、他の者に比べて命を軽く評価している」と答えました。ムスリムについて最初に頭に浮かぶことを尋ねると、32%が否定的な意見であるのに対し、肯定的な意見の回答者は、たった2%でした。

この聞き取り調査は、2004年6月23日から7月2日までの間に、1000人に電話でインタビューをして行われたものです。「イスラームに関してより知識のある人は、(その宗教に対して)より肯定的な考えを持つ傾向がある」のです。イスラームの有識者の何人かは、メディアが有識者たちが呼ぶところの

「一方的な描写」、すなわち、ムスリムをテロ行為に結びつけるような描写でしかムスリムの生き方を報じていないと非難しました。

第二の反応

しかし、なぜ憎しみがあるのでしょうか。アラブ人やムスリムの人たちがアメリカ及びアメリカ人を嫌っているかどうかについて、アラブの学者や機関が非公式な調査をいくつか行っています。調査の対象には、様々な年齢層の様々な社会的背景を持つ人が選ばれ、彼らがどのようにアメリカを見ていて、アメリカ人に対してどう感じているかについての質問がされました。

結果は重要かつ論争を呼ぶものでした。アラブ人とムスリムの人たちは、アメリカを高く評価し、アメリカ人に好意を持ち、西洋文化を敬愛しています。彼らは、アメリカの料理、映画、音楽、歌を楽しみ、アメリカ的ユーモアを理解し評価しています。彼らは、アラブ人とムスリムに対するアメリカ人の態度を好ましく思っておらず、中東におけるアメリカの政策を嫌っています。また、アメリカが、彼らから見て不当と思われる攻撃をイスラームに対して仕掛けてくること、クルアーンに敬意を払わないこと、そして、彼らが深く大切にしている価値観を潰そうとすることに、憤りを感じています。

従って、アメリカに対する愛憎の度合いは、イスラーム諸国や開発途上国の内政にアメリカがその外交政策でどう関わって来るか、ということに対する気持ちに左右されているようです。

第三の反応

2004年10月11日から10月14日に実施された聞き取り調査で、「9月11日の衝撃は、どのように貴方に影響を与えましたか」という質問がされました。

回答	%	回答者数
悪く	44.1	16,837
良く	31.7	12,108
影響なし	24.2	9,226
計	100.0	38,171

2004年9月8日から9月11日に実施された別の聞き取り調査では、「西側に対するアル・カーイダの行動は、ムスリムとアラブの目的にかなうものだと思いますか」という質問がされました。

回答	%	回答者数
はい	50.2	34,734
いいえ	49.8	34,458
計	100.0	69,192

2004年7月9日から8月1日に実施された三つ目の調査では、「アル・カーイダがヨーロッパに脅威を与えていると思いますか」という質問がされました。

回答	%	回答者数
はい	40.8	22,504
いいえ	59.2	32,588
計	100.0	55,092

アメリカによるファルージャ攻撃が行われている最中と、イラクの民間人に多数の犠牲者が出たことが世界中で報道された後に行われたこれら三つの調査の結果を見ると、二つの世界が苦悩している、その危機感の深さが表れています。そして、戦争時には、相手の社会に対して抱く気持ちがいかに関わり易く影響を受け易いかをも示しています。

これらの調査で出た数値は、自分たちが暴力の被害者であると感じるシンдрームが無くなれば、数週間で消えてしまうこともあり得ます。しかし、アラブ人、アメリカ人ともに、この感情に取りつかれているのです。

では、私たちは、精神分析の言葉を借りて、9月11日は単なる「触媒」、または、深く生まれつつある要求の、いわば口実あるいは徴候であったと結論付けられればよいのでしょうか。ムスリムとアメリカ人の中で起きたショックと不快感の他に、大衆のコミュニケーションのツールであるインターネットに代表される表面下のマス・コミュニケーションで、他者に対する暴力行為に反対しながらも、それを心の奥深くで



享受する人々が存在することが、私たちに分かったのです。

ムスリムを敵視するために調査の結果を利用するのは簡単です。しかし、真実は違うのではないのでしょうか。中東は、植民地主義の西洋諸国とその同盟国から、専制政治、傷つけ合い、抑圧、累積的暴力の長い歴史を受け継いで来ました。このような背景が、9月11日のあのような恐ろしい攻撃の下地を作ったのです。西側、特にアメリカでは、9月11日の惨事を口実に利用して、以前の平和な状況なら決して公に言うことができなかったことを言う、という事態が起きています。

Part II

A 理解の試み

いわゆるイスラーム原理主義者に対する西側のメディアの攻撃について、中東での反応には三つの傾向が現れつつあります。

1. 退行的反応。すなわち、西側の懸念に真剣に配慮し、西側の言葉の範囲で自らを再構築し、自らを近代的かつ穏健かつ非好戦的社会として同定する反応です。このように反応する人々のほとんどは、学術的背景を持っているか、または、学界関係の人々です。
2. 知的離脱(intellectual breaking-off)。しかし、これは、ガストン・シュラール(Gaston Bachelard)が言うところの、「認識論的区切り」(Coupure Epistemologique)に類似しています。この傾向は、モロッコのアブドゥサラーム・ヤーシーン(Abdesalam Yassin)師など、一部の学者の間でここ10年間に生まれたものです。ヤーシーン師の場合、イスラームと非イスラームの境目は言語にあるとしています。彼は独自の事物に対する呼び方を築きました。Thawra(革命)という言葉は彼の辞



書から省き、Qawmaという言葉を使い提案しています。Uzwiya(会員)という言葉は省かれ、as-Suhba(仲間)という言葉に置き換えられました。この戦略は、ヤーシーン師のグループである「公正と慈善の団体運動」(al-Adl wa al-Ihsan)が、周辺の世俗的環境によって操作されること、つまり、「敵」のルールでゲームをすることから自らのグループを守る強力な手段となりました。同じようなケースが、エジプト、シリア、スーダンでも生まれつつあることが分かっています。

3. 三つ目の傾向は、西側の非難を正常化し、挑発の危険を削減するというものです。これは、イスラームの各種団体に敵対するために、原理主義者やイスラーム主義者に対する陳腐な非難の言葉が、過剰に使用された1980年代以来起こっている傾向です。この結果として、これらのグループは、その陳腐な非難を平常化し、今では「はい、私は原理主義者です。それが、どうかしましたか」と平気で答えることができるようになりました。

今日の懸念は、西側の政治行動に対して不安がある者、または、反対する者すべてを、テロリスト、テロリスト支持者、または、テロに関与している者であると述べることによって、西側は同じ間違いを「繰り返そう」としているのではないかということです。同様に、この手法はイラクで活動しているアメリカ人によって最近使用されたことがあります。彼らは、「占領」という言葉を標準化し、国連で公式に許可されるまでにしました。しかし、2年間イラクにアメリカが駐屯した今でも、この概念が伝統的な植民地主義に繋がっているという非難を展開させた者はいません。

確立されていない言葉を標準化するのは非常に危険です。「テロリズム」という言葉に話を戻しますと、この言葉を使うことによって、暴力が平常化

し見慣れたものになるという状況が作り出されているという気がします。アメリカによるイラク侵攻後の西側メディアの報道を見ますと、今やイラクのすべての武装グループが、西側によるとテロリスト・グループです。また、西側の公人の中には、イスラームをテロリズムの宗教であると言う極端な発言をする者もいれば、預言者ムハンマドをテロリズムのゴッドファーザーと呼ぶ者もいます。

この非常に複雑な心理的プロセスに基づき、人間の防護メカニズムは善から悪へ、悪から善へと変わることができます。統合、拒否、投影、同一化のメカニズムは、テロリズムという概念を平常化させてしまうことができます。私は明日には、誰かに「貴方は、テロリストですか」と挑発的に聞いても、相手が「はい、そうです」または、「はい、そうなりたいと思っています」と答えることになるかもしれないことを非常に懸念しています。

テロリズムは、現代社会で最も微妙で危険な問題のひとつと見なされています。従って、テロリズムが定義されていないことが、反テロリスト活動の妨げとなる大きな欠失であるということを、私たちははっきり述べなければなりません。反テロリスト活動について話し合い、実りある結果へと導くためには、まず、テロリストが誰なのかを正確に定義する必要があります。

テロリズムは単なる言葉で、主観的な軽蔑の言葉であり、客観的な現実ではありません。それは、国際法の規則すべてを停止させる口実には決してならないのです。

B 宗教の向こうに

イラクの混沌とした状況(占領、暴力、安全の欠如)の中、それがアメリカ人、韓国人、日本人、アラブ人であろうと、戦時下における罪のない民間人の殺害を弁護することはできません。しかし、イラク危機の主役4者、すなわち、政策決定者、メディア専門家、学者、そして、宗教権威者は、互いに

話し合い、このような血なまぐさい状況に対処するための戦略または基本方針を立てる必要があるのではないかという気がします。

今日のイラクの環境は非常に複雑で、宗教の関与に対処する場合は、多大な注意が必要です。しかし、アメリカの政策決定者が「自由」を単なる政治的解放だけではなく、商業的な「経済的自由」をも意味するものとしている限り、対話が主体となる妥協点に達することが難しいのです。

コメント・ディスカッション

司会：中田 考
(同志社大学大学院神学部研究科教授)

【司会】 今日セッションCの司会を勤めさせていただきます、中田と申します。このセッションはアメリカと中東の関係があなたの宗教と他の宗教との関係にいかなる影響をおよぼしたかというタイトルで、三人の先生方からご発表をいただきます。最初に、昨日森先生がおっしゃいました通り、ここにいらっしゃる皆様は、私一人を例外といたしまして、皆それぞれの宗教の非常にリベラルな宗教間対話に経験の豊富な方だと思います。そういうリベラルな人々の間で合意が成立する、これは、もう、すでにこれまでも日本でもそうですし、西欧諸国およびイスラーム諸国でもたくさんの会議が行なわれておりまして、そこでも多くの決議がなされていると思います。しかし、この集まりの目標はそのような共同声明を出すことではありません。ここにお集まりの皆様方の間でそのような共通理解に達することが目的ではないと私は理解しております。むしろ、昨日森先生がおっしゃった通り、それぞれの宗教に存在する、言葉はいろいろあると思いますが、ファンダメンタリストという言い方もありますし、ラディカルズという言い方もあります。インテグラリストあるいはハードライナーであるとか、いろいろな言葉があると思いますが、そういう人々と共存していく言葉をどうやって見つけていくのか、ということがこの集まりの目的ではないかと思っております。その意味でアメリカの大統領選挙の直前に公開されたウサーマ・ビン・ラーディンのテープなどは

非常に意義のあるものだとは私は考えております。もちろん皆様方の中で彼の言葉に同意された方はいないと思います。しかし少なくとも彼が何を言おうとしているのかはおそらく全員が理解できたかだと思います。これは私のようにイスラーム世界でイスラームの政治運動を見てきたものから見ると、非常に画期的なことだったと思います。一番最初に9・11の後、あるいはその前に公開されたビン・ラーディンのテープはたくさんありますけども、これは内容を理解する以前にレトリックといいますが、言葉自体がクルアーンやハディースの引用がちりばめられておりまして、そもそも異教徒を対象としたものではなく、ムスリムの間でもレトリックになれた人間でなければ、何をいっているかさっぱりわからない内容のものでした。ところが今回のテープは明らかに西欧の視聴者を対象としたもので、最後の呼びかけなどは、ビン・ラーディンが民主主義者に改宗したのかと思わせるような言葉でした。これは、私は非常にポジティブなサインだと思っています。もともと彼らが対西欧、対アメリカの武装闘争に踏み切った背景には、特に80年代の終わりから90年代の初めにかけて、民主化運動がイスラーム世界で非常に盛り上がった時期がありました。特にイラン革命の後、イスラーム世界でも民主化が起こるのではないか、その後世界的に、サミュエル・ハンチントンが「文明の衝突」の前に書いた「第三の波」という本の中で、民主化の第三の波ということを言っていますけれども、そういう事態が起きました。そのときに、イスラーム世界には

西欧がイスラーム世界の民主化を支援するのではないか、イスラーム世界にたくさんある独裁政権というものに対して、民主化に向けて圧力をかけるのではないかと、という期待が非常に盛り上がりました。しかし、それは残念ながら湾岸戦争と、特にアルジェリアの民主化の失敗、イスラミストのFISが政権を握ろうとしたときに、それを軍事クーデターでつぶした、それに対して西欧側がそれに圧力をかけるどころか応援したということが非常に大きなトラウマになって、西欧の人間とはもはや対話はできない、話をする相手ではないというムードが生まれました。私はその当時エジプトに暮らしておりましたので、その当時の感触をよく覚えております。そういうことがございまして、もう対話できないという、むしろイスラーム世界、特に過激派といわれる人たちも、西欧との対話を求めていたのですが、裏切られたという思いが非常に強かったと思います。9・11の後で実は西欧世界・第三世界も含めて、イスラーム世界の外でも政府のレベルではともかく、民衆のレベルでは思ったよりも同情があった、あるいは彼らの主張に理解を示す声がある程度聞こえたという、このことが明らかなフィードバックになっております。イスラーム世界の中で、特に「カーイダ」と呼ばれる人たちの間ですら、確かに西洋の政府とは話ができない、しかし西洋人でも民衆レベルでは言葉が通じるのではないかという思いが非常に強まっているということは明らかに感じます。そしてそれはもちろん、インターネットなどを通じたコミュニケーションの発達、特に今までは政府を通じてしか聞こえなかった、そういう民衆の声というものが聞こえるようになった、ということがあると思います。

その中で、今対話のムードが実は高まっている、と私は感じます。私は80年代の終わりに90年代始めにかけて起こったイスラーム世界における西欧の民主化・平等といったものに対する、ダブルスタンダードに対する失望をまた繰り返してはなら

ないと思っています。政府レベルの意思決定を覆すことは非常に難しいと思いますけれども、民間レベルで彼らとの対話を進めていくということは非常に意味があると思います。この集まりもそういうきっかけになればいいと思っています。あと一言だけ付け加えさせていただきますと、昨日少しお話をしましたけれども、私個人にとってアメリカと中東の関係と言うものが私の宗教と他宗教との関係にどういった影響を及ぼしたのかということについてですが、一番大きな影響は、まずしゃべる機会が増えた、ということです。残念ながら私自身はこういう話をするのが好きではございません。残念ながらこういう状況下ですから非常に護教的、アポロジェティックにしゃべらざるを得ないという状況に置かれています。これが私は非常に残念なことで、私自身はそういうことをやるつもりがあまりありません。私はこの集まりは一神教聖職者の集まりということで、昨日小原先生のお話にもありましたけれども、日本では多神教こそが共存の思想である、という言い方がされていますけれども、それにはそれなりの理由がありますが、その話は置いておいて、一神教は、では何の思想かといえますと、普遍と統一の思想であると思っております。一神教というのは、神は唯一であって、神はこの宇宙の、そして当然ですけれどもこの地球すべての神である、それは古代イスラエルの預言者からイスラームの預言者ムハンマドにいたるまで、共通のメッセージであると思います。ですので、この一人の神が創られた地球に国境というものを引いて、その中に人間を囲い込み、また外からの人間を締め出す、こういう制度、ナショナリズム、民族主義、国民国家の思想と言うものは、神の教えにも反するし、また、その世俗化した形態の人権・平等・民主主義・ヒューマニティーといったものにも反する教えである、ということを訴えることが、私は一神教、特にセム系一神教の使命である、と考えております。ですので、国境・国民国家・民族主義、こういった



ものが新しい偶像崇拜であってこれは単に神の教えに反するだけではなくて、ヒューマニティーに対する裏切りである、Crime against humanityだと私は思っております。残念ながら現在日本でも、ますます右傾化がすすんでおります。国家主義、あるいは民族主義・国粹主義が強まりつつある。こういう発言をすることが難しい状況になりつつあると私は感じております。私は個人的な体験ですが、20年前にムスリムになった時に、キリスト教徒になるかムスリムになるか、その当時はあまり深い知識ありませんでしたが、迷ったわけですが、なぜムスリムを選んだかというと、私はイエス・キリストの十字架を背負う決意はない、背負えないと考えてムスリムになりました。ですから、命をかけてまで今後、今言ったようなことを主張する気はありません。しかし、まだ日本が自由でなんでもしゃべれる、その間に言うべきことは言っておきたいと思っております。長くなりましたけれども、これからレスポndenツからのコメントを頂きます。最初にワッサーマン先生、5分間お願いします。

コメント：ミラ・ワッサーマン (ベツ・シャローム・ユダヤ共同体)

この三つの論文に答えることは、ほとんど不可能に思えますので、時間制限を定めてくださったことをありがたく思います。本当に感謝しています。レヴィンさんのお話を聞いて、私の母国の痛みと希望の偉大な歴史的瞬間を数々思い出し、感動いたしました。ありがとうございました。しかし、最も心を動かされたのは、私とより異なる伝統や方向性を持った方々のお話でした。

私はユダヤ教のコミュニティがひとつしかない小さな街でラビをしています。ということは、最も親しくしている仲間の多くが同じ街のキリスト教牧師の方々です。ですから、異なる信仰を持つ者同士として対話することがよくあります。牧師の皆さんには、友情、協力、そして、支援をいただいでい

ます。私は自分の政治的な忠誠を何も隠していませんので、選挙の翌日、私どもの幾人かにとっては、正にブラック・ウェンズデーだったわけですが、その日にイラク系アメリカ人の友人と昼食をし、トルココーヒーを飲みながら互いを慰め合いました。

異宗教間の対話というものによく参加しているのですが、この出来事が象徴しているのは、そのような対話の中には神学的な違いが確かにあるけれども、私たちは奥深くでたくさんのことについて考えが一致しているということです。そのことが、お互いの相違点に取り組もうとするこの機会を、私にとって更に貴重なものにしているのです。

ですから、ここに来る準備として、これらの論文を読んでいましたとき、私が賛同できない多くの意見を、思慮深く正確かつ忠実に述べたサイダーさんの論文を目にし、率直に言って、嬉しく思いました。そして、私が賛同している多くの意見が、思慮深く正確かつ忠実に述べられているのを目にしたときは、更に大きな喜びを感じました。ですから、福音派的な政治を拡大するという計画について話し合いができることを大変楽しみにしています。というのも、そこには、ユダヤ教徒とキリスト教徒の間に新たな連携ができる可能性が多分にあるように思えるからで、それは、私にとって楽しみなことだからです。

私どもの意見が最も異なるのは、家族に対する考え方に関わる事柄でしょう。また、別の機会にこの点に関する疑問を取り上げることができることを願っていますが、驚いたのは、政治的な見解を聖書に基づいて裏づけをしようとしていることです。家族の規範を創世記の中に求めるのは、無理があると思います。これは、私に言わせると大変問題のあることです。創世記を読むと、ちなみに、私は創世記を読むのは大好きで、私たちの会堂では今、創世記を読んでいる最中ですが、機能不全の家族がいっぱい出てきます。結婚を男性と女性の間のものと定義するために創世記を読むのは、正しくな

いと思います。創世記には、その他の形の家族もたくさん出て来ますから。妻が二人とか、妾と正妻とか様々で、私には何の根拠にもなりません。それでも、創世記の中の話にはとても人間的な側面があり、それにいつも惹かれます。

レズラーズィーさんの論文に非常に興味を持ちました。このバージョンは、準備のために私が読んできた論文とは異なっていましたが、興味を持ちました。私の感情的な反応を発表し、他のレスポンスやパネリストや他の方々がこれにコメントして下さることを願います。ファトワが世論に同調しているという、貴方が提示した内容を読んで、大変悲しく思いました。三つの宗教的伝統に共通している基本と見なされていること、すなわち、人間の生命の尊さについて、宗教的主導者が明確に表現できないのを見て大変悲しく思いました。心が痛みます。責任感があり、信仰の厚い人々は戦争に反対だと思います。そして、戦争については様々な理論があります。しかし、戦争についてどう感じているにせよ、中東では悲劇が起こっており、すさまじい数の命が失われています。ですから、私が大切に思っている人類に対して配慮のない論文が、宗教的観点から書かれているのを見るのは、ユダヤ人として、また、一人の人間として、心痛むことなのです。もしかしたら、私はここにいらっしゃるイスラエル人の方々に同情し過ぎているのかもしれませんが、どのような視点からであれ、そのようなことに遭遇することは、非常に苦しいことなのです。ですから、私たちがこのことに真に取り組めるよう、これを提示して下ったことに感謝いたします。でなければ、このようなことについては、往々にして、そっとしておいてしまうことが多いからです。では、私の話はここまでとさせていただきます。

【司会】 ありがとうございます。では、エルジェナイディーさん、お願いいたします。

コメント：マハ・エルジェナイディー (イスラーム・ネットワーク・グループ)

私がとても大切に思い、いつも心に留めているこの問題に関する、3名のプレゼンターの方々によるお話しにコメントをするのは、私にとりまして大変難しいことです。ですから、挙げられた問題の中ではっきりと理解できなかった争点を提示して、それを明確にさせていただこうと思います。すでにプレゼンターの方には質問をさせていただいていますので、5分ほどここで割いて、3名の方からの回答を伺いたいと思います。では、他の皆さんのために、私が提示した質問を読み上げようと思います。

私はワッサーマンさんのコメントを続けることから始めます。レズラーズィーさんから始めます。私がまず質問をして行きますので、お好きな順番でお答えください。

貴方の論文は、アル・カルダーウィー師 (Yusef al-Qardawi) が他のファトワに矛盾し、後に改正する必要があるようなファトワ、宗教的法典を發布したとして、彼の権威を失墜させました。彼の出したファトワは、非常に主観的で利己的なもの、彼の周りの人間にとって有利なもののように見受けられます。アル・カルダーウィー師のことを持ち出すことは、中東では明らかに何らかの影響があります。それで、貴方への質問は、中東における彼の影響の内容を教えていただきたいというものです。なぜなら、私が知る限りでは、彼は知られているテロ行為の元凶ではないからです。ハマースはイスラエルによって暗殺された最後のシャイフに影響されていることが分かっています。シャイフ・ハーシムだったと思います。そして、アル・カーイダですが、あの元凶はウサーマ・ビン・ラーディンとエジプトのアル・イスラミーヤです。

私が知る限りでは、アル・カルダーウィーの呼びかけに応じた国はありません。例えば、占領軍に対抗するのを助けるためにイラクに進出することです。また、私の知る限りでは、アル・カル

ダーウィーはムスリム同胞団を支持してはいますが、その場合でも、ムスリム同胞団はイスラームの制度内部の変化を提唱している、広く知られた組織です。この同胞団内には過激分子もあります。ハマースやイスラミック・ジハードが実際にこの同胞団から派生したものだということは、皆よく知っています。しかし、概して、ムスリム同胞団は、とにかく、既存の民主的なプロセスを経て、制度内部を変革することを提唱している組織なのです。ですから、実際、どのような影響力がアル・カルダーウィー師にあるのでしょうか。私には分からないからです。彼の影響の内容が分からないのです。

サイダーさんへの質問です。私はサイダーさんを心底尊敬しており、彼とは空港から京都まで車で素晴らしい2時間を共に過ごすことができ、彼と福音派教会について多くを学ぶことができました。そして、私が抱いていた福音派の人々に対する固定観念を覆すこともできました。

福音派の最も強硬な発言をする一部の人たちは明らかにイスラエルを支持しており、その点についてのロビー活動も盛んなので、アメリカの中東に対する外交政策に直接的に影響を及ぼしてきました。彼らはイスラエルを支持しているだけではなく、アル・アクサー・モスクの代わりにユダヤ教の寺院を建設することを求めています。皆さんもご存知のように、アル・アクサー・モスクはムスリムにとって最も聖なる三箇所のうちのひとつで、実際、巡礼に行く場所なのです。そしてこのことは、福音派の人々とイスラーム世界の関係に直接的に影響を及ぼしています。そのような活動は、あの公共政策宣言(Declaration on Public Policy)の精神とどう折り合いを付けるのですか。その強硬派の人々もその政策の制定に関わっていたのですか。また、福音派内の穏健派の意見を耳にすることがないのは、なぜなのかを教えてください。これらはムスリムに向けてよくされる質問です。ですから、今回はサイダーさんに同じ質問をします。なぜ穏健

派の人々の意見が聞こえてこないのですか。

そして、ユダヤ教徒の皆さんにも同じ質問ができます。家の破壊や占領区への侵略など、ユダヤ教徒の人々が反対している、とてつもなくひどいことをイスラエルが行ったとき、なぜユダヤ教徒の穏健派からの意見を耳にすることがないのですか。でも、これは私が先ほど出した質問ではありません。

私がした質問は、イスラエル国家以外では、ユダヤ教徒の人々にあらゆる面で最良の環境を提供しているのはアメリカです。そして、そのアメリカはイスラエルと特別な関係にあります。私の質問は、ユダヤ系アメリカ人社会とイスラーム系アメリカ人の社会の関係はどういう状態にあると思うかです。もし、良いものだとすれば、どういう点ですか。悪いのだとすれば、それを基本的にどう証明できますか。

これが3名の方々への私からの質問です。好きな方から始めてください。サイダーさん、貴方から始められてはいかがですか。

【サイダー】 今その話をした方がいいですか、それとも、残りの報告が終った後の方がいいですか。

【エルジェナイディー】 質問にお答えいただけるのであれば、いつでも構いません。質問を回避して欲しくないだけです。これらはこの主題に直接関係があり、この主題は大変重要だからです。これは政治と宗教に関わることなので、質問にお答えいただけるのであれば、別に後でも構いません。では、司会者の方に譲りましょう。

【司会】 それでは、直接の質問にのみ簡潔にお答えいただけますか。そのあとで次のコメンテーターのかたに回します。とりあえず今のご質問にのみお答えください。簡潔にお願いいたします。では、まず最初にレズラーズィーさん。

【レズラーズィー】 貴方は質問をされたのではな

く、意見を述べられたのですね。それはそれで構いません。悪い面について語ることは苦しいことですが、それが現実なのです。別の話題を取り上げていた方が私は楽だったかもしれません。しかし、この会合を本当の意味での対話にするのであれば、誰も話したがない、隠された部分をまず露呈することから始めようではありませんか。対話という名のもとで開かれる会合は何千もあります。本当の対話とは、良い部分と嫌な部分の両方を出すことのできる対話です。そして、対話とは、同じ言語で、会議室で同僚や対等者の前で話すこと、教会やモスクやシナゴグで仲間の前で話すことなのです。

【エルジェナイディー】 私が質問しているのですが、学術研究者として貴方は中東へ行き、リサーチをし、人々と話されてきました。ユーセフ・アル・カルダーウィー師が中東に及ぼした影響の内容についてご説明いただけますか。誰も彼の呼びかけに答えていないということは抜きにして、です。

【レズラーズィー】 シャイフ・アル・カルダーウィーは、実はもう80歳以上で、かつて非常に影響力のあった1970年代、80年代のアル・カルダーウィー師について語っているのかどうか、気を付けなければなりません。事実、彼は今も影響力がありますが、かつてと同じような影響力ではありません。湾岸地域に移り住んだと同時に、人脈や人々への影響力を幾分失ったからです。

アル・カルダーウィー師が発したファトワまたは意見に変化があったことを申し上げた際に、人権問題の活動家たちの小さな非宗教的なエジプト系の団体があることも言いました。その団体がアル・カルダーウィー師に圧力をかけ、意見を変えさせたのです。そして、これは非常に意義があり、意味の深い動きだと思います。つまり、イスラームの世界にも様々な意見や学識があり、先ほどのファトワにつ

いても、多くの学者がアル・カルダーウィー師に反対していたということです。

アル・カルダーウィー師のケースを紹介することで私が強調したのは、もし穏健派だと考えられているアル・カルダーウィー師があのような結論に至ったのだとすれば、何か様子が変わったということ、特に、同じ側の者たち、または、反対側の者たちの間で何かが変わったということです。アル・カルダーウィー師は、自らの職と評判を大切にする人だということが私にも分かってきましたが、その彼があのようなファトワを発するということは、彼がそれを正当化する裏には何かあるということ、それが正しいか間違っているかは別としてですが、彼は、そのとき怒りの中にあったということです。彼は、過剰なまでに自分の人間的な部分を露呈したのですが、残念なことに、メディアでは彼の言葉は正しいのが当然とされているので、宗教的な声明として公表されたのです。そのようなことは、公的な人物が自らの名のもとに語った場合によくあることです。彼らは、自分の言葉にどれほど影響力があるかをときに忘れることがあるのです。それで、個人的な意見だと話の初めに前置きをしても、人々はそのようには受け止めてくれないのです。宗教的声明として受け止められるのです。

【司会】 イスラームの専門でないかたのために少し説明をしたいと思います。今レズラーズィーさんが挙げましたとアル・カルダーウィーという人は、アルジャズィーラの放送で有名なカタールの国民というか、市民権を持っておりまして、カタール大学の学長でもあります。こちらの四戸さんの先生でもあるのですけれども、それでアルジャズィーラという非常に有名になりましたあの放送の中でも非常によく登場される方です。そういうことでアラブ世界では非常に影響力がございます。また、彼の属しますムスリム同胞団という組織は世界中にたくさん

作はたくさん英語にも訳されています。またイスラーム・オンラインという、政府から独立したイスラーム系のサイトではいちばん大きなものと思われませんが、そこにも彼のコーナーがあるという意味で、世界的な影響力、アラブ圏を超えた影響力を持った学者ということで、例として挙げられたのだと思います。

では次、サイダーさん、お願いします。

【サイダー】 エルジェナイディーさん、その非常に素晴らしい質問に感謝します。最初のコメントは、その問題については、貴方が目の前に持っていらっしゃる全国福音派協会 (National Association of Evangelicals) の文書の中で、単に、私たちが取り上げなかっただけです。

二つ目のコメントですが、アメリカには保守的な福音派がかなりいることは確かです。最初の発表で申し上げたとおり、私が思うに、彼らはイスラエルとパレスチナの紛争に対して非常に一方的な考え方を持っています。そしてその基本には、私が神学的また釈義学的に間違っていると見なしている考え方があります。しかし、それでも、そのような者たちが確かに存在し、大きな存在でもあるわけで、イスラエルの政治的指導者はアメリカの保守的な福音派の存在を充分認識し、彼らと密接な協力関係を持っているのです。

三つ目のコメントは、実際、私には分かりません。福音派の何割が今説明したような立場を取っているか、また、何割がより私に近い立場を取っているのか、私の知る限りではそのような調査データはありません。ですから分からないのです。ただ、私寄りの意見に賛成の人がかなりいることは確かですが、それが20%なのか45%なのかは、はっきりしません。

三つ目のコメントですが、私たちの多くは、この問題について意見を聞いてもらおうとしてきました。私自身の組織「社会活動のための福音派 (Evangelicals for Social Action)」も、ここ15年ほ

どこの主題について意見を文書にして出しており、公平な取り組みを呼びかけてきました。私たちはイスラエルが中東の国として安泰であることを願い、パレスチナ人が安全で存続可能な国家を持つことを願い、そして、アメリカには、この両方を促進するためにより公平であることを願っています。ここ20年ほどで「中東理解のための福音派 (Evangelicals for Middle East Understanding)」というグループも組織されており、そのようなことに取り組んでいます。また、政府による公平な対応を私と同じく支持する大勢の福音派の指導者が署名した、大統領への手紙をまとめる作業にも携わりました。パウエル氏とコンドリーザ・ライス氏がその手紙を歓迎してくれたと聞いております。『ワシントンポスト』にその話が出ていたと思いますが、あまり大きく注目されませんでした。ありがとうございました。

【司会】 では、レヴィンさん、簡単に。

【レヴィン】 エルジェナイディーさんは、二つの質問をなさいました。それらに答える前に、サイダーさんにまずお答えさせてください。私はユダヤ人として、公平な取り組みを支持して下さること、及び、祖国としてのイスラエルとユダヤ人との関係に対する理解に深く感謝します。私をはじめとして、ユダヤ人の中には、福音派の宗教的思想の中で私たちが置かれている立場について、また、皆さんからこのような支持を受けた結果がどうなるのかについて、必ずしも不安がないわけではない者たちがいます。私たちは、皆さんを支持したいと思いますし、皆さんが私たちを支持して下さることを願っています。なぜなら、私どもの側に正義があり、また、正当なパレスチナの主張もあるからで、皆さんの宗教的思想を実現させ、私たちのを実現させないということが目的ではないからです。そうすれば、疑いが生まれることもありません。ですから、公平さへの配慮に加えて、私たちが互いにど

うなれるかを考えていただきたく、また、話したいと思います。そして、それが手段ではなく結果であることを私たちは願うのです。私たちの友情が、皆さんにとって手段ではなく、結果であることを。これは、私たちの一部にとって大変重要なことです。

貴方はユダヤ教の穏健派がなぜ意見を言わないのかと質問されました。たくさん意見は発言されていると思います。公平な対応を支持すると同時に、パレスチナを支持しているユダヤ人組織は非常にたくさんあります。つまり、人権問題でパレスチナを支持したり、ユダヤ人がひとつの祖国を持つべきか否かを疑問視しているのでパレスチナを支持したりと、ユダヤ人が現況を疑問視するのには、色々な角度があります。ほとんどのユダヤ人は、必ずしも声を大にして立場の表明をするわけではありませんが、退席することで反対の意思表示をユダヤ組織に対して行っていると思います。ですから、多くの支持はあるのですが、その一方で、イスラエルの安全に対しての多大な支持と懸念もあります。

新聞で取り上げられるかどうかということと、どういう意見の主張があるかということとは、全く別問題です。皆それはよく分かっています。良い方の一例を挙げてみましょう。今、私はアラブ系イスラエル人と関わっていますが、いつの日か、パレスチナ人の人たちとも関われることを願っています。今はそれはできません。私の娘はパレスチナ人と協力し、教科書問題に携わっていましたが、その問題のために2000年には協力することができなくなりました。今、娘はベドウィンに協力し、ベドウィンとイスラエル政府の間の仲介役をしています。今は私たちにとって大変難しいときですが、色々なことが可能になる日を目指して準備をしているのです。

とはいえ、アラブ系イスラエル人にとって、とても重要な問題は存在します。一年半前、アウシュ

ビッツにいっしょに行かないかと、何人かのアラブ系イスラエル人の友人から電話をもらいました。ヨーロッパから300人のアラブ系イスラエル人と200人のパレスチナ人が団体でアウシュビッツに行くという計画をしていたのです。これは、非常に信じ難いことでした。より冷笑的な私のユダヤ系アメリカ人の友達は、そんなに早々と感激しない方がいい、しっぺ返しがあるにちがいないからと、言いました。アウシュビッツに行くと、彼らはアル・ナクバ (Al-Naqba) を理解せよ、1948年の悲劇を理解するのだと、言って来るだろうと言いました。私は、それで結構、じゃあ理解するよと答えたのでした。その二つの出来事を同一視することには特に賛成はしないが、それのどこがいけないのかと。でも、何もしっぺ返しなどありませんでした。これは、純粋な動機で計画されたもので、本当に信じられないことでした。数名のユダヤ系イスラエル人とユダヤ系アメリカ人を伴い、約500人のアラブ系イスラエル人とパレスチナ人が、自らの呼びかけでアウシュビッツを訪れたのは、本当に信じられない素晴らしいことでした。しかし、『ニューヨーク・タイムズ』では、何も報じられませんでした。ほとんどのアメリカのメディアは、何も報じませんでした。BBCは確かに報道していました。しかし、これは本当に起こったことなのです。私がこの目で見たのですから。ですから、新聞の報道では、問題を測り知ることができないのです。

しかし、最終的にこの問題についてですが、私に穏健派として資格があるかどうかは分かりませんが、私はユダヤの祖国を強く支持していますし、帰還法も強く支持しています。また、アラブ系イスラエル人の全面的な権利も強く支持していますし、パレスチナ人の祖国も強く支持しています。これを穏健派と見なすのかどうか分かりませんが、これは言えるでしょう。すでに申し上げたと思いますが、私は生涯を通して、恐れているユダヤ人、私と政治的見解を共有していないユダヤ人、しば

しば強硬な態度に出て、非常に險悪になり得るユダヤ人と関わって来ました。そして、私のような立場の者が最終的にユダヤ人社会に影響を与えられないということは、劣等感を感じさせられることで…。つまり、誰かが(子供にするように)私の頬を掴んで、または、頭を軽く叩きながら、「お前はいい子だ。正しい感情、気持ちを持っている。しかし、相手側にお前のような奴はいるのか。どこにいたんだ」と言われているようなもので、話はそれで終わってしまっていました。

1968年にはそれで話が終ったのです。当時、「パレスチナ人と協力しよう」と言いたいと思っている人はいたのですが、同じことを言うパレスチナ人がいなかったのです。リスクというものは、相等しく皆に存在するものではないのです。私にとっては、ある状況下で排斥されることがあったとしても、それで必ずしもすべて終わりというわけではありません。しかし、貴方やパレスチナの人々が私たちと立場を同じくすることは、ときによっては、非常に危険なことである場合があります。これは、貴方が自らの社会に問わなければならないことですが、これらの問題について発言する準備とやる気はあるのです。私たちは、適切な同盟関係が出来るのを待っているわけで、エルジェナイディーさん、貴方のような方とお会いすると、私はとても勇気付けられるのです。

では、イスラーム系アメリカ人とユダヤ系アメリカ人の関係について話しましょう。主な問題は、私たちが互いを知らないことだと思います。皆さんにお会いして、名前を交わし、お互いの社会のことを知ることは大変勇気付けられることです。たくさん実験がありますね。一人がケンブリッジに行っていて、もう一人がパークレーに行っているとすると、互いをファーストネームで呼び合うような知り合いがそれぞれ何人できるかというような実験です。お互いの社会を充分知り、ファーストネームで呼び合うまでになるのです。

しかし、一番の問題はお互いを知らないということです。私たちの社会は互いに隣接しています。言い換えれば、その間で問題が起こることということです。ユダヤ系アメリカ人は、それほど多くのアフリカ系アメリカ人を知りません。残念なことに、私たちはアフリカ系アメリカ人と、社会経済的尺度ではもはや隣接してはいません。隣接していないために、そこには大きな隔たりが生まれます。住まい、学校などの面で、隔たりが生まれます。パレスチナ系アメリカ人やイスラーム系アメリカ人に関しては、社会的には私たちは隣接しているのですが、何らかの理由でお互いを知りません。立場を共有していませんし、いっしょに発言する術を身に付けてはいません。つまり、もし皆さんが皆さんの発言の仕方を教えてくださり、私が自分の発言の仕方をお教えすることができれば、それは本当に素晴らしいことで、アメリカ人にとって究極の願いの実現となるでしょう。そして、私たちには、今、「ハイフォン付アメリカ人」を保護するための運動を、始めなければならないときが来ているのです。

サミュエル・ハンチントン民族の異なるアメリカ人の権利を疑問視する本を書きましたが、その中で経済的な利害が常に影響を与えようとしているのに、これを比較することもないというのは、私たちにとって困った事態になるのです。困った事態なので、私たちはこれらの(民族的)問題の解決を支持すべきなのです。しかし、文化的な違いやその他の問題があるわけです。

9月11日以降、私は大変苦労しました。イスラーム系アメリカ人に手を差し伸べ、出来る手助けはしました。しかし、相手から同様にしてもらえないことがよくありました。そして、あることを発見したのです。それは、必ずしも私が知っている人の間でのことではありませんでしたが、9月11日の出来事をシオニストCIAの陰謀だと言っているイスラーム系アメリカ人が極めてたくさんいることが分かったのです。私はそれに対して何と云えばいいのでしょうか。私

の母が母であるか、私の父が父であるか、私には分かりません。しかし、ある状態が起こるには、ある種の根拠、ある種の可能性というものがあるのです。よく付け加えられた言葉は、「このように私たちが考えるのは、うまくやってのけることができたからだ。だから、お前ら利口なユダヤ人の仕業にちがいない」でした。これを聞いて、本当に泣きたくなりました。というのも、これには文化的な違いだけではなく、心理的な争点もあったからです。そして、それは他の問題の場合にも現れることで、そのことが問題の根底にあるのです。

【司会】 ボレリーさん、次のコメントについてお願いいたします。

コメント：ジョーン・ボレリー
(ジョージタウン大学)

中田先生、ありがとうございます。もし、私がお話することが批判的に聞こえたら、すべてのコメントがそうだというわけではありませんが、もし、批判的に聞こえたら、私の意図は批判することではないということを分かってください。私はサイダー氏とレヴィン氏が、ここにいらっしゃることを本当に幸せに思っています。お二人は、それぞれの伝統を抱き、話し合いのためにここにいらしたのです。もし、それぞれの伝統から別の人がここ来ていたら、本当に大変な争いになっていたかもしれません。アメリカからいらした人すべてについて、同じことが言えるのではないのでしょうか。

レヴィンさんと私は15年から20年ほど前、ニューオーリンズで本当にひどい対話の場に出席したことがあります。その対話の方法に欠陥がありましたが、それに関わった人々には様々な思惑がありました。しかし、彼と私はその人たちに働きかけ、良い関係を育みました。私の側からすれば、その対話を私たちがムスリムやユダヤ教徒の人々との絆を深めるための、新たなひとつの機会と見なし

ていました。レヴィンさんがいて、キリスト教徒がいて、ムスリムがいます。ですから、お二人がここにいらしていることは、大変喜ばしいことなのです。

サイダーさんの発表について、これを言わせてください。カトリック教徒と福音派は、ある問題について同じ結論に達することがあるかもしれませんが、その結論に至る方法はかなり異なっています。どのようにそれらの結論に達するかについては、かなり多くの違いがあります。私たちは異なる方法を使って、聖書の解釈も異なります。ですから結論もしばしば異なります。新約聖書には、複数の箇所でも繰り返されているメッセージがあります。それは神がすべての者を救うことを望んでいるということです。しかし、この箇所をどう解釈するかは異なるのではないかと私は思います。サイダーさんなら、すぐに指摘してくれるでしょうが、福音派の間でもこれをどう解釈するかについては様々な意見があるでしょう。

従って、聖書に基づいた均衡の取れた見解ということについてサイダー氏が語った場合、彼が言わんとしていることをカトリック教徒がすんなりと受け入れることはないでしょうし、採用することもないでしょう。カトリック教徒は、神の言葉としての聖典よりも、人間としてのイエス・キリストに重きを置いています。私たちにとっての神の言葉は、福音書や新約聖書全体で記述されているイエス・キリストという人です。そして、その神の言葉としての、より大きな意味でのキリストを重視することが、人間の能力全体を私たちがどう理解するかに全面的に影響しているのです。カトリック教徒は、人間の本質をより信頼しているのだと思います。実際、カトリックでは、人間の本質のある部分を秘蹟として定めています。ですから、家族ということについても、私たちは秘蹟という観点から考えます。私たちは、家族というものを神が秘蹟を定めることによって高められた、男女の関係から成る人間関係の一組織であり、キリスト、すなわち、神の言葉と

の出会いとして高められた関係であると理解しています。それが私たちの捕らえ方です。故に、私たちの解釈では、結婚は聖なるものなのです。そして、この結婚についての解釈は、聖書の言葉に含まれていると私たちも考えてはいますが、いわゆる聖書に基づいた解釈とは異なるものだと思います。カトリックでは、人間の理性が大いに信頼されています。ですから、私たちの結論は、神の啓示にもあることですが、その多くは、カトリックで言うところの伝統というものに属するものなのです。カトリックの伝統とは、聖書と別のものではなく、キリストのメッセージを神の言葉として立証するという目的を聖書と共有しているものです。また、もし私たちの結論が正しいのであれば、それは人間の理性全般に適用できるはずだと、私たちは考えます。私たちはこれを確信しています、ちょうど聖パウロがそうしたようにです。善があり悪があること、それに気が付いたら何が善かは自分の良心に問はなければならないこと、そして、もしそれに気が付かなければ、神の裁きを受けるのだということ、これらの一般的な概念の多くをギリシャ人も同様に持っていました。ですから、聖パウロはアテネで話をしたとき、ギリシャ人自身の伝統を駆使して聴衆に訴えかけることができたのです。彼は、ギリシャ人に対してギリシャの文献等を引用し、私の信仰によって理解することができる、私の信仰、私のイエスに対する信仰によって、あの哲学者たちが言わんとしていたことを理解できるのだと言ったのです。私たちは、人間の理性を信頼し、その理性によって築くことのできるコンセンサスを信頼しています。だからこそ、アメリカ合衆国で民主主義を体験したカトリック教徒たちは、アメリカが住み易い所だと感じたのです。今、申し上げたことは私が書いたことですし、次の時間にお話しする予定です。

サイダーさんが言った「正義の戦争」の伝統についてですが、これはカトリック教徒が理性と伝統を

もって取り組んでいる主題のひとつです。サイダーさんは、福音派として、彼自身すべての殺人に反対していると言っており、私は彼がその見解を明らかにしてくれたことに感謝しています。その「正義の戦争」という伝統は、アウグスティヌスに起源を発し、後にトマス・アクィナスによって明示されたものなので、カトリック教徒はそれを自分たちの伝統であると思う気持ちを持っています。今日、「正義の戦争」の伝統に対するカトリックの考え方は、サイダー氏の見解とほぼ一致するものになりつつあります。すなわち、今日、「正義の戦争」が起こり得る場合というのは、非常に限られているという考え方です。実際、最も明確に、最も声高にイラクに戦争を仕掛けることを反対したのは、ヨハネ・パウロII世を始めとするカトリック教会です。そして、世界中のカトリック教徒が反対の意志を表明したのです。ですから、「正義の戦争」という伝統自体が、今、ある種の変革を遂げようとしているのですが、この変革が大きく誤解されているのも事実です。

福音派の弱点として彼が挙げたひとつは、一部の福音派による無批判な国粋主義でした。特に、その古い考え方、アメリカ建国からの古い考え方、実際にはそれほどですから古くないわけですが、その「明白な運命」という考え方は国粋主義とキリスト教の信仰の合体を表すもので、日本の皆さんは、この合体による影響というものを経験していますね。東京湾にやって来て、そろそろ国を開いてもいいのではないかと迫ったのは、アメリカ海軍船の船長でした。あの出来事で、私たちはあの超国粋主義、あの無批判の国粋主義を日本に少し経験してもらったわけです。あのアメリカの行為は、良い効果と悪い効果を生み出したのです。

エルジェナイディーさんとサイダーさん、そしてある意味でレヴィンさんの話し合いでも言われていたとおり、福音派の一部とイスラエル政府との間には不健全な同盟体制があり、和平への過程やそ

の他を害する形で、それぞれが異なった目的のために互いを利用し合っています。非常に不健全な同盟体制です。そしてまた、イスラエル政府は非常に不健全な方法でキリスト教アラブ人に敵対するために、アラブの過激派を利用することさえしています。このことは、数年前、ナザレのカトリック教徒たちが2000年を迎えるに当たり、イエスの母マリアの生家とされるバシリカ周辺の交通の便を良くしようとした際に特に顕著に現れました。このキリスト教徒の要望は、ある末梢的グループによって拒否されたのです。このグループは、かつてはキリスト教が過半数であったナザレの市民政府で、突然イスラーム系アラブ人が過半数となったという政治的背景に無関係のグループではありません。また、ある過激派のグループが、問題の場所には墓地があり、そこにはサラディンの兵隊たちが眠っているので、駐車場の建設は認められないと主張しました。この問題を解決するには多くの努力を要しましたが、ありがたいことに、カトリック教徒たちはここにいるユダヤ人の友とともに、態度を和らげるようイスラエル政府に圧力をかけたのでした。ですから、非常に複雑な政治問題が絡んでおり、様々なグループが中東のこの地域での政治や活動に関わっているのです。

ですから、再度お礼を申し上げます。レヴィン氏やサイダー氏のような人たちを、今日私たちとともにここにお招きくださったことを感謝しています。彼らは互いに、また、自らのコミュニティの中で対話を続けていらっしゃる方々なのです。

レヴィン氏は多神教と一神教についての考察から話を始めました。これは彼の論文の重要な箇所ではなく導入の部分の話だったので、ここで私がそれについて一言だけ言いたいと思います。多神教とは一神教の者たちによって定義されたものであり、そのこと自体が問題であるということです。実際、これはこの会議の以前のテーマに関わることです。ヒンズー教にも一神教主義者はいます。

ヒンズー教徒について私が調べたところによると、彼らは実際には一神教であるということです。

レヴィン氏がユダヤ教史上の三つの重要な事柄を述べてくださったことに感謝しています。アブラハムを通じて交わされた契約、イスラエル人が神の掟を受け入れたこと、つまり、彼らが選ばれた民であるということを受け入れたこと、そして、バビロン捕囚のことです。このことは、1654年に23人のユダヤ人がニューヨークの前身のニューアムステルダムに来たのには、どういう意味があったかを表すのに良い例えだと思います。マジソン街で、「オランダ西インド会社が何かを言えば、人々は耳を傾けた」と彼らが言っているのが聞こえて来るような気がします。経済的な理由と実用的な価値判断の両方が混じってはいましたが、そうすることはビジネスとして良かったのです。しかし、そこにオランダ人による宗教的な蔑視があったことは事実です。このことを私たちも理解していますし、キリスト教徒がユダヤ教を宗教として蔑視するという問題を解決するまでには、長くつらい道のりがあったのです。

レヴィン氏が私たちの国では、複数のグループに対して帰属意識を持つことが歓迎されると言いましたが、これもかなり苦労して来たことです。しかし、これについても、次の時間にカトリックの観点からお話したいと思います。また、彼は、シオニズムはアメリカで盛んになった運動で、特に20世紀、特に第二次世界大戦後にはアメリカにシオニズムの本拠地があったと語りました。これは、歴史上のある一定の時期のことであり、周りの状況を考え合わせて検討する必要があることなのではないかと思いますが、彼がそのことに言及してくれたのは価値あることだと思います。

そして、彼が本筋でない部分で話してくれたことで、非常に皮肉な現象のことだったのですが、注目されないままになるのは惜しいと思った話があります。それは、彼が語ったカジノとギャンブル

の問題です。調査によると、ギャンブルで苦しんでいる人たちは、ギャンブルをするべきではない人たち、つまり、貧困層だということです。しかし、皮肉なことに、アメリカで権利を剥奪された最も貧困な層はアメリカ先住民の人たちですが、彼らの多くが賭博法をくぐり抜け、カジノを作って、部族で利益を分け合う方法というのを突然見出したのです。これがいつまで続くか分かりませんが、これは本当に皮肉なことです。

彼の9・11以降の世界についての話の中には、いくつかの深刻な問題が提示されました。9・11は異宗教間の対話を促すことになりました。9月11日の数日後、私はワシントンのPublic Affairs Council for Reformed Judaismの長であるデイヴィッド・サパーシュティン(David Saperstein)と話をしました。ロナルド・ヤング(Ronald Young)氏が声明文を回して、何百人もの宗教指導者に署名してもらっているらしいという話をしたのですが、私はサパーシュティン氏にそのような声明文よりも、より簡単な、プロテスタントの指導者一人、カトリックの指導者一人、ユダヤ教の指導者一人、イスラームの指導者一人がそれぞれ署名した声明文の方が有効だと言いました。その方が私たちの社会により大きなインパクトがあるだろうと。この話をしているときに、私たちの念頭にあったのは、もちろん、司教会議(Bishops' Conference)や全米福音派協会(National Association of Evangelicals)ではなく、全米教会協議会(National Council of Churches)や、ユダヤ教組織とイスラーム組織のなかの一つです。彼はあるユダヤ教組織の指導者の賛同を得るために努力し、私がその他の指導者を担当しました。結局、実現はせず、彼は申し訳なかったと謝りました。彼もまた、レヴィン氏のように、会合や対話の席や三者会議に、妥協することなく常に出席している数少ない一人です。しかし、そのような異宗教間の協力を実現するのは、9・11以来非常に難しくなっているのです。

独自の報道をするジャーナリストたちは、非常にお粗末な方法を使い、一般の人々の感情に訴えようと、この国のイスラーム指導者の評判を徹底的に落とそうとしました。このようなことがあり、三者で話し合いをするのは、とても難しい世界となって来ているのです。

レズラーズーさん、貴方の論文に私は賛同します。貴方は、ご自分の論文を書き換えることによって、暗く心痛む主題に目を向けられました。私はそのことに賛成です。しかし、影響力を測る方法はまた、問題を回避する方法のひとつでもあるのです。問題を回避するための方法論的な手段なのです。統計上の数字をいじっているだけなのです。

例えばある統計によると、毎週、教会に通っているキリスト教徒の大部分がブッシュに投票したということです。毎週、教会に通っているということは、信仰心が強いということを本当に意味するのでしょうか。そう思う人もいれば、思わない人もいでしょう。私の教会では、ある所まではそうですが、そこを越えると、信仰心の強さを決定付けるために来ている人たちの方が多いと思います。また、カトリック教徒であっても新しい移民の人たちは、毎週、教会に来ないかもしれません。ラテンアメリカや東ヨーロッパなどからの人たちです。もちろん、ユダヤ教やイスラームでは、毎週、寺院やモスクに通うことが強い宗教心を持っているということにはなりません。ですから、どのように測り、どのように設定すればいいのでしょうか。

そして、このような話の中、自爆という大変難しい問題があります。ワールド・トレード・センターでのあの出来事がある一方、中東では定期的に自爆テロが起こっています。この主題をここ日本で取り上げたことにより、討議の幅が広がりました。後の話し合いの中で出たのは、インターネットの功罪です。問題は、インターネットの影響と、インターネットにより情報に不当な権威が与えられてしまうということです。

例えば、20世紀初めの数十年、カトリック大事典というものが出版されました。20世紀の中ごろ、第二ヴァチカン公会議の時代、カトリック教会に変化が起きていたときですが、新カトリック大事典が作成されました。そして、つい三年前、更にカトリックの教義等を更新した、新カトリック大事典の最新版が出版されました。ジョージタウン大学の私の学生たちが、ある主題について調べるためにインターネットを利用すると、グーグルで最初に出て来るのが1929年版のカトリック大事典で、それは、例え時代遅れではないにしても、完全に伝統主義的な見解に基づいて書かれているものなのです。しかし、学生たちは、この文献の意義を見極めるための、批判的考察の手段を持ってはいないのです。

最後の点ですが、テロの使用とテロリズムという言葉の問題です。人々がテロと呼ぶであろうその他の行為を除外した、非常に偏狭な見解しか持たない、アメリカ政府の高官との会合に私は参加して来ました。ですから、このテロという言葉自体がコミュニケーションを行う上で問題になってきていて、そのことが私たちユダヤ教徒、キリスト教徒、ムスリムが互いを理解するのをより難しくしているのです。例えば、「神の言葉」という表現は、この部屋の皆さんの中でも解釈がそれぞれ異なるでしょう。ですから、宗教的な言葉がそうであるように、政治的な言葉もお互いに全く理解し合わずに使って話しているのです。私は、貴方が非常に深刻な問題を指摘されたと思います。つまり、言葉と言葉の影響の測定という問題です。ありがとうございました。

【司会】 松永先生、お願いいたします。

コメント：松永 泰行
(同志社大学客員フェロー)

なるべく短く、簡潔に行いたいと思います。まず最初に一言だけ私自身について申し上げさせていただきますと、私自身はムスリムではないのです

けれども、イスラーム、特にイランを中心としたシーア派イスラームを20年近く勉強してきている者です

今日はサイダーさんに絞って質問を二つさせていたきたいと思います。理由は、ブッシュ大統領が最近再選されて、アメリカとイランの間がこれからどうなるかというのは、私にとっても、アメリカにとっても重要な関心事項であるからです。

最初の質問ですが、昨日のオープンのセッションのサイダー先生のコメントの中で、世界の大宗教というものはそれぞれ排他性を主張する、exclusivityというものを主張して、お互いにdisagree、要するに合意できない部分があるのだとおっしゃったので、私は非常に期待をしてエキサイトしたのです。つまりそういう議論が今日も続くのではないかと考えて期待をしていました。今日のサイダーさんの発表を聞いていると、サイダーさん自身は福音派の中ではセントラリストであるということを十分証明されましたので、私は今日の発表は非常に内容的には賛成するところが多くて、逆にいうと期待外れでした。

それでも二つだけ質問させていただきたいのです。一つは、今日ご発表になったnormative biblical visionという、サイダーさんのペーパーは二つのセクションがあり、最初のbiblical visionという部分と、それを公共政策にどうトランスレートするかという二番目の部分です。私の質問はもし福音派のかたがたが生命や家族というものをそれほど中心的に大事なものだとお考えであるのならば、なぜサイダーさんの直接のconstituentである福音派を超えて、例えばキリスト教というboundaryも超えて、中東で今その大きな紛争の直接の被害者となっているムスリムに対しても、その生命であるとか家族の重要性というものを適用されないのか、そこのreluctanceはどのようにご自身は説明されるのでしょうか。つまり例えばアラブ、イスラエルだけでなく、イラク、来年もしイランで戦争があ

ったら、被害者というものが男親を失ったり、男兄弟を失ったり、難民になったり、生活インフラが破壊されたり、それは要するに、まさに家族が失われることであり、生命が失われることなのです。どうしてそれを中心的に関心事項の中にお入れにならないのかなというのが私の疑問です。

二番目の質問です。ちょっと離れますけれども、ブッシュ大統領がよくスピーチの中で、自由というものは神からのギフトである、これはアメリカ人だけに与えられているギフトではなくて、中東のムスリムに対しても与えられていると私は信じてよくおっしゃいます。

それで昨日も富田さんがおっしゃいましたが、我々イランを研究している者からそれだけを見ると、それは非常にウェルカムしたくなるような発言です。なぜならば、25年前のイラン革命の第二番目のスローガンはまさに自由なのです。第一番目のスローガンは独立、インディペンデンスです。二番目がフリーダム、三番目がイスラミック・ガバメントです。イランの憲法にも自由と自決権、フリーダムとセルフ・ディタミネーションというのは、神から与えられたギフトであるとして書いてあるわけです。

そこだけを取ればブッシュ大統領とイランのアヤトラ・ホメイニは意見が一致しているようにも本当に聞こえるわけです。ところが大統領選挙の直前のウサーマ・ビン・ラーディンのビデオメッセージが先ほども出てきましたけれども、あの中でウサーマ・ビン・ラーディンは、「ブッシュ大統領は自由の意味を分かっていない。ミスアンダスタンドしている」と言ったわけです。私はアメリカに住んでいて、アメリカで教育も受けましたから、アメリカ人がウサーマ・ビン・ラーディンが言っていることは全く意に介さない、ウサーマ・ビン・ラーディンが言っているがゆえに聞きたくないというのは十分に理解はできるのですけれど、私は中東研究者として、このウサーマ・ビン・ラーディンが言っているかどうかはともかく、この「ブッシュ大統領は自由の意味

を分かっていない」というのは中東のムスリムの大部分の人間が、大部分のムスリムが当たり前のこととして受け入れていることだと思うのです。

どういう意味かというビン・ラーディン自身も言っていたと思うのですけれど、中東のムスリムにとって、今の自由の意味というのはアメリカの干渉からの自由なわけです。アメリカに干渉してほしくないというそういう自由なのですから、要するに話がすれ違っている。ブッシュ大統領やアメリカ政府のオフィシャルがそれを分らないというのはしょうがないとしても、サイダーさんのような宗教者だったら、自由、彼らにとっての自由の意味の大事さというのはお分かりになるのではないかと思います。ですので、いかがでしょうか。どうもありがとうございました。

【司会】 ありがとうございます。それでは簡潔にサイダーさんにお答えいただいたあと、フロアに質問を振りたいと思います。では、サイダーさんお願いいたします。簡潔をお願いいたします。

【サイダー】 最初の質問についてですが、すべての人々に対して、規範的なビジョンを持つようではありませんか。私は全く貴方に同感です。そうしようと努力しています。私の国がそれをうまくやっていると嘯くつもりもありません。しかし、すべての場所の、すべての人々の命の尊さについては大切に思っています。そして、アメリカが現在大勢の人の命を奪っているということを非常に残念に思います。私たちが進攻を始めてから、明らかに10万人近くのイラク人が亡くなっています。そして、これは、非常に深刻な問題です。

自由が神から与えられたものであるということについての二つ目の質問についてですが、これは素晴らしい表現で、私も同感ですが、ある重要な質問とは主旨を異にしていると思います。それは、アメリカは一貫してその立場で行動しているか、と

いう質問です。アメリカが民主主義と自由を国際的に促進するための非常に重要な力となってきたことは間違いありません。しかし、他方、アメリカが自らの原則に必ずしも常に忠実であるわけではないということも、ある程度よく目にして来たことです。ですから、非常に民主的ではない政府を支持したこともあります。イランではそれまでの政府を打ち倒し、シャーを政権に付かせました。冷戦中はそのようなことを、アフリカその他の世界の多くの地域で行ってきました。私はそのような行為を弁護するつもりはありません。しかし、それはアメリカ的地政学の持つ矛盾の一部なのです。

これが、私の短いコメント二つです。これについて喜んでもっとお話しします。

【松永】 私は貴方にアメリカ政府の外交政策を説明して下さるようお願いしたわけではありません。私は、宗教的主導者として、なぜその聖書に基づくビジョンをすべての人に適用することを躊躇するのかと、お尋ねしたのです。

【サイダー】 私はそれを躊躇してはいません。宗教的指導者として、すべての地域の人々、まずは、アメリカ政府に対して、そのすべての活動において人命の尊厳と神聖さを重視するよう説得していきたいと思っています。まだ、あまり成功はしていませんが、それをしようと努力し続けるつもりです。そのビジョンをすべての地域の人々に適用すべきではないと考えているわけではありません。

【松永】 二つ目の質問ですが、貴方はイランの人々の、例えば、大志といったものを理解されているのですか、理解することができるのですか。

【サイダー】 もちろんです。

ディスカッション

司会：中田 考

(同志社大学大学院神学研究科教授)

【司会】 ありがとうございます。それではフロアのほうに自由な議論をお願いいたしたいと思います。では最初に、まず塩尻さん、お願いいたします。

【塩尻】 中田さん、ありがとうございます。私は筑波大学でイスラーム思想を教えております。私は個人的にはプロテスタントの信者ですが、もう20年以上、イスラームとかかわってきております。中東に長く住んだ経験もございますし、特に中世のイスラーム思想の、イスラーム神学カラムの研究とともに、中世のイスラーム思想がユダヤ教、キリスト教などのさまざまな文化の影響を受けた、あるいは中世のイスラーム科学などが多くの周辺文化の影響を受けて成立したということをおもに研究しております。

私はムスリムではない立場から、イスラームというのは決して暴力的な宗教ではなく、また非人間的な宗教でもなく、非常に平和的な、そして救済宗教でもあり、またキリスト教や仏教と同じような高度な宗教理想を備えた、非常に普遍的な宗教である、だからこそ1400年の間生き延びてきて、今でもなお世界じゅうの多くの人々を救い続けているのだということを、声を大にしていつも説明しています。

しかし、その説明を幾らしても、いろいろな事件が起こるたびに、私どもの努力が本当に無駄になってしまうというか、悲しいことになってしまうのも事実です。今日もレヴィン先生が、ユダヤ教徒がアメリカの社会の中に定着し確固とした地位を築いていくためには大変な努力と苦悩があったということを簡単にお話になりましたし、私も成功したユダヤ人の自叙伝を読んだことがあるのですが、大変な努力を重ねて、今の地位を築いていらっしゃる

る、これは昔のディアスポラの歴史をいうまでもありません。(だから、ムスリムが西洋世界で市民権を得て暮らすためには、これから多くの苦難があると理解しています。)

例えば、私が所属している筑波大学では12～13年前にこんな事件がありました。サルマン・ラシュディ(Salman Rushdie)の『悪魔の詩(“The Satanic Verses”)』を翻訳した五十嵐先生という助教授がある日何者かに暗殺されてしまいました。私が勤務しています一つ下の階のエレベーターホールを血に染めて、先生は倒れていらっしゃいました。その犯人はすぐ国外に逃亡して今も捕まっておりません。あと2年ぐらいするとこの事件は時効を迎えてしまいます。イスラームについては、このような非常におどろおどろしい、また人々を戦慄させるような事件が起こってしまう。

私はいつもイスラーム研究者として大変つらい思いをするわけですが、特にエルジェナイディーさんやレイミーさんというムスリムのかたがた、また中田さんとは私も20年来のおつきあいをさせていただいているのですが、ムスリムの先生がたにお聞きしたいことがあります。この五十嵐教授の殺人事件は特別なこととおきまして、リベラル派のムスリムの先生がた、あるいはこの宗教指導者のかたがた、法学者のかたがたがリベラルな発言をなさるとすれば、そのたびに、イスラームの社会の内部で生命の危険を非常に感じる、あるいは例えばカイロ大学のアブゼイド教授の事件のように、ヒスバ訴訟というか、イスラーム社会に不適切な人だという訴訟が起こされてしまって国外に逃亡せざるをえなくなるような事件が起こります。

また、今のイラクやパレスチナの現状というのは、いろいろな側面から考えなければいけないので一概にはもちろん言えませんが、ムスリムどうしの抗争事件が起きて、ムスリムどうしで殺し合ったりする。この緊急を要する、そして重要なときになぜ結束をしてイスラーム世界を守っていくことができない

のか。また、アメリカにいらっしゃるエルジェナイディーさんやレイミーさんといったリベラル派のかたがたも、いろいろな意味で、非常に強硬派の、あるいはミリシア(militia)のグループの人たちから脅しを受けたり、脅迫を受けたりすることがおありではないかと思うのです。そういう報告を幾つも聞いておりますので。

イスラーム、今のアメリカと中東の関係、世界のいろいろな宗教と宗教の関係の中に、非常に強く横たわっている大きな問題点というのは、イスラームを軽蔑すること、イスラームを正しく理解しないことだと思うのです。先ほど松永先生がサイダー先生にしつこく質問なさったのですが、私は自分がクリスチャンの立場として、一般にクリスチャンは、ムスリムが何人殺されても、それにはあまり関心を持たないということがわかるのです。ムスリムの命の値段とキリスト教徒の命の値段があまりにも違いすぎる。そういう考え方の中にはやはり宗教的な要素とともに、ムスリムは神の敵だ、あるいは人間ではないといったようなイスラーム蔑視が横たわっているのではないかといつも思います。

そういうことを解決していくためには、もちろん周囲の理解、キリスト教徒、あるいはユダヤ教徒とのダイアログ、語り合い、平和的な共存を求める努力ももちろん重要です。でも、私は非ムスリムのイスラーム研究者として、ムスリムの先生がたにムスリムの内部が結束していることの重要性ということをどうお考えになっているのかお伺いしたいと思います。よろしく願いいたします。

【司会】 ではまずレイミーさんと エルジェナイディーさんに今の質問にお答えいただいたあとで、順番にドロン・コヘンさん、それから四戸さん、ノーフさん、小原さんの順に質問をしていただきます。では、まずレイミーさんからお願いいたします。

【レイミー】 塩尻さんにお答えしたいと思います。

とても正直で刺激的なご質問をありがとうございます。私も公的な生活の中で、あるとき脅威に晒されたことがあります。実際、5回あります。それは、とても保守的な全国的なアメリカのテレビ番組に出演したからでした。その司会者もまた、超保守的でした。その番組で私は、アル・カーイダとウサーマ・ビン・ラーディンによるテロへの対応として、アメリカ軍が無作為かつ総括的にアフガニスタンの人々を殺すことに反対するという意見を弁護したのです。ですから、アメリカの市民社会において私が経験した、個人的なレベルの脅威は、ムスリムによるものではありませんでした。しかし、それが世界中のムスリム社会すべての状況について該当することでは、もちろん、ないかもしれません。

もうひとつ申し上げたいのは、アメリカでは、アメリカの市民社会は大変希望の持てるもので、その一部として私はこれを取り上げるのですが、アメリカの市民社会、ムスリム社会内、及び、ムスリムとムスリムでない人々の間では、色々な見解があるということが一般的に受け入れられていて、個人的な脅威とか被害が起こる可能性が低いのです。

例えば、私はリベラルではありません。暴力の問題に対して私は過激派ですし、グローバリゼーションの問題でも過激派、軍事主義に対しても過激派です。しかし、例えばムスリムの兄弟姉妹たちと私との差異について、理解しようと大抵は心を開いています。また、イスラームにおける女性解放論、すなわち、ムスリムの社会で女性が完全に平等であることを支持するという意味で、男性として過激派であるよう努めています。私がこう言うと、男性から非常に嫌悪に満ちた目で見られたことはありますが、今までのところ、ありがたいことに、それ以上の脅威を体験したことはありません。

【司会】 では、エルジェナイディーさん。

【エルジェナイディー】 私が受けた唯一の種類の

脅威というのは、女性として非常に活発に活動しているということを受けた、男性からの脅威です。でも、私の意見に対して脅しを受けたことはありません。今、言ったことは冗談ですよ。ジョークのつもりだったのですよ。

ムスリム社会で強い女性であるということは、一部の男性にとっては脅威であることもあるでしょう。しかし、とにかく、私は貴方が全面的に正しいと思います。レヴィン氏もこのことを間接的に言っていましたが、9月11日以前はそういう問題があったと思いますが、9月11日がもたらした最も良い結果のひとつは、ムスリム社会の穏健派の意見が聞こえるようになったということです。それまでは、決して私もハーマスやイスラミック・ジハードについて悪く言うことはできませんでした。しかし、今では、私たちのウェブサイトに行けば、そういうことが掲示されていて、それが9月11日の出来事に直接繋がっていることだと思っています。それらが同等のものだと思っています。

私は、パレスチナ人に対するイスラエルの政策には大変批判的ですが、現実を率直な言葉で表現する必要があると思います。あれはテロです。そして、彼らがイスラエル国家との戦いに用いている方法は、イスラームの精神に完全に反するものです。

ですから、9月11日以降、問題がもはや問題ではなくなったのだと私は思っています『プログレッシブ・ムスリムス』という、オミド・サフィが編集した本をぜひ買ってください。かなり良い本です。その本の中では、約15名の学者が、9月11日以前なら書けなかったであろう問題について記載しています。ある問題、一連の問題は、ジェンダーの正当性についてのものですし、もうひとつ取り上げられているのは、社会的多元主義の問題に関連した、ムスリムでない人々との関係であり、もうひとつは、ムスリムがもっと社会正義に関わらなければいけないということについて議論しています。また、

人間の性についての論述もあり、その中では、同性愛の正常性を提唱する立場が実際に取られています。ですから、9月11日以前なら、殺されたかどうかは分かりませんが、脅しはされていたでしょうが、そういうことはもうないのです。過激な意見の方が影を潜めたように思います。今は、穏健派が声を大にする機会が来ているのです。これで終わります。

【司会】 では次、ドロン・コヘンさん、質問をお願いいたします。

【ドロン・コヘン】 キリスト教福音派による無条件のイスラエル支持について、簡潔にコメントしたいと思います。レヴィンさんがすでにそのことについて話しましたが、イスラエル人として、私はこの問題に最も個人的に関わっている者であると思いますので、それについて手短かにコメントしたいと思います。

イスラエル人として、外部から、別の宗教の人々から、私の国がそのような支持を受けていることを喜ぶべきなのかもしれません。しかし、当然、私はこの種の支持のことを快く思えないことがよくあります。そして、レヴィンさんがその理由をすでに言っていました。その理由とは、このように支持してくれる動機は何なのか、ということです。その人たちの考えでは、将来、私たちはユダヤ教徒として存在しないのです。私たちは、彼らが望んでいる贖罪を実現させるための道具にしか過ぎないのです。この図式の中で、私たちには居場所がありません。本当のユダヤ教徒としての居場所です。そして、これは宗教的に私たちにとって大変難しいことなのです。宗教的にだけではありません。政治的にも苦痛だと感じています。なぜなら、私の政府が行うことを、誰であっても無条件で支持すべきではないと思うからです。もし、何かが間違っていれば、間違っていると言われなければならない

ないのです。そして、イスラエル社会の一部の人間が、そのような人々と同盟を組んでいるということは、多種多様の異なる過激派同士が同盟を結ぶことを促す、またひとつの例に過ぎないのです。そのような同盟こそが、今日の世界の主な問題のひとつだと思っています。それが望まれたことでなく、計画されたことでもないのに、異なる信念を持った過激な者たちが、ときに、共通の計画を持ったり、同じ目標に向かって奮闘したりするということがあり、それが今日、私たちが直面している主要な問題のひとつなのです。

次にボレリーさんに一言。貴方が言ったナザレの話ですが、私は近年、このキリスト教の教会とモスクに関して、ナザレで起こっている問題を非常に詳しく追って来ました。貴方は、それをシニシズムの一例として、イスラエルの政府が他の者たちといっしょになって行っている不健全な活動のひとつとして話されました。しかし、私ならそれを愚かさの一例、政府の愚かさの一例と呼ぶでしょう。なぜなら、それがどのように始まり、どのように展開したかを見てきたからです。それが最初から最後まで愚かな行為であるということは、私の目に明らかでした。ですから、それにシニシズムという評価さえ与えようと思いません。

【司会】 今、ご質問がありましたけれども、とりあえず全員の質問を終わってからお答えを頂きたいと思います。それでは次に四戸さん、お願いいたします

【四戸】 イスラーム法を勉強している四戸と申します。昨日から皆さんのお話を聞いていまして、アメリカから来られたということで、アメリカの国が与えてくれた恩恵に対する感謝というのを、ユダヤ教の方も、キリスト教徒の方も、イスラームの方も共に持っているということに対して、私は非常に感銘を受けました。アメリカから来た各宗教の方々

自分たちの宗派がその国を支配するという意図が全くなく、自分たちのコミュニティを守ること、アメリカ合衆国のほうが自分たちのコミュニティの倫理規範に抵触することに対して、法律的な関係で鋭く関心を持つという印象を受けました。そういう意味で、一つ的手段として宗教を守ることに対して移住ということが非常に重要だということなことも感じます。

イスラームの歴史を見れば決してジハードの戦いばかりではなくて、イスラーム暦8年のメッカの征服の前までは、ムスリムにとって移住というのは宗教を守る一つ的手段であったのです。ですから、エチオピアにも移住しましたし、メディナにも移住しました。メッカに帰還する、戻るということが彼らの最大目標であったわけです。メッカ征服以後にジハードは残るといふ預言者の言葉があるわけです。そういう意味でエチオピアにおいてはムスリムも現地のキリスト教政権に対して、その主権を認めるという立場を取っていたことを考えると、移住の意味をやはりムスリムの人がもう一度よく考えるべきではないかと思います。

次にコメントしたいのは、塩尻さんのコメントですけれど、私もムスリムですが、イスラームという単語そのものにおいては「平和」という意味は全くありません。「イスラームに入る」という意味しかありません。その「SLM」という単語から、派生系として、平和もありますし、服従もありますし、降伏というものも、敵に降伏するという単語も出てきます。ですから、派生語としていろいろな単語がありまして、派生語を結びつけてイスラームは平和だとか、服従だとかいうのは違和感を覚えてしまうのです。

イスラームについての説明というのは、預言者が残した言葉、つまり天使との対話において示されていますから、イスラームのいちばんいい説明は、預言者が天使に会ったと時に、サハーバというか弟子たちの前で述べた「イスラームとは何か」という、つまり六信五行の五行に当たるといふ理

解のほうを私はしていますので、先ほど塩尻先生がおっしゃったイスラームは、平和を愛するのにか、イスラームは平和なのにとという言葉に関しては、私は最初からあまり、そうは思っていません。むしろイスラームは剣を持って秩序をつくるためにジハードを行っていたわけですから、私にとってイスラームというものと現状の戦いというものはあまり矛盾していない。

次にもう一度コメントしたいのは、イスラーム法学者カルダーウィーのコメントです。ちょっと理解してほしいイスラームの考え方ですが、まずどうしてイスラーム法学者が力を持っているかという、クルアーンに書かれていることをムスリムはそのまま聞くということが前提となっているからです。これは非常に重要な問題です。ところがどうして法学者がそれを解釈できるのかというと、クルアーンに分からないことがあったらアッラーと預言者と権威のある人にそれを質問しなさいとあります。そして質問したところで、預言者は人間ですからそこで解釈的に答えを与えたわけです。

もう一つはクルアーンの中で、アッラーが例えば人間をつくったということと、アッラーは死んだ人間を再生できること、この二つの節がありますけれども、これを二つ聞いて、アッラーはすべてができる人間は統合理解できるだろうとクルアーンの中で述べているわけです。これは人間の思考能力に対して許しを与えたと理解されるのです。これが大体キアース(類推)とか、イジティハード(法学者の法判断を導き出す努力)の正当性の根拠になっているわけです。

ですから、いろいろな問題が起こったとき、我々をヒューマニズムで考えるのではなくて、クルアーンを根拠に解釈すればどうなるかという形で法学者に問うわけです。そうすると法学者はヒューマニズムという考えではなくて、クルアーンの中に述べられたものと現実をつなげるという思考方法をして答えを出すわけです。そこにおいて幾つ

かの答えが出るのは当たり前なのですが、これがイスラームの正しい理解の思考方法です。

それに対して、政治的な問題とか自分の利益に対して不満を持つムスリムもいるわけです。そういう人が自分の気に入らない答えを出した法学者を殺すということが起こりうるのです。私も90年代に五十嵐先生が殺されたときに本を出しましたが、すぐに護身ガスを買って身につけていた時期があります。イラン革命が起こった後で、イラン大使館においては反イラン的な言動をする者が全部チェックされているとの情報がありました。イスラームについて発言することの恐れ面もありました。しかし、どうしてイスラームの思考方式が、人間に立ち戻ってとか、ヒューマニズムでないというのは、それは人間に考える自由を与えたときに、クルアーンに精通している人に聞けという、そういう基本的な立場あるわけなのです。

これが最後ですけれども、レズラーズィーさんの指摘についてです。カルダーウィーさんの解釈は自爆テロによって民間人が巻き込まれることに対して、敵の心の中に恐怖心を巻き起こすのだとして自爆テロを容認したのですが、これはクルアーンにその根拠があるわけです。カルダーウィーさんはそれをもって合法性、ファトワを与えたわけです。

もう一つ重要なのは、これがいつ行われたかという、シャロンが9・11事件後、パレスチナの政治指導者をアパッチという攻撃型ヘリで家族もろとも殺すという暗殺政治テロを行った時期なのです。これは政治指導者を殺すとともにその家族も全部殺してしまうという異常事態が起きた後の自爆テロに対して、カルダーウィーさんがファトワ(法判断)を与えたのです。これはもう全面戦争に入ったのだという形になります。

そして、カルダーウィーさんはイラクにおいては人質は殺してはいけないということも言っていますから、全然矛盾していません。多分、レズラーズィー

さんが引用したのは、パレスチナの特種ケースの戦いの中だと私は思うのですが、これは私も読んだことがあるのですが、以上そういうコメントをしたいと思います。

【司会】 すいません。細かい議論になってしまいますので、とりあえず質問を全員終わらせたいと思います。ノウフさんお願いします。

【ノウフ】 私は英語で話してみますが、英語も日本語も私の母国語ではないので、私の下手な英語をどうか許してください。私はエジプトで生まれました。エジプト、パキスタン、アフガニスタン、イラン、そして、最後にサウジアラビアで17年間仕事をして来ました。私が日本に来たのは、たったの2ヶ月前です。今、私は同志社大学で客員教授をしています。

今日、私はたくさんのことを学び、皆さんにとっても感謝しています。皆さんにです。皆さんはとてもプロフェッショナルな先生方ですし、会議に参加することにおいてもプロフェッショナルでいらっしゃいます。話し方をご存知ですし、何を言えばよいか、どのように言えばよいか、後に何を言えばよいかをよく心得ていらっしゃいます。でも、私にはこれはとても難しいことです。皆さんのように経験がありませんから。ですから、すべてのことについてコメントすることはできません。一点だけ取り上げたいと思います。

私がお話しする点について、ラビのワッサーマンさんが、宗教心の厚い人たちに対してファトワを変更することの痛みを語ってくれたことに深く感謝します。しかし、イスラームでは、実際にはファトワを変更することはできません。ひとつのファトワに、二つ、三つ、四つの側面がある場合、シャイフ・カルダーウィー師、彼には私がサウジアラビアに滞在中にお目にかかったことがあります、カルダーウィー師があるファトワを定めて、その2ヶ月、3ヶ月後

に状況が変わったために、別のことを言ったとしても、それは正しいことなのです。以前のファトワを変えてはいないのですから。イスラームには、ファトワについての規則がありますが、それについては今お話しできません。

カルダーウィー師にはある会合で一度お会いしました。彼はターリバーンとの話し合いについて語っておられました。ユネスコから彼に介入するようにと、依頼があったそうです。つまり、仏教徒(バーミヤンの石仏)についてターリバーンと話すようにです。それで、彼はターリバーンと話をしたそうです。ムスリムたちがエジプトに来たとき、ピラミッドがあり、スフィンクスがあり、ラムセスがありましたね、と。ムスリムたちは、それらを破壊しなかった。なぜ貴方たちはあれらの石仏を破壊するのか、と言ったそうです。しかし、ターリバーンはこう答えたのです。ムスリムたちは、ピラミッドを破壊するための爆薬を持っていなかったからだ、と。この話し合いは、彼の人間性を物語っています。

カルダーウィー師はカタールに居て、カタールのパスポートを持っています。私は彼を大変尊敬していますし、多くの人が彼を尊敬しています。彼にはグループがありません。彼は学者なのです。彼が語っていること、彼は自分が語っていることを証明することができるのです。それが一点です。

もうひとつの点は、私が昨日ハマースやジハードやその他のグループについて聞いたことについてです。私がハマースやその他の人々がしていることに賛成しているというわけではありません。しかし、イスラームには自殺があり、ジハードがあります。ハマースの人々が考えていることは、もしかしたら正しいかもしれないし、間違っているかもしれない。彼らは、そうせざるを得ない状況にあるのかもしれません。ですから、イスラームにとってはジハードなのです。

昨日、彼らはムスリムではない、ハマースはムスリムではない、あれはムスリムではない、ジハード

もムスリムではない、みなムスリムではないと言っていた方々がいました。でも、私たちは人を判断することはできないのです。私たちは、これはキリスト教ではない、これはムスリムではない、と言うことはできないのです。かつて、日本を守ろうとした人々、カミカゼと言うのですよね、その人たちについて、彼らは日本人ではないと言うことはできないのです。彼らは日本人です。そして、彼らは自国を守らなければならない立場になり、だから、あのようなことをしたのです。ありがとうございました。

【司会】 ありがとうございます。では最後に小原さんお願いいたします。

【小原】 もう時間がないので、質問は省略してコメントとお願いだけを、特にサイダーさんに対して述べたいと思います。

松永さんのコメントにもありましたが、命をどう考えるか、これからエバンジェリカルの中で取り組んでいって欲しいと思います。というのは、今、エバンジェリカルの政治政策について興味深い話を聞いたわけですが、エバンジェリカルの中で「プロライフ」と言ったときの「ライフ」は、これまで、専ら胎児の命に限られていました。ほとんどの場合、胎児の命だけに関心が寄せられてきました。しかし、イラクに派遣されているアメリカの軍人たちの命にも、あるいはアメリカ兵によって殺される命にも、「ライフ」の概念を拡大していくことはできると思いますし、またそうすべきだと思います。

次は中東政策についてです。ブッシュ大統領が再選され、その翌日の記者会見の中で、記者が中東におけるアメリカのイメージ、イメージ・プロブレムをどのように考えているのかという質問をしました。ブッシュ大統領は、それなりに答えていました。しかし、中東において反米感情は非常に強く、簡単に払拭できるようなものではありません。先ほどの命の問題と、反米感情は非常に深いかかわ

りを持っていますので、この点についても考えてほしいと思います。

最後に環境問題について。サイダーさんは、ケア・フォー・クリエーション(Care for Creation)ということを言われました。環境問題に対する関心がエバンジェリカルの中でもだんだん高まってきているということを興味深く聞きました。京都で、このテーマを考えることは非常に重要な意味を持っています。というのは、1997年に京都議定書が、ここ京都でとりまとめられたのです。実際、世界人口の4%を占めるアメリカ人が世界のほぼ4分の1の二酸化炭素を排出しています。しかし、アメリカはブッシュ大統領のリードのもとに京都議定書から脱退して、今は、見向きもしません。

エバンジェリカルの人たちがブッシュ政権を支えるのは結構なことです。しかし、本当にケア・フォー・クリエーションということを考えるならば、ブッシュ大統領に対して、アメリカ人の4分の1を占めるエバンジェリカルの人たちが「大統領の環境政策は間違っている」ということをはっきりと言って、軌道修正させるぐらいのパワーを示してほしいと思います。アメリカの国外においても貴ばなければならない人の命があります。そして、この地球全体のことを考えても、多様な生命種の命の保護という視点から、アメリカが占める役割というのは非常に大きいと思います。

生命と地球環境というこの両方に問題に関して、アメリカは大きな責任を負っています。ところが、ブッシュ政権が今までの路線を行くなら、この二つの課題に対して、さらに大きな危機を及ぼしかねません。だからこそ、今、エバンジェリカルがもっと根本的な批判をブッシュ政権に投げかけて、ブッシュ政権の既成の価値観を変えるようなムーブメントを起こしていただきたいと私は期待します。

【司会】 ありがとうございます。時間がございませんので、質問が二つですが、それぞれ1分間で

お答えをお願いします。まず、ボレリーさん、ドロン・コヘンさんに対する質問に1分間でお答えください。そのあとで、レズラーズィーさんから1分間でまた質問の答えをお願いいたします。

【ボレリー】 私はコヘンさんに実際お答えする必要があるとは思いません。ナザレのモスクについては個人的にお話しします。サルマン・ラシュディ氏の件について、何人かの方がお話しされましたが、あれは非常に複雑な問題です。公にイスラームを批判した人間、ムスリムとして許すことが、非常に、非常に難しいことを提示した人間がいるわけですが、彼の行為は、文学的表現や言論の自由といった布で包まれてしまい、それによって傷つけられた、または、少なくとも侮辱された、コミュニティの感情を尊重することの重要性が無視され、侵害されたことが、多くの人々にとって勝利を意味したのです。ですから、これはとても難しいケースだと思います。なぜなら、著者自身をはじめとする、多くの陰險な人々が関わっていることからです。

【司会】 ありがとうございます。では次、レズラーズィーさん、お願いします。

【レズラーズィー】 まず、アル・カルダーウィー師の件について私が話すと、多くの人が快く思わないようですね。私がそうしたのは彼のことを暴露するためではなく、ある種の議論を検討するのが目的だったのです。実際、彼のことは私の発表の目的ではありません。彼のことを言ったのは、私の話に口実と文脈を与えるためだけだったのです。私の関心事は、一般の人々の感情を考慮せずに、真の対話(ダイアログ)を始めるということです。私たちのこの話し合いは公にされているものではなく、また、私たちは皆、学者や専門家なので、計算や躊躇なく、より率直に話し合うことができると

思います。第二に、アル・カルダーウィー師のファトワは2004年8月20日のことだったので、パレスチナには関係なく、イラクに関するものだったようです。最初のが2004年8月17日でしたから、三日前にそれを変えたことになります。

私は、アル・カルダーウィー師に関心があるわけではありません。彼は単なるひとつの例にすぎません。それに、彼のことを言ったのは、彼の言葉が大衆に与える影響に焦点を当てて語ったのであって、宗教的な定言としてではありません。というのも、ジハードに関する神学的な話し合いをするつもりは全くないからです。

私がより懸念しているのは、世論管理をする上での認知的不協和です。ときに、人々は、発表された文面、及び、その文面を主張している人物、または、その文面の読解、解釈、普及を操作する人物、その両方ともが聖なるものだと思ってしまうのです。ですから、この混乱が起きる過程を示そうとしたまでです。ありがとうございます。

【司会】 ありがとうございます。では、エルジェナイディーさん。

【エルジェナイディー】 これは、ある種、ノーフさんへの答えですが、二、三の点を指摘したいと思います。貴方は、「イスラームでは、何々…」という言い方をされましたね。私は、その言葉の使い方に異議を唱えます。なぜなら、イスラームにはひとつしか考え方がないわけではないからです。いくつかの、いわば、異なる考え方があるのです。ですから、「イスラームでは、何々が起こる」とか「イスラームでは、こういう見方をしている」とかという言い方はしない方がいいと、ご注意申し上げたく思います。なぜなら、見方もひとつではないからです。

私も誰も、イスラミック・ジハードやハマースがムスリムではないなどとは言っていないし、昨日、誰

かがそう言っているのを聞いたとは思いません。しかし、これらの者たちはイスラームの名のもとに行動しているのです。彼らはイスラームの名のもとに行為を遂行するのです。ウサーマ・ビン・ラーディンやその他の者がしたようにです。そして、彼らがそのようなことをすれば、同じ信仰を持っている者であれば、誰でも彼らがしていることに異議を唱える権利があるのです。

彼らがしていることに学者たちが異議を唱えたかもしれません。彼らに自らを守る権利や占領軍と戦う権利についてでさえ、ないとは誰も言っていません。私が異議を唱えているのは、彼らが選んだその方法に対してで、多くの学者の意見に沿ったものです。もっと声を大にして唱えるべきなのかもしれませんが、彼らのしていることはイスラームの精神を反映していないという異議を唱えた学者はいます。誰も、彼らに自らを守る権利や占領軍と戦う権利についてでさえ、ないとは言っていないのです。問題なのは、その方法です。

占領下に置かれた人々は他にもたくさんいます。ガンジーは、私たち皆が知っている方法で戦いました。マーティン・ルーサー・キングはあの方法で戦いました。そして、彼らは国を変えたのです。彼らは国を変えたのです。そして、私はそれの方がイスラームの精神をより反映していると思います。預言者ムハンマドは、制圧下の最初の13年間は、ハマースやイスラミック・ジハードなどの、ムスリムたちが今日しているようなことを、決して行いませんでした。メディナを出るまで、ムハンマドは戦いに参加せず、戦いも自己防衛のためで、戒律を犯すようなことは一度もありませんでした。

ですから、私が同感できるのはこのような精神で、多くの学者がハマースやイスラミック・ジハードに対して異議を唱えていると思います。単にこの点をはっきりさせたかっただけです。貴方が正しくないことを言っていたからです。昨日話された限



りでは正しくなかったからです。

【司会】 ありがとうございます。では最後にサイダーさん、お願いいたします。

【サイダー】 小原さんに、二、三お答えいたします。先生が最初に指摘された点は、人間の命の尊さに対する福音派の見解は妊娠中絶にのみ限定しているようで、矛盾しているということでした。私は小原さんとまったく同感です。命は受精に始まり、誕生の時点で終ると人はときに思ってしまうかもしれないと、私は時々言って来ました。80年代半ばに、私は『Completely Pro-Life(完全なプロ・ライフ)』という本を書き、その中で、もし私たちが人命尊重主義なら、中絶や安楽死はもちろん反対の対象になりますが、世界中で飢餓によって亡くなる何百万人の貧しい人たちも対象になるということをおうとしました。また、死刑の問題も対象になると言えます。戦争の問題も対象となると私は主張します。そして、良い知らせとしては、まだ少しではありますが、その方向に向かって進展がありました。しかし、カトリックの司教は、かなり長い間、「継ぎ目のない命の衣(seamless garment of life)」(全ての生命体が分割不可能な一つであるということ)について言っており、より多くの福音派がそれと同じ方向に進もうとしているのだと思います。

環境についてですが、この点に関しても、私は貴方にまったく賛成です。私は、「環境についての福音派ネットワーク(Evangelical Environmental Network)」の創立者です。このネットワークは、過去10～11年、私の組織に拠点を置き、この問題について熱心に取り組んで来ました。ここでも有望な展開がいくつかありました。この全米福音派協会(NAE)の文書に環境に関する声明があることが最初のひとつですが、ブッシュ氏を説得するまでにはまだ至っていません。今後も取り組み続け

る予定です。

【司会】 ありがとうございます。次のセッションは4時を目標に始めたいと思います。司会の不手際で時間をオーバーいたしまして、申し訳ありませんでした。これでセッションCを終了いたします。皆様どうもありがとうございました。



聖職者
交流会議

セッションD

あなたの宗教伝統と宗教実践は、現在の
アメリカ社会にどのように積極的に貢献できるか？

司会／バーバラ・ジクムンド（同志社大学大学院アメリカ研究科教授）

- 発表／「アメリカのカトリック教徒——公共政策と大統領選挙」
ジョン・ボレリー（ジョージタウン大学）
「イスラームの信仰と実践——
アメリカの社会問題に積極的貢献を果たすため——」
イブラーヒム・レイミー（フェローシップ・オブ・リコンシリエーション）
「仏教の伝統と実践は、どのような方法で
アメリカ社会に貢献出来ると考えるか？
——仏教はアメリカの一神教的環境にどのように関連しているのか——」
今井 亮徳（パークレー東本願寺）

- コメント／ クラーク・ローベンシュティン（メトロポリタン宗教間対話会議）
森 孝一（同志社大学大学院神学研究科教授・一神教学際研究センター長）

- ディスカッション

アメリカのカトリック教徒——公共政策と大統領選挙

ジョージタウン大学
ジョン・ボレリー
John Borelli

背景としての2004年大統領選挙

2004年大統領選挙は多くの理由で意味深いものでした。アメリカ史上最高の有権者数を記録し、投票率は近代史上最高でした。当選したジョージ・ブッシュは、おおかたの推測ではテレビ放映された3回の大統領候補討論会で敗北し、イラク戦争や経済政策については過半数を超える支持率を得られませんでした。対立候補のジョン・ケリーは、アメリカ史上で、二大政党のいずれかの大統領または副大統領候補に指名された4人目のカトリック教徒です。過去6回の大統領選のうち4回の選挙（1980年、1988年、1992年、2000年）のときと同じように、カトリック教徒は投票者全体を反映した投票行動をしました。カトリック教徒は全有権者数の20%から25%を占めています。投票した人の20%を占める福音派キリスト教徒の圧倒的多数は、2004年選挙の勝者であるブッシュ大統領を支持しました。

投票する候補者を決める際に最も重視したことは何かという質問に対して、「倫理的価値観」と答えた人は投票者の20%を占め、そのうちの80%がブッシュに、18%がケリーに投票しました。ほぼ同数の20%の回答者が経済と雇用と答え、そのうちの80%がケリーに、18%がブッシュに投票し、まったく正反対の結果となりました。対テロを重視したと答えた人は19%で、そのうちの86%がブッシュに、14%がケリーに投票しました。イラク戦争と答えた人は15%で、そのうちの73%がケリーに、26%がブッシュに投票し、ここでも福音主義キリスト教徒

の強力な支持を受けているブッシュが逆転されています。ケリーは、自分の理念がカトリックの信仰によっていかに形成されたかということについて個人的な所感を述べただけで、公職にあるカトリック教徒がしなければならない倫理的選択についての姿勢を明確にしませんでした。そして、カトリックの教えに関わる問題について、政治家としての選択を伝えるように求めるカトリック教徒の声がこれまでになく大きいときに行われた選挙でケリーは負けました。カトリック教徒の間でそのような激しい論争が起こっていても、カトリック教徒の47%がカトリックの候補であるケリーに投票しました。ケリーは全投票者の48%の支持を得ましたが、このように僅差であったことはカトリック教徒の間には国民的討論の影響はほとんどなかったことを示しています。前回カトリック教徒が候補者となった1984年にも、カトリック信者の間で公職者の倫理的選択について全国的に大きな議論が巻き起こりました。しかしその時は、全投票者の40%に対して、カトリック教徒の投票者はその45%がカトリックの副大統領候補に投票しました。カトリック教徒にとってこれは大きな違いでした。

最終的に結果を左右する選挙人の数という基準から見ると、2004年選挙は大接戦でした。おそらく1億1,500万票を超える票のうち、勝敗を決定したのはわずか12万票にすぎません。この12万票はオハイオ州でブッシュを勝利に導いたのです。もしケリーがオハイオで勝っていたならば、一般投票で350万票足りなくても大統領になっていたで



しょう。このような争点や得票数の傾向はアメリカの分裂を物語っています。ブッシュは僅差で勝ちました。ここで重要なことは、アメリカ国民は戦時中に大統領を替える選択をしたことはなかったということです。

2004年にはカトリック教徒の「宗教論争」の焦点に二つの大きな変化がありました。まず、カトリック教徒の候補者の大統領としての適性をいかに判断すべきかという問題について、カトリック社会の中で論争があったことです。これまではカトリック教徒は、アメリカ合衆国大統領としてのカトリック教徒の適性について、プロテスタント教会系住民一般と議論をしなけりなかつたのです。次に、カトリック教会内でリーダーシップ、倫理的責任、説明責任といった問題についての議論が高まる中で、カトリック司教らが信頼を回復しようとして、特定の社会問題について現在のカトリック教会の教えに反する立場をとっているカトリック教徒と称する政治家の倫理的適性や、このような政治家に投票するカトリック教徒の倫理的適性について議論を始めたことです。司教らは候補者を公認するような言動を慎重に避けたが、ごく一部の司教は、カトリック教徒の候補者(ケリー)に投票することは罪であると信者たちに言ったも同然でした。大半のカトリック司教はこのような警告を発することはしませんでした。大統領選挙で賢明な判断をするために考慮すべき事項について、カトリック教徒に助言するために全米の司教協議会が作成した資料を利用しました。また多くのカトリック司教は、政治家がカトリックの教義では「重大な背徳」であると明言しているようなことを擁護する行動をした場合に、政治家や、政治家の聖体拝領を支持する人達に適用される一般教令を出しませんでした。このような成り行きについてよく理解するためには、1928年、1960年、そして1984年の大統領選について振り返ってみる必要があります。

1928年大統領選挙

1928年選挙では、アイルランド移民のカトリック教徒であるニューヨークのアル・スミス(Al Smith)州知事が民主党大統領候補となり、共和党のハーバート・フーバー(Herbert Hoover)に敗北しました。スミス知事は、カトリックの投票力を見せつけて最初の民主党員のニューヨーク市長に選ばれ、その後、当時最も人口の多かったニューヨーク州の知事になったのです。アメリカ合衆国大統領候補となった最初のカトリック教徒であるアル・スミスはカトリック信者であったために落選した、という考えに異論を唱える人はほとんどいないでしょう。『アメリカの反カトリック主義、最も容認できない偏見』(Anti-Catholicism in America, the Last Acceptable Prejudice)の著者、マーク・マッサ(Mark Massa)はスミスの敗北の理由を次のようにまとめています。

「スミスの禁酒反対の姿勢に、宗教改革運動と同じようにアルコール撲滅運動に打ち込んでいた南部や中西部のアメリカ国民が当惑したことは確かである。スミスの都会人スタイルのリーダーシップと選挙運動も、大都市型政治を快く思っていなかった小都市の有権者を不安にさせる要因となった。だがしかし、当時もそしてその後も、最も論議を引き起こしたのはスミスの宗教であり、通常はそれが大敗の原因とされている。」(※1)

選挙のずっと前のことですが、プロテスタント側が宗教の自由について批判的な「19世紀のローマ教皇の文書」を持ち出してスミス知事に挑んだときに、彼は政教の関係について姿勢を明確にしました。その挑戦的記事の発行元である『アトランティック・マンスリー』(The Atlantic Monthly)はアル・スミスの回答を掲載しました。スミスは、政治顧問やニューヨークの牧師と相談しながら回答を作成しました。彼は、宗教と公共政策の対立は個人的にはまだ経験していないことを述べた上で、「カトリック信者の実践、国への忠誠つまり戦時中の兵

役は、『教義上の原理をめぐる』論争を超えるものである」(※2)という実際的な見解を明らかにしました。スミスは大差で負けました。スミスは伝統的に民主党を支持していた南部の州と境界州の8州で敗北しましたが、それまで共和党支持であったマサチューセッツ州とロードアイランド州を制しました。民主党にとっては変化のきざしが見えた選挙でした(※3)。

1960年大統領選挙

ジョン・F・ケネディも、第二次世界大戦中の南太平洋での兵役とヨーロッパで戦死した兄弟のことを追想して同じような忠誠心に訴えました。「二股の忠誠心を持つことがあるかもしれないとか、自由を信じないとか、あるいは『我々の祖先が命を懸けて手に入れた自由』を脅かす不実な集団に私たちは属している、ということを当時は誰も示唆しなかった」と、ケネディはあるとき語りました(※4)。1956年には惜しくも民主党の副大統領候補の指名を逃しましたが、1960年大統領選では長期間に及ぶ効果的な選挙運動を繰り広げ、11月に最終的な勝利を収めました。

マスコミが特定したような「宗教問題」が持ち上がることはほとんど誰もが予想し、実際にそうになりました。ケネディは、憲法と政教分離に対する彼の忠誠を頑固すぎるくらいに主張することによって、この問題に粘り強く対応しました。しかしながら、1960年9月7日にプロテスタントの牧師やジャーナリストらが発表した声明によって、ケネディはさらに言葉を尽くさなければなりませんでした(※5)。マスコミはケネディを批判する人たちを、ワシントンDCで150人のプロテスタント聖職者を集めた、マンハッタンのマープル協同教会の牧師で有名な作家のノーマン・ヴィンセント・ピール(Norman Vincent Peale)にちなんで「ピール・グループ」(The Peale Group)と名付けました。このグループの記者会見の場でボストンのパーク・ストリート教会のハロル

ド・オッケンガ(Harold Ockenga)は、ケネディ上院議員の政教分離を支持する発言は「フルシチョフ首相の世界平和を推進する発言に似ている」と述べて、ケネディの誠実さに疑問を投げかけました(※6)。その結果、ケネディ大統領候補は「アメリカの政教分離の概念と相容れない」とそのグループが明言したカトリック教を信奉するか、そのカトリック教を捨てて「聖職者の支配からの独立」を宣言するかを選択しなければならないという困難な立場に置かれました(※7)。

その五日後の1960年9月12日に、ケネディ上院議員は大ヒューストン牧師協会(Greater Houston Ministerial Association)を相手に演説をしました。それは、アメリカ史上最も興奮させた大統領選挙戦における一つの画期的な演説でした。アイゼンハワー大統領や、ラインホルド・ニーバー(Reinhold Niebuhr)、パウル・ティリッヒ(Paul Tillich)、そしてニューヨークのユニオン神学校のジョン・C・ベネット(John C. Bennett)学長らの代表的なプロテスタント知識人が、ピール・グループの発言を非難したと相まって、この演説はケネディがアメリカ史上最も勢力伯仲した選挙戦の一つを勝ち抜くのに十分な効果を上げました。

ケネディ候補の言葉にはわずかな苛立ちが感じられました。

「しかし私がカトリック教徒であるということで、そして大統領になったカトリック教徒はこれまで一人もいないために、おそらく故意にだと思われませんが、ここよりも無責任な一部の方面において、この選挙戦の本当の争点があいまいになっています。ですから、私がどのような教派を信じているかではなく、というのもそれは私にとってだけ重要なことであるべきです……どのようなアメリカを私が信じているのかということを私が改めて明言することが間違いなく必要なのです。」(※8)

ケネディは政教分離に対する彼の忠誠を繰り返して強調し、教会聖職者が大統領に対してどのよう

な行動をとるべきかを指示したり、牧師が「教区民にどの候補者に投票すべきか」を指示することのない状態が「絶対的に必要である」と表現しました。もちろん、牧師達はまさにその通りのことをしていました。6週間後の宗教改革記念日、つまり投票日に先立つ日曜日には、ケネディに投票しないように説く組織的な動きさえ見られました。

マサチューセッツ州選出の民主党員であるケネディは、「いかなる教会または教会学校にも公的資金を供与したり政治的優遇をしない、そして任命者である大統領と異なる宗教を信じているという理由だけで公職につけないということのない」アメリカを信じていると言明しました。個人的なレベルの話にとどめながら、ケネディ大統領はさらに次のように述べています。

「私は公共の問題に関して、自分の教会を代弁することはありませんし、教会が私のために賛成意見を述べることもありません。大統領としての私がどのような問題に直面しようとも、もし当選したら、避妊、離婚、検閲、賭博などのいかなる問題についても、外部からの宗教的圧力や指図に関わらず、私の良心が国益にかなうと判断するものに従って決定を下すつもりです。そして、いかなる権力も懲罰の脅しも、私の決断を変えさせることはありません。それでもなお、万一、私の任務のために良心か国益に反することをしなくてはならない状況に陥った場合は、そのような衝突の可能性はほんの少しもないとは思いますが、そのときは大統領職を辞任します。そして、良心的な公僕なら誰でも同じ行動を取ることを望みます。」

ケネディは反カトリックの戦術に対抗して、「たいはいはよその国のものであり、20世紀のものでないことも多く、今のアメリカのいかなる状況にもほとんど無関係のものである、カトリック教会聖職者の発言や声明から、文脈とは関係なく引用する箇所を注意深く選んだ……小冊子や出版物」に注意を喚起し、彼もまた戦術を変えました。彼のカトリ

シズムの問題に対する組織的または構造的反応があることを述べ、「政教分離を強く支持し、ほとんどすべてのアメリカ人カトリック教徒の見解をより正確に表している、1948年にアメリカの司教たちが出した声明」を指し示しました。反カトリックの印刷物には決して引用されなかった資料に言及したのですが、この文書について触れることで、ケネディは巧みに自分の「民主的な」考えをカトリック教会指導部の考えと同調させたのでした。

現在の米国カトリック司教協議会の前身である全米カトリック福祉会議(National Catholic Welfare Conference)の運営委員会(Administrative Board)が、11月の司教会議の後、すべての委員の名で声明を発表することが1940年代までには慣例となっていました(※9)。1948年の声明では、憲法修正第1条(連邦議会、国教を樹立し、あるいは信教上の自由な行為を禁止する法律を制定してはならない)のあまりに熱心な解釈は、宗教教育に弊害をもたらすと批判しました。同年、連邦最高裁が下したある判決について言及し、次のように述べています。「マッカラム事件では、大多数の意見が、法解釈の論理や歴史や一般に認められた基準に十分に配慮していないことに、アメリカ流の法を学んだ法律家は驚くことだろう。」(※10)

マッカラム対教育委員会の判決(333 U.S. 203、1948年)では、公立学校で授業時間を割いて、特定の宗教団体による宗教教育を行ったことを最高裁は違憲としました。このような「授業時間の開放」は1913年にプロテスタントの間で始まったもので、1947年までには、当時あった48州のうち46の州で行われていました。具体的には、プロテスタントとカトリック、そしてユダヤ教が地元の教育委員会の許可を得て、公立学校の時間割の1コマを担当する、それぞれの宗教の教師を各宗教団体の費用で雇い、保護者の承諾書を提出した生徒に公立学校の教室で宗教教育の授業を行うというもの

でした(※11)。

1948年の声明についてのジョン・F・ケネディの言及を完全に評価・検討するには、きわめて詳細な研究を行わなければなりませんが、ここでは必要ありません。ケネディはすでにカトリック系学校に対する公的資金提供に反対の立場を表明していましたが、授業時間の開放は別の話でした。ケネディ陣営のスタッフは、カトリック教徒だけでなくあらゆる宗教コミュニティの宗教教育に影響を及ぼす判決について批判している1948年の声明を取り上げました。さらに1948年の同じ声明の中で、アメリカのカトリック司教は「宗教と善良な市民の本質的なつながり」を「アメリカの伝統に深く根付いたもの」として強調し、「国民への宗教的影響の偏りのない助長」は「良い政府の適切かつ現実的な機能」であると力説しました(※12)。そして、憲法修正第1条は「現在の状況を現実的に認識している点と、宗教に関わりなくすべての国民に公正であることを明らかに求めている点で、まさにアメリカ的である」と称賛しました(※13)。憲法修正第1条の限定的な解釈については容赦なく批判しています。

「この現実的方針が『教会と国家の間の分離の壁』などというあいまいな比喻で表現されるならば、その言葉は明確かつアメリカ的な意味で理解されなくてはならない。それが教条的世俗主義の合言葉になっているように、この現実的方針が宗教への無関心や宗教と政府の協力の排除を意味するように解釈することは、アメリカの歴史と法律を全く歪めることになる。」(※14)

ケネディがこの1948年の全米カトリック福祉会議の声明をさりげなく取り上げたことは、アメリカ社会で公共道徳と公共政策を形成するうえで宗教が果たす役割について、こみ入った議論をすることを少なくとも巧みに認めることにはなりました(※15)。

カトリック教徒はそのような議論に当初から参加していました。つまり、ジョン・キャロル(John

Carroll)は、アメリカで最初のカトリック司教に任命される前から、ベンジャミン・フランクリン(Benjamin Franklin)、サミュエル・チェイス(Samuel Chase)、そして独立宣言に署名した唯一のカトリック教徒であるといこのチャールズ・キャロル(Charles Carroll)らとともに、独立革命に対するカナダの支持を取り付けることを目的とした、1776年の使節団の一人となりました。1960年には、カトリック教会全体の司教たちが第2バチカン公会議(1962年～65年)の準備をしていました。この公会議では、現代世界との関わりについて幅広い提案を採択することになります。そのような提案を考え出すうえで、1948年にアメリカの司教たちがアメリカの試みについて表現したように「まさにアメリカ的な意味」での「現実的方針」が大いに貢献することになります。

第2バチカン公会議

1961年1月、ジョン・ケネディが就任の宣誓をすませニューフロンティア政策に着手したとき、もう一人の「ジョン」という名前の世界的人物がすでに公職に就いていました。同じく新開地(ニューフロンティア)のカトリック教会を率いる教皇ヨハネ23世です。教皇は、全世界的なカトリック・コミュニティの精神的刷新、キリスト教徒の一致の推進、そして現代世界におけるカトリック教会の現代化などを目指して、約100年ぶりにカトリック教会の全体会議を召集しました(※16)。これが1962年から1965年まで毎年秋に4回にわたって開かれた第2バチカン公会議でした。

最終会期ではカトリック教会の司教らは、カトリック教徒の現代世界への対応の指針となる二つの公文書を承認しました。その一つ、『信教の自由に関する宣言』では政府の役割と個人の良心の重要性について論じています。政府は「正しい法律と適切な手段によって」人間の不可侵の権利を保護・促進し、それによってすべての市民の信教の



自由を守るべきであると宣言しています(信教の自由に関する宣言6)。政府が信教の自由のための状況を創りだせば、社会は正義と平和の促進によって恩恵を受けるのです。

「信教の自由の権利は、人間社会において行使される。したがって、その権利の行使は、ある抑制的な規定の下に置かれる。すべての自由の使用にあたって、個人的、社会的責任の道德原理が守られなければならない。すなわち、個人も社会団体も、他人の権利と他人に対する自分の義務とすべての人の共通善とを考慮すべき道德的義務を負わされている。正義と愛をもって、すべての人に接しなければならないからである。」(信教の自由に関する宣言7)

宣言によると、このすべては人格の尊厳に基づいており、「その要求は幾世紀の経験によって人間の理性にいつそう明らかになった」のである。(信教の自由に関する宣言9)

司教らはこの宣言で、様々な宗教を信じる市民の間に、倫理的合意という確かな基盤を築くうえでの自然法の役割について、カトリック教徒にとって要となることを伝えています。このような一般原則は神の啓示にも基づいているが、すべての人が神や天啓について同じ理解を共有しているわけではないため、すべての人がともに暮らし、公正で礼節のある社会を築き、お互いの権利と宗教的信条および実践の自由を尊重するためには、この理性の一般原則は正統かつ普遍的なものであると司教らは信じています。また、「テモテへの手紙第一」に書かれた使徒の言い伝えの「神はすべての人が救われて真理を悟るに至ることを望んでおられる」(2章4節)を引用するとともに、聖パウロのローマの信徒への手紙とコリントの信徒への手紙に基づき、「われわれ一人ひとりが自分のことを神の前に報告しなければならない」と言明しています。したがって、理性に基づく倫理的合意とともに、自分の良心に従う一人ひとりの権利を尊重するこ

とも重要なのです(信教の自由に関する宣言11)。

『信教の自由に関する宣言』と同じ日に発表された『現代世界憲章』では、「時のしるし」を探求し、それを「福音の光のもとに」解明することを唱えています(現代世界憲章4)。『現代世界憲章』はまた、尊厳を備え理性をとおして偉大な知恵を実現することができるという、人間の肯定的な理解に基づく見解を提示しています。

「人間は良心の奥底に法を見いだす。この法は人間がみずからに課したものではなく、人間が従わなければならないものである。この法の声は、常に善を愛して行ない、悪を避けるよう勧め、必要に際しては『これを行なえ、あれを避けよ』と心の耳に告げる。人間は心の中に神から刻まれた法をもっており、それに従うことが人間の尊厳であり、また人間はそれによって裁かれる(ローマの信徒への手紙2章15～16節)。良心は人間の最奥であり聖所である。」(現代世界憲章16)

『現代世界憲章』の範囲は幅広く、人間の生活の多様な分野を考慮しているだけでなく具体的な人権問題にも目を向けています。さらに、第2バチカン公会議は冷戦の最中に開催されたことも念頭に置く必要があります。ソ連とアメリカが核戦争を始める寸前であった1962年のキューバミサイル危機の後に、ヨハネ23世は有名な回勅「地上の平和」を書きました。

『現代世界憲章』の文言は明らかに民主主義を擁護しています。

「しかし、政治共同体を作る多くの異なった人々は、当然種々の異なった意見に傾くことができる。そこで、各自が自分の意見を固守することによって、政治共同体の分裂を防ぐために権威が必要となる。すなわち権利は機械的にでもなく、暴君的にでもなく、まず自由と責任感に根ざす道德的力として、全国民の力を共通善に向けさせるのである(73)」それでもなお、今の時代が与えてくれる人間の知識や富とチャンスには素晴らしい

前進が数多く見られますが、このような恩恵を享受できない人々がたくさんいます。憲章ではとくに、老人を見捨てること、外人労働者に対する不当な待遇、難民たち、望まれずに生まれてきた子供たち、そして飢えに苦しむ人々の窮状、すべて生命そのものに反すること、例えば、殺人、集団殺害、妊娠中絶、安楽死、拷問、強制、人間以下の生活条件、不法監禁、流刑、奴隷的使役、売春、人身売買、労働者を自由と責任のある人間としてではなく、単なる収益の道具として扱うような悪い労働条件などに言及しています(現代世界憲章27)。妊娠中絶と安楽死への言及は、アメリカのカトリック教徒にとってはとくに重大です。

1973年の判決でアメリカの連邦最高裁が人工妊娠中絶の権利を認めたことで、カトリック教徒にとって政治参加はより複雑になりました。1965年に発表された『現代世界憲章』では、すでに中絶の問題に関係するカトリックの教えの内容を提示していました。「生命は妊娠した時から細心の注意をもって守られなければならない。墮胎と幼児殺害は恐るべき犯罪である(51)」というくだりです。1995年に教皇ヨハネ・パウロ2世は回勅「いのちの福音」の中で、人工妊娠中絶についてさらに明確な宣言をしています。

「それゆえ、キリストがペトロとその後継者たちに与えた権威に基づき、司教たちとの交わりのうちに—司教たちはさまざまな機会に人工妊娠中絶を非難し、また前述の諮問の際には、全世界に広がっているにもかかわらずこの教えについては全員一致で賛成を表しました—わたしは次とおり宣言します。『直接的な人工妊娠中絶は、つまり目的として意図された人工妊娠中絶であろうと、手段としてのそれであろうと、罪のない人を意図的に殺害することなので、つねに重大な道德上の不秩序をなすのです』(62)」。

ヨハネ・パウロ2世は、「民主主義の価値に関してほとんど普遍的とでもいえる合意」があり、それ

を明らかな「時のしるし」と見なしていますが、それにもかかわらず、「民主主義の価値は、民主主義が具体化し推進する様々な価値によって、立ちもすれば倒れもします」(いのちの福音71)と声明しています。さらに、中絶と安楽死はいかなる人間の法によっても合法化できない犯罪であるとしています。そして、力強くこう結論付けています。「そのような法律に従う良心の義務はありません。それどころか、良心的拒否に基づいてこのような法律に反対する重大かつ明白な義務があります。」(いのちの福音73)この宣言は理性または自然法の嘆願でしょうか。それとも倫理的問題に関する国民の合意について、宗教的教えを選択することを訴えているのでしょうか。

1984年大統領選挙

アメリカで人工妊娠中絶が合法化された1973年と、ヨハネ・パウロ2世が強い口調の回勅を出した1995年の間に、1984年大統領選挙が行われました。ニューヨークのジョン・オコーナー(John O'Connor)枢機卿は、ニューヨークの二人のカトリックの政治家が中絶合法化に反対しなかったことを公然と非難しました。民主党指名大統領候補の万年対立候補であるマリオ・クオモ(Mario Cuomo)知事とその年の民主党副大統領候補になったジェラルディン・フェラーロ(Geraldine Ferraro)議員の二人です。この問題はすべてのカトリック政治家にとってまた別の難題でした。スミスとケネディは、カトリック教徒であることが大統領職の妨げになるという攻撃をプロテスタントから受けましたが、今回はクオモやフェラーロをはじめとするカトリック政治家は、彼らのカトリック教徒としての資格についてカトリック聖職者から攻撃されました。「アメリカで最も人気のある民主党の政治家でありカトリック系大学の卒業生であり、カトリック神学に関心を持っている」クオモ知事は正式な回答を出しました(※17)。投票日の2ヶ月前の1984年9月13日にノ



ートルダム大学で講演をしました。それは大きなイベントで大手テレビ局が生中継しました。「宗教的信仰と公衆道徳」と題するクオモの講演は、ケネディのヒューストンのスピーチよりもはるかに長いものでした。

まずクオモは、「正式な教会の代弁者が、中絶問題に対する政治的姿勢を基準にして特定の候補者に投票するように、あるいは投票しないようにカトリック教徒に求めている」というオコーナー枢機卿の批判によって作り出された不正確なイメージを明らかにしました。そして、「マスコミは一部しか報道していませんが、夏の間をとおして続いている対話のおかげで、正確でないイメージが伝わっていることが分かりました」(※18)と聴衆に語りかけました。また、司教たちの協議会は、その立場を利用して、いかなる候補者も支持または反対することはないという姿勢を改めて表明しました。彼はこれを政教関係に関するアメリカのコンセンサスのひとつの特徴として称賛しました。第2バチカン公会議前のカトリック教会で育ち、カトリック系学校で学び、弁護士として政治家としてどのような活動をしたかを語りました。彼は公務員として、カトリックの教えに反する法律を擁する、離婚、避妊、妊娠中絶の権利を保護する多元主義的民主主義社会に奉仕する宣誓をしました。アメリカのコンセンサスは、たとえ罪深く間違っていると感じる行為につながるとしても「私たちの自由を確かなものにするために他の人々にも同じ自由を認めなければならない」という政治的現実に基づいたものです。憲法修正第1条は、他の人々が他の宗教を国教にすることを防止するだけでなく、「私の宗教的信仰が普遍的公共道徳の一つとして役立つのだと主張する法的権利を保障する」ものです。他のアメリカ国民と同様にカトリック教徒もまた、政治の領域においては慎重かつ倫理的な判断を要求されていることが分かっています。

クオモ知事は奴隷問題を例にとって説明しまし

た。アメリカで北部と南部の戦争が始まる21年前の1840年に、教皇グレゴリウス14世が奴隷売買を非難しているにもかかわらず、南北戦争前に奴隷制度に対して声高に反対するカトリック司教はいたとしてもごくわずかでした。反カトリックの不可知論者が増加傾向にあり、カトリック教徒が懐疑や痛烈な非難や散発的な暴力行為の的になっていた時期にこのように反対の声を上げなかったことを、クオモは「現実的な政治判断」と言っています。また、自分たちが公式見解を出しても人々の心を変えることはほとんどないこと、南部には奴隷を所有しているカトリック教徒や司祭さえいることを司教たちは知っていました。要するに、クオモが言うには、この問題はカトリックの教えを公共政策へと変えているということです。奴隷制度や妊娠中絶に関するカトリックの教義は明確ですが、カトリック聖職者や政治家がとるべき行動の方向は、かならずしも明確ではなく賢明な判断が求められます。

2004年大統領選挙

妊娠したときから人間の命は始まっているというのがカトリック教会の見解ですが、アメリカの多元主義社会のコンセンサスは、強固な非宗教的理性のうえに形成しなければなりません(※19)。論議を巻き起こした2004年の選挙でもマリオ・クオモは、「私たちの法律の基盤となるのは、知性、知恵、歴史、哲学、学問、そして、たとえ心からのものであっても、大統領の宗教的信仰によってのみ共有されるのではなく、共同社会の思慮深い人々が共有する自然な理性である」(※20)という見解を変えていません。1984年にクオモは「政治的現実主義というアメリカのカトリック信者の伝統」について語りましたが、2004年でもそれを繰り返しています。

アメリカのカトリック司教協議会が2004年選挙のために『忠実な市民 — カトリックによる政治的責任の要請』(Faithful Citizenship: A Catholic Call to Political Responsibility)という題名の小

冊子を発行しウェブサイトにも掲載しましたが、ここでもこの伝統についてふれています。

「カトリック・コミュニティが政治に参加するのは、宗派の教義を押し付けるためではなく、私たちの道徳的信条に基づいて行動し、貧しくて最も影響を受けやすい人たちのために奉仕する私たちの経験を分かち合い、私たちの国の未来について語る対話に参加するためです。」(※21)

カトリック教徒に対して候補者選に際して賢明な判断をすることを求めて、2004年に司教らは次のような助言を出しました。「候補者や公共政策に関する選択肢についての決断には、道義的信条の固守、慎重な識別、カトリックの信仰の価値観に基づいた賢明な判断が必要です。」これはマリオ・クオモの見解と概ね一致しているだけでなく、他の忠実な善意の人々の考えにも沿ったものです。人間の命と尊厳と、人間の生命の保護という二つの問題は、カトリックの社会的教義の七つのテーマと、『忠実な市民』で提示している公職における四つの道義的優先事項に含まれていますが、それぞれのリストの上位に置かれています。さらに、不明な点を残さないために、司教らは2004年7月7日に『政治におけるカトリック教徒(Catholics in Political Life)』と題する別の声明を発表しました。その中で、人工妊娠中絶とヒト胚の作製は「比類なく重要な問題」であることを明確にしました(※22)。

司教らはさらなる検討の継続と、より具体的な意見を明確にすることを決意しました。「一貫して中絶や安楽死を認める法律のために運動したり、そのような法律を支持する」(※23)ことによって、重大な罪を明らかにし、あくまでも固執しているカトリック政治家に対して、司教たちはどう対処すべきでしょうか。カトリック司教は一丸となって、「人工妊娠中絶を公に支持するカトリック政治家に聖体を授けるべきか否か」という問題について検討しています(『政治におけるカトリック教徒』)。カト

リック生活の原点であり頂点である聖体拝領では、カトリック教会と一体になっているか、それとも罪深い行為によってカトリックから離れているかどうかを良心に問うことが求められます。カトリックの教えは、とくに第2バチカン公会議の公文書に示されている教えは、個人の良心を尊重することを強調しています。聖体拝領に関するもう一つの原則がありますが、これは通常、カトリック教徒が聖体を他の教派のキリスト教徒と分かち合う根拠として引き合いに出される原則です。つまり、聖体とは洗礼を受けた者のための聖なるパンであり和解の手段であるということです。

「聖体は、洗礼を受けた者がより深くイエスと一体になり、より豊かにイエスの神秘の全摂理にあずかるために、洗礼を受けた者が罪に打ち勝ちイエスの生涯そのものを生きることを可能にする聖なるパンである」(※24)。

特定のカトリック政治家に対する聖体拒否の問題については、「このように重大な問題についての賢明な判断に伴う広範囲の様々な状況を鑑みて」司教らは、司教が個別に決断を下すことを認めました。自らの決断の過程を文書で明らかにした多くの司教の中で、私が現在知っている限りでは、他にもいるかもしれませんが、癒しの原則に言及しているのは一人だけです。そして、「聖体は癒しと一致の源であること、政治的審査や判断の機会にするべきではないと、私は強く信じています」(※25)と明言しています。何人かの司教は、一部の政治家に聖体を授与することを拒否する姿勢を表明し、中絶に賛成したりカトリックの教えに反する立場をとっているというのが主な理由で、そのような政治家を支持しているカトリック教徒は聖体拝領を禁止するという見解を示しました(※26)。多くの司教はこの問題を保留にし、特定の個人への聖体を拒否したり、そのような個人を支持するカトリック教徒に対して聖体を拝領しないように指示する教令は出していません。



民主党の大統領候補、ジョン・ケリー上院議員が、アメリカの最高位の職の候補者として大政党の指名を受けた史上3人目のカトリック教徒として選挙戦を戦っている最中ですが、こうしたカトリック内部の論議は一般国民に見える形で行なわれています。ケリー候補は個人的には中絶は間違っていると考えていますが、中絶することを選ぶ権利を維持することを明確に支持しています。1960年と1984年の選挙と違って、信仰によって自分の主義や見解がいかに形成されたかについて語る個人的告白を除いては、カトリックの信仰と公職の問題について、指導的カトリック政治家による重要な演説はありませんでした。組織的な対応が選挙の結果に違いをもたらしたようです。1984年にマリオ・クオモが演説をしたときは、カトリックの候補に対するカトリック票は全国民の平均よりも5%高いものでした。

2004年にアメリカのカトリック司教が出した声明は、アメリカのカトリック・コミュニティにおける師としてのカトリック司教の役割に注目を集めました。6月の声明は次のような言葉で始まります。

「私たちは司教として、カトリック信仰と道德律の師として話をします。私たちには、人間の命と尊厳、結婚や家族、戦争と平和、貧困者たちの要求、正義の要求などについて教える義務があります。」

司教たちは、「はっきりと教えることがこの時代の司教としての義務であること」と、「[政治家が一貫して人工妊娠中絶を支持する行動によって]悪に協力しているという中傷は、適切に道義心を育てていくことによって解決できるという希望をもって、助言を与える職務を続けること」を明言しています。教え、説得し、コミュニケーションを維持し、中絶、研究用の胚の作製、同性婚という本質的悪を支持し続ける人々に聖体を授与することを拒否する個人の権利を認めるという職務を担う司教らは、集合的な「私たち」という言葉を用いています。

過去2年間のアメリカのカトリック社会を考えるこ

となく、こうした言葉の話しぶりはなるほどと思わせるように力強く自信にあふれています。実情は、聖職者の職務の中で、そして、まれにですが私生活においてさえ行われた性的虐待の問題に一部の司教が対処しなかったために、師として、また道德の権威としての司教の説得力は甚だしく弱まりました。アメリカのカトリック教徒は、司教たちが虐待問題と説明責任の欠如の発生を許したことに激怒しています(※27)。アメリカ内外の他の教会も同じような問題を抱えています。それにもかかわらず、アメリカのカトリック教会は2年間にわたって聖職者による性的虐待でマスコミに取り上げられました。

コンセンサスの形成

このように、カトリック・コミュニティでは国民に丸見えの状態です。二つの論争が行われているのです。一つは賢明な判断と教会の教えについての問題、もう一つはカトリック教会のあまりにも聖職者主義的運営の短所という観点から見た教会のリーダーシップと権威の問題です。カトリック教徒は、その政治家としての適性について、プロテスタントや世俗主義者と論争をしているのではありません。ただし、一部の高位のカトリック聖職者に対する国民の見方は、カトリック教徒は「現在の状況を現実的に認識している点と、宗教に関わりなくすべての国民に公正であることを明らかに求めている点で、まさにアメリカ的である」と表現された憲法修正第一条に対する見解を固守し続けているのだろうか、批判的な人々に疑念を抱かせているかもしれません。実は、カトリック教徒は米議会最大の単独宗教集団です。2004年大統領選挙前は、上院議員100人中23人がカトリック教徒で、下院では435人中125人がカトリック教徒でした。おそらく2億9千万人を超えると思われるアメリカの人口のうち、7千万人近くがカトリック教徒です。プロテスタント系教派の合計よりは少ないですが、単独ではアメリカ最大の宗教集団です。これ

までの大統領選挙では、カトリック教徒は有権者全体を概ね反映する投票行動をしています。数週間後、数ヵ月後、そして数年後でも、「カトリック票」を構成するものは何かという問題について専門家は議論をしているでしょう。

2004年にはカトリック教徒は、特定のカトリック教徒を支持することが適切かどうかという問題を中心とする諸問題について、カトリック関連刊行物で意見を対比しながら議論しました(※28)。この議論が明らかにしたことは、一部の司教の見解にもかかわらず、この問題は宗教と政治の弁証法的議論ではなく、宗教、政治、公共道德を考慮に入れる必要がある議論だということ、そして多くのカトリック教徒が議論において理性と自然法が果たす重要な役割を理解しているということです(※29)。

またカトリック教徒は、性的虐待を行なう聖職者から信者を守ってやれなかったカトリック教会の階級組織的な構造の欠陥が意味するものについて調査し、もう一つの問題をめぐる議論も続けています。カトリックの教えに反することをとりわけ声高に非難していたバーナード・ロウ(Bernard Law)枢機卿は、以前「真理と反対意見の間を取りもつ方法としての対話はごまかしあいである」と発言したことがありますが、未成年に対する性的虐待問題にうまく対処できなかったために、2002年12月にボストン大司教の職を辞任しました(※30)。2004年8月には、リベラル派のカトリック政治家をずけずけと批判していた政界では有名なカトリックの新保守主義派ジャーナリストが、1995年に性的虐待を理由にカトリック系大学の終身教員職を正式に辞めていたことを『ナショナル・カトリック・レポーター』(*The National Catholic Reporter*)にすっぱ抜かれたために、その影響力のあるポストを去りました(※31)。性的虐待の被害者が起こした訴訟によって、多くの司教区が倒産状態に追い込まれています。そして、児童保護のためのカトリック憲章を作成した、2002年の有名なダラス総会を経て、

約束していた司教と信者たちとの定期協議が徐々に実現しつつあるという状態にすぎません。このような状況下で、米国カトリック司教協議会は、社会正義や公共政策の諸問題についての意見を聞いてもらうのに苦労しています。多くの司教は教区内の信者たちの信頼回復に専念しています。カトリック教会は、2004年大統領選挙の結果によって深刻な亀裂があることが明らかになったアメリカという国の中にある分裂したコミュニティです。カトリックが過半数を占める多くの州はジョン・ケリーを固く支持していましたが、2004年選挙でもカトリック教徒は全有権者を反映する投票行動をしました。統計によると、カトリック教徒も全有権者や候補者と同様に、重要な争点については意見が分かれたようです。統計を読み込み、分裂が実際に存在するのかどうか判断するには力量が要求されます(※32)。

2004年の選挙データの入念な検討がすでに始まっています。京都の同志社大学で行なわれた一神教聖職者交流会議第一日目(2004年11月13日土曜日)の『ジャパン・タイムズ』(*The Japan Times*)朝刊に、『ワシントンポスト』(*The Washington Post*)のコラムニスト、ロバート・J・サミュエルソン(Robert J. Samuelson)の意見が掲載されていました。サミュエルソンは、自著『文化戦争? アメリカ二極化神話』(*Culture War? The Myth of a Polarized America*)の中で、スタンフォード大学のモーリス・フィオリナ(Morris Fiorina)の言葉を引用して、「アメリカは、政治的には二極化しているが、二極社会ではない」と論じています。引用によると、アメリカ人は「おおむね考え方は穏健で行動は寛大」とフィオリナは言っています。サミュエルソンは、そしておそらくフィオリナも、過激なエリート層が二極化して国民全体が分裂しているという印象を与えようとしていると考えています。サミュエルソンは、「今、中道派の本を出すことは自殺行為である」というサイモン&シュスター社(出版社)



のジャック・ロマノス(Jack Romanos)社長の言葉も引用しています。明らかに分裂してはいるが妥協点を見いだそう、という戦略なのでしょう。

アメリカのカトリック・コミュニティ内で信頼と協力を回復するための論議が続いている中で、2004年という大統領選挙の年にカトリック教徒に向けて提起された諸問題に関する司教たちの助言が提示されています。これまでの大統領選挙とは違う問題もありますし、変わっていない問題もあります。現在のところ、アメリカの高位の政治家としてカトリック教徒が適任であるかどうかという問題ではありません。むしろ、公職に仕えながら信仰に忠実であるにはどうしたらよいか自問しているところです。カトリック教徒は今や主流派になりました。ある意味では、これはすべての宗教集団に共通の問題です。多元主義的社会において、国民の倫理的コンセンサスを形成するうえで宗教の果たす役割は何か、という問題が根強く残っています。アメリカでカトリック教徒は、大学などの知的機関の幅広いネットワークを持つ最大の単独宗教集団であるという事実が、この問題を複雑にしています。この大統領選特有のものですが、複雑にしているもう一つの理由は、アメリカは世界で単独の超大国であるということです。国民のコンセンサスや道徳秩序に関する問題は、アメリカがどのように世界全体に向き合うかという問題に及びます。ジョン・コートニー・マーレーが第2バチカン公会議の『信教の自由に関する宣言』に大きな貢献をしたことは誰でも知っていますが、彼は鋭い洞察力で「アメリカは世界の混乱という重々しい事実と向かい合い、『世界にどのような秩序を望むのか』という問題に直面している」と論じています。彼がこれを書いたのはソビエト共産主義が崩壊する40年前の1960年のことです。この問題を提起する前に彼は次のような考えを提示しています。

「たとえ共産主義の帝国が崩壊しても、そして共産主義のイデオロギーがそれとともに崩壊するよう

なことがあっても、アメリカの諸問題が解決されることはないとまで極言したい。むしろ多くの点で問題は悪化するだろう。」(※33)

- 1) Mark Massa, S.J., *Anti-Catholicism: the Last Acceptable Prejudice* (New York: Crossroad: 2003), p. 33.
- 2) 以下で引用。John T. McGreevy, *Catholicism and American Freedom* (New York: W. W. Norton, 2003), p. 149.
- 3) Michael Barone, “Religion, Politics, and the American Experience,” published in *One Electorate under God? A Dialogue on Religion and American Politics*, edited by E. J. Dionne Jr., Jean Bethke Elshtain, and Kayla M. Drogoz (Washington, DC: Brookings Institution Press, 2004). に発表。
- 4) 1960年9月12日、Greater Houston Ministerial Associationでの演説。ウェブサイト(www.american-rhetoric.com)で引用。
- 5) John McGreevyは「1960年大統領選の間、マーレーをはじめとするカトリック教徒の知識人たちは、ケネディが信仰と政治生活を厳格に区別していることに不安を感じていた」と書いている。(Catholicism and American Freedom, p. 213.)
- 6) Massa, p. 78. を参照のこと。
- 7) Massa, p. 79.
- 8) この演説は以下のウェブサイト入手可能。<http://www.americanrhetoric.com/speeches/john-fkennedyhoustonministerialspeech.html>
- 9) 第2バチカン公会議終了の1年後の1966年に、アメリカのカトリック司教らは全米カトリック司教協議会(National Conference of Catholic Bishops)を設立した。改革を推し進め協議会の活動を実施するために、第3回会議で設置した各種常設委員会を再編した。旧全米カトリック福祉会議(National Catholic Welfare Conference)の教育、社会正義、公共政策などの委員会は、NCCBが後援する類似組織である米国カトリック会議(U.S. Catholic Conference)内に置かれた。2001年に二つの組織は合併して米国カトリック司教協議会となった。
- 10) “The Christian in Action,” 14, 以下より引用。*Pastoral Letters of the American Hierarchy, 1792-1970*, edited by Hugh J. Nolan (Huntington, IN: Our Sunday Visitor, 1971), pp. 413-14.
- 11) Hugh J. Nolan, *Pastoral Letters*, p. 370.
- 12) “The Christian in Action,” 9, p. 412.
- 13) “The Christian in Action,” 11, p. 413.
- 14) “The Christian in Action,” 11, p. 413.
- 15) 1960年11月にケネディが大統領に選出された後、全米カトリック福祉会議は「個人の責任」(Personal Responsibility)という題名の声明を発表した。アメリカのカトリック司教が共同で、ケネディ選出の「宗教的問題」に関

する考えを提示したというのなら、その声明は違まわしだった。司教らは、個人の責任を求め「国の偉大さの真の源であった」理念を「手遅れにならないうちに」復活するように促した。また、すべての人が個人の尊厳と全体の自由、平等、そして自分の祖国や伝統に対する揺ぎない愛着に誇りを持っている状態の「精神的成熟」を目標として、「宗教的信念を強めることによって個人の責任感を強め再び活性化することになる」と論じている。“*Personal Responsibility, Pastoral Letters of the American Hierarchy, 1792-1970*, edited by Hugh J. Nolan (Huntington, IN: Our Sunday Visitor, 1971), pp. 530-5.

- 16) Joseph Komanchak, “Is Christ Divided? Dealing with Diversity and Disagreement,” 2003 Common Ground Initiative Lecture, published in *Origins, CNS documentary service*, 33, 9 (July 17, 2003): 141.に発表。
- 17) McGreevy, p. 288.
- 18) この演説はインターネットで入手可能。<http://www.americanrhetoric.com>
- 19) John Langan, S.J.が最近の論文で提示した12の所見のうちの1番目。“Observations on Abortion and Politics,” *America* (October 25, 2004): 9-10.
- 20) Mario M. Cuomo, “Persuade or Coerce?” *Commonweal* (September 24, 2004): 15.
- 21) USCCBウェブサイトに掲載。<http://www.usccb.org/faithfulcitizenship/bishopStatement.html>
- 22) USCCBウェブサイトに掲載。<http://www.usccb.org/bishops/catholicsinpoliticallife.htm>
- 23) “Interim Reflections,” Task for on Catholic Bishops and Catholic Politicians, June 15, 2004. USCCBウェブサイトに掲載。<http://www.usccb.org/bishops/intreflections.htm>
- 24) *Directory for the Application of Principles and Norms on Ecumenism* (129), Vatican City: 1993.
- 25) Archbishop Harry J. Flynn, *The Catholic Spirit* (September 9, 2004).
- 26) Archbishop John Donoghue (Atlanta), Bishop Robert Baker (Charleston), Bishop Peter Jugis (Charlotte), “A Manifest Lack of Proper Disposition for Holy Communion,” *Origins, CNS Documentary Service* 34, 12 (September 2, 2004): 188-89; Archbishop Raymond Burke (St. Louis), 2004年10月1日に発表した声明。Cardinal Francis George (Chicago), statement issued October 10, 2004; Archbishop Justin Rigali (St. Louis), 2004年10月28日に発表した声明。
- 27) Massa, *Anti-Catholicism in America*, pp. 165-92.
- 28) 例えば、*America, the National Catholic Weekly* (September 27, 2004)や*Commonweal* (September 24, 2004). を参照。
- 29) Margaret O’ Brien Steinfels, “Time to Choose, Voting a Catholic Conscience,” *Commonweal* (October 22, 2004).
- 30) McGreevy, p. 289.
- 31) “Bush Campaign Adviser Quits as Sexual

Misconduct Case Is Recalled,” *New York Times* (August 19, 2004).

32) Andrew M. Greeley, “A Catholic Vote?” *America* (December 6, 2004): 6.

33) John Courtney Murray, S.J., *We Hold These Truths, Catholic Reflections on the American Proposition* (New York: Sheed and Ward, 1960), p. 88.



イスラームの信仰と実践 — アメリカの社会問題に積極的貢献を果たすため —

フェローシップ・オブ・リコンシリエイション
イブラーヒーム・レイミー
Ibrahim A. Ramey

皆さまこんにちは。慈悲ぶかく、慈愛あまねきアッラーの御名において。この奇跡のような集まりの場を仕切ってくださるジクムンド教授にお礼を申し上げます。また、日本の皆さま、そしてはるばる海を越えてこの場に集われた米国からの参加者の皆さまに感謝いたします。真実とは日々進化するものであり、昨日理解したことが必ずしも今日理解することと一致するわけではないと私は実感しております。ですから、米国から来られた皆さまにお礼申し上げると共に、この48時間で私の目を大いに開かせてくださった3名の方にとくに深い謝意を呈したいと思います。

最初にお礼を申し上げたいのはクラーク・ローベンシュティン先生です。先生は、イエス・キリスト(彼に平安あれ)の愛がキリスト教徒のみならずムスリムにとっても精神的な核になっていることを、ムスリムである私に教えてくださいました。また昨日個人的にお話しできたことにも、心からお礼申し上げます。

次にロン・サイダー先生にお礼申し上げます。本日の先生のお話を拝聴し、米国ではともすれば固定概念で見られがちな福音派キリスト教徒が実は単一的な集団ではなく、それぞれが違ったご意見を持っておられ、本日のテーマはもとより米国の市民生活にも多大な貢献をなさっている人々の集まりであることを知りました。

そして最後に信仰を共にするマハ・エルジェナイディー先生に感謝いたします。先生のお話をお聞きし、私がなぜ聡明で力強いムスリム女性を擁

護し、私たちの社会で彼女たちの平等とリーダーシップを実現したいと思っているのかに思い至りました。帰国すれば必ず妻にこのことを伝えたいと思います。

では「あなたの宗教伝統と宗教実践は、現在のアメリカ社会にどのように積極的に貢献できるか?」という問いについて私なりの考えを簡単に述べた上で、再度この点を詳しく取り上げたいと思います。というのもイスラームをめぐる議論は多くの場合、とてもおもしろく、発見も多いものの、そこには米国におけるイスラームの現実という視点がしばしば抜け落ちているからです。ですから私たちがファトワ(イスラーム法の判断)や、あるいは中東の地政学を話題にする場合、グローバルなイスラーム社会という視点ではとても有意義な議論になるのですが、その一方では米国の社会や歴史に特有の問題もあるわけです。ですから、私たちに投げかけられた問いを論じる中で、この点についても触れておきたいと思います。

最初に申し上げたいのは、米国のイスラーム社会は多様性に富み、日々変化しているということです。米国には700万から800万ものムスリムがおり、その社会的、歴史的背景も様々です。

ご記憶のことと思いますが、昨日の講演で私はアフリカ系米国人のムスリムに焦点を当て、その来し方を振り返りました。そして早くも14世紀には冒険心あふれるムスリムが米国に渡っていたこと、アフリカ人奴隷の間にイスラームが浸透してきたこと、20世紀に入るとイスラームを信仰するアフリカ系米

国人の間で二つの解放運動がうねりとなって台頭したことをご紹介しました。イスラームの歴史を多方面から深く理解するためには、こうした点を是非知っておかねばなりません。

しかしムスリムの背景は実に様々で、その住む場所も環境も大きく違っています。ムスリムは自らが日々変化を遂げる中で、市民社会への方向性を強め、社会学者のいうゲマインシャフト(血縁などの有機的な人間関係に支配された閉鎖的共同体)からゲゼルシャフト(二次的、社会的関係で結びついた開放的な共同体)への移行を果たしつつあります。つまり視野の狭い排他的な環境から抜け出して、信仰、政治信条、文化を異にする人たちともオープンな連帯を築こうとしているのです。こうした変化についてご説明したのは、ムスリムが固定化した均一な集団でもなければ、米国社会の変動と無縁でいるわけでもないことを指摘したかったからです。

ここで、どうすれば米国社会をよりよいものにできるのか、あるいはどのようにして米国に貢献することができるのか、という大局的な問題について論じるために、四つの社会的現実に焦点を当てたいと思います。これはいずれも、イスラームを理解する上で考察に値する大切な問題です。

まず最初は、米国ではおよそ200万人が刑務所に収監されているという事実です。米国は人口比でも、実際の人数でも、世界一囚人の多い国なのです。こうした現実の背景には差別問題をはじめとする社会の複雑な実態があるものと思われますが、いずれにしても米国に刑務所の収監者が多いというのは紛れもない事実です。

次に何人かの基調報告者の方からもご指摘がありましたが、米国では結婚の50%が破綻しているという事実があります。これは大変な数字です。とりわけカトリック教徒やプロテスタント教徒などは結婚を神聖なものにとらえており、婚姻における男女の結びつきを重要視しているため、こうした事態



にとても心を痛めています。

三つ目はアルコールやドラッグ、それにギャンブル中毒の問題が米国で深刻化していることです。アルコールや常習性のドラッグなど、薬物乱用のために心身を蝕まれた患者が全米各地の病院に収容されており、その数は増える一方です。またどなたかの発表にもありましたように、米国ではスポーツ賭博や宝くじ、果てはカジノ賭博に至るまで、ありとあらゆるギャンブルが蔓延し、社会にしっかりと根を下ろしています。これは実にゆゆしき事態です。

次の問題は、米国社会で貧富の二極化が恐ろしい勢いで進行していることです。具体的な数字をあげますと、1979年には米国人口の1%の最富裕層が社会全体の富のおよそ19%を所有していました。ここでいう富とは、不動産、普通株、証券、事業資産などを指します。ところが2年前には同じ1%の最富裕層が米国の富の実に40%を所有するまでになったのです。すなわち米国では宗教や人種だけでなく、富の分配という意味においても、社会の二極化が進んでいるわけです。持てる者はますます豊かになり、持たざる者はますます貧しくなっているのが米国の現実です。

ではこうした事態に対し、ムスリムはどのように行動すべきなのでしょう。問題を提起するだけでなく、イスラーム社会、ひいてはすべての国民を視野に入れた正しい社会的な回答を見つけるには、どうすればよいのでしょうか。

最初に私が申し上げたいのは、各人の倫理的責任という意味で、イスラームが国内の数々の社会で、再生・回復に大きな貢献を果たしてきたということです。マルコムXの名を聞いたことのある人は多いでしょう。エル・ハジ・マリク・エル・シャバーズ(El-Hajj Malik El-Shabazz)というムスリム名を持つマルコムはアフリカ系米国人による解放運動の立て役者であり、20世紀を代表するムスリムとして有名です。マルコムはネブラスカ州オマハで少年時代を過ごし、その後米国北東部のマ



サチューセッツ州ボストンに移ります。やがて彼は賭博やギャンブル、売春の斡旋、こそ泥、ドラッグなどの犯罪に手を染めるようになり、ついに刑務所に送られます。そこで彼はイスラームに出会い、ドラッグや犯罪、不法行為に依存した生活から足を洗って更正を果たしたのです。

マルコムはほんの一例に過ぎず、イスラームを知ることで人生をやり直した人の数は何百万にものぼります。ただしイスラームを知るといっても、正確にクルアーンを理解したというわけではありません。それは別の話になります。それでもこうした人たちがイスラームの信仰によって魂の再生を果たしたことに変わりはありません。またアフリカ系に限らず、何百万もの米国人が何らかの形でイスラームの精神と深く結びついています。

ちなみに、刑務所収監中にイスラームの教えに出会ったという信者はかなりの数にのぼります（もちろんムスリムが皆そうだというわけではありません）。こうした人たちにとって、ムスリムになるということ、つまりイスラームを知り、イスラームの道徳律と規範に従って生活することは、これまでの生き方を一変させる体験であり、刑期を終えた後にはそれぞれがそれぞれの社会で、積極的、建設的な役割を担うようになりました。

もちろんすべてのムスリムが刑務所で信仰に目覚めたというわけではなく、そうでない人の方が圧倒的に多いことはいうまでもありません。私だって刑務所に入ったことは一度もありません。核兵器に反対する抗議運動に加わったことはありましたが、それは別の話です。それはさておき、精神的な覚醒を体験した人たちにとって、イスラームの信仰は文字通り墮落から再生への一大転機となったのです。

また米国のムスリムと話をすればお分かりになることですが、その多くは生まれながらのムスリムだったわけではありません。キリスト教社会やキリスト教信者の家庭に生まれた人も大勢います。こ

うした人たちはイスラームとの出会いを機に人生観を一変させ、地域社会や国民の倫理向上のために積極的な役割を果たすようになったのです。

二番目に申し上げたいのは、イスラームが経済的正義や富の再分配をめぐる議論に一石を投じているということです。イスラームの信仰には、富とは個人が所有するものではなくアッラーに帰属するという考え方があります。アッラー、すなわち創造主です。イスラームの教えでは、人間は富の管理者にすぎず、いうならば現世におけるカリフであり、創造主の代理でしかないわけです。ですから神学的な解釈では、人間ではなく、アッラーのみが世界とその富を所有していることになります。

つまり米国社会では資本主義原理により富の二極化が進行していますが、こうした事態を前にして私たちムスリムは、「所有」と「富の再配分」という問題を別の視点からとらえているわけです。

確かに、世界のムスリムの中には豊かな者もいれば貧しい者もいます。米国でもそれは同じです。しかし富に対するムスリムの考え方は、利益や蓄財といった世俗的な見方とは違い、もっと宗教的で神学的なものです。富および経済的配分に対するイスラームの見方は、金銭や富・権力の分配をめぐる米国内の議論に別の角度から一石を投じています。その中心になるのは正義という考え方です。

同様にイスラーム的な経済原理には、リバー、つまり貸付金に対する利息がクルアーンの教えに反しており、経済的正義にもととする考え方があります。そのため米国のムスリムの間では、たとえば利息の支払いに頼らない不動産や家屋の所有という概念が生まれ始めており、社会の変革に役買っています。もちろんムスリムが皆こうした考えの持ち主だというわけではありませんが、ムスリムがこのようにして経済的現実のあり方を変えつつあるというのも事実です。

三点目として、非暴力、非武装化、大量破壊兵

器の保有という問題を取り上げたいと思います。何を言っているんだとお思いでしょうか。ムスリムはあれほど暴力的ではないかと。そしてイランの大量破壊兵器開発や、イラクの計画を支持していたではないかと。

それでもムスリムの間では、非暴力を訴える声が確実に広がっています。米国では、メノナイト、クエーカー、ブレザレンの三つのプロテスタント教会が平和と非暴力を信仰の基盤に置いています。もちろん他宗派のプロテスタント信者やカトリック信者もその多くが非暴力を支持していますし、ユダヤ教徒も暴力と軍国主義に反対する姿勢をとっています。そして今イスラーム社会でも、インターナショナル・フェローシップ・オブ・リコンシリエーション (International Fellowship of Reconciliation) の関連団体であるイスラーム平和同盟 (the Muslim Peace Fellowship) などを中心に、非暴力と非武装化を訴える動きが着実に拡大しています。

また米国のイスラーム社会では、軍国主義や経済的不均衡といった構造的暴力には、政治的、文化的「リベラル」な視点だけではなく、クルアーンそのものの教えを引いて対峙しなければならないという考えが広がりつつあります。クルアーンの教えは「人類には非暴力という選択肢がある」と解釈することができ、現にそう解釈されることが多くなっているからです。

また私が大量破壊兵器をめぐる議論が必要だというのは、それが私個人の活動の中心だからというだけでなく、核兵器をはじめとする大量破壊兵器を開発し、保有することがアッラーの命に反することなのか否かという問題が一部の宗教学者の研究テーマとなっているからです。クルアーン第2章(牡牛の章)には、アッラーが人間に自然の被創造物の保護者となるよう命じた、と書かれています。つまりこの啓示の中でアッラーは人間に、アッラーの代理として、またアッラーの導きにより自



然の被創造物すべてを保護する責任を託されたのです。ですから現在世界の脅威となっている核兵器の保有、とくにその使用は、宗教的観点から見た場合「自然の管理者となり保護者となるように」というアッラーの命に背く行為に当たるのです。そういうわけで、政界はもちろん宗教界でも、イスラームの立場から核兵器の違法性をめぐる議論の必要性が叫ばれています。

最後に申し上げておきたいのは、米国ではムスリムが、キリスト教徒とムスリムの橋渡し役を自然に務めているということです。「キリスト教徒とムスリム」と言ったのは、米国のムスリムの多くは、私も含め、生まれつきのムスリムではないからです。私自身、43歳くらいまで、人生の大半をキリスト教徒として生きてきました。イスラームに改宗したのは12年前のことです（こういうと年がばれてしまいますね）。しかしこれはごく普通のことです。米国では二つの異なる文化圏に暮らす多くの人々が同じような体験をしています。私たちはキリスト教的なものの見方をすることもできます。妻はよくゴスペル音楽を聴いていますし、私もこうした音楽に接するとわくわくするような高揚感を覚えます。またご近所のキリスト教徒の皆さんとも親しくお付き合いをしています。その一方で私たちは「神(アッラー)の外に真の神はなく、ムハンマドはアッラーの使者である」という思想を堂々と掲げています。イスラーム社会とキリスト教社会の両方を体験しているからこそ、私たちは他とは少し違ったやり方でその二つの間を行き来し、対話を促進することができるのです。

では簡単ではありますがまとめに入りたいと思います。多元的で、日々変化を遂げつつあるムスリムは、タクシー運転手として、科学者として、エンジニアとして、あるいは医師として米国人の現世的生活に貢献すると共に、その宗教的生活を豊かにする役割を担っています。社会は今、宗教間の共存と調和に向けて着実に変化しつつあります。ま



た私たちが皆、被創造物を保護し、相互理解を育み、アッラーの栄光を賛美する責任を共有しているという認識が広がりつつあります。こうした認識の内にこそアッラーがその姿を現され、すべての人間に祝福を賜るのです。

皆さまの上に平安あれ。ご静聴ありがとうございました。



仏教の伝統と実践は、どのような方法で アメリカ社会に貢献出来ると考えるか？

——仏教はアメリカの一神教的環境にどのように関連しているのか——

バークレー東本願寺
今井 亮徳

仏教が、アメリカ社会にどのような方法で貢献できるか、ということを知るまえに、仏教はアメリカの一神教的環境にどのように関連しているのかということについて私の思っていることを述べてみたいと思います。

アメリカの社会に住むものの環境は、宗教的に一神教であるということは、その通りなのかも知れませんが、私個人としては、一神教的環境ということを意識しながら生活して来たことはありません。大統領の演説の終わりに「God bless America」と必ず言いますが、その時にチラッと一神教の国だなということを感じる程度です。アメリカの紙幣の裏には、「In God we trust」と印刷されていますが、スーパーマーケットで買い物をして、支払いのときに、「In God we trust」と考えてレジのおばさんに紙幣を渡すことはまったくありません。飛行機に乗り見知らぬ人と話をしているときに、または、隣に住むアフロ・アメリカンのおばさんと世間話をしているときに、アメリカは一神教の環境にあると感じたことはありません。つまり、私の日常生活において一神教的環境を実感していないということです。逆に仏教徒だと言って肩肘張って生活しているかという、そのようなこともなく、一住民として普通の生活をしています。しかしアメリカはキリスト教の国だと思わされることが多々ありますし、私は仏教徒だということを感ぜられる出来事に会うことはあります。

例えば、庭掃除をしていて、表を通るおばあさんたちは、必ずと言って良いほどに「God bless

you」と、声をかけてくれます。アメリカに移住した当初は、なんと答えてよいかわかりましたが、今では、相手の私にたいする思いやりを素直に受け取って、「Thank you. You too.」と平気で答えています。ただおもしろいことに、若い人は、通りがかって庭の手入れの良さを褒めてくれても、「God bless you」と私に向かっていうことはありません。正直なところ今でも「God bless you」という言葉に抵抗はありますが、平気になったということは、「God bless you」という言葉が、「Amida Buddha always embraces us」というように私の中ですり替えが行われているということです。ですから、大統領なども「God bless America」という代わりに、「God bless the World」と言えばもっと世界の人達に喜ばれるだろうなと思ったりします。

また、こんなこともありました。クリスマスの近づいた12月のある日のことです。10歳ぐらいの女の子が母親と一緒に私に会いにきました。その女の子が学校で友達に、「あなたはキリスト教徒ではないから、クリスマスを祝う資格はない。だからクリスマス・ツリーも飾ってはいけない」と言われたということです。そのことについてどう思うかと聞かれました。私は、「クリスマス・ツリーの伝統は、キリスト教徒から始まったものだという訳ではなさそう。だからキリスト教徒でなくてもツリーを飾ってもいいのではないかな。クリスマスは、今ではキリストの誕生を祝う日というよりも全世界の人達が、なんらかの形で愛を確認するような祝日となっているのではないかな。だから仏教徒として愛ということ



を大切に考えるチャンスとしたら良いのではない
か。またあなたの友達が、本当のキリスト教徒なら、
キリスト教徒だけがクリスマス进行うことが出来る
とは言わないと思うよ。愛をあなたと分かち会
うという意味から言えば、あなたの友達は本当のキ
リスト教徒ではないのではないか。ただ、あなた
に意地悪しているだけだと思うよ」というようなこ
とを言ったことを覚えています。

この10歳の女の子の置かれた環境にアメリカの
宗教的現実を感じます。キリスト教徒でない子へ
の宗教的迫害という大げさですが、「クリスマス
を祝う資格がない」という子の発言にファンダメン
タリストの影を見る思いがします。また、この10歳
の子は日系人で、その友達というのは非日系人で
す。そこには、民族的(ethnic)な問題も含んでい
るように思います。

もう一つの例を挙げます。pledge of alle-
giance についてです。問題は、「one nation
under God」と言う言葉です。ご存知のように、こ
れは、憲法(修正憲法第一条)との関係、公教育
の場におけるschool player という言葉に代表さ
れる宗教教育との関連、また、1954年に「one
nation under God」という言葉がpledge of alle-
giance に書き加えられたという事実から来るアメ
リカ政府の政策における歴史的な問題など広範囲
にわたりますから一概に論ずることができません。
ここでは、そのような環境で私の周囲の人達は、
この問題をどのように考えているかということを若
干報告し、それに私の個人的見解を付け加えたい
と思います。

子供のころ、学校で「pledge of allegiance」を
言うとき、どんな気持ちだったか、またこの言葉が今
でも生活に影響を与えているか、という質問を数名
の大人に聞いてみました。全部の人が、子供の
ころは言えというから言っていた。だから別に問
題意識ももたなかった。高校ぐらいで一番問題と
なったのは、Anglo-American とAfro-American

とのracial tension/conflict だったと言うこと
です。大人になった今、「pledge of allegiance」の抱
えている問題についてどう思うかと重ねて尋ねた
ところ、問題にならないというのは、custom (習
慣) として言っているからだということです。しかし、
教育はある意味で洗脳的役割をもっているから、
nationalism や愛国心高揚と結びついてくると自
我主張になってきて、他者を認めない独善的な生
き方となる危険性がある、とも言っていました。一
人の人は、「one nation under God」という言葉は、
後から付け加えたのだから、撤廃すればよい、と
も言っていました。

私の住んでいるバークレーを中心とした San
Francisco-Bay Area は、中西部や南部と比較し
てリベラルな考え方を持つ人が多数を占めている
といわれています。ですから、このような意見は
普通にいわれていることだと思います。しかし、こ
こでの問題は、one nation に重点おくのか、
under God に重点をおくのかということだと思
います。一宗教者としては、どちらの言葉も問題を含
んでいると思いますが、私と話してくれた人達は、
one nation に問題を置き、God ということには注
意を払っていないというように受け取れました。
言い換えれば、彼等の意識の中には神学的な意
味でのGod は存在していないといっても良いので
はないでしょうか。ですから、仏教寺院がスポンサ
ーとなっているboy scouts やgirl scouts で、
「pledge of allegiance」を言う場合(20年前ほど
までは、言っていました、今はどうなのか知りませ
ん)、God という意味を「自分の信ずる宗教」とい
うように説明していたようです。

私の住んでいるバークレーはリベラルな人が多
いと言いましたが、リベラルということは、「open-
ness」即ち、開かれた社会ということでもあります。
カリフォルニア、就中、ロスアンゼルスやベイ・エイ
リアという地域は、より開かれた社会になってい
ると言われています。開かれた社会というのは、

異なったライフ・スタイルを受け入れるということ
でもありますから、民族的背景の異なった人達を認
め、ゲイ社会を認め、エイズ問題などに積極的に
関わっていると思います。開かれた社会ですから、
いろいろな宗教も共存していると言って良いと思
います。こういう開かれた社会となってきたとい
うことには、ロスアンゼルスに見られるように人種・
民族の多様性に対処していかなければならない現
実的な社会の流れということがあるので、
ベトナム戦争のころに興ったカウンター・カルチャ
ー・ムーブメントを見逃すわけにはいかないと思
います。カウンター・カルチャー・ムーブメントは開放
された社会を作っていく一つの流れとして今も流れ
続けているし、開放された社会という考え方は、
今はカリフォルニアという小さい地域で興っている
事柄からかもしれませんが、全米に広がっていく可
能性を含んでいるということを、ここでは指摘する
に留めておきたいと思います。

さて、「仏教の伝統と実践は、アメリカ社会にど
のような方法で貢献できるか」という私に与えられ
た主題について私見を述べさせて頂きたいと思
いますが、それを述べるには今のアメリカ社会をど
う見ているのかによって異なってくると思います。
つまりアメリカ社会は健全な社会なのか、それとも
病んでいる社会なのかということです。具体的な
例は一々あげませんが、私は、病んでいる社会と
見ます。社会が病んでいるということは、言うま
でもなく社会を構成する人が病んでいるというこ
とです。その病みの中心的課題は、「自我中心性」を
肯定する生き方にあるのではないかと考えていま
す。翻って考えてみますと、宗教、特に仏教は、
常に「自我」の在り方を中心的課題とする教えで
あると考えます。そこには深い「内省」が実践と
して求められます。Meditation(座禅)が、アメリ
カ社会には大変普及していますが、多くの人は、ス
トレスに対するリラクゼーションとして座禅を取
り入れているようです。それも結構ですが、「内省」

には座るということと共に謙虚に教え(Dharma)
に聞くということが求められます。そのように見て
きますと、「自我中心性」を肯定する生き方のアン
チ・テーゼとして「自我中心性」を否定する仏教の
伝統と実践が、アメリカ社会に貢献していく一番基
本となる事柄ではないでしょうか。自我中心的生
き方に対する否定はアメリカ社会ばかりでなく、現
在の世界の問題に対しても云えることではないで
しょうか。

「内省」ということが、アメリカ社会に全くな
かった、ということではありません。例えば、ベ
トナム戦争中にもよく読まれた Dalton Trumbo
というハリウッドの映画製作者であり小説家であり脚
本家が1939年に書いた *Johnny got his gun* とい
う本などを読みますと、戦争の愚かさの告発とい
のちの大切さが切実に伝わってきます。しかし、こ
のような考え方は、1940年代から50年代にかけ
てのマッカーシズムが荒れ狂う中で、反愛国的、共
産主義的として議会から弾圧されました。最近
では、Michael Moore 監督の “Fahrenheit 911”
という映画が大きな反響を呼んでいます、私見で
は、この映画も Dalton Trumbo の “Johnny got
his gun” に流れている同じテーマがより鮮明に、
即ちアメリカという国家の「自我中心性」というこ
とを問題にして扱っていると思います。しかし、
Dalton Trumbo の時代と違ってMoore 監督が、
反愛国的として議会から弾圧されることはない
と思います。それは私が、アメリカがより「openness」
な社会となってきた現れだろうと見ているか
らです。そのことは、また、第2次世界大戦中に
120,000人の日系アメリカ人をconcentration
camp に収容したことに対し、アメリカ政府が、
1988年に償いをしたという事実にも見ることで
できると思います。

何が愛国的で、何が反愛国的なのか、という
ことは、ここでは問わないことにします。何故かと言
えば、恐らく主義・主張の応酬に終わると思うから

です。ただ、考えられることは、一国の利益のみを追求する時代は終焉を迎えてきているのではなからうか、と問いたいのです。宇宙船地球号という言葉が生まれてきている現代です。平和、環境、といった問題は、一国のみで解決できる問題ではありません。人類的レベルで解決していかなければならないと考えているからです。

仏教という言葉をはとんどのアメリカ人が知らない時、アメリカのキリスト教徒は、奴隷解放という人類の基本的人権にかかわる問題を南北戦争というアメリカ人同志の殺戮を通して勝ち取りました。リンカーン大統領のGettysburg Address として「and that government of the people, by the people, for the people」という有名な言葉が残っています。その前に、彼は、「that this nation, under God, shall have a new birth of freedom」と言っています。この時のGod はキリスト教徒のみのGod なのでしょうか。私には、リンカーンの生き方として、また、キリスト教徒が互いに殺し合うという悲劇をとおして、Godという言葉に、謙虚に自らを省みるという在り方をうながす超越的側面をもっていたと理解したいのです。

仏教には、God という言葉を立てなくても、謙虚に自らを省みる在り方をうながす超越的側面を教えにもっています。そのような考えのもとで、「自我中心的」な生き方を否定する仏陀の教えは、アメリカ社会に貢献できるだろうと言いたかったのです。また、開かれた社会ということを通して、仏教がアメリカ社会に同化 (assimilate) していくのではなく、異なる価値観をもつグループ或いは民族が違いを理解し敬いあうという統合的 (integrate) な役割を担い、なおかつ、アメリカの政治から回避した、政治と争ったりするのではなく、人類の普遍的な理想に向かって対話を続けていく忍耐を教えつづけてくれるだろうと考えています。

大言壮語したような意見発表で、おもはゆい思いをいただいています。というのも私のおあずかりし

ているパークレーの寺は120名ほどの家族からなる小さな寺です。私は、その小さな寺に出入りする人達のお世話で毎日が明け暮れているという状態です。このような機会を頂いて、改めてアメリカにおける仏教を考えることができました。最後にこの会議を主催してくださった関係各位の御苦勞とご招待頂いたことに、ここから御礼申し上げ、意見発表とさせていただきます。

コメント・ディスカッション

司会：バーバラ・ジクムンド
(同志社大学大学院アメリカ研究科教授)

【司会】 三人の方にプレゼンテーションをしていただきました。ありがとうございました。では次に、出席者のうち二人の方に5分間ずつコメントや感想を述べていただきます。

コメント：クラーク・ローベンシュティン
(メトロポリタン宗教対話協議会)

ジクムンド先生、ありがとうございます。私たちの宗教がアメリカ社会にどのような貢献ができるかについての考察に参加する機会を与えてくださったことに感謝します。ボレリー先生のコメントについて述べさせていただきます。先生は、カトリック教会による選挙参加についての分析に非常に有用な方法で焦点を当てられました。20世紀には大統領職や副大統領職など四つの選挙にカトリック教徒が参加しました。優れた分析だったと思います。そして、こうした選挙に対するカトリック教会のアプローチの変化についての先生の結論は、アメリカでは選挙へのカトリック教徒の関与が増えていることを示していると思います。カトリック教徒が大統領職に適しているか否かという問いかけに反論する必要はもはやないと思います。大統領職などに就いたカトリック教徒はその役割を果たしていく過程でどのように評価されるべきかが現在では論じられているからです。

ボレリー先生、貴方はその他にもローマ・カトリック教会がアメリカ社会に非常に多くの重要な貢

献をしてきたし、現在もしているということについては論じられませんでした。私はこうした貢献のうちの三つについて簡単に言及したいと思います。その一つについては以前に貴方も触れられました。“Catholic Charities” は多くの素晴らしい方法でわが国の貧しい人たちのニーズに correspo 最大の影響をもっています。カトリック教徒だけでなくあらゆる人々に奉仕している “Catholic Charities” の費用の多くはカトリック教会が負担していますが、これはカトリック教会のアメリカ社会に対する素晴らしい貢献の一つです。

次にアメリカの司教に関する分析について述べたいと思います。1980年代における経済的公正と核戦争に対する司教の意見も非常に重要な貢献をしたと思います。両方とも、司教の意見に基づいてInterfaith Conferenceを通してワシントンで私たちが異宗派間対話を行ったときに取り上げられた事柄です。

そして次は貴方が昨日述べたことですが、カトリック教区学校による貢献です。カトリック教区学校は、スラム地区の子供たちにとっては公立学校の代わりとなっていて、非常に重要な存在です。少なくともワシントンにおけるカトリック教区学校の生徒のほぼ半数はカトリック教徒ではありません。

また、自然法に関するボレリー先生のコメントは特に素晴らしいと思います。様々な宗教伝統をもつ市民間で、道徳に関して納得のいくコンセンサスに到達するためのしっかりした基礎を築く場合に、

自然法は重要な役割を果たすというのが、古くからのカトリックの共通の理解です。これはカトリックによる貢献についての非常に重要な洞察であり、宗教間における努力のなかでカトリックはこうした貢献をしており、またしていけるということをもっと強調する必要があると思います。私たちの信仰における主要なポイントとこれらの信仰について、こうした洞察がなされる理由とを私たちは明確に区別しますが、その一方で、多くの場合、信仰の対象は違っても、信仰をもつ人間としての共通の価値観の下に私たちは連帯できるのだと思います。理性は重要な役割を果たすものであり、共通の価値観は何であるかを私たちが確認する助けとなるものです。

私たちの研究のなかだけでなく多くの他の状況のなかで一貫して活用されてきたInterfaith Conferenceの成果の一つは、『共通の大義のために』(*To Our Common Cause*)と題する互いに共鳴できる書物です。これは、私たちの最高の共通分母あるいは私たちの共通分母の多くと呼ぶもので、様々な信仰をもつ人間として連帯できる共通の価値観を明確にしたものです。私たちが共通の価値観を知る方法の一つが自然法です。

カトリック教会のもう一つの重要な貢献は、貧しい人たちにとっての選択の自由を重視していることです。確か、サイダーさんも福音派によるコミットメントとしてそのことを促していました。他のキリスト教の教えのなかにも確実にあります。しかし、カトリック司教たちが貧しい人たちにとっての選択の自由を一貫して強調していることは素晴らしい貢献です。

レイミーさんの考察についても少しコメントさせていただきます。ムスリムによる四つの貢献についての貴方の洞察は素晴らしいと思います。ただ、イスラームに改宗したキリスト教徒の貢献について、私自身が経験し確信していることについて少し述べさせていただきます。イスラームへの改宗者は多くの場

合、イスラーム信仰とキリスト教信仰についての家族内における、あるいは人と人の中における架け橋となっています。もう一つの架け橋となった例は、Interfaith Conferenceの元会長であるDr. Sulayman Nyangです。彼はムスリムとして育ちましたが、子供時代はカトリック系の学校に通い、時々、キリスト教徒と対話して、キリスト教徒以上に聖書やキリストの教えについての理解を深めました。しかし、ここで指摘しておきたいのは、アフリカ系アメリカ人のムスリムが特に刑務所内での効果的な勤めを通して抱える難題の一つは、自分たちの息子や娘、親戚がムスリムになり、自分たちの信仰を見捨てると考えるキリスト教の家族との間で軋轢を生じることです。キリスト教の牧師は少なくともしばらくは、「羊が盗まれようとしている」、即ち、自分たちから人々を連れ去ると考えます。そこで、アフリカ系アメリカ人がイスラームに改宗する場合の非常に重要な貢献は、橋を架けることですが、時として緊張も生み出します。

CISMORが認識しているかどうかはわかりませんが、*Muslims in the Public Square*は非常に重要な文書です。これはリリー財団が資金を提供して、八つの異なる宗教コミュニティと一緒に3年がかかりで研究した成果の一部です。この研究報告書のすべてが森先生、一神教学際研究センターの図書館に非常に重要な貢献をしているのではないのでしょうか。しかし、特にそのうちの2冊は、公的領域におけるムスリムの役割と貢献についての多くの研究から生まれたものです。

また、ムスリムと核戦争に関する討論が活発化し、一部のコンセンサスが得られていることについてのレイミーさん、貴方のコメントを聞いて嬉しく思いました。私が1985年にキリスト教徒とムスリムの関係に関する牧学会博士号論文を書いたとき、核兵器使用反対の立場のムスリムによる論文は一つしか見つけることはできませんでした。“Christian-Muslim relations, Our Hope in Dialogue, Our

Bond in Covenant”という私の論文のコピーを1部、CISMORに提供するつもりだったのですが、持ってくるのを忘れたので後で郵送します。

最後にアメリカとは何かを定義する場合に、外国系アメリカ人の価値観を思い出させてくれたことについて今井先生に感謝します。今井先生は、私たちが自分自身をどのように定義し、アメリカの宗教生活だけでなく政治生活のなかで、私たちがいかに安易に宗教語や神の話を利用しているかということについての非一神論的伝統としての仏教の課題と恩恵についても想起させてくださいました。

ワシントンには25の仏教寺院があり、どの国の仏教寺院かという、12、15かな、あるいは18かな、国の数は確認していませんが、様々な国の仏教寺院があります。アメリカ人が仏教に改宗したコミュニティかということについても確信がありません。そのコミュニティのなかはこのように実に多様であるので、唯一連帯できることと言えば、お釈迦様の誕生日を祝うことです。これらのコミュニティは、Interfaith Conferenceに加入する可能性を模索しているおり、全員ではありませんが、一部の人たちは加入するつもりです。加入するためには、個々の寺院ではだめだということは明白です。移民コミュニティと改宗コミュニティがまとまり、必ずしも25すべての寺院が参加しなくても、ある程度まとまって統括グループを結成する決心をしなければなりません。そんなことになるとは思いますが、これらのコミュニティはある程度まとまるのではないかと考えます。Interfaith Conferenceに加入する場合に仏教コミュニティはもう一つの貢献をすることになります。しかし、これは仏教内の協力をさらに促進することになると思います。ワシントン地区にある11のヒンドゥ寺院と一つのジャイナ教寺院はヒンドゥ・ジャイナ寺院連合協会を結成しています。これはInterfaith Conferenceが加入条件として一つの寺院ではなく、信仰コミュニティ

であることを要求しているからです。現在、彼らは統括グループになっているので、例えばヒンドゥ教のディワリー(灯明の祭)も一緒に行っています。以前には彼らは別々に多くの祝祭を行っていましたが、今ではディワリーを祝うために15,000~20,000人のヒンドゥ教徒が一堂に会します。仏教寺院の間でも今後、新しい協力形態が生まれていくと思います。仏教コミュニティもInterfaith Conferenceに加入したいと考えており、二つないし三つの寺院が参加したいというのではなく、一つの信仰コミュニティとして参加することを私たちが要求しているからです。加入のための用意をする過程で、仏教徒の人生は互いに充実したものとなり、また他の信仰コミュニティの人生も充実したものになっていくでしょう。有益なコメントをお聞きし、それらについて考察をする特権を与えてくださり、ありがとうございました。

【司会】 ありがとうございました。では森教授、お願いします。

コメント: 森 孝一
(同志社大学大学院神学研究科教授・
一神教学際研究センター長)

このあと、クロージング・アドレスはジクムンド先生から正式になされると思いますけれども、コー・チェア(共同議長)の私からもここで改めてアメリカからご参加くださいました8人の先生がたに心から御礼をお申し上げたいと思います。この二日間、本当に多くのことを私たちは皆さんから学ぶことができました。本当にどうもありがとうございました。このシンポジウムで培われた関係をこれから発展させて、さらにCISMORにご協力いただければと願っています。

それでは、私のコメントを2点にわたってお話します。第2点は今井先生に、第2点はボレリー先生とレイミー先生にコメントをしたいと思います。

今井先生はカリフォルニアのパークレーの

Buddhist Templeの一人のモンクとして、その現場から、本当に貴重な体験に基づいたお話をしてくださいました。そしてその経験、体験というものに基づいて、今日のアメリカと、そしてアメリカの宗教について非常に深い洞察を示してくださいました。このことに対して心から感謝申し上げたいと思っています。

今井先生のご発表の中で一つ二つ私が気のついたことを申し上げたいと思います。一つは、1988年にアメリカ政府が第二次大戦のときに日系アメリカ人を強制収容所に入れたということについて、謝罪するだけではなくて、具体的に日系社会に150万ドルですか、個人に2万ドルですね。

【今井】 個人に2万ドル。あれは、キャンプで生まれた子、キャンプに収容された人、その人たちに個人に2万ドルずつです。そういう補償です。

【森】 そうですね。日系人社会全体に対しても150万ドルの賠償があったと思うのですが。

【今井】 それは僕はあまり聞いていないです。

【森】 そうですか。私はそれがレーガン政権のもとで行われたということについて、非常に驚きを持ちます。あの保守的な、レーガン政権のときに、そのような謝罪がなされたということです。この点に関してアメリカを私は尊敬いたします。それと比較して、日本が第二次世界大戦のときにアジアの国に対して行ったことに対して正式の謝罪、具体的な謝罪を何もしていないということに対して、私はこれは恥ずかしく思います。

それから、今井先生の発表の2点めのコメント、それはカウンター・カルチャーについてです。私は1973年から77年まで、今井先生がおられるパークレーで大学院の学生として勉強しましたから、カウンター・カルチャーの最後の辺りのことを経験して

います。僕が住んでいたアパートのすぐ前も、コミュニティ(共同の住居)で20名程の男性と女性が生活していました。そして子供が生まれました。誰の子供かということになりますが、彼らはみんなの子供だと受け止めていた。そのような時代でした。

このカウンター・カルチャーをどう評価するかという問題です。この問題は今日のアメリカまでずっと続いています。今井先生はそれを高く評価されました。私もパークレーにいた者として、それはよく分かります。しかし反対に、カウンター・カルチャーに対するカウンターパンチとして、レーガン以降の保守化というものが起こってきて、それが今日まで続いていて、文化戦争を生み出してきているのではないか。ですから、これをどう克服していくかというのは非常に大きな問題ではないか、というのが今井先生の発表についての私のコメントです。

ボレリー先生は非常に精密にアメリカのカトリックの歴史を教えてくださいました。そしてレイミー先生はアメリカのイスラームが直面している課題についてお話しなさったわけですが、私はそれを両方聞きながら、外国にいるアメリカ宗教の一人の研究者として少し考えてみたい。アメリカン・イスラームの将来について、私の考えを述べてみたいと思います。

今日アメリカのイスラーム教徒、すなわちムスリムの人たちが非常に厳しい状況に置かれているということは私はよく分かります。これは考えてみれば100年前にカトリックがアメリカ社会の中で置かれていた状況と非常によく似ているのではないか。100年前のアメリカ社会においては、カトリックは外国の宗教であると受け止められていました。アメリカの原理である民主主義(共和制)と相入れないと考えられて、多くの迫害や抑圧を受けていたと思います。

ところが、そのカトリック教徒のなかから、1960年にはジョン・F・ケネディが大統領になった。これについて先ほどボレリー先生はジョン・F・ケネディ

の魅力、能力であったとお話しになりましたが、私はもちろんそれもあると思うけれども、アメリカのカトリック自体が何十年かの間に大きく変化してきたことが背景にあったと考えています。その変化をアメリカ世論が受け入れたのではないかと思います。私はそれをアメリカン・カトリックの民主化であったと考えています。

例えば、価値観の問題ですが、今回の大統領選挙でも問題になった中絶の問題、そして避妊の問題です。これはバチカンとしてははっきりとした立場がある。それについてはボレリー先生が紹介してくださいました。しかし世論調査によれば、アメリカのプロテスタントとカトリックの差は、中絶と避妊の是非についてはほとんどないのです。

それはどういうことなのだろうかということを考えてみると、アメリカのカトリックの信者が変化しているのです。バチカンから自立したアメリカン・カトリックというものを作り出していったということです。それをアメリカの世論が認めて、アメリカのカトリックは外国の宗教ではなく、アメリカの宗教であるということを認識した。それがジョン・F・ケネディが大統領になったということの背景にあるのではないかなと思うわけです。

バチカンから自立するということは一体どういうことなのだろうか。それは、バチカンが何と言おうと自分で判断するカトリックになったということではないかと思います。100年前のカトリックに対して、アメリカ世論が持っていた恐れや不安、それから現在のアメリカのムスリムに対してアメリカの多くの人々が持っている恐れや不安というのは、非常にアナログカルではないかなと思うわけです。

それはどういうことかという、先ほども少し言いましたが、アメリカの原理である共和制、あるいは民主制と、過去のカトリックや今日のイスラームは相入れるのかどうかという問題ではないかなと思うのです。

アメリカの原理である共和制を成り立たせるも

の、その根本にあるのは自律した市民だと思います。自律した市民とはself-governed citizenです。だれかに影響されて投票するのではなくて、自分の判断で投票することができる人を育てることができるのかどうか。それがこのアメリカ人がかつてカトリックに抱いた不安であるし、今、イスラームに対して持っている不安ではないかなと思うのです。これは先ほどの議論の中でホメイニが言う自由と、アメリカが言う自由というのは同じではないかという議論がありましたけれども、私はやはり違うと思います。アメリカが考える自由というのは共和制に基づいた自由です。

そのことを皆さんに、もう少し説明するために一つ、1920年代にファンダメンタリストとモダニストが論争を行ったとき、ファンダメンタリストがモダニストを批判した言葉を紹介してみたいと思います。これは何について述べたものかということ、いわゆる聖書の文献批評、テキスト・クリティシズムについてのファンダメンタリストの批評です。あるファンダメンタリストはこう言っているのです。ここでいう1920年代のファンダメンタリストの定義は、現在のファンダメンタリストの定義とは全く違います。現在のファンダメンタリストのように1920年代のファンダメンタリストは政治的な意味というものは何も持っていません。

その発言とはつぎのようなものでした。「かつてカトリック教会は、神と私たちの間にローマ法王を置いた。」カトリック教会は神と人間の間にローマ法王を置いている。ところがモダニスト(近代主義者)、これは現在のリベラル派といってもいいと思うのですけれども、モダニストのクリスチャンは「神と私たちの間に聖書学者を置いている」と。すなわち、テキスト・クリティシズムを行うことができる聖書学者だけが神の言葉を理解できると、モダニストは考えていると批判したのです。ファンダメンタリストはそうは思わない、庶民である自分たちが神の言葉を理解できるのだということ

を言いたかったのだと思います。

私は今日アメリカの多くの、いわゆる草の根の民衆たちがムスリムに対して抱いているイメージ、これは正しくないと思いますが、そのイメージというのはどういうものかということを考えてみると、これとよく似た形を取っているのではないか。それはどういうことかという、いわゆるイスラーム法学者の問題です。先ほど議論になっていたような、イスラーム法学者の問題です。結局、アッラーフの意図というものを理解するのは、イスラーム法学者を通してしか理解できないのでしょうか。それだとするならば、そのイスラームはアメリカの原理に合わないのではないか。私の質問は、今後アメリカのイスラームが、かつてカトリックがアメリカ化したように、アメリカ独自の、アメリカの原理と相入れるようなイスラームに変化する可能性があるのかどうか、そのことを教えていただきたいと思います。

ディスカッション

司会：バーバラ・ジクムンド
(同志社大学大学院アメリカ研究科教授)

【司会】 これはローマ・カトリック教徒とムスリムの両方が答えたいと思う質問だと思います。まず回答をお聞きし、それを踏まえて考えていきましょう

【森】 とくに、ムスリムの人たちから意見を聞きたいと思います。

【司会】 では最初に、よろしければボレリー先生にお願いします。簡単にお答えいただけたらと思います。その後、さらにコメントや質問の時間を30分ほど取ります。一連の質問で終わりにするより、私たちがこの時間に学んだことについて何らかの考察をするようにしていきたいと思います。お願いします。

【ボレリー】 森先生のご質問は、実際には長い論文が必要なご質問です。昨日、今井先生がお話されたことについて述べさせていただきます。今井先生は、野菜スープとサラダは違う、つまり同化と統合は違うと言われました。そのことを心に留めておきたいと思います。益々多くの人がアメリカ社会に参加するようになることにより、カトリックの宗教的力や宗教的豊かさがその特性を失いつつあります。私たちは、カトリック教徒としての威信を失いつつあり、他のあらゆる宗教コミュニティがアメリカ社会と向き合うときに目の当たりにするような、アメリカの古くからの率直な態度といったようなものを身につけつつあります。そこで、この場合に私たちが抱える問題とは、私たちがもはや特別なカトリック教徒ではなく、ステレオタイプを守り続けているといった、他のキリスト教グループに似たものになりつつあることを、ある程度認めざるを得ないという非常に深刻なものだと思います。

まず、1984年のMario Cuomoの演説について批判するなら、彼が「中絶とバースコントロール」という表現をあたかも同じ原理に関するものでもあるかのように、あまりに頻繁に使用しすぎたと思います。この二つは全く別の問題です。一方は生物医学的倫理観に関連するものであり、もう一方は性的な行動に関連するものです。これらは非常に異なる二つの問題なのです。

時間の制約があるため詳しい説明はできませんが、私は長い論文のなかでカトリック教会の世界教會的コミットメントについて述べています。私が論文のなかで非常にカトリック的と言っている場合、それはキリスト教徒の友人に対して非常に強い世界教會主義的なコミットメントをしていないという意味ではありません。私たちは教会、カトリック教会を信じていますし、これについては他のキリスト教徒も同じ考えだと思います。教義のための要素の一つは信者による受け入れです。これは“consensus fidelium”つまり信者のコンセンサ

スと呼ばれています。当然のことながら、信者が教えを信じない限り、教えは意味をもちません。

バースコントロールの問題に関しては忠実な信者の話だと思います。中絶の問題については、サイダーさんが既に指摘しているように、アメリカ社会の一般的なコンセンサスは中絶反対です。アメリカ人は一般的に、中絶は良くないことだと考えています。しかし問題は、中絶を選択する権利があるかどうかなのです。それが問題なのです。一部の鋭い識者が指摘しているように、それは連邦の問題ではありません。極めて保守的な法律の専門家に話せば、彼らは、それは法律問題としては決着済みだとさえ言うでしょう。一部の人たちの意見は違います。しかし、実際のところ、キャンペーン中、民主党大統領であったクリントンの時代のキャンペーン中に何人かの人が指摘したように、民主党の時代には共和党の時代より中絶は少なかったのです。これは、生命だけでなく生命のあらゆる面に対するカトリック教会やカトリック教徒のコミットメントと関係があります。このコミットメントには、選択肢をもてる機会を提供すること、経済的な困窮に直面しないように子供を育てる方法を人々が見つけられる機会を提供することなどが含まれます。そのため、一連の幅広い問題があるのです。先のキャンペーンで、妊娠中絶合法化に反対するカトリック教徒が、ジョン・ケリーを何故支持するかについての多くの記事を読みました。多岐にわたる問題だからです。例の最高裁での「Roe対Wade」の裁判は多くの人たちから見ると既に決着した問題であり、州法や地域の判決に関連する問題なのです。

教皇権の役割について話す時間はありません。教皇不可謬説は、民族国家の台頭とイタリアにおける教皇領の喪失、それに聖書のなかの言葉や伝統についての現在も続いている神学的理解が相俟って発生した問題に対する19世紀の対応でした。貴方が提起されたあらゆる範囲の問題について私たちは非常に活発な討論ができるでしょう。

昨日の10分間という短いプレゼンテーションのなかで私が言いたかったことの一つは、第二バチカン公会議の前のカトリックコミュニティと第二バチカン公会議後のカトリックコミュニティは違っているということです。カトリック教徒は常に良心に基づいて判断を下さなければなりません、第二バチカン公会議では、近代世界、即ち私たちが現在生きている近代世界と折り合いをつけることに重点が置かれました。

事実、この特別な選挙の場合、こうした物の見方に従おうとすれば、バチカンにおける当局は、その人が中絶を選択する権利を支持する政治家である場合、あるいはこうした政治家に投票するカトリック教徒である場合、聖餐を受けるべきかどうかをその人に言うことに非常に抵抗を感じていました。バチカンの公式資料をみればわかりますが、バチカン職員はこうしたことを言うのをむしろ躊躇していました。そのため、それが逆の展開になりました。

この点について私は五つ程度の意見しか述べることができないでしょう。カトリック教徒の政治への関与については非常に複雑な歴史があります。非常に長い経緯をみていく必要があるでしょう。非常に多くの場合、人々はお互いについて自分なりの目で自分なりの理解をしていると言っていいでしょう。人が言うことや人がどのように理解することによって人を理解するほうがはるかにいいことです。人がその人自身について何を言っているか耳を傾けることから対話は始まるのです。それは、私たちが自分自身をどのようにみるかという観点から他者を明確に理解しようとするよりかはるかに重要だと思います。以上です。

【司会】 ありがとうございます。では、何かコメントはありますか。おありですか。ではどうぞ。

【レイミー】 ムスリムにとっての同化の問題につい

てコメントします。同化を理解する場合に私が提起したい問題は二つあります。一つは、私の考えでは、これはこの件についての“Fellowship of Reconciliation”や“World Council of Muslims”あるいは“Interfaith Relations”などからの正式の表明ではなく、この研究に携わっている人間としての私の認識は、アメリカ合衆国は世界において帝国としての役割を積極的に追い求めつつあり、経済的支配、政治的支配、あらゆる範囲の軍事支配、資源戦争を含め、世界全体にアメリカ帝国を広げていこうとしています。アメリカ合衆国は様々なものが入ったバスケットのようなものです。それはアメリカを国民国家としてだけでなく、ポール・ウォルフowitz国防副長官が規定した明確な教義と、グローバル支配という明確な教義である新しいアメリカの世紀のためのプロジェクトを規定します。これは、通常「帝国主義」と呼ばれるものです。

或る民族集団を帝国構造に同化させるという考え方は、道徳的に考えても、そのときアメリカ帝国の一部としての私たちが、この支配の対象であるイスラーム世界の同胞にどのような対面するかという点から考えても問題です。

次に、同化したアメリカン・ムスリムが中東における対イラク戦争の問題にどのように対処するかです。アメリカン・ムスリムはアフガニスタンにおける戦争の問題にどのように取り組むのか。民主主義を守るためではなく、資源獲得のためにイラクに新たに16の米軍基地を建設し、維持するという計画に私たちはどのように対応するのか。私にとってこれは単なる政治的問題ではなく、この言葉が適切かどうかはわかりませんが、価値観の問題です。そのため、これは私たちが同化するかどうか、同化するならどのように同化すべきかを問かけるときに中核としなければならない問題です。

第二の疑問は、アメリカだけのことではありませんが、同化の論議のサブテキストとして表面化して

くるものです。人種構造の問題、米国ではしばしば「白人至上主義」と呼ばれている現象に関するものです。白人カトリック教徒を支配的な白人プロテスタントの文化に同化させることと、黒人、褐色人種、黄色人種のムスリムを白人プロテスタント社会に同化させることの違いは、単にムスリムではないがキリスト教の一部であるというカトリックの問題と同じではありません。さらに、米国におけるムスリムは100%ではありませんが、相当数が非白人というのが現実です。

また、アメリカにおいては、非白人をどのようにみなすかということについては歴史的にみて一様ではありません。第二次世界大戦からの二つの例について簡単に述べてみましょう。一つは今回の私たちのホストである日本の人たちが苦い思いで認識している例です。米国はドイツ、イタリア、日本と戦争をしましたが、強制収容所に収容されたのは日本人だけでした。米国はマンハッタン・プロジェクトによって二つの核兵器を開発しましたが、原爆投下の悲劇に遭ったのはドイツ人ではなく、広島と長崎の日本人でした。このことに反論される人はいないと思いますし、人種問題をより幅広い対話のなかで宗教、階級、文化、構成の要素に分けて討論する必要があると思います。

従って、誰かが指摘したように、完全に人間であるためには、人は人種差別を認識し、人種差別を根絶する方法について、進んで真面目に誠実に対話しなければならないと思います。人種の問題と帝国の問題は、ムスリムなど他の民族を米国文化や米国市民社会といった別の構造に同化させる、あるいは同化させる可能性についての討論に影響を与えるものだと思います。

【司会】 ありがとうございます。では次にマハ・エルジェナイディーさん、話してください。

【エルジェナイディー】 わかりました。ムスリム系

アメリカ人の同化に関する森先生の質問についてコメント、あるいはお答えしたいと思います。私は別の観点からこの問題にアプローチしたいと思います。これはアメリカのムスリム・コミュニティで現在起きているプロセスだと思います。これは私にはあまり馴染みのないトピックです。なぜなら、これは私ではなく、別の学者に対してなされるべき質問だからです。本来ならここに出席されるはずであった学者Dr. Ingrid Madsenの代わりに私がお答えすることになります。私は学者というより活動家ですが、私たちのコミュニティの歴史はそれほど古くないのです。

しかし、一方で私たちのコミュニティは、アメリカ海岸にたどり着いたムスリムであるBrother Ibrahimが早くに設立したコミュニティという意味では長い歴史をもっています。コロンブスの前に設立されたという説もあれば、18世紀と19世紀に奴隷としてやってきた西アフリカ人が確かに設立したという説もあります。とにかく、ムスリムたちはアメリカの地にやって来ました。現在のムスリムに関するかぎりでは、60年代に遡ります。例えば、私の父は60年代に米国にやって来ました。父は専門家であり、心理学者でした。ジョンソン大統領の移民政策により60年代半ばに米国にやって来たのです。

また、アフリカ系アメリカ人のムスリム・コミュニティもその歴史はかなり新しいものです。ネイション・オブ・イスラームから主流派イスラームへの転換が起きたのは、75年のElijah Mohammedの死の後の70年代のことでした。アフリカ系アメリカ人コミュニティ、私は彼らを擁護するつもりはありませんが、これらの人々の多くをシリア、エジプト、その他のムスリム世界各地に送ることによって学者を育てようとする多くの運動があることは知っています。ネイション・オブ・イスラームでは学者が非常に不足しているのです。

とにかく、ムスリムは60年代にやって来ました。

私の世代は学位を取得していますが、皆、医学か工学の道に進みました。私たちの両親が人文科学の分野への進学を薦めなかったからです。私は工学部に入りました。兄弟も同じです。妹は小児科医、弟は内科医です。彼らはやはり医者と結婚しています。イスラーム学の道に進んだのはごくわずかでした。あまり成功していないか成績が良くないといった人たちがイスラーム学の道に進みました。その考え方は変わりつつあります。

皮肉にも、ヨーロッパ人がイスラームへ改宗することを通して多くの変化が起きています。ここに出席するはずだったDr. Ingrid Madsenもそうした人の一人です。Hamsa Yusef Hansonもそうです。Zeehech Shaker、Abdu Hakeem Jackson、Hadid Blackenship、Dr. Armin Faruq Abdullah、これらの人は皆、イスラームへの改宗者です。ヨーロッパ系アメリカ人とアフリカ系アメリカ人はイスラームに改宗し、同化の問題を考察しつつあります。ムスリム世界で現在、ムスリムが使用している法体系の多くは、何世紀も前のイスラーム古典時代に解釈されたものであるため、現在私たちはその法体系を見直し、解釈のし直しを始めています。従来の法体系は現代に適用できません。

例えば、Dr. Armin Faruq AbdullahはこのNawawi財団のウェブサイト(www.nawawi.org)に「イスラームの文化的要請」(“The Cultural Imperative of Islam”)と題した論文を掲載しています。これは実に優れた論文で、アメリカ系イスラーム文化創出の問題について論じたものです。彼は中国におけるイスラーム文化について考察し、中国のムスリムたちが中国系イスラーム文化を創出したように、アメリカのムスリムたちもアメリカ系イスラーム文化を創出する必要があると考えています。アメリカ系ムスリムは、アメリカ系イスラーム文化を創出する必要があります。

さらに別の学者集団がいます。この本は私が以前に、特に貴方のセンターで入手するように言っ

た本です。『進歩的ムスリム』(*Progressive Muslims*)と題する本で、著者はOmid Safiです。彼らは移民学者集団です。彼らは近代主義者と分類されています。大半が大学人で、伝統的な教育訓練を受けていません。以前にお話したもう一つの学者集団はイスラームへの改宗者で、彼らは伝統的な教育訓練を受けています。つまり、イスラームに改宗した後、彼らは中東に行き、ムハンマドの時代以来のライセンスを持つ伝統的な学者たちからライセンス(ijazes)を取得しました。彼らは非常にスーフィズムへの志向が強く、非常に精神性を重視する集団で、私はこの学者集団に共鳴しています。彼らは伝統的な学者と呼ばれています。進歩主義のムスリムの多くは近代主義者ですが、この本全体はイスラーム法学を解釈し直したものであり、法体系を解釈し直したものです。彼らは前に私が言及した三つの問題に取り組んでいます。イスラームにおける女性の権利の問題、イスラーム・コミュニティにおける女性の役割などの問題です。こうした取り組みが始まったのはつい最近のことです。アメリカにおけるイスラームの歴史は非常に新しいものだからです。

【司会】 ありがとうございます。コメントなさりたいのですか。どうぞ、ボタンを押してください。

【レヴィン】 カトリック教徒の同化とムスリムの同化についての森教授の興味深い比較は、私の持つ思いをさらにかき立てるものです。私たちは象徴政治のコンセプトを覚えています。それは実際にはカトリック教徒に対する抵抗と関連して展開されたものです。例えば禁酒法です。ご存知のように、飲酒をしているプロテスタントもいました。それはアメリカ社会でカトリック教徒が成功し始めたまさにそのとき、プロテスタントの没落が始まったのです。ご存知だと思いますが、ニューイングランドの古くからの家系のエリートは皆、どこにいてし

まったのでしょうか。これらのエリートのうちかなりの数はいなくなっていまい、どんどん減っていています。このような道徳的な運動が開始されたのは、まさにカトリック教徒に対応してのものでした。

ある意味、ムスリムは、同じような状況に直面しなければなりません。私たちは確かに、9・11に関連する様々な愛国的な法律が緩和されるようになることを望んでいます。緩和されることはないでしょう。それは私たち全員の問題であります。それ以上にムスリムとアメリカ人の問題であることを知っています。しかし、ある程度、これは似たような状況であり、アメリカのなかでムスリムが真の社会的勢力となり、また、より広いコミュニティのなかで勢力となることを妨げるものとならないことを私は望みます。それは貴方が受けた教育の一部であり、現在貴方が言っていること、社会科学、より推論的な類の分野で台頭していくことは、広いムスリム・コミュニティのなかで貴方を中庸のための真の力を持つものとしていくでしょう。侮辱的なこと、抑圧し、空港で列に並ばせるような、こうした象徴政治といったものは、貴方が実現できると思うことを実現するために前進することを妨げることはできないでしょう。

最後に、この会議の初めの頃にローベンシュテインさんが示唆していたことをしたいと思います。個人的な言葉で、しばらく個人的な話をしたいと思います。私は、慈善事業の寄付金の税控除といった実務的な事柄を繰り返すことにはうんざりしますが、実際にはそれについては強い関心を持っています。また私は、私たちが抑制しようとするべき宗教様式としてではない犠牲について、そしてあらゆる種類のアジェンダを促進し、生命を肯定する私たち皆にとってのプロジェクトとしての犠牲について幾度となく自問しています。たとえ私が犠牲を信じていなくても、私が何のために戦うか、何のために犠牲になるかという観点から、この二つを一つにしたいと思います。

慈善事業への寄付金の税控除の重要性は、市民社会とは一体何であるかを大まかに示す点にあります。必要以上の法は制定したくはないし、必要以上の規則は作成したくはありません。私たちは市民を信頼しており、従って市民社会を強化するために市民が参加し、動機づけられ、報われることができるように税金のかかなりの部分をあきらめる覚悟でいます。

これは非常に重要な対策だと私には思われます。私が日本の友人にアドバイスするとしたら、こうした税制を勝ち取るために日本の皆様も戦うことができるはずであり、特にこの点について日本は緩和されつつあり、安全保障理事会などを通して国際社会のなかで経済力、政治力を大幅に強化し、真の役割を果たす準備をしつつあります。またこの種の法律制定に対する要望もあります。この対策は、日本がアメリカから実際に模倣すべきことです。良いことなのですから。抵当金も控除して欲しいかどうかは皆さんが決められることだと思います。

私が戦い、犠牲になってもいいと思っていることがもう一つあります。このことについては助けを必要とするのでしょうか。私はフランスに行って、大量虐殺(pogromchiks)に対してジハードを展開するつもりです。使用した言葉はすべてユダヤを連想させる言葉です。ユダヤ人の大量虐殺は攻撃というだけでなく、国家の背信行為です。大量虐殺は国家による皆殺しであり、現在フランスでムスリム女性に起きていること、ヒジャーブを着用してはならない法律を施行して彼女たちが受けた教育を危うくすること、これは大量虐殺だと私は思います。これは大量虐殺であり、宗教の歴史に対する非道行為です。統治の歴史に反するものであり、フランスの象徴であるフランス革命に反します。私たちは皆でフランスに対してジハードを宣言すべきだと思います。ユダヤ人である私は、他にも課題を持っています。私は反ユダヤ主義には困惑しますが、

フランスにおける反ユダヤ主義を大量虐殺だとは思いません。しかし、ムスリム女性に対する攻撃は大量虐殺だと思います。それに対してはあらゆる種類のリスクを冒すつもりでいます。これは私の個人的な話です。この会議参加という素晴らしい機会を与えてくださった素晴らしい主催者の方々への感謝の気持ちとしてお話しました。

【司会】 ありがとうございます。時間のことを考え、司会者としては5分間で、これまでの話し合いのなかで繰り返し浮き彫りにされたと考える問題点のいくつかを明確にするために、この二日間に私が書きとめたことを皆様と共有したいと思います。私のコメントは順序だてた体系的なものではありませんが、聞いたことをまとめ、これらの事柄について互いに問いかけ合い、これからも考え、話し合いを続けていく決意をしてこの会議を終わることができたらと思います。

第一に、米国憲法修正第1条の重要性を強調しておきたいと思います。この修正第1条は、アメリカにおける信仰行為に非常に強い影響力を及ぼすものです。すべてのアメリカ人にとって信教の自由は大切であり、彼らはそれを理解し、明確にし、様々な方法で信仰の自由を得るために戦っています。アメリカ人は“GOD”という言葉を使用する方法や誤用の例など特定の事柄についてはうんざりしているかもしれませんが、しかし、信教の自由には未だに深くコミットしており、これへのコミットは私もアメリカ人がもっと綿密に検討し、より広く共有していく必要があるものではないかと考えます。貴方が先ほど言われた、信教の自由を米国の税法により行使する方法はその一例だと思います。

第二に、宗教的価値観とモラルは公的生活、政治における意思決定、選挙、法律、法律を制定し管理する方法に違いをもたらすはずのものであり、そのことが重要であることを私たちは繰り返し述べました。しかし、米国市民は時々、それを忘れ

ています。人が実際に、生きていくなかで何が重要であるかを詳細に話す場合、その人がどの宗教コミュニティに属しているかに関係なく(実にさまざまな宗教コミュニティがありますが)、宗教的な信念と世間で起きていること、あるいは市民権の一般的な行使に関連したものであるとアメリカ人は思っています。そのことが何を意味するのかを理解するためにアメリカ社会における特定の事項について私たちは苦闘しています。私たちは信教の自由を失わないようにしようとしていますが、宗教的なコミットメントが私たちの公的生活と関連があるという考え方にも非常にコミットしています。このことを表現することは非常に難しいです。私は生活していくなかで日本の人たちと話をしてみると、それらの人たちの多く(私の学生)は宗教と政治は完全に別のものだと言います。アメリカ人としての私の答えは「ノー」であり、別のものではありませんのです。大半のアメリカ人は実際にそれについて考えるように促された場合、宗教と政治は全く別だとは考えないと思います。宗教と政治は別のものではなく、問題は、この二つのことをどのように関連づけることができるかです。

第三に、真実の主張を支持し、そうした主張を軽視したくないという気持ちは私たち皆が持っています。信仰する人間としての私たちの真実の主張は時々、相反します。私たちが主張することと、隣人が主張することは異なります。しかしアメリカでは、信教の自由のコンセプトに私たちはコミットしています。なぜなら、私の真実の主張が妥当であることは、貴方の真実の主張が妥当ではないということにはならないからです。このことにうまく対応することは非常に難しいのですが、アメリカでは私たちはそうする努力をしています。うまく対応できることもあれば、できないこともあります。それでも、真実の主張の妥当性にコミットすることが重要だと思います。多くのアメリカ人はそのことが重要ではないと言わないし、あらゆることは同じだと言

いません。実際、アメリカ人は一部のことは他のことより重要だと考えています。一つとして同じ宗教はないし、アメリカ人はそれらの宗教を理解したいと考えており、真実の主張は認められるべきであり、妥当であり、自由に表現されるべきであり、社会に影響をもたらすべきです。

第四に、私たちは皆、宗教集団間の対話や相互作用(“dialogue”(対話)という言葉は時々問題となりますので)が現実のものであるのかを確認したいと思っています。それは私たちの日常生活の一部です。アメリカでは誰もそれから逃げたりはしません。私たちの子供たちは異なる宗教をもつ人を相手に選んで結婚していきます。私たちは、非常に異なる信仰をもつ人たちと一緒に仕事をし、一緒に生活しています。自分の周りには実に様々な宗教が溢れています。宗教における均質性は、たとえアメリカの僻地やいわゆる隔絶された田舎でも存在しません。誰も宗教的多様性から逃げることはできないので、私たちは皆、互いに関与していこうとしています。アメリカでは対話をするかどうかを選択することはできません。「私はあの人たちと話をするつもりはない」ということはほとんど不可能です。互いに隣り合って生きているのですから不可能です。私たちは他人と一緒に仕事をし、それぞれの子供たちは同じ学校に行っているのですから。(それが誰であれ)私たちは人と話をしなければなりません。人と関係していかなければなりません。こうしたことがどうすれば上手にできるかは常にわかるわけではありませんが、この会議で、宗教的多様性はアメリカ社会の至るところに存在することが明確にされました。

第五に、どの宗教を信仰しているかということと、宗教的信念とは必ずしも関係はありません。貴方がどこに所属しているのであれば、どのように呼ばれているのであれ、そのことと貴方が信じていることとの間には必ずしも相関関係はありません。貴方が信じていることは貴方が所属しているもの

によって具体的にわかります。アメリカ人は順応性のある考え方をします。家族や育ちから私という人間がどういう人間かを判断されることはありますが、私が属している集団のあらゆる人と私の意見が常に一致するわけではありません。例えば、その集団の役員の言うことに私が同意しないこともしばしばあります。アメリカではそれは大丈夫なのです。大半のアメリカ人は、宗教的信念や指導者、慣例に同意しない人を不信心者であるとか悪い人だとは考えません。アメリカ人がこうした類の考え方を認めることは時として難しいことですが、それでもアメリカ人は認めようとしています。

最後の第六番目は、アメリカ人の宗教に対する考え方は必ずしも明白ではないということです。信仰の目的は一樣に曖昧です。次の二つのことが常に起きています。私たちは根をはりたい、定着したいと考えています。私たちは寛容でありたいと思っています。私たちは聖書や教会論から、あるいはコーランやハーデイスを根拠として、伝統の重要性を主張したいと考えます。伝統を復活させたい気持ちがあります。自分たちの歴史を知り、自分たちと同じように信じる人たちと連帯したいと考える人たちによりある種の宗教の再主張が行われています。同時に、反対の方向に向かう力もあります。解釈し直し、つくり直し、全く新しい形態に移行する必要があるという声があります。人々は、定着し根付きたいと考えると同時に、過去を再発見して信仰の新しい方法を見つけたいと考えています。人々はこの正反対のことを同時に行いたいのです。

今回の四つのセッションで皆様のお話を聞いて、皆様それぞれが言われたことの多くはこれらのテーマに関連する言及であったと私には思われました。それらの一部は、皆様の話を聞きながら私の頭に浮かんだことでしょうが、以上の要約は、ユダヤ教、キリスト教、イスラームが現代アメリカのなかで直面している問題について私たちが提起した疑問

をまとめるためには適切だと感じました。私が要約したことの多くを私たちはこれまで探求してきましたが、触れていないものもあります。しかし、現代アメリカにおける宗教については、いくつかの重要な方法で傾聴し学習してきたと思います。

皆様全員に感謝したいと思います。そして、私が出席依頼の手紙を出したときには何に関与することになるかがわからないのに出席の返事をくださり、やって来てくださったアメリカからの参加者には特に感謝したいと思います。リスクを厭わず、来てくださった方々に感謝します。会話は今後も続いていきますし、CISMORの仕事はこの二日間で得られたことでさらに充実したものになると思います。会議に参加し傾聴してくださったことを感謝します。

では、2、3分ありますので、どなたか一言言いたいことがある方はおられますか。会議終了前に数人の方が言いたいことがあると言われていました。会議を終了する前に皆の前で発言したいことがあればしていただきたいと思います。ローベンシュティンさん、言いたいことがあると言っていましたね。最初にどうぞ。

【ローベンシュティン】 この場を借りて皆を代表して、この会議に出席する特権を与えてくださり、私たちにとっては初めての日本でこうした時間を過ごす特権を与えてくださった森先生とジクムンド先生に深謝の気持ちをお伝えしたいと思います。私は妻のCarol Crumleyとこれからさらに12日間日本に滞在し、美しい日本をもっと、せめて一部でも味わうつもりです。

私たちは、学習して互いに共有し合い、一緒に成長する機会を得ることができました。また一緒にご招待くださったおかげで、これまで知らなかった米国の同胞と会う機会を得ることができました。非常に感謝しています。ここで始まった対話が、CISMORの今後の仕事を形成していくことを期待するのと同様に、私たち自身を形づくっていくもの



と思います。

“Interfaith Conference” はようやく25周年を迎えました。私たちはこれまでの沿革概要書を作成しました。この概要書は、環境に関する私たちの最近の資料や研究、最近のニュースレターと同様に、私たちが皆様と共有したいと思っているものの一つです。また、私はカナダのバンクーバーで作成されたこの「マルチ信仰カレンダー」を皆様お一人ずつに差し上げたいと思います。これは世界の12の宗教的伝統の聖なる日を記載したもので、それぞれの日についての簡単な説明も付いています。このプロセスに参加できたことを非常に感謝します。

スタッフが改宗に関する“Interfaith Conference”の説明書を一部ずつお配りします。昨日、そのトピックについて私が考察したときは用意できませんでした。“Interfaith Conference”からのこの沿革概要書と資料も何部か持っていますので、欲しい方は言うてください。ありがとうございました。

【司会】 ありがとうございました。感謝の言葉、発表、その他必要と思われることであれば何でもいいです。発言したい人は他にいますか。

【エルジェナイディー】 主催者の皆様のおもてなしに深謝したいと思います。皆様は素晴らしい方々です。この会議に来る前、9・11以降、私は日系アメリカ人と一緒に仕事をしていたので、同僚から日本の文化については聞いて知っていました。しかし、この二、三日で経験したあらゆることに私は心底感動しています。皆様は素晴らしい。品位ある方々です。この会議出席を私は本当に楽しむことができたし、再び来たいと思っています。恐らく、別の機会になるでしょうが。再びこの会議にお招きいただきたいと言っているではありません。本当に日本にまた来たいのです。これまで来たこ

とがなく、実際、来たいと思ったこともないこの日本という国をもっと探索したいのです。正直に言います。実際のところ、来たいとは思っていませんでした。しかし今はまた来たいと思っています。そう思えるのはひとえに皆様のおかげであり、この週末に皆様に会えたからです。皆様が私たちにしてくださったあらゆることに深く感謝します。

【司会】 ありがとうございました。コメントなさりたいのですか。

【ボレリー】 私もう一度、この会議に招待してくださった皆様全員の広く優しいお心に感謝したいと思います。私が昨夜、言ったことは私自身の気持ちを十分にまとめたものです。貴方は気持ちを込めて話しました。私も気持ちを込めて話しました。バーバラ・ブラウン・ジクムンドが私たちの討論をまとめ、まとめ直していたとき、彼女は宗教的共存の三つの意味に触れていると思っていました。宗教的共存は社会的現実であり、彼女が言ったように、私たちは互いにかかわり合う存在であり、米国の多様な宗教は互いにかかわり合っています。しかし一方で、宗教的共存は政治的現実でもあります。それは米国憲法修正第一条について私たちが言及したすべてのことに関連しています。そこで、政治的現実と社会政策としての宗教的共存があります。第三に、宗教的共存は神学と宗教法の問題です。それについては、私たちの立場は様々ですが、多様な宗教がかかわり合うという問題と宗教および公共政策の問題は異なるものです。米国で経験する宗教的共存の問題を考察するときにこれらの三つの分野は異なるということを心に留めておくことが非常に重要です。最後にもう一度、会議を主催され、素晴らしい国である日本、そして素敵な都市である京都に私たちをご招待くださったことに感謝します。

【司会】 ありがとうございました。それではこれで会議を終わります。会議にご出席くださったことに対して、もう一度お礼を申し上げます。会議を終了します。ありがとうございました。

